

---

# 過去の希望、未来の遺産

辰巳 結愛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

過去の希望、未来の遺産

### 【Nコード】

N5000D

### 【作者名】

辰巳 結愛

### 【あらすじ】

時の列車、デンライナー。次の駅は過去か、未来か……。

電王としての日々を終え、デンライナーに乗った5人のイマジン。しかし最近やたらとトンネルに入る。オーナーの脅しじみた依頼を果たすべく、イマジン達は2004年12月に向う……。

「仮面ライダー電王」の最終話後、「仮面ライダー剣」の最終回近辺で、実は電王メンバーが動いていたら……と言う妄想から生まれた物語。

貴重なお時間を頂けましたら幸いです。

2011/8/2、修正作業完了。目安読了時間が7時間オーバー  
となりました。サブタイトルがしりとりになっているのはここだけ  
の話。

## その1：始まり（前書き）

この話は私、辰巳の解釈が加わっているものとなっております。  
自分の確固たる解釈をお持ちの方、並びに他のライダーとの関連を  
絶対に認められないと言う方にはお勧めできませんのでご了承下さ  
い。

## その1：始まり

永い間生きていけると言うのは、退屈なのですよ

……いつか、どこかで、誰かが言っていた言葉。

何故、今になってその言葉を思い出すのだろう……

時の列車、デンライナー。次の駅は、過去か、未来か……

今この場、デンライナー食堂車には5人の青年と1人の少女がいた。

青年の1人はクレヨンで画用紙に何かの絵を描き、別の1人は優雅な仕草でコーヒーを堪能している。残る3人は少女を交えて、カードゲームで遊んでいるらしい。彼らの手の中には数枚のカードが扇状に広げられており、机の上には場に出されたいカードが小さな山を作っている。

「へっへっへ……今度こそ俺の勝利で……」

カードに興じる青年のうち、深紅の瞳の青年が、にやりと不敵な笑みを浮かべて自分の手札から1枚を引き抜こうとした瞬間。

唐突に、明るかった車内が闇に閉ざされた。しかし一瞬後には非常灯のようなものが点灯するが、そのオレンジの光はお世辞にも明るいとはいない。停電とも思える現象ではあるが、電車は何事も無いかのように一定の速度で走っている。

それを感じ取ったのか、青年は深い溜息と呆れたような言葉を吐き出した。

「おいおい、またトンネルかよ。最近トンネルに入る回数多すぎやしねえか？」

言葉通り、最近頻繁にこの現象が起きているのだろう。青年の顔にはうんざりとした表情がありありと浮かんでいた。

逆立った黒髪の中に1房だけ、瞳の色と同じ鮮やかな真紅が目立

つ。

「もーっ！ 絵を描いてる時に入られると困るんだよ！ 色がわかんなくなるし」

絵を描いていた青年が、どこまでも不快そうに言いながら机を両の拳で軽く叩く。

紙から離れた瞳は紫紺。ウェーブのかかった前髪が、被ったキャップから覗いている。やはり彼の髪も、1房だけ瞳と同じ紫紺に染まり、ふわりと揺れていた。

「コラコラ。暗い中で描いとつたら、目エ悪するで？」

関西訛りで紫の青年に言ったのは、赤い青年の右隣に座る、金色の瞳の青年。さらりと長い髪の中には、やはり1房だけ瞳と同じ明るい金があり、後ろで1つに括られている。

「カードで遊んでる僕達も、人の事言えないと思うけどね」

ひよいと肩を竦めながら、赤い青年の向かい側に座っている青年が、金の青年の言葉にやや皮肉気に返す。かけられた黒縁眼鏡の奥では蒼玉のような瞳が光り、真ん中より少し右側で分けられた髪は、やはり1房だけ瞳と同じ色に染まっている。

「この程度の些事で騒ぐな。騒音は私のコーヒータムの妨げとなる」

この闇にも動じず、ただひたすらに優雅な動作でコーヒーを飲む青年。瞳は限りなく白に近い灰色。コーンロウに結われた髪は、これまた1房だけ白くなっている。

……何も知らない者が見れば、この異様な光景に驚いたかもしれない。

纏う雰囲気、紡がれる声、そして瞳の色こそ違うものの、彼らの顔は全く同じなのだから。声さえなければ、5つ子だと説明されて納得できる程に。

「あんだ達のその姿、最近定着してきたわよねえ」

「いや……これに関しちゃあ、俺も正直驚いてんだけどよ」

まるでその姿は本来の物では無いかのような少女の言葉に、赤目

の青年が頬をかきながら同意を返す。

その顔には言葉通り困惑と、そして僅かながらの嬉しさが滲んでいた。

「ま、いつまでもイマジンの姿でうるついている訳にもいかなかったし、丁度良かったとは思うけど……」

「まあ、あのセンス無え姿よりは、こっちの方が良いけどな」

にやりと笑いながら、赤目の青年……かつてモモタロスと呼ばれていた存在は、少女……ハナにそう返すのであった。

2008年1月20日。その日、全てのイマジンがこの時間から消えた。

だがイマジンの一部は消滅する事なく、存在する事を許された。

……人の記憶に支えられて。

その「一部」の中には、時の列車デムライナーの乗客として時間の中を行き来しつつ、時の守護者として働いていた。

それが、かつて野上良太郎と共に「電王」として戦った彼ら5人……モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、そしてジーク。

しかしある日を境に彼らの姿が変化した。イマジン特有の怪人のような姿から、かつて彼らが、野上良太郎に憑いた時の姿へと。

別の時の列車、ゼロライナーにはデネブがいるはずであるが、彼がどうなったかは最近会っていないので分からない。ひよっとしたら彼も、桜井侑斗に憑いた時の姿になっているのかもしれない。

それでも、彼らの性格が変わった訳ではない。

時に喧嘩をし、時にこうやって共に遊び、時にモモタロスがハナの鉄拳を喰らい、時にナオミの「実験」的なコーヒーでおかしくなったり……

と、やっている事は今までと大して変わらない、騒がしくも楽しい日々を過ごしていた。

良太郎がいない事と、最近になって頻繁にトンネルに入る事を除いて。

……この時は、誰も知らなかったのである。

トンネルの多い事が、何を意味するかを……

## その2：理由探し

時空ときに、歪ひずみが生じている。

全く、今度は何が起きると言うのか。

厄介な事にならなければ良いが……

「折角体があるのに、外に行けないのはつまんない」

「お絵かき」にも飽きたか、クレヨンを放り投げるようにして机の上に置いたリュウタロスが、心底不機嫌な声でそう言った。

「時間の中」なので正確な「期間」は分らないが、少なくとも主観的にはかなり長期間、「時間の外」へ出ていない。デンライナーと言う閉鎖空間に飽きが来たと言う事なのだろう。

椅子ではなく机の上に座り込み、バタバタと足をばたつかせながら、リュウタロスは食堂車の角に座る初老の紳士……いつの間にか定位置についているこの列車のオーナーへと視線を向けた。

「ねえ、次の停車時間で外に遊びに行ってもいいよね？ 答えは……」

「構いませんよ」

「……え？」

「聞いてない」とリュウタロスが言うよりも先にオーナーが許可を出す。それがあまりに意外だったのか、他の面々はぎょっと目を見開いて驚愕の声を上げる。

いつもは彼らの行動に厳しい制限を課すのに、今回は妙にあっさり許可を出した。

ひよつとすると、何か裏でもあるのかも

軽く苦笑を浮かべ、1人はしゃぐリュウタロスと、ステッキの持ち手を白い布で磨くオーナーを交互に見やりながら、ウラタロスは心の中でのみ呟きを落とす。

……下手に声に出して、ヤブヘビになるような事は避けたいのだから。

「うわーい、やったー！　ねえねえねえ、亀ちゃん達も一緒に行つて良い？」

「ええ。構いません」

「オーナー！」

「無論、タダで出かけて頂く訳ではありませんが」

ハナの抗議の声を遮り、オーナーは普段と全く変わらぬ口調で言葉が続ける。

「最近トンネルの数が増えています。これは異常、と言つても過言ではありません」

「つまり、その理由を僕達に調べろって事？」

「そうです。……無論、断つて頂いても、構いません。ですが」

それまでの穏やかさから一転、オーナーの逆接を示す短い単語に空気が変わる。イマジン達の間を走る緊張感、そしてピクリと肩眉を跳ね上げてびっすすとステッキの先をウラタロス達の方に向けるオーナー。

……これで空気が変わらないはずもない。誰かの、ごくりと空気を飲み込む音が、やけに大きく響く。それが聞こえたのか、オーナーは軽く首を傾げると、ゆっくりとステッキの先を下ろし……

「皆さん、乗車賃を滞納していますからねえ、金銭または労働力でのお支払いが無い場合は……」

皆まで言わず、彼は静かに懐の中から赤みがかったオレンジ色のカードを取り出す。それはあたかもサッカーのレッドカードのような……

……言わずと知れた、「乗車拒否」。オーナー権限により発動し、これを渡された者はデンライナーに乗れなくなるどころか、下手をすればこの広大な時の砂漠の中に捨てられ、置き去りにされる可能性もあるカードだ。

「……いやあ、久しぶりに外の空気を吸いたいなあと思つた

「トコやったんや」

「奇遇だなあ熊、俺もまさに同じ事を考えてたんだよ」

「ふむ、まあ飯の住まいの主の頼みだ。特別に聞こうではないか」「調べるくらいならそう時間もかからない、か。その他の時間は、何やっても良いんでしょ？」

相変わらず「乗車拒否」は最強の切り札なのか。あまり乗り気でなかったイマジン達が、声を揃えて「やる」と言ったのだから。

……リユウタロスに関しては、面白そうだから、と言う理由なのかかもしれない。最初から外に出たがっていたし、外に出られるのなら何でも良かったのだろう。

「時間に干渉しない範囲であれば、構いません。好きなように、過ごして頂いて結構です。何しろ次の停車は2004年12月19日ですからねえ。しつこいようですがくれぐれも、時間に干渉しないで下さい」

「そもそもお、何でトンネルが多い事が問題なんですか？」

ここでようやく、オーナーに炒飯を持ってきた、客室乗務員のナオミが割り込んで来る。

そんな彼女の言葉に、オーナーは深く1つ頷きを返すと、いつも通りの静かな口調で

「この時間の中に存在する『山』。これは時間と空間の『壁』、なんです。トンネルがあると言うことは、その『壁』に穴が開いていると言う事。そしてそれが何を意味するかという……」

そこまで言った瞬間。音もなく炒飯に立っていた旗が傾ぎ、倒れる。同時にそれは、オーナーの話の終了を意味し……彼はほんの僅かに残念そうな表情を浮かべると、そのまま食堂車から出て行ってしまった。

時間と空間の壁、ねえ……

外に出られるとはしゃぐイマジン達の中、ウラタロスだけは、オーナーの言葉の意味を考えていた……



### その3：知らない獣

世界は常に、分岐の可能性を秘めている。  
人はいつも、何かを選び、何かを捨てる。

そして捨てられた「可能性」が「異なる世界」を作るのだと……  
これも、誰かが言っていたな。

西暦2004年12月19日。

その日、産み落とされた1つの存在があった。

「神よ、貴方は53体のアンデッドをお作りになられた。しかし私はここに、新たなアンデッドの誕生を宣言する」

薄暗い部屋中で、1人の男が語る。仕立ての良さそうな黒のスーツをその身に纏い、圧倒的な威厳を放っている。

彼の名は天王路博史。人類基盤史研究所……通称BOARDの理事長である。

その地位故の存在感は、周囲の人間を傳かせるには充分過ぎる程であるのに、彼の眼前に置かれた、人程の大きさを持つ漆黒の石もまた、彼に負けない程の存在感を伴って悠然と存在している。

奇妙な事に、その石は平たい物を捻ったかのような形をしている。天然物だとすれば奇跡に近い形だし、人工物だとすれば作った者の腕を褒め称えたくなる美しさ。

その石から生えている電極は、天王路達がつけたものなのだろうか。白いコードと部屋に響く甲高い電子音が、無粋にも神聖な雰囲気壊しているように感じられる。

「5枚目の『A』……」

そんな無粋な空気など気に留めていないのか。まるでその場には自分とその石しかないのだと言いたげに、天王路は薄く目を細め、低い声で呟きを落とす。

そんな彼が手にしているのは、1枚のカード。そこに描かれているのは三つ首の獣。

……ケルベロス。カードに描かれた獣の名。

それを取り出した瞬間、背後では安定していないだの何をやる気だなどと騒ぎ立てる白衣の者達。しかしそんな有象無象など意に介さぬのか、天王路は持っていたカードを石に向かって投げた。

そして石は、まるでそれを待ち侘びていたかのようにそれをするりと己の身の内に取り込み、光を放ち始める。

「どうだ神よ、お前の作った物ではないアンデッドは！ お前はその存在を認めるのか！？」

高らかな天王路の声。問いの形をとってはいる物の、彼には「石」の答えが分っているのか、その表情に不安は微塵もない。

そして刹那の後、石は彼の言葉を肯定するかのように1匹の怪物を生み落とした。

産み落とされた怪物……初めて己の肉体を得たケルベロスと言う名のアンデッドは、凶暴な唸り声を上げ、それが当たり前であるかの様に周囲を破壊し始める。

機器類が破壊された際にかかる、火花の散る音。

逃げ遅れた者が引き裂かれた際にかかる、血飛沫の音。

黒い革張りの椅子に腰掛けながら、天王路は口の端に笑みを浮かべてその音を聞く。

しばらくして、ケルベロスは「親」である天王路と石以外の全てを壊した後、何かを求めるようにその場を後にした。

……残された天王路は、その様子を樂しげに眺める。まるで子供を慈しむかのように。口の端に浮かんでいた笑みは、いつの間にか顔全体に伝播し、満足そうな笑みとなって浮かんでいた。

「フフフ……ご苦労様、仮面ライダー諸君。……そして……」

ゆっくりとサングラスをかけつつ、言葉が続ける。直後、その顔に浮かんでいた笑みが邪悪に歪む。そこに優しさは一切無い。あるのはただ、冷たくて暗い感情のみ。

「さようなら」

\*

「あ、可愛い仔犬〜!!」

デンライナーから降りるや否や、リュウタロスは言葉通り仔犬を見つけたらしい。言葉と同時に猛ダツシユで後ろも振り返らずその場を後にした。

……しかもその先は鬱蒼うつそうと生い茂った森。彼を1人にするには、些か……いやかなり、色々な意味で不安を感じるような場所。

「おおいリュウタ！ 1人で行ったら危ないで！」

見かねたキンタロスが心底心配そうな声で彼の後を追い、リュウタロス同様森の中へとその姿を消した。

「……やれやれ。リュウタの事はキンちゃんに任せて、僕らはオナーに言われた事を調べなきゃいけないみたいだね」

「フーか、そう言う事なら駅長に頼んだ方が早いんじゃないのか？」

見る間に後姿が小さくなっていく2人を眺めてぼやくウラタロスに、モモタロスがガシガシと頭をかきながらも言葉を返す。

「分岐点も現れてないのに駅長に頼むのは無理よ」

「しかし姫、我らが動く必要はあるまい。世界は！ 私のために動いているのだから」

1人だけ少々ノリの違うジークを横目に見やりながら、3人はそつと憂鬱そうに溜息を吐き出す。

ここまでマイペースに生きられると、いつそ楽よね

と思い、もう1度ハナの口から溜息が零れかけた時。くるりと踵を返し、その場を立ち去ろうとするウラタロスの姿が、彼女の視界の隅に入った。

「じゃ、僕は近くにある喫茶店でも行って情報集めてくるから。先輩達は先輩達で頑張って」

ひらひらと手を振り、彼は鼻歌混じりに歩き出す。が、そんな彼

の裾をハナはがっしりと掴んでその動きを止める。

「……あれ？」

「あんたを1人にしたら絶っつつつ対にナンパするからダメ。あんたは私と一緒に情報収集」

「ちよつと待て！ って事は俺とこの鳥野郎とペアかよ！」

ウラタロスの非難よりも、モモタロスの抗議の声の方が先に上がる。

心底嫌そうな表情で、心底嫌そうな声。彼の人指し指の先には、羽根マフラーに付いたゴミを鬱陶しそうに払いのけるジークの姿があった。

しかし恫喝するようなモモタロスの声にも怖じず、ハナは真っ直ぐに相手の目を見つめ返すと、自分の腰に手を当てて一息に言葉を紡ぐ。

「あんたはウラと一緒にでも文句言うじゃない。それとも私と一緒に良かった？」

「ぐ」

ハナに言われ、渋々と言った風にモモタロスは頷きを返す。

一方のウラタロスも、仕方ないと言わんばかりの表情で肩をすくめた。

ただ1人、ジークだけが眠そうな表情でそのやり取りを眺めていた……

「熊ちゃん、見て見てー！ お魚さんがいっぱいいるよ！ 亀ちゃんが見たら喜ぶかなあ？」

「ホンマに、えらく綺麗な川やなあ」

追いかけていた仔犬を見失ってしょんぼりしていたところで、この川を見つけたリユウタロスとキンタロスの2人は、この清流に心癒されていた。

こんな奥まで滅多に人が来ないのだろう。ごみの類は見当たらず

ないし、人の気配も感じない。鳥の鳴き声が大きく聞こえる。

しかし、唐突に鳥が一声大きく鳴いたかと思うと、直後一斉にその声が止んだ。

「何や！」

緊張が走る。2人はゆつくりと周囲を見渡しそして……ほぼ同時に、それを見つけた。

黒い、人型の異形。だらりと垂れた長い触角に、指から生えているのは鋭さを持つ緑の爪。

カミキリムシに似ているような気もするが、そうではないようにも見える。所々、体にある傷からは、白っぽく濁った緑色の体液が流れており、よろよろとした足取りで川岸に向かって歩いている。

「あいつ……イマジン？」

「分からん。せやけど、随分と弱つとるで」

こつそりと岩陰から覗き込み、そいつの様子を観察する2人。すると唐突に、自分達がいる場所とは逆方向から、男の声が響いた。

「始は始は！」

苦しげに呻く異形に、男は警戒した素振りを見せながら声をかける。その手ある携帯電話のようなものが、警告とも取れる電子音を鳴らし続けているのは、その異形に反応しているからだだろうか。

男の言葉や、2人の間に流れる雰囲気から察するに、互いに顔見知り以上の知り合いではあるようだが、男の方は異形に敵意を抱いているようにも見える。

「何故その姿をしている！？」

訝しげに男は異形に問う。

どうやら彼らの位置からはキンタロス達は見えていないらしい。その方が彼らとしては都合が良いので、気にはしないのだが。

しかし、「その姿」とはどう言う意味か。もしかすると、あの異形は、今の姿以外にも別の姿を持っているのだろうか。

軽く首を傾げて考えるキンタロスだが、考えて答えが出る訳でもない。警戒はしつつも、2人はじっとその場で事の成り行きを見守

る事にした。下手に関わって、時間の運行を乱すような真似をすれば、今度こそ乗車拒否で置いてけぼりをくらいかねない。

などと思っていると、異形が苦しげに息を吐き出し……男の声に答えるべく、言葉を紡ぎだした。

「……奴に……全てのカードを奪われた」

「カードを奪われた？」

「俺はまた、ジョーカーの本能を、押さえられなくなるうとしている……」

訝る男にむかってそう言うと、異形はううっと苦しげな唸り声を上げ、何かに操られているかのように男に向かって拳を振り上げた。が、その拳が相手の顔に当たる寸前で自分を取り戻したのか、異形は慌てて男と距離を取り……

「俺は……相川始だ！」

怪物が、何かに宣言するように叫ぶ。それと同時に前のめりに倒れたまま、ピクリとも動かなくなった。時折胸が上下している所を見ると、呼吸はしているらしい。

男はそれを見るや、心配そうに怪物に駆け寄るが……直前で、その足を止めた。

「もしもこいつが勝ち残ったら、世界は……」

聞こえるか聞こえないか程度の呟きが、男の口から零れ落ちる。

同時にその目に躊躇いの色が宿ったのを、影で見ているキンタロスは気付いた。

だが、一体何を躊躇っているのかが分らない。

どこへ連れて行くべきかを逡巡している訳では無さそうだ。何となく……これはあくまでキンタロスの直感だが、彼は助けるべきか否かで迷っているように見えた。

知り合いとは言え、異形だ。余程心の強い者でない限り、二の足を踏むのは当然かも知れないが……

「……今ならこいつを封印できる……」

「ねえ、そいつやっつけるの？」

暗い瞳で吐き出された男の呟きに、じっとしている事に耐え切れなくなつたらしいリュウタロスが無邪気な声をかける。

自分以外に人間がいるとは思っていなかったのだから。男はハツとした様にリュウタロスを見つめ返し、身構える。

「誰だ！」

男の声に、そして態度に、警戒の色が濃く浮き出る。が、リュウタロスはそんな事お構い無しに怪物の方に近寄り、つんつんとそいつを指先で突いた。

指先に返ってきたのは、虫に触れた時のような硬い感触。しかし冷たいかと思っていたその体温は、ヒトよりも僅かに高い。

「こいつ、何？ イマジン？」

「イマ……？」

リュウタロスの言っている事がわからないらしく、男は困ったような表情を浮かべる。

イマジンと言う単語その物を知らないと言った反応だ。と言う事は、目の前の存在はイマジンではないのだろう。

何となく、予想はしていた事だが。

「……リュウタ、下手に近付いたらあかんやろ？」

仕方ないと言わんばかりに、キンタロスも岩陰から出て、己の姿を見せる。

この時間に干渉してはならない。そうオーナーに言われている。

誰かの記憶に残れば、それだけでこの時間に干渉した事になりかねない。だから人との接触は避けたかったのだが……

「いやあ、スマンなあ。ここに迷い込んだんや。そしたらお前らがなんや話しとるさかい、出られんようになってしもた」

「……俺の質問に答える。お前達は、誰だ？」

「人に物聞く時は、自分から言うもんやろ？」

半ば睨みつけるように言った男に、飄々と返すキンタロス。

相手の方は暫くの間2人を警戒していたが……小さく息を吐くと、構えていた手を下ろし、ぶっきらぼうに答えた。

「……………橘 朔也だ」

「俺は、金。野上金。こっちは弟の龍太や」

「イエイっ!」

橘と名乗った青年に、キンタロスは自分とリュウタロスを指して自身の仮の名を告げる。

この名前は、かつて彼らの姿が変わった時に決めたものだ。デンライナーの中以外では、自分達の契約者である良太郎の苗字である「野上」を使う事。もちろん、使わない事に越した事はなかったのだが、自分達もいつかは時の列車から降り、自分の時間を紡ぐ事になる。ならば名前を持っていた方が良かったらうという事で考えたものだったが……………まさか、早速使う事になるとは。

軽く苦笑を浮かべながら、キンタロスは未だ胡散臭そうな視線を変えない橘と、それを気にも留めずにこやかにブイサインを送るリュウタロスを交互に見やる。

一方で橘もこちらを交互に見つめ……………やがて何か諦めたように小さな溜息を吐き出すと、するりと異形……………彼曰く、「始」とやらの側にしゃがみこみ、その腕を己の肩に回した。

「……………悪いがそこをどいてくれ。こいつを……………始を人目につかない場所に移動させなければならぬ」

言いながら、橘は顔を顰めて異形を背負う。顔を顰めている理由は、恐らく相手が重たいからだらう。担ぎきれずに相手の足ははずると引き摺られ、川辺に2本の線を残す。

その様子を見かねたのか、キンタロスはむう、と小さく唸ると、ひょいと異形の足を持ち上げ……………

「ちよあ待て。1人では無理や。俺も手伝ったる」

「僕も行く」

「な……………っ!? 恐ろしくはないのか? こいつはジョーカー……………アンデッドなんだぞ!」

キンタロスの申し出に、橘が軽く目を見開き、意外そうな声をあげた。

確かに、目の前の怪物は見た目に恐ろしい。鋭い爪や先程の言動を見ても、人を傷つける可能性がある。しかし今は死んだように眠っているのだ。触れたくないと思う程の生理的嫌悪感もないし、この程度の外見の相手は幾度と無く相手をしてきている。

「いや、別に……恐ろしくはないなあ」

「そうそう、襲って来たらやつつければ良いんだし」

あっけらかんと言った2人に、橘は驚きの表情を隠さない。

恐らく彼が今まで出会ってきた人間は、こんな反応を返した事が無いのだろう。大方、この存在に恐れをなして逃げ出すか、逆に無条件に攻撃態勢に入るか……そう言った反応が主だったのでは無いだろうか。

「ほら、早よ運ぶで？」

思いながら橘をせかすキンタロスに対し、リュウタロスは手を貸そうとはせず……ただ、困ったように顔を顰める橘を見つめて、思っていた。

あいつ、この変な奴の事嫌いみたい。嫌いならやつつけなければいいのに

\*

「ここで良いだろう。……手伝ってくれて助かった」

山の奥にある小屋にジョーカーへと姿を戻していた相川始を運び終えると、橘は手伝ってくれた2人……正確には手伝ったのは金と名乗った青年だけで、龍太と呼ばれた青年は面白そうに見ていただけだったが……に対し礼を言う。

双子なのだろうか。改めて見ると、瞳の色と髪型以外は本当に良く似ている。兄弟と言っていたが、年子でもここまでは似ないだろう。

……彼らに関しては謎が多すぎる。

一般人なら「ジョーカー」である始を見て、怪物と罵り、怯える

だろう。逃げるのが普通だ。しかし彼らは逃げるところか逆にこちらに近付いてきた。更には、襲ってきたなら倒せば良いとまで言っていた。

倒すと言ったのだから、アンデッドと言う存在を知っているのかとも思ったが、彼らの反応は知っている者のそれではない。何やら別の単語を発してはいたが。

敵……トライアルやティターンと言った物を送ってきた存在の回し者と言う可能性も無くはないが、もしそうならばとうの昔に襲ってきていてもおかしくは無い。警戒するに越したことは無いが……

「お前達は一体、何者なんだ？」

思っていた疑問が口について出てしまう。しまった、と思うが声になってしまった物は戻せない。

戻せないならば、あとは開き直って追求した方が良いだろう。思い、橘はギャレンバックルを密やかに準備しつつ、困ったような表情を浮かべる青年達を見つめた。

「さつきも言うたやろ？ 野上……」

「名前を聞いているわけじゃない。アンデッドを見ても驚かないのはBOARDの関係者位だが……そう言う訳でも無いだろう？」

「ぼーど……？」

「あんでつど？ って何？ こいつの事？」

橘の言葉に心底不思議そうな顔をして、2人が問いかける。

やはりアンデッドの事は知らないらしい。しかもBOARDの関係者でも無さそうだ。

もっとも、睦月と変わらない年頃の彼らが、BOARDの関係者である可能性は元から低いとは思っていたが。

「こちらの質問に答えろ」

橘がそう言うと、龍太は不機嫌そうに膨れ、金の方は困ったような顔をした。兄貴肌の金に比べ、龍太の方は随分と子供っぽい印象がある。

「いや……こいつ、あんだと知り合いやったみたいやから。害は無

「思ったんや」

「それだけで近づくとは思えないが」

橋の言葉に、困惑で眉間の皺を深くする金。どうやら今度は答えようが無いらしい。

「ねえ！ それより、さっきから言ってる『アンデッド』って何？

こいつの名前？」

痺れを切らしたように、龍太が問いかける。

何度も問いかけてくる所を見ると、随分と気にしている様子である。

答えない訳にはいかないか

幾度となくアンデッドと言う単語を発した。そしてそれに興味を持たれてしまった。ならば、橋には龍太の問いに答える義務がある。ふう、と小さく息を吐き出すと、彼は当たり障りのない範囲でアンデッドの説明を組み上げ、声に出した。

「……アンデッドは、53体存在する様々な種の祖先の総称だ。個々には個々の名前がある。例えば……こいつには、ジョーカーと言うようにな」

「ふーん。でも、さっきこいつの事『始』って呼んでたでしょ？

何で？」

「『ジョーカー』と言うのはアンデッドとしての名だ。上級アンデッドは人間の姿になる事が出来る。そしてこいつも上級アンデッドだ」

「ほんなら、こいつが人間の格好をしとる時、『始』って名乗ってる言う事か？」

「……ああ。『相川始』。それがこいつの、人間としての名だ」

答えつつ一瞬だけ橋はジョーカーに視線を向け……そして意識が無い事を確認した上で、そっと小屋の外に出る。それに続くように金と龍太もするりと表に出た。

「なあ、聞いてええか？」

「何だ？」

「アンデッドは様々な種の始祖の総称で言つてたな。それなら……あいつは、なんの始祖なんや？」

単純な好奇心からだろう。ぬうと呻き、腕を組みながら金がそう問いかけてくる。

だが……それに答えて良いのだろうか。

……ジョーカーはどの種の始祖でもない事を……

そこまでならば別に構わない。だが、もしそう答えたならきつと次はこう聞くだらう。

……ならば何故、存在するのかという事を。

もしそれを聞かれたら、バトルファイトの事から話さねばならない。それは時間のかかる話だし、何よりそれを話せばおそらくは気付かれる。

ジョーカーが、世界を滅ぼすかもしれない存在だと言う事を。それは無用な混乱を招くだろうし、何より……心の片隅で、そんなはずは無い、今の「彼」はジョーカーではなく始なのだと思う部分もある。

「いや、知らんのやつたら別にええねん。変な事聞いて悪かったな」  
思考に落ちかけていた沈黙を、どうやら金は「知らない」と解釈してくれたいらしい。

うんうんと勝手に1人納得したように首を縦に振ると、彼はがしりと龍太の二の腕を掴み……

「ほな、俺らはそろそろ帰るか」

「えー？」

「ここに居つてもしやあないやろ？ それに早よ戻らんと、桃の字達が心配するで。コハナも怒るやろし」

そう言つて金は、もう少しいたいのにとむくれる龍太を強引に引っ張りながら、橘に一礼をして踵を返した。

……そして、剣崎一真達はその場に到着したのは、それから5分ほど後の事……

## その4：望む平和

ヒトはこの仕組みから抜け出せるか。

ヒトでない者は、どこから来るのか。

ヒトの行き着く先は、滅びか。それとも……

キンタロスとリュウタロスが、橘朔也と会う少し前。ハナとウラタロスは凄まじい速さで走る男と、それをバイクで追いかける青年を見かけた。

「……バイクと同じ速さで走る人間なんて、いないよねえ」

「怪しいわね。追いかけなきゃ」

「ホント、真面目だよねえ、ハナさんは」

気合充分なハナを見つめ、呆れたように呟きつつも、彼らの向かった方向にウラタロスは歩き出す。

そんな彼の様子に、ハナはムツとしたように顔を顰め、隣に立つ黒縁眼鏡の青年をきつく睨み上げる。

「ちよつと！ 走るぐらいしたらどうなの!？」

「イマジンだからって、キンちゃんはともかく、僕はバイクと併走できる自信は無いよ。それに、この先一本道だから真っ直ぐ行けばいつかは釣れる訳だし。何より、汗かきたくないんだよねえ」

歩きながらもハナの抗議の声に、しゃあしゃあと言いつつ、ウラタロスは軽く肩を竦める。

かつて、キンタロスは良太郎に憑いた状態でバスと併走すると言った芸当をやり遂げた事があるが、それはひとえに体力に自信のある彼だからできる事だ。主に頭脳プレーを得意とするウラタロスには出来ないし、ガラではない。

「けど、何かあってからじゃ遅いの……よ!」

言って、ハナはぎゅりつとウラタロスの足を踏み躪る。外見年齢

が一桁程度の少女とは言え、慈悲も躊躇もない一撃に、ウラタロスの顔が苦痛に歪む。

「ちよつ、ハナさん！？ 今のは真剣に痛いんだけど！？」

「どーせ何言っても急ぐつもりないんでしょ、あんたは。だったらここに好きなだけいられるようにしてあげようと思っただけけど……」

足りなかったかしら？ と、にっこりと笑いながら言われ、ウラタロスにはブンブンと首を横に振る。恐らく抵抗した場合もつと手酷い扱いを受けると悟ったのか、彼は大人しく痛む足を引き摺りながら、バイクの後を追った。

そして行き着いた先は、人気ひといけの無い、廃港のような場所。そこでは既に、真剣な顔をして話し込む2人がいた。

いや…… 真剣な顔をしているのはバイクに乗っていた青年の方だけで、走っていた男の方は明らかに彼を小馬鹿にした態度を見せている。

その態度は、どことなく嘘を吐いて人を煙に巻く時の自分ウラタロスに似ていると思う。

「何か深刻な話みたいね。ここからじゃ良く聞こえないけど……」  
彼らに見つからぬよう、少し離れたコンテナの影から様子を窺う2人にとって、この距離は声を聞くにはあまり適していない。

「まあ、友達同士の会話って訳じゃあ、無いだろうね」  
眼鏡の奥で、彼の青い瞳が2人の顔を見据えていた……

\*

「もう戦うのは止めないか？」

バイクの青年…… 上城睦月は、ここまで自分が追ってきた男にその声をかけた。

廃港なのか、うまい具合に人の気配は無い。ひよっとすると男に誘い込まれたのかもしれないが、彼に話したい事があった身として

は、むしろこの静かな場所は好都合だった。

「俺は最近、封印したアンデッド達の声が聞こえて来るんです。戦いをやめろ……アンデッドもジョーカーも封印される事がなければもう何も起こらないって」

睦月が、誰もいない海を見つめながらそう言った。

アンデッドは、その名の通り不死の存在。死なない代わりに、トランプに似たカードに封印されるだけである。

彼には本当に聞こえているのかもしれない。かつて彼自身が封印した嶋昇しまのぼると呼ばれていた男と、彼自身を取り戻すきっかけを作った城光じょうひかると名乗った女の声。そして、他の封印されし者達の声も。しかしそんな真剣な彼とは対照的に、相手は軽く鼻で笑うと、小ばかにしたような態度のまま言葉を紡ぐ。

「戦いを止めて……それでどうする？ 仲間のクワガタムシ達と、森に暮らせて言うのかい？」

眼鏡を軽く上げながら言った彼はダイヤのスイートのカテゴリーキング。ヒトの姿をしているが、ギラファアンデッドと呼ばれるれっきとしたアンデッドである。

普段は金居と名乗っているようだが、その名はあまり使ってはいないらしい。少なくとも、睦月は彼を「カテゴリーキング」としか呼んだ事がないし、彼もそれをわざわざ訂正するような事もない。

そして……彼は、ジョーカー以外に残った「最後のアンデッド」でもある。

バトルファイトのルール通りならば、彼が最後の1体として残れば、この世界は彼の眷属……ノコギリクワガタの支配する世界となる。しかしジョーカー……相川始が残れば、この世界はリセットされ、全ての生物が存在しなくなる。

どちらが勝っても、人間の世界は終わる。

だが、決着がつかなければ、何も起こらない。人々は何も知らずに、今まで通りに生活していける。

……何より……睦月は信じている。人間とアンデッドは分かり合

うことができると。闘争本能のみに忠実なジョーカーであるはずの  
始すら、人の中で暮らしていこうとしているのだから。

「人間と共存すれば……」

「俺は、俺達の世界を作る。人間など一人もいない素晴らしい世界だ」  
一縷の希望を乗せた睦月の言葉を遮って、金居は自分の理想とす  
る世界を告げる。

……金居にとって見れば、人間など自分の種にとって害悪でしか  
ない。

同種間でも考えの違いで争いあう愚かな生物……金居は、人間の  
事をそう捕らえていたのかもしれない。

それは本来なら地上の覇権を賭けて、自然発生的に行われるはず  
のバトルファイトが、今回に限っては、故意に引き起こされたもの  
だと知っていたのも大きな要因だろう。

「……クツ。共存だと？」

馬鹿馬鹿しいと言わんばかりに睦月の言葉を一蹴し、金居はくる  
りと睦月に背を向ける。共存など、で斬る訳が無い。愚かで哀れで、  
どの種よりも戦いに貪欲な生命。それが人間と言う生き物だ。

彼らが地上の覇者となった事で、どれだけ多くの種が絶滅に追い  
やられたかを思えば、なおの事。話し合う事などない。

思いながら足を進める彼だったが……その足は、突如として己の  
いく手に現れた異形の姿を見止めた事でひたりと止まった。

腰にベルトのような物がある事から、かろうじてそいつがアンデ  
ッドだと分かる。

両肩に獣の顔のような物が生えていて「三つ首の獣」のようにも  
見える。更に左肩の顔の後ろからはなにやらホースのような物も伸  
びているが、それが何を意味するのかは分からない。

「こいつは！」

見た事があるのだろうか、金居は舌打ちせんばかりに異形を見て  
そう吐き捨てた。

その言葉を理解しているのかどうかは定かではないが、そいつは

金居に掌をかざすと、そこからビームのようなものを発射する。が、睦月が金居を庇いその攻撃は難なくかわされた。

「お前が最後のアンデッドじゃなかったのか!？」

「人造アンデッドだ」

「そんな……馬鹿な……」

「こいつも説得してみるか？」

信じられないと言わんばかりの睦月に対し、皮肉気に金居は返しつつも、異形……ケルベロスとの距離を置くべくゆっくりと後退る。だが、それを許すケルベロスではない。金居に向かい再び掌をかざして攻撃を仕掛ける。

しかしその攻撃が当たるより先に、睦月が再び金居を庇う様に前に踊り出る。アンデッドと人間、共存できる未来を作る為に。

「変身！」

『OPEN UP』

睦月が腰のベルトをスライドさせると同時に、電子音が響く。そこから蜘蛛の模様をした紫色のエネルギーの壁が展開。それにケルベロスの攻撃は弾かれ、ケルベロス自身に跳ね返る。

その一方で、エネルギーの壁は睦月の体を包み、彼を緑色の仮面ライダー……レンゲルへと強化した。その姿は、トランプのクローバーと、蜘蛛の両方を連想させる。

そこでようやくレンゲルを敵と認識したのか、彼の姿を見止めるとケルベロスは攻撃の標的を逃げ腰の金居から敵意を向けてくるレンゲルへと変更。振り回されるレンゲルの杖の攻撃を最小限の動きでかわし、絶妙のタイミングでレンゲルに対して攻撃を仕掛け、当たる。

金居はその戦い……と言うよりケルベロスの様子をじっと見つめていた。まるで何かを観察し、理解せんとばかりに。

複数のアンデッドの細胞を合成している

「逃げた方が良さそうだが、坊や」

ケルベロスを危険な存在と認識したのか、彼らしからぬ気遣いの

見える言葉を睦月に投げかけ、その場から離れようとする。が、奮闘するレンゲルを見てもう少し留まっても平気と判断したのか、少し離れた場所に身を潜めてレンゲルとケルベロスの戦いを再びじっと観察する。

「俺には新しいフォームは無い。けど……強い仲間がいる！」

金居が見つめる一方で、レンゲルはそう言うと1枚のカードを宙に投げた。同時に自分の持つロッドに、何らかのカードを読み込ませる。

……投げられたカードはクラブのJ。描かれた動物は象。

読み込んだカードはクラブの10。描かれた動物は猿。そしてその能力は……

『REMOTE』

リモート。封印したアンデッドを解放、自分の意のままに操る事のできる特殊なカード。

その力によつて、今まで封印されていた象の始祖……エレファントアンデッドが封印から解放された。

「一緒に戦ってくれ」

レンゲルの言葉に、エレファントアンデッドが力強く頷きを返す。それは、リモートの効果で操られているからなのか。それとも、彼もまた睦月に対し、「戦いをやめろ」と囁くアンデッドの1人なのか。

真偽の程は定かでは無いが、「一緒に戦う」と言う願いを聞き入れたエレファントアンデッドは、レンゲルと共にケルベロスへ同時攻撃を仕掛ける。

しかしケルベロスはその攻撃をかわしつつ、確実な攻撃でレンゲルとエレファントアンデッドにダメージを与える。

……いつの間にかダメージが蓄積されてしまったのだろう。エレファントアンデッドの体は実体を保てなくなり、再びラウズカードの中へと封印されてしまった。

本来なら、リモートで解放されたカードはもう一度封印されれば

解放した者……レンゲルの手元へ戻るはずだった。だが、カードはケルベロスの肩から生えるホースのようなものが「吸い込んで」しまった。

「あいつ……アンデッドを取り込んでしまえるのか！」

その様子を影で見ていた金居が驚いたように……だが、どこか楽しそうに呟く。

一方でケルベロスは、驚愕と疲労で動きの止まったレンゲルの首を締め上げ、再び肩のホースでレンゲルからカードを吸い取る。今度は、彼の持つカード全てを。

それは即ち、「レンゲル」としての力を与えていた「チェンジスパイダー」のカードすらも失い、「レンゲル」と言う仮面ライダーから「上城睦月」と言う一介の人間に戻る事を示している。

睦月へとその姿を戻した事で、目の前の相手に興味を失ったのか、ケルベロスは彼の体を放り投げ、どすりと壁に叩き付けた。生身でその衝撃を受けたせいだろうか、睦月はただ苦しそうに呻くだけ。ゆっくりと自分に近付いてくるケルベロスにさえ気付いていないようだ。彼の体に、再びケルベロスの手が伸びる。だが。

「睦月！」

ケルベロスが睦月の元に着くより先に、橘の声が響いた。彼のすぐ後ろには剣崎もいる。

一瞬ケルベロスの動きが止まったのは、単純に大きな声に反応しただけなのか、それとも2人を新たな獲物と認識したためなのか。とにかく、ケルベロスは視線を睦月から橘と剣崎へと変えた。

一方で、剣崎は睦月を襲っていたアンデッドを見る。

始が戦っていた時、アンデッドサーチャーはジョーカーともう1体、正体不明のアンデッドの存在を示していた。それと同じ反応が、睦月の前に立っている。

剣崎はかつて、最後のアンデッド……ギラファアンデッドに出会った事がある。しかし、今近付いている敵はそれとは全く違う。本当に……「正体不明のアンデッド」。

「やはりあいつはカテゴリーキングじゃありません！」

「何だと!? じゃあ一体……」

「正体不明のアンデッド」が、てっきりカテゴリーキングだと思っただけに、目の前の存在の正体が気にかかる。

しかし、相手がアンデッドである以上……そして睦月に危険が及んでいる以上、考えている時間は無いと判断したのか。橘は思考を中断させ、ベルトのバックルを構えた。

「行くぞ！」

「はい！」

変身していない今の睦月は、ただの17歳の少年である。それがケルベロスに襲われればひとたまりも無いだろう。

それを阻止するため、睦月のいる場所に向かうべく2人が駆け出す。

音もなくやってきた黒塗りの車から降りた男が、彼らに声をかけたのはその時だった。

「無駄な事はやめた方が良い」

「天王路理事長……なぜ貴方が！」

男……天王路の登場が意外だったのか、その場で足を止め不思議そうに橘が問う。剣崎は天王路を見た事がないのか、不思議そうな表情で相手を見上げている。

一方で問われた側は、薄ら笑いを浮かべ彼らに衝撃的な事実を言の葉に乗せて放った。

「全ては計画通りだよ。トライアルシリーズも、ティターンも。ケルベロスを生み出すための実験に過ぎなかったのだ」

「何……?」

「貴方があのアンデッドを作った……!？」

人とアンデッドのデータを融合させた存在、トライアルシリーズも。

2体のアンデッドを強制的に融合させた人工アンデッドのティターンも。

全てはこの男の実験だった。

しかも今また、目の前にいるカテゴリー不明のアンデッド……彼曰く、ケルベロスと言つらしいそれを使って何かをしようとしている。

そこまで考えが及んだ時、睦月とケルベロスの事を再認識した。

案の定そこには、ゆつくりとした足取りで睦月に向かうケルベロスの姿があった。……彼に止めを刺すべく。

「奴を止める！ やめさせる！」

「ケルベロスは、誰にも止められない」

楽しそうに言い切る天王路の言葉を理解しているのかいないのか。ケルベロスは未だに呻く睦月の首を締め上げ、近くの壁に幾度と無く叩きつける。

抵抗もできず、ただ叩きつけられるままの睦月を見て、橘と剣崎の2人が同時に睦月の……ケルベロスの方へと駆け出す。

『TURN UP』

ベルトのバックルを回転させると同時に、睦月のそれとは異なる電子音が響く。

それぞれの持つカードの力によって橘は赤い仮面ライダー……ギヤレンに、剣崎は青い仮面ライダー……ブレイドへとそれぞれ変身した。

\*

変身した男達の攻撃を軽々とかわす異形……彼らはケルベロスと呼んでいた……の様子を、ウラタロスは静かに見つめていた。

「ウラ、助けなくていいの？」

「……それじゃ、この時間に干渉する事になるんじゃないかな？」  
ハナの言葉に、爪をいじりながら返す。

確かに、この時間の戦士達は苦戦している。しかしこの戦いは過去に「あった」事なのだ。

下手に手を出して時間に干渉するような事は避けたいし、あった事ならばなるようにしかならない。

「……！ 強い！」

そう呟くと同時に、赤い戦士はカードを取り出し、持っていた銃のリーダー部分に読み込ませようと構える。だが、彼が読み込むよりも先にケルベロスの肩口から伸びるホースへと吸い込まれていった。

先程見た杖使いの緑の戦士が、そうされた様に。

「橘さんのカードが！」

その様子を見て、青い戦士が驚きの声を上げる。

「そっか、あの人は初めて見るんだもんね」

見慣れた側としては今更だが、青と赤の戦士にとっては初めての経験。驚くのも無理はない。

その隙を突くかのように、ケルベロスは赤い戦士を集中的に攻撃する。

赤い戦士を助けようと、青い戦士は持っている剣で斬りかかるが、ケルベロスは鬱陶しそうにその剣を振り払う。その衝撃で持っていた剣が遠くへと弾かれ、彼の援護はかなわない。

その間に受けたケルベロスからのダメージが大きすぎたのか、赤い戦士……橘と呼ばれていた男の変身が解ける。その場に膝をつき、肩で息をしているところを見ると、見た目以上に疲労しているらしい。

それを見て、心底愉快そうに笑う黒服の男……天王路と呼ばれていたか。

「やはり貴様が……始のカードも！」

散らばった橘のカードが、再びケルベロスへと吸い込まれたのを見て、青い戦士は怒ったように言葉を放つ。

同時に、1枚のカードを腕に付けている装置に読み込ませ、もう1枚のカードもセットしようと……した時だった。戦士の後ろで苦しそうに呻いていた橘が声をかけたのは。

「待て剣崎！」

その声に本気の静止が含まれているのを、ウラタロスもハナも感じ取る事が出来る。

その声は、かつて桜井侑斗がカードを使う事を憂いていた、デネブの物と同じような。

「今、お前はジョーカーの影響を受けている。ここでキングフォームになれば、また……あの時のように……！」

あの時？

彼の言う「あの時」が何なのかはわからない。いや「ジョーカー」や「キングフォーム」など、殆ど<sup>ほとん</sup>の事が理解不能だ。しかし、嫌な予感めいたものがある。

侑斗が変身する度に、他人の記憶から消えていくのと同じように、もしかすると青い戦士が抱えている問題も、同じように何らかの代償を必要とする物なのではないのか。

……それでも止める事はできない。時間に干渉する事ができない以上、彼らは見ているしかないのだ。

……それが、ハナにはもどかしかった。

『EVOLUTION KING』

電子音が響くと同時に、青の戦士の姿が変化……いや、進化する。全身に様々な動物のレリーフが浮き上がり、青い戦士から金色の戦士へと。

同時に虚空から現れた光が、弾かれた物よりも1回りほど大きな剣となつて、彼の手に収まった。

「始の……睦月のカードを返してもらおう！」

「剣崎！」

橘の声には、やめろと言う響きが含まれていた。

その姿には、やはり何らかの代償が必要なかもしれない。

「君達では、ケルベロスに勝つ事はできない。全てのアンデッドのデータを融合させた、究極のアンデッドだ！ その力はジョーカーさえも凌ぐ<sup>しの</sup>べない！」

まるで自分の子供を自慢するかのように、天王路と呼ばれていた男は宣告する。

しかしその声を無視し、金色の戦士はひたすらにケルベロスに向かってその剣を振るっていた。

「何なのよあの男……！」

「しー。あんまり大声上げると見つかつちゃうよ、ハナさん」

怒り心頭のハナの口元を押さえながら、困ったようにウラタロスと言う。

別に見つかっても構わないが、ケルベロスに襲われるのは厄介だ。確実にこの時間への干渉行為に当たる。いくら何でも、まだ乗車拒否をされて、この時間に捨て置かれたくは無い。

「すぐに封印してやる。ジョーカーもな！」

「そんな事は……させない！」

天王路の声に、宣言するかのように金色の戦士が言う。

その足元には、先程ケルベロスによって弾き飛ばされた彼の剣があった。

それを素早く拾い上げると、二刀流の要領でケルベロスに斬りかかる。

「始を、睦月を、橘さんを！ これ以上、誰も傷付けさせはしない！」

宣言すると同時に、拾った方の……青を基調としている方の剣をケルベロスの胸部に向けて投げつけた。

突然の出来事に対処し切れなかったのか、それとも連戦によるダメージが溜まっていたのか。ケルベロスはかわす事ができず、己の胸に突き立った剣の刃を握る。恐らくは、引き抜こうとしているのだろう。

だが、刃に触れた事で手は斬れ、刃先はずりりと緑白色の血に濡れるのみ。ケルベロスの胸から生える長さは一向に変化しない。

それを見やると、戦士は5枚のカードを取り出して腰についているリーダーに読み込ませる。

『 SPADE TEN、JACK、QUEEN、KING、ACE』  
読み込まれたカードの名前が読み上げられる。

「ふうん……ポーカーだと、最強の技だねえ」

ウラタロスの呟きに応えるように、電子音が宣告する。彼の言った通り、ポーカーでも……そして戦士自身においても、最強の技の名を。

『 ROYAL STRATE FLASH』

同時に、持っていた剣から投げつけた剣へとエネルギーの奔流が伝えられ……ケルベロスの体内で爆発した。

……それをもって、ケルベロスは敗者となったのである……

\*

「天王路さん、貴方の作ったケルベロスとやらは倒れた」

「そのようだな」

もう少し悔しがるかと思いきや、思った以上にあっさりと橘の言葉にそう返すと、天王路はケルベロスをカードに封じた。

封じられたカードは封じた者……天王路の手元に戻る。

今までケルベロスのいた場所には、彼が吸収したカードだけが残っていた。

「カードが戻ってきました！」

ようやく本調子に戻ったのか、睦月が嬉しそうな声を上げ、いそいそとカードを拾い集める。

自分が奪われたカード、橘が奪われたカード、そして始が奪われたカード。これがなければ始まらなかつたし、これがなければ戦えない。

「確かに、君らがこれ程強くなっていたとはなあ」

心底感心したように、天王路が言う。

「だが、君たちには失望しているんだ。アンデッド封印と言う職務を完遂できずいつまでも手間取っている。しかもそんな素人まで巻

き込んでいる始末だ」

天王路の視線の先には、まだ散らばったカードを集めている睦月がいる。

確かに、睦月は戦闘のプロではない。一介の高校生だ。レンゲルになるためのカテゴリーエースとの融合係数が高かったが故にレンゲルとして変身、戦っているだけに過ぎない。巻き込んだ、と言われれば否定できないのは確かである。

「君達は……退職処分とさせてもらった」

「それって、クビって事ですか？」

「何故ですか！？ 私達は今までアンデッドを封印してきた。それを今更……」

剣崎と橘がそれぞれに問う。

だがそんな問いに答える気もないと言わんばかりに、天王路は自分の言葉を続ける。

「君らの持つライダーシステム。封印したプライムベスタ。その全ては、BOARDの所有物だ。返還したまえ」

それは即ち「仮面ライダー」である事をやめろと言う事。

彼らはBOARDに雇われた「仮面ライダー」だ。だから、天王路の言葉は正しい。BOARDを解雇されたと言うのなら、ライダーシステムやラウズカードは本来の所持者であるBOARDに返還するのが筋と言う物。

しかし……

「それは……できません」

橘が、静かな怒りを湛<sup>たた</sup>えて言葉を紡いだ。その目は、彼の存在の真意を探るべく真っ直ぐに天王路に向けられている。

しかし、天王路の瞳は暗い。何を思い、何を考えているのか、全く読めない。

「……貴方はトライアルシリーズやテイタンを作り、今また睦月を冷酷に処分させようとした。俺の知っているBOARDは、人類の平和のために作られた組織だ。貴方のやっている事は、まるでそ

の逆だ！」

「お前がケルベロスで何を企んでいたかは知らない。だがそれは葬られた。お前の負けだ！」

「俺達はこれからもアンデッドを封印する。それが、俺達の使命だ！」

やれやれと呆れた様子で車に乗りこみ、去って行く天王路を見つめながら、橘はそう宣言する。

冷酷な理事長に、その声が聞こえているとは思っていない。だが、彼の……彼らの信じる正義は、人間を守る事。例え相手が元は自分の雇い主であったとしても、人間の敵になるのであれば敵対する。

……もはや、アンデッドの封印は彼らにとって「職業」ではなく「使命」となっていたのだ。

車を見送り、改めて己の「使命」を認識したその刹那。

「……何なのよあの男！ 頭にくる！ 自分で仕掛けておきながらあの言い草はないんじゃない？」

「え？」

自分達以外に誰もいないと思っていた所に、幼くも甲高い声が響く。

その声に、思わず警戒しながら声の方向を振り返る3人。するとコンテナの陰に、憤懣やるかたないと言わんばかりの表情の10歳前後の女の子と、やれやれと言いたげに眉根を寄せている黒縁眼鏡の青年が立っていた。

「ああ、ほらもう……ハナさんが大きな声出すから、見つかつちやっただよ」

少女を窺<sup>たしな</sup>める青年の方に、橘は見覚えがあるような気分<sup>たしな</sup>に駆られる。それもつい最近……と言うか、先程。

そこまで思考を巡らせた時、思い浮かんだのは始を山小屋に運ぶ際に現れた2人の青年。その姿によく似ている。

ただ、ここにいる青年の瞳は青。先程会った2人は金と紫の瞳だったので、その2人では無い事は明らかだが……無関係、と言う訳

ではないと思う。

「何者だ？ いつからそこにいた！？」

「いつからって……君が眼鏡をかけた男と話している時からよ」

睦月の問いかけに、少女が腰に手を当てて答える。

明らかに睦月よりも年下なのに、自分を「君<sup>きみ</sup>」と呼んでくる事には驚いたが。

「そしたらさっきの怪物が現れて……僕達、怖くて出るに出られなくなってしまうたんです。そのまま先程の方と深刻そうな会話をされていたし、部外者の僕達が出て行くと空気を壊してしまいそうで……盗み聞きする気は全く無かつたんですけど、つい……聞こえてしまつて。うるさくしてしまつたみたいで、どうもすみません」

少女の言葉を継ぐように、青年はすらすらと謝罪する。

だがその言い分はつい数時間前、橋が聞いたものによく似ていた。

こちらが話し込んでいたから、出るに出られなくなった、だと？

「そんな前から……気がつかなかった」

僅かに眉をしかめた橋に気付かなかったのか、睦月が心底驚いたように言う。

剣崎も、よく無事だったな、と2人に声をかけている。

「それじゃ、僕達はこの辺で失礼しますね」

「ちよつと、ウラ！？」

「さっきのゴタゴタで魚も逃げちゃつたし、これ以上ここにいても釣れないみたいだから」

これ以上係わり合いになりたくないのか、それだけ言うと、ウラと呼ばれた青年と、ハナと呼ばれた少女はその場を後にする。

橋だけが、彼らの存在に疑問を抱いていたが……問いかける事はできなかつた。

## その5：悪巧みを叩き

世界は円環する。

だが、何度も同じ歴史を紡ぐ訳では無い。

歴史は、緩やかな螺旋を描くものだ。

「……情報つってもなあ。トンネルの正体がわからねー以上、どんな情報集めろって言うんだよ……」

「集める必要などあるまい。世界は、私を中心として回っているのだ。勝手に私の方へやってくる」

ウラタロスとハナが剣崎達に見つかった頃、モモタロスとジークの2人は芝の綺麗な公園の中にいた。

住宅地から離れているせいか人影は少ない。そもそも、ここにいる理由はジークが「何となくこっちに行きたい」などと言う、訳のわからない理由からだった。

何で俺がこの鳥野郎の面倒見なきゃなんねーんだ？ つーか、ごちゃごちゃ考えるのも面倒だよなあ……

ポケットの中に入れていたパスケース。そこに入ったチケットを見つめつつ、ぼんやりとそんな事を考える。

このチケットは、この時間に滞在するために発行された飯のもの。描かれているのが「かつての自分」ではなく「電王・ソードフォーム」であるため、その気になれば変身もすることができるのだが、今までのように何度も使える訳ではないらしい。

ゼロノスのカードのように、1度使えば変身はできなくなる、とオーナーからは聞いている。

「何をしている？ お供その1。コーヒーはまだか？」

「だああああっ！ 俺が知るか！ って言うかお供その1って呼ぶなっつってんだらうがっ！」

「ふむ。まあ、お前の様に粗野な者に、期待するだけ無駄と言う事か」

「……だったら最初から言うなよ」

「何か言ったか？」

「……………別に」

ジークの相手は疲れる、と言う事を今更のように悟り、パスケースをしまつて芝生の上にごろりと寝転ぶモモタロス。

真冬とは言えそれほど寒くはない。キンタロスでは無いが、このまま昼寝をしても良いかもしれない。

そもそも本来、頭脳労働者ではないモモタロスに、情報収集など向いているはずも無いのだから、こんな風にだらけてしまうのは、当然と言えば当然である。

ハナがいれば怒られそうだが、運よく今は口うるさい暴力娘はいない。いるのはマイペース王子のみ。これと言って面白い事も無く、そしてだらけていても怒る人間もいない。

よし、寝よう。不貞寝しちまおう

思い、陽気に任せてゆっくりと瞼を下ろそうとした瞬間。

「ところで、お供その1」

「……………その呼び方はやめろって言ってるだろ鳥野郎！ 3歩歩いて忘れたか？ ああ？」

軽口を叩きながら、モモタロスは倒していた体を起こしてジークに向かつてその赤い瞳を向ける。寝ようと思ったところを邪魔され、少々苛立ったのもあるのだろう。

しかし見られている方は、そんな若干殺意の籠った視線をスルーし、ただ1点を不思議そうに見つめて問いを漏らす。

「あれは、何だ？」

「あれ……………？」

ジークの視線の先にある「あれ」を確認すべく、モモタロスもそちらの方を見る。

そこには。

やや白髪の混じった中年の男の姿と。

それに、今まさに襲い掛からんとする異形の姿があった。

「っ！ 危ねえおっさん！」

条件反射的にそう叫びつつ、男を突き飛ばして襲い掛かってきた異形を蹴る。

蹴られた方は、2、3歩よろめきはしたものの、大したダメージでも無かったらしく再び男の方に向き直った。

「何なんだあいつ！ イマジンじゃ無えぞ……！」

相手がイマジンならば、自分が気付かない筈が無い。人の姿をしていても、イマジン特有の臭い……「存在」を感知する事は得意だからだ。

だが、近くにジークがいる事を差し引いても、今自分の目の前にいる相手からはイマジンの臭いが無い。

全く無いとは言い切れないが、少なくともイマジン程強い物ではない。

「おいジーク！ そのおっさん連れて逃げろ！」

「私に命令するな。不愉快だ。……しかし、それでお前は どうする気だ？」

「へっ。決まってるんだろ？」

ジークの問いに、モモタロスは肩をピクリと震わせて笑い……どこからか、銀色のベルトを取り出した。

「丁度、暇で暴れたいと思ってた所だ。相手してもらおうぜ」

カチャリとベルトを巻きつけ、再びパステースを取り出し……

「変身！」

声をあげると同時に、ベルトの1番上の赤いボタンを押し、ベルトにセタツチする。

『SWORD FORM』

電子音が響き、ベルトはモモタロスのチャクラを物質化、赤い電王……剣撃主体の姿であるソードフォームへと変身した。

「俺、参上！」

言うのが早いか、モモタロスは腰に付いていたデンガツシャーをソードモードに組み上げる。

それを見た異形が、不思議そうに首を傾げ、虚ろな瞳がようやく男性から反れ、モモタロスだけを映した。

骸骨を連想させる白い顔以外は、全身が漆黒。背中から生えている触手めいた物が、どこと無く蜘蛛や百足と言った多足類を連想させる。そして手には大振りの剣を携え、ゆらゆらと体を左右に揺らしながら歩いてきた。

「最近体が鈍ってきたと思ってた所だ。相手してもらっぜ」

嬉しそうに言い、剣の腹をするりと撫で上げながら、モモタロスは異形に容赦なく切りかかる。が、相手はその攻撃を背中の触手で受け止め、先程のお返しと言わんばかりにモモタロスの腹を思い切り蹴り飛ばす。

「うっぐっ！」

「確実に倒さんと次は無いぞ、赤いお供その1」

「分かってんだよそんな事は！ ちょっと油断しただけだ！ それと、色で呼ぶな、色で！」

「色も駄目、数字も駄目。我儘が過ぎるのではないか、お供よ」

「誰が！ いつ！ お前のお供になった、烏野郎！？」

襲われていた男を隠すようにして立つジークの声に、見向きもせずモモタロスは体勢を立て直しながら答える。

何度か斬りかかるが、その悉くを怪物は受け止め、逆に手に持った大太刀でモモタロスを斬りつける。

「何だ何だあ……やってくれるじゃねーか。楽しくなってきたぜ……！ つつつても、俺は最初から最後まで、徹底的にクライマックスだけどなあ！」

自分に劣勢……にもかかわらず、モモタロスの声は心底楽しそうだった。

彼は基本、戦いを楽しむ癖がある。いかに格好良く戦うかに重きを置いていると言っても良い。歯応えのある相手と戦えるのは嬉し

いい、楽しいのだ。

……もつとも、今は楽しんでる場合では無いのだが。

そしてジークの後ろでは、男が険しい顔をしてモモタロスの……  
電王の方を見つめていた。

「んん？ どうした？ 何か言いたい事でもあるのか？ あるなら聞いてやるぞ」

男の様子に気付いたジークが声をかける。

ジーク独特の、上から物を見るかのような言葉遣いに気を悪くした風も無く、男は真剣な表情を作ると、ジークではなく電王の方へ声をかけた。

「……腹部のベルト。その中央部分を破壊しろ。それでそいつを……  
…トライアルAを倒す事ができる」

「ああん？」

男の言葉に、モモタロスの口からは思わず不審かつ不満そうな声があがる。

怪物の弱点と思しき物を知っている事も不審ながら、何より命令口調なのが癪に障る。そう言う口調で話すのは、今のところジークだけで沢山だ。

だが、ジークが先程言った通り、1回のフルチャージで雌雄を決しなければならぬ。しかも下手にダメージを喰らい過ぎれば、それもまた変身解除につながってしまう。

もう少し楽しんでいたい所だが、これ以上は時間への過度な干渉へとたりかねない。

「チツ！ 考えても仕方ねえっ！ ベルトのど真ん中をぶち壊せば良いんだな、おっさん！」

舌打ちと共に言うが早いか、異形の懐に潜り込みその腰の辺りを横に薙ぐ。斬れはしないがダメージには繋がったらしく、異形……  
男はトライアルAと呼んでいた……は目に見えて後退した。

一瞬の事で相手の反応は遅れていたが、それを見逃すモモタロスではない。少しでも遠ざけようとする異形の反撃をかわし、もう1

度パスをベルトにセタッチする。

『FULL CHARGE』

電子音と共にデンガツシャーにエネルギーが送られ、バチリと赤いプラズマが走る。そして普段なら剣先を飛ばす「操り糸」となるはずのそれは、使い手の意思故にそこに留まり、デンガツシャーの刃先を取り巻く。

「俺の必殺技、パート1！」

エネルギーがチャージされたデンガツシャーを、すれ違いざまに振り……モモタロスはそのまま、異形の体をベルトごと断ち斬る。

デンガツシャーを通じて伝わる、イメージを斬る時とは異なった確かな手応え。そして嫌な音と共に上がる相手の血。それに顔を曇める間もなく、異形は爆発、四散し、大きな爆音だけ残してこの世から姿を消した。

「……もう少し歯応えがあるかと思っただが、大した事無えじゃねえか」

「その割には、手間取っていたようだが？」

「うるせー。俺は格好良く戦えればそれで良いんだよ。時間や相手は関係ねえ」

先程感じた「嫌な手応え」を振り払うかのようにジークの言葉に軽口で返しつつ、自分のベルトを外す。同時に今回使ったチケットの絵柄が、ソードフォームからかつての自分の姿……イメージとしての、あの赤鬼の姿に変化した。

ちつ。やっぱり無制限に変身して訳にはいかねーか

眉をしかめ、そのままパスケースをズボンのポケットにしまう。

「助かった。だが、その力はライダーシステムでは無いな。……どこで作られた物だ？」

ジークの後ろから、助けた男がそう問いかける。

眼光は鋭く、だからと言って悪人と言う風にも見えない。服装はくたびれてはいるが、それは先程の異形に襲われていたせいだろう。……自分が突き飛ばした事による怪我、と言う可能性も否定しき

れないが。

その辺りを差し引いても、どこかの「偉い人」らしい事はわかる。男が纏っているのは、責任ある者のみを持つ事の出来る空気だ。

「作られた所なんざ知らねーよ。ところでおっさん、怪我とかねえか？」

「無い。それから、おっさんと呼ぶのはやめる。俺はまだ48歳だ」

余程嫌だったのか、険しい顔で男はモモタロスに言う。……相変わらず命令口調ではあったが。

「じゃあ、何て呼べばいいんだよ」

「……烏丸。烏丸啓だ。BOARDの所長……だった」

男は、どこか遠くを見るような目でそう己の名を告げる。

BOARDと言うのが何なのかよく分からないが、とにかく偉い人物らしいと言う事は分かった。「だった」と言う過去形なのは、今はその職を解かれでもしたのだろうか。

だからと言って、烏丸に対する態度を変える気は、2人にはさらさら無いのだが。

「烏丸、か。私は……野上 軸ジク。そしてこの粗野な男は私のお供その1だ」

「だからお供その1って呼ぶなって言ってるだろうがっ！俺にはなあ、野上 桃モモって名前があるんだよ！」

あまりセンスが良いとは言えないが、呼ばれなれた「モモ」を捨てる事はできなかった。

本当はもつと格好良い名前を考えたかったが、どうにも思いつかなかったなので、今のこの「野上桃」を名乗る事にしたのである。

一方のジーク。「軸」とは、意外にも彼自身がつけた名だ。

常に世界の中心である事……そして自分の本来の名であるジーク。この2つの意味を繋げる字がこの「軸」だったのである。

本来は自分の母……最初の契約者の苗字である「鷹山」を名乗るうとも思っていたようだが、今の自分の姿を考えて、「野上」の方を名乗ることにしたようである。

「お前達はよく似ているが……双子か？」

「まあ、そのような物だ」

頷きつつ、ジークは優雅な動作で近くのベンチに腰をかけた。

「……随分と曖昧な表現だな」

「双子って訳じゃねえし。こんな鳥野郎と血のつながりとか……無い無い無い」

ジークの隣に座る烏丸を見やり、モモタロスはブンブンと首と手を振って心底嫌そうに返す。

その回答に満足できなかったのか、烏丸は更に何かを問おうとしたが……先に放たれたジークの問いによって遮られてしまった。

「それよりも烏丸、先程の怪物は何だ？ 随分とアレに詳しくあったが」

「おう、そう言えば俺もそれが聞きたかったんだよ」

「簡単な事だ。あれを……トリアルAを作った者を知っていたからだ」

「作ったあ？」

不審そうに、モモタロスが返す。

今まで戦ってきた者の中に「何者かに作られた者」と言うのは無かったからだ。

自分達をこの時間に連れてきたカイですらも、イメージを統べるだけであって、ゼロから作る事はしなかった。

「そうだ。あれはBOARDの……天王路の企みによって作り出されたものだ。アンドッドと人間のデータを融合させたもの。それがトリアルシリーズだ」

「アンドッド」や、「BOARD」と言う物は、2人にはよく分からない。だが、烏丸がトリアル「シリーズ」と言った事を考えると、彼を狙っている怪物は今の1体きりとは到底考えられなかった。まして、先程の怪物は間違いなく烏丸を殺そうとしていた。つまりこれからも彼を狙う怪物が現れるかも知れないと言う事になる。とは言え、既にモモタロスは1度変身してしまっている。今、襲

われたらまともにも戦えるのはジークだけだが、それも本人のやる気次第だろうし、彼の表情を見る限りその気は全く無さそうだ。

「でもよ……あなた、そのボードとかつて所の所長だったんだろ？  
何でそこで作った奴に命狙われるんだよ」

「天王路にとつて、俺はもう用済みらしい。自分の欲望のためなら邪魔な者は消す……そう言う男だ」

烏丸が自嘲気味に呟いた言葉はとても小さなものだったが、2人の耳にははつきりと届いていた。

その声には、憤りと絶望……そしてほんの少しの悲哀が混ざっていた。

「何だかよくわからねーが、要はお前、その天王路つて奴に狙われてるって事だろ」

「そうなるな」

「だったら、そいつをブツ倒したら良いだけだろ」

「それができたら苦労はしない。今の俺には、奴の居場所は分からん」

そう言うのと、烏丸はゆっくりと立ち上がった。

「巻き込んですまなかつたな」

「どこへ行くのだ？」

ジークが座ったまま、どこかへ歩き出そうとした烏丸に声をかける。

烏丸の表情に、迷いや絶望は無い。

むしろ何かを決意したような光が、その瞳には宿っていた。

「アンデッドを封印している部下達がいる。そいつらを頼ろうと思つてな」

頼る、とは言っているが、恐らくは自分も力になる気なのだろう。先程までを感じられなかった威厳のような物が、今の烏丸にはある様な気がした。

「そつだ、桃」

「何だよ？」

「お前の戦い方は、少しだけ剣崎に似ているな」

「はあ？」

不敵な笑みを浮かべる烏丸に、モモタロスは素っ頓狂な声を上げた。

剣崎と言うのが誰だかわからない。知らない人間と比較されても嬉しくもなんとも無いし、そもそもイマジンである自分と比較される人間とは如何な物か。

……少し興味が湧いたが、今はその人間よりもオーナーに言われていた「元凶」とやらを探る事が先である。

その人間とは、機会があれば会えば良い。

去り行く烏丸の背を見つめながら、モモタロスはそんな事を考えていた。

「……さて、我々も行くぞ、お供その1」

「行くつて……どこへだよ？」

「決まっているだろう？ 姫達と合流するのだ。これ以上ここにいても、何の収穫もあるまい」

「……それもそうだな。カメ公達が、何か掴んでるかも知れねーし。

……つて、だから！ 俺をお供その1つて呼ぶんじゃねエよ！ この鳥野郎オー！」

すたすたと、烏丸とは逆方向に向かって歩くジークに、モモタロスはこの日何度目かのツツコミを入れた……

その6：君なら何を望みますか？

これは真なる歴史なのか。

それとも新なる歴史なのか。

どちらにしても、まだ未来は決まっていなない。

「いくら収穫無しだからって、チーム編成変えてまで調査を続ける必要あんのか？」

はあと盛大な溜息を吐きながら、モモタロスは誰にと言う訳でもなく呟いた。

トリアルとか何とか言う異形を倒し、烏丸と別れた後、何とか他のメンバーと合流したのだが……誰もトンネルに関する情報は得られなかったと分かったため、ハナの号令の下もう一度調査をしないおす事になったのだ。

「デンライナーから放り出されたいって言うなら、別に良いわよ？」

「しかもハナクソ女と一緒に……」

それを言い終わるかどうかのうちに、ハナの鉄拳がドゴツと言う音を立ててモモタロスの鳩尾に入る。

「ぐふおっ！」

「……ハナちゃんってイマジンに容赦ないよね」

「……俺には特に容赦ねえだろ……良太郎に憑いてた時でさえ、良太郎ごと殴られてんだからよ」

蹲りながら痛みで痙攣している自分を、人指し指で突くリュウタロスに、モモタロスは涙目で相手を見上げながら答える。余程ハナの拳が堪えたらしい。

……なお、今回のチーム編成は「モモタロス、リュウタロス、ハナ」と「ウラタロス、キンタロス、ジーク」の3人1組の2チームハナとしては、正直このチーム分けで問題が起きないはずも無い

とは思ったが、情報の共有化という観点から、ウラタロスがこれを提案してきたのだ。

……まあウラタロスの本心は大方、ハナがいてはナンパができぬ、と言う事なのだろうが。

そしてそれが「昨日」の事。結局彼らはこの時間の中で夜を明かし、今日は朝から行動開始である。

「……そう言えば、何でモモは変身した訳？ それを昨日聞きそびれたんだけど」

「う。それはまあ、人助けって言うかよお……」

ももごと口ごもるモモタロスに、ハナがきゅつと眉間に皺を寄せ、更には視線を合わせるように爪先立ちになってずずいと詰め寄る。

「あんだねえ！ オーナーからも時間に干渉するなって言われてたでしょ！？」

「しょうがねえだろ！？ あのままじゃあのおっさん、死んじまうところだったんだからよ。……見捨てる訳にもいかねえだろうが」

「でもさあ、事故とかなら変身しなくても助けられるよね？」

「そうよ、その人がイマジンみたいなものに襲われてたって言うならともかく……」

「……襲われてたんだよ、変なバケモンに」

低く返されたその答えが予想外だったのか、モモタロスに詰め寄っていた2人の動きがぴたりと止まる。

「イマジンじゃねーけど、それに似た奴だな。確か……トリアル、とか言ってたがっただぜ」

一瞬の間隙を好機と取ったのか、モモタロスは真剣な声のまま、自分の記憶を辿って更に言葉を放つ。

トリアル……その単語に、ハナは聞き覚えがあったのか、彼女は爪先立ちを止めると、モモタロス同様自身の記憶を辿るように瞑目した。

思い出すのは、愉快そうに怪物を眺める男。そしてその時口にし

ていた言葉。

全ては計画通りだよ。トライアルシリーズも、ティターンも、ケルベロスを生み出すための実験

「トライアルって……あの男が言ってた？」

「ハナちゃん、あの男って誰？」

「そうか、あんた達は知らないのよね。昨日、ウラと一緒にいた時見た男よ。天王路って言ってたっけ」

きよとんとした表情でかけられたリュウタロスの問いに、ハナが心底嫌そうに答えを返す。特に、天王路の名を出した時の顔はイマジンを憎んでいた時の表情を彷彿とさせるものだった。

「そう言や烏丸のおっさん、その天王路とかって奴に狙われてる、とかも言ってるやがったな。……偶然か？」

彼なりに、何かキナ臭いものを感じたのだろう。いつもは大きく見開き気味の目を僅かに細め、彼を取り巻く空気が剣呑な物に変わる。

ハナとモモタロスが纏う空気が悪くなっていく中、リュウタロスだけは話しについていけない事もあるせいなのか、きよとんとした表情を浮かべ、モモタロスの袖を引いた。

「ねえモモタロス、そのトライアルって何？」

「あ？ ああ、烏丸おっさんが言うには、『アンデッド』とか言う奴と人間のデータを融合させて作った物らしいぜ。良くわかんねーけどな」

3人の中で唯一トライアルという単語を知らないリュウタロスの問いかけに、昨日聞いた言葉をそのまま返す。

自分自身でさえ意味が分からないのに、初めて聞くリュウタロスに意味が通じるとは思えないが、これ以上の説明のしようが無いのだから仕方ない。

「そう言えばその『アンデッド』って単語、私も昨日聞いたけど何なのかしら。モモは知らないのよね」

「知らねーな。俺もそう言うもんだって事しか聞かなかったし……」  
「僕、知ってるよ」

首を傾げる2人に対し、今まで質問しかしていなかったリュウタロスが、えっへんと言わんばかりに胸を張って言い放つ。

その様子に、2人はぎょっと目を見開き、声の主をまじまじと見つめた。それに気を良くしたのか、リュウタロスはにこにこことその顔に無邪気な笑顔を浮かべ、更に言葉を続けた。

「んつとねえ、色んな生物の始祖の事なんだって、アンデッドって全部で53体いるんだって言ってたよ」

「……言ってたって……誰が？」

「昨日、熊ちゃんと一緒に会った……橘って奴」

本当に、これは偶然なのかしら

リュウタロスの言葉を聞いた瞬間、ふとハナの脳裏をそんな考えがよぎった。

全く違う場所にいた自分達が、揃いも揃って「アンデッド」と呼ばれる存在と、何らかの形で接触している。

しかもリュウタロスの出会った橘と言う人物が、自分とウラタロスが見たあの赤い戦士と同一人物だとしたら、これ程「出来すぎた偶然」も無い。

「でも……トンネルの事とは関係無いよね？」

そう、いくら自分達がアンデッドに関する情報を持っていたとしても、それはトンネルに関係する事ではない。

ならば優先させるべきは……

「アンデッドの事は一旦忘れましょ。今はトンネルの情報を集めるのが先決。……モモ、サボるんじゃないわよ？」

「ちよつと待て！ 俺限定か！？」

「やーい、怒られてやんのー」

いつもの調子を取り戻し、ハナと2人のイマジン達は当ての無い情報収集を再開した……

\*

ケルベロスからカードを取り戻した物の、ハートの2……「スピリットヒューマン」のカードを用いて「ジョーカー」から「相川始」の姿に戻しても、彼は目を覚まさなかった。

仕方なく剣崎達は彼を虎太郎の家に運び、夜通しで様子を見ていたが……それでも、目覚める様子は無い。

疲れていたのか、いつの間にか剣崎を除く全員がリビングで眠ってしまっていた。寝息と鳥の囀り以外は聞こえない。時折剣崎が始の額に置いた布を冷やす為、桶に張った水がぴしゃりと跳ねる音が小さく響くだけだ。

だが、その静寂はけたたましいまでの電子音によって打ち破られた。

始を除く、眠っていた全員がその音で跳ね起き音源を探す。そしてその音源がアンデッドサーチャーの物である事に最初に気がついたのは、広瀬菜だった。

覗き込んだパソコンのモニターには、カテゴリーキングを指し示すマーカーと、彼の現在位置が示されている。

「アンデッド、カテゴリーキングよ！」

「カテゴリーキング……！」

彼女の言葉を聞くと同時に、橘がレンゲルのバツクルを持って部屋の出入り口へと足を踏み出す。睦月も険しい顔でその後に続く。だが……剣崎だけは、外へ出るのを躊躇っているようだった。目を伏せ、苦しそうに始と橘を交互に見つめる。

「橘さん……俺は……」

「お前そいつを見張っている。カテゴリーキングを封印した時、そいつに何が起こるかわからない」

剣崎に皆まで言わせず、未だ眠り続ける始をちらりと見ながら、橘はそう言葉を放つ。

今の剣崎がアンデッドと戦ったとしても、恐らくは相川始の事を気にかけてしまう。戦いにおいて他の事を考える事ほど危険な事は無い。

しかも相手は上級アンデッド……カテゴリーキングなのだ。下手をすれば死に繋がりがかねない。

「橘さん、俺も行きます」

「頼む」

睦月の言葉に短く……だがそれ故に急を要すると分かる返事をすると、橘と睦月はこの邸を出て、サーチャーの示した場所へと赴いた。

「始……起きてくれよ……」

出て行った2人を見送った後、剣崎は祈るようにそう呟く。その声に含まれるのは、眠り続ける彼への心配。そして、ほんの僅かな不安。

そんな剣崎の声が届いたのか。始の瞼が、ゆっくりと……そしてうつすらと開いた。

「やっと気がついたのか？」

剣崎の声が弾む。表情もほっとしたように緩んだ。

いくら何でも寝すぎだろう、どれだけ寝てたと思ってるんだよ。

その言葉を続けようとする剣崎を、始の黒い瞳が映す。その刹那、彼は弾かれたようにその身を起こすと、無表情に一同を見渡し……

皆さん、はじめまして

「頭の中に声が……！」

響いた声に、広瀬が驚きの声を上げる。どうやら彼女の言う通り、「彼」はテレパシーのような物で自分達に語りかけているらしい。

頭に響くのは、確かに始の声。しかし始であればこんな話し方はしないし、何より「はじめまして」などと言うはずが無い。

「違う！ 始じゃない！ ……誰だ、お前は」

訝り、敵意すら感じられる剣崎の問いかけに、相川始の姿をしたその存在は、相変わらず無表情のままテレパシーでこう答えた。

私は、相川始でも、ジョーカーでもありません。貴方達の言う、

カテゴリー2

「ヒューマン、アンデッド……」

呆然としたような剣崎の眩きが落ちる。

ヒューマンアンデッド。即ち人間の始祖。

ジョーカーを「相川始」の姿に変える存在であり、今は既にラウズカードに封印された身。

その彼が、なぜ今この場に現れ、剣崎達に語りかけているのか……何よりも、始はどうなったのか。

剣崎の頭の中には、無数の疑問が浮かんでいたが、それを声に出す事はなかった。……できなかった、と言った方が正しいのかもしれないが。

そんな彼の考えの一部を読み取りでもしたのだろうか。彼は真つ直ぐに前を見据えたまま、剣崎の疑問の1つに答えを返す。

ジョーカーは、自分が獣に戻る事を恐れました。そのため、自分が目覚めぬように、深く深く、自己催眠をかけました

「始は、大丈夫なんですね？」

ほつとしたように剣崎が言う。今の彼にとって、始は大切な友人なのだから、当然ではあるのだが。

ケルベロスに吸収されていたはずのヒューマンアンデッドが、何故その事を知っているのかは定かではないが……始が無事であった事に比べれば、些細な事だ。

私は、彼の内部から働きかけてきました

ジョーカーの闘争本能を抑えるためには、外部からと内部から、両方から働きかける必要があった。そのために、ヒューマンアンデッドはあえてジョーカーの前に身を晒し、無抵抗のまま封印されたのかも知れない。

「相川始」が、いつか本当に大切だと思える人間に出会えるかもと言う、ほんの僅かな可能性に賭けて。

そして今では彼は、人間になりたいと願っています。他の生物を滅ぼすのではなく、人間の中で、生きていこうと

結果、彼はその賭けに見事に勝ったのである。栗原親子と言う「守るべき者」と……剣崎一真と言う「親友」と出会った事で、人で

あり続けようとしているのだから。

「それで、ご先祖様」

「ご先祖お！？」

「そうでしょ？ あたし達人類の始祖なんだから」

虎太郎のあげた頓狂な声に、広瀬は冷たい視線と声を浴びせる。

彼女の言葉に納得したのか、それともただ単に威圧されただけなのか、小さく体を震わせると、虎太郎は黙り込んでしまう。

そんな虎太郎を無視し、広瀬はヒューマンアンデッドの方に向き直って言葉を続けた。

「教えて欲しい事があるんです。アンデッドが最後の1体になった時、何が起るんですか？」

アンデッドが最後の1体になった時、勝ち残った種が地上を制する。今まではそうだと思ってきた。

だがここに来て、天王路の行動やカテゴリーキングの「勝利」に対する執念は、それだけでは無い「何か」がある……そんな気がしていたのだ。

バトルファイトに勝利した時、統制者の声が聞こえました。お前の望むままになる。人類も、人類以外の生物も。この地球さえも、と

「……一体、どういう意味？」

勝利者には、万能の力が与えられます。世界を自分の望むように変える事ができる力を

「それじゃ、まるで神の力……アンデッドが欲しがらる訳ね」

淡々と、まるで他人事のようにヒューマンアンデッドは語る。…

…かつてはその「世界を自分の望むように変えられる力」を手に入れたはずであるにもかかわらず。

「それで貴方は、何を望んだんです？」

それを察したのだろうか、剣崎が思わず問いかけた。

今の地上は、確かにヒトという種が支配している。しかし、他の生物もまた存在している。カテゴリーキングではないが、自分が勝

利したのなら、自分以外の種を排除する方向に持っていくの一般的なアンデッドの考えでは無いのか。

……ならば、彼は何を望んだのか。

万能の力をもって、何を成したのか。

だが。そんな剣崎の問いに対して、彼は問いで返した。

……君なら、何を望みますか？

無表情だが、どこか笑っているようにも見える顔で、剣崎の瞳を見つめ……人類の始祖は、再びその意識を閉ざした……

\*

……君なら、何を望みますか？

頭に響いた声は、最後にそんな事を言つて途絶えた。

いつの間にか迷い込んでしまった誰かの家の前で、ハナ達はそこから聞こえる「頭の中に響く声」と家の中にいた人物達の会話に耳を傾けていた。

ハナにとっては、頭の中に声が響く事など初めての経験だったが、モモタロス達2人にとっては、声こそ違えど似た経験がある。それを思い出したのか、2人共あからさまに不愉快そうにその顔を歪め、軽く頭を振つて声の残滓を追い出そうとしていた。

「勝手に頭の中で喋るんだもん。……嫌いから嫌いなのに」

心底嫌そうに言うリュウタロス。家人に見つからぬよう、小さな声ではあったが。

「ヒューマンアンデッドだったか？ あいつ、まるで俺らがここに居るのが分かってるみてーだったな」

「偶々じゃない？ 中に居る人の質問に答えているだけみたいだったし」

「だったら僕達にまで聞かせる必要ないよ」

リュウタロスに言われ、ようやくハナも彼らの言いたい事を理解する。



## その7：カテゴリー、不明

誰かが教えなければ、知り得ようの無い事実がある。

例えばそれは、時を支配する列車の存在。

例えばそれは、バトルファイトの勝利者への祝福……

「ほう？ トライアルAがな」

電話越しに行われる部下の報告に、思わず天王路は目を細めた。

昨日、烏丸を襲わせていたトライアルAが、何者かに倒されたと言う報告。トライアルシリーズを倒せるのは仮面ライダー位だろうが、彼らが烏丸を助ける事ができたとは、時間的にも考えにくい。

では、何者が？ そんな疑問が浮かぶが、恐らく答えは出ないだろう。

トライアルAを倒した者が何者であるにせよ、今この時点で烏丸とBOARDのライダー達が接触するのは不都合だ。

今は部下達が烏丸を妨害しているが、部下とて所詮は人間。烏丸に確実に死んでもらいたい身としては、人間がそれを行うのは心許ない。

ならば……

「確かまだ、トライアルCが残っていたな。それで何とかしたまえ」  
それだけ言うと、彼は煩わしそうに電話を切って懐にしまう。それと同時に天王路は先程までの会話を頭の隅へと追いやった。

一方で、今度は電話と入れ違うように取り出したカードに向けて、陶酔した声で語りかける。そこに描かれたケルベロスに。

「ケルベロスよ、お前の本当の力を見せる時が来た。ライダー達を超える、真の力を！」

ここは昨日、ケルベロスが破壊した部屋。だが、かの存在が破壊した痕跡は少ない。瓦礫は綺麗に撤去され、屠られた死体は血の跡

も残さず処理されている。唯一天王路の背後の壁に開いた大穴だけが、昨日の惨劇を証明するように残っているだけ。

その穴の向こうから1つの影がするりと伸び……カツンと小さな音を立てて、天王路の背後にその影の主が立った。

「……私の周りをこそこそ嗅ぎ回っていた様だな、カテゴリーキング」

入ってきた存在……金居に、天王路は座ったまま首だけをそちらに向けて声をかける。そんな不遜な態度に気を悪くした様子も見せず、金居はひよいと肩を竦め、口の端に皮肉気な笑みを浮かせた。

「このバトルファイトを始めた者に、興味があつたのさ」

……それは、彼が随分と以前から天王路を調べていた事を意味している。

愚かしくも賢しい「ヒト」であれば、ジョーカーを……アンデッドにとつて最大の脅威を封印する手段を開発する。そう見込んでいたのかもしれない。

そして事実、彼ら「ヒト」は開発した。ケルベロスと言う、彼が求めていた「手段」を。

「これが欲しいのか」

「そのカードを使えば、アンデッドを封印できるんだろ？」

天王路の見せたケルベロスのカードに視線をやりつつ、金居は自分の推測を述べる。

推測……にしては、声に確信めいた物があるのは、先の戦いにおいて仮面ライダー達がカードを奪われ、苦戦していたのを見ていたためだろうか。

「その通りだ。お前とジョーカーを封印するその時、地上に残るアンデッドはケルベロス1体のみ」

金居の言葉を肯定すると同時に、天王路はゆっくりと席を立ち目の前にあるあの漆黒の石の前で歩みを止める。

石に対して抱く感情は愛だろうか。触れる手つき、送る視線、そして吐き出す吐息。その全てが、天王路が石に抱く「愛」を示して

いるようにしか見えない。

「そして神が現れて、ケルベロスに祝福を与える。バトルファイトの、勝利者に……！」

「ジョーカーを封印するのは俺だ。そのカードさえあれば」

天王路の愛に興味は無いのだろう。ゆらりと金居の周囲の空気が歪み、同時に彼の姿が「金居」から「ギラファアンデッド」へと変貌した。

……元の姿に戻った、と言った方が正しいのかもしれないが。

純金に近い色の体。その両手にはそれぞれヘルター、スケルターと名付けられた大剣が握られている。

「さあ、カードをよこせ！」

「フフフフフ。君はまだ、ケルベロスの本質を理解していないよ  
うだねえ」

「何……？」

剣を喉元に突きつけられているにも関わらず、何の動揺も見せない。それどころか余裕すら感じられる天王路の態度に、ほんの少しだけギラファアンデッドは不信感と不安を抱く。

自分の知らない何かを、まだ天王路は隠しているのかも知れない。そう思った刹那、やおら天王路が左袖を捲り上げ、己の腕を見せた。そこにあつたのは、彼の腕に融合している、銅色の「何か」。  
「変身」

呟くように天王路がそう言うと、持っていたケルベロスのカードをその「何か」に差し込む。

すると……カードは吸い込まれるように「何か」の中に入っていく、天王路の姿をケルベロスその物へと変えていった。

いや。先日見た姿とは、ほんの少しだが異なっている。左肩にあった顔が一回り大きくなり、胸の辺りからは白く濁った天王路の顔の上半分が覗いていた。

……Aのカードの特徴は「チェンジ」。即ち変身。

天王路がケルベロスのカテゴリをAとした理由を、今になって

ようやくギラファアンデッドは理解した。

「アンデッドと……融合しただと!？」

「いや。私はアンデッドになったのだ!」

ギラファアンデッドの言葉を否定し、心底嬉しそうに響く天王路の声。

同時にギラファアンデッドは「それ」を危険な存在だと判断したのだろう。持っている大剣で斬りつけようと襲い掛かるが、その攻撃はあっさりとかわされカウンターを喰らう。

反動でギラファアンデッドは建物の外に飛ばされ、それでも追撃に備えて体勢を立て直そうとする。しかし相手も考えているのか、彼が体勢を完全に立て直すよりも先に散弾の様な攻撃を放って吹き飛ばした。

飛んでいく相手を、悠然とした足取りで追うケルベロス。それからは、天王路の高らかな笑い声が響いている。

その声が癪に障ったのか、それともアンデッドとしての本能なのか。ギラファアンデッドは今度こそ体勢を立て直すと、再び大剣を振りかざしてケルベロスに挑む。

ケルベロスと融合しているとは言え、相手は実戦経験の無い一介の人間である。ギラファアンデッドの敵ではない……はずだった。

だが、ケルベロスは素早い動きで攻撃をかわし、逆にギラファアンデッドにダメージを与えている。そして大きく彼を突き飛ばすと両肩から高エネルギーを発射。命中させた後、爆煙で濁った視界をもともせずギラファアンデッドを捕らえ、壁に叩きつけた。

「君を封印すれば、残るはジョーカーのみ!」

「封印する……?」

訝しげな声をギラファアンデッドはあげ……天王路の目的に思い当たったのだろう。普段は冷静な彼が、声を荒げた。

「それがお前の目的か!」

相手の「目的」を遂げさせる訳には行かない。

そんな考えからか、ギラファアンデッドは必死にもがいて何とか

ケルベロスの手から逃れた。だが、ケルベロスはそれを許さぬと言いたげに、再び散弾型のエネルギーを放って命中させる。いや、させたつもりだった。

だが煙が引いたあとには、寸前で逃げたのかギラファアンデッドの姿は無い。点々と、彼の物と思しき緑白色の液体が続いているだけ。

「逃がしはせんよ……カテゴリーキング。神の祝福を得るのは、私なのだから」

\*

モモタロス達が白井邸に迷い込んでいた頃、一方のウラタロス達もあてもなく彷徨っていた。

彼らの行き先は、やはりジークの気の向くままではあったが、何も指標が無いよりはマシと言った所か。

「……やっぱり、アンデッドって言う存在が今回の件の鍵かもね」

「なんやいきなりやな。せやけど何でそう思うんや、亀の字？」

「何となく、ね。僕らしくないけど、勘って奴？」

自分達の前を歩くジークの背を見つつ、ウラタロスはキンタロスの問いへ苦笑混じりに答える。

ウラタロスもハナと同じように、アンデッドに関する情報の多さに不自然さを感じていた。

時間と空間を分け隔てる壁に開いた穴、か……

ふとオーナーの言っていた「トンネル」の定義思い出し、もう一度その意味を考える。

「ねえキンちゃん、トンネルの向こう側はどうなってるんだらうかね？」

「そんなん、普段と変わらんやろ。ずうっと時間の中のままや。例え降りても何も変わらん」

「線路があるトンネルの場合は、ね。でも線路のつながっていない

トンネルはどうか？」

デンライナーの中で何度か見かけた「山に開いた穴」を思い出し、ウラタロスはキンタロスに再び問う。

山が「時間と空間を分け隔てる壁」だと言うのなら、その向こうにある物は何なのかと。

「簡単な事だ。異なる時間、異なる空間とつながっている」

しかし問いに答えたのは、キンタロスではなくジーク。おまけにその物言いは、その向こう側を見てきた事があるかのようで……流石に一瞬、ウラタロスの思考が止まった。

「確かにオーナーが、時間の中の山は時間と空間の『壁』や言うところだけ……」

「そうだ。姫の時間に続く路線も、壁の向こうから続いていただろう。あれは姫の生まれた日付がずれた時間……異なる時間とつながった証拠だ」

ジークに言われ、2人はああ、と小さく声を上げる。

確かに、ハナが小さくなった時に現れた路線は、山……即ちオーナーの言う「壁」の向こうから続いていた。そしてその向こうには、2007年8月以降にハナが生まれた時間が存在している。

ではもし、ハナが予定通り2007年8月に生まれたとしたら……？

答えは簡単。壁の向こうにあった時間はつながる事無く、今も壁の向こう側にあったに違いない。そんな時間がある事など、自分達は知らぬまま。

「線路のつながっていない壁の向こう側は……分岐の時に、選ばれなかった時間があるって事かな？」

「そうだろうな。それがどうかしたのか、お供その2」

ジークの言葉に返す事無く、ウラタロスはそのまま黙り込んでしまった。

彼が口元を弄る仕草をして考え込んでいる時は、相当真剣な証拠だ。まあ、大体は嘘を考えている時の方が多いが、今回はどうも違

うように思う。

付き合いがそれなりに長い分、流石にキンタロスもその差異に気付いたらしい。すっと眉を寄せ、視線をウラタロスに送って問いをかける。

「なんや、気になる事でもあるんか？」

「まあ、ね」

壁の向こうにあるのが、分岐の時に選ばれなかった時間ならば、当然その向こうには……

ぼんやりと考えが纏まりかけたその時だった。……キンタロスが不審そうな声を上げたのは。

「緑色の血イ流す人間なんて……おるか？」

「え？」

言われて2人はキンタロスの視線の先にあるものを見る。

そこには満身創痍の男が、キンタロスの言う通り、緑色の血を流しながら近くのトンネルに逃げ込む所だった。

「ふむ。あれを追うぞ」

「ええ？ マジで？」

「下手に関わらん方がええんとちゃうか……？」

2人の言葉を無視し、少し離れた所からその男を観察し始めるジーク。

そして結局は、キンタロス達もそれに付き合う事になったのである。

まさか追っている男が、アンデッドだとも知らずに……

\*

橋と睦月があるトンネルへ差し掛かった時。彼らの前に、1人の男がよろよるとした足取りで現れた。

服はボロボロ、顔も煤けている。至る所に傷が浮いており、見た目に痛々しい。……その身から流れる血の色が、緑白色でなければ

の話だが。

今、睦月と橘が知る者の中で、緑色の血を流す者は2人しかない。

1人はジョーカーである相川始。

そしてもう1人は……

「カテゴリーキング！」

そう。目の前でふらついている存在こそ、ギラファアンデッドの姿からヒトへ擬態しているカテゴリーキング……金居であった。

「そうか、こいつが……！」

「待って下さい！……何があつたんだ？」

バックルを取り出し、臨戦態勢に入る入る橘を睦月は静止し、心配そうに金居に近付く。その顔に浮かぶのは困惑と心配。

しかし、金居にはそう見えないのか、ギロリと睨みつけるような視線を返し……

「来るな！……封印などされてたまるか！」

「その傷はどうした？」

「少し油断しただけだ。まさか天王路が！」

目の前の男達が本気で変身するつもりが無いと気付いたのか、それとも単純に体力がつきかけているのか。その場に座り込みながらも、金居吐き捨てるように言葉を放つ。

「天王路にやられた？」

軽く眉を顰め、訝しげに橘は声を上げる。

天王路の野望は、ケルベロスを封印した時点で潰えたはず。それなのに、カテゴリーキングである彼が、一介のヒトである天王路によつてここまでのダメージを受けている事が不思議だったのだろう。だが、どこか不貞腐れたようにそっぽを向く金居が、これ以上何かを語ってくれるとは思えない。

「とにかく話を聞いてみましょう。……来るんだ」

睦月が金居に向かって言ったその瞬間。彼らが来たのとは逆方向から、高らかな笑い声と共に怪物が姿を現す。

そのシルエツトは2人にも見覚えがある。昨日、自分達が苦戦を強いられた相手……

「ケルベロス……！ 解放されたのか！」

「そんな馬鹿な……」

金居に注いでいた警戒心を、今度はケルベロスに向けなます。

昨日、確かに封印されたはずのケルベロスが、再度解放されている事は気になる。だが、先程金居が言った「天王路の奴が」と言う言葉から、何となくだが推測は出来る。

……彼が、まだケルベロスを使って何かをしようとしているらしい事。そしてその為にケルベロスを「解放」したのだろうと言う事は。

『変身！』

瞬時にその考えに達したのか、2人は同時に変身してケルベロスへと攻撃を仕掛ける。

だが、相手は昨日よりも格段に早い動きでギャレンとレンゲルの攻撃をかわし、逆に確実な反撃を加えてくる。

半ば吹き飛ばされるように、2人はケルベロスと距離を取り、何とか隙をうかがおうと武器を構え直した時……

「アンデッドを渡せ」

ケルベロスが、喋った。

そしてそれは、聞き覚えのある声。

「その声は……」

「まさか！」

「天王路……！？」

「何故です？ 何故天王路がアンデッドに……！？」

2人の間に動揺が走る。ヒトが、アンデッドになる。有り得ないとは言い切れないのは知っているが、どうして天王路がアンデッドと同化しているのかは疑問だ。

それも、人工アンデッドであるケルベロスと。

しかし、じっとしている訳にも行かないと思ったのか。レンゲル

は近付いてきたケルベロスに殴りかかる。

それがきっかけと言わんばかりに、一時的に中断されていた戦闘が再開される。だが先程同様、ケルベロスの圧倒的なパワーにレンゲルの体は派手に吹き飛ばされる。

「一旦退くぞ！ 奴を連れて行く」

不利と判断したのか、ちらりと金居の方を見てギャレンが言った。レンゲルは了解と言わんばかりに小さく頷くと、金居の腕を取ってその場に立たせる。

それを確認するや否や、ギャレンはカードを1枚持っている銃に読み込ませ……

『FIRE』

読み込ませたカードはダイヤの6。その効果である火力強化を施した銃撃は、ケルベロスに命中したものの、効いてはいないらしい。ケルベロスの……否、天王路の笑い声がトンネルの中で高らかに響く。無駄だ、と言いたげに。

だが、爆煙が引いた後には……既にギャレン達の姿は無い。先の銃弾は自分へのダメージを重視したのではなく、それによって発生する煙幕を使った目くらまし目的だったのだと気付くと、ケルベロスはふうと小さく溜息を吐き出し……

「……やはりライダー諸君から始末するしかないか……」

仕方ない、と言わんばかりに小さく呟きを落とすと、今度はゆっくりと後ろを振り返った。

そこに現れた、見知らぬ3人の青年を始末するべく。

\*

昨日ウラタロスが見た、赤い戦士と緑の戦士が男を連れて退却したのを見届け、これ以上男を追うのは無理だと判断した時。

悠然とした足取りで、ジークがケルベロスに向かって歩く。

それに気付いたのだろうか、ケルベロスもゆらりとこちらに向き

直った。

「……………何者かね？」

「ただの通りすがり。……………でも、見逃してくれそうに無いねえ」

「こつちから出向いた、言う節ふしもあるけどな」

ケルベロスの問いに曖昧に答えつつ、ジークに付き従うかのよう  
に彼の後ろを歩く2人。

ジークが何を考えてケルベロスの方に歩を進めているのかは定か  
ではないが、今の状況が非常に良くない物である事だけは確かだ。  
ウラタロスとしては、できればケルベロスに見つかみつかる事無くやり  
過ぎたかった。無論、キンタロスとて同じである。

何が時間に影響するか分からない以上、下手にこの時間の者と関  
わるのは得策ではない。

だが、そんな2人の思惑とは裏腹に、ジークは更に歩を進める。

「私の通る道を塞ぐな。邪魔だ」

目の前に立ち塞がるケルベロスに対し、ジークは心底不快そうに  
言い放つ。

ジーク達を、ただの人間だと思っているのだろう。ケルベロスは  
小さく笑い、唐突にジークを裏拳で殴りつけた……………はずだった。

しかしジークはその攻撃をあつさりとかわすと、不愉快の極みと  
言わんばかりの表情でケルベロスを見返す。

「……………不愉快だ……………実に不愉快だ」

「ならば、君はどうすると言うのかね？」

軽く首を傾げ、挑発するようなケルベロスの言葉が耳に届く。

そして視界にはいつの間に取り出したのか、ジークの手の中のパ  
スケースに入ったチケットと、腰に巻きつけたベルト。

「……………これ、止めようが無いよね、キンちゃん？」

「無理やる。それに、そいつから無事に逃げるには誰か変身せなあ  
かんかったやろしな」

諦めたように言う彼らの言葉が終わるかどうかの内に、ジークは  
パスケースをベルトにセタッチしていた。

「変身」

『WING FORM』

電子音と共にジークのチャクラが、金のオーラスキンの上から白を基調としたオーラアーマーに変化する。電王、ウイングフォームの降臨である。

他の電王のオーラスキンが黒であるのに対し、彼のみ金色のオーラスキンを纏うのは、彼なりの「王子」としてのこだわりなのかもしれない。

「降臨。……満を、持して」

「ほう。BOARDのライダーシステムでは無いな。成程、トライアルAを倒したのも君か」

「昨日の野蛮な獣ならば、私が手を下すまでもない。我がお供1人で充分だったぞ」

ケルベロスの納得の声に、ジークはフンと軽く鼻で笑いながら答えを返す。

「そのシステムがどこで作られた物かは知らんが、今の私には勝てんよ」

ジークの言葉に気分を害した様子も見せず、むしろ嬉しげにそう言つと、ケルベロスは両肩から高エネルギー波をジークに発射する。だがジークはそれを軽やかにかわし、デンガツシャーをハンドアックスモードとブーメランモードの2種類に素早く組み上げ、ブーメランの方を投げつける。

動きの中に優美さはあるものの、ジークが短期決戦に持ち込もうとしているのが、見ている2人には分かった。

それはトンネルと言う狭い空間の中ではウイングフォームの機動性が生かしきれないと考えたためか、それとも単純に早く終わらせてしまいたいだけなのかは定かではないが。

「フフフ……無駄だよ。言っただろう？ 私には勝てん、と」

ブーメランをかわして、ケルベロスが小馬鹿にしたように言う。

その言葉に、普段ならば怒りそうなジークだが……返した声は、

ウラタロス達の予想を裏切るような、静かで冷静な物だった。

「別に、勝とうとは思っていない」

「何……？」

「要は、お前が退けば良いのだ。勝つ必要は無い」

そう宣言すると、ジークは瞬時にケルベロスの懐に飛び込み、胸の辺りにある白い顔をハンドアックスで斬りつける。直後、ケルベロスの口からくぐもった悲鳴が上がった。

それ程重くは無いはずのその攻撃に、2、3歩後退るケルベロス。それは、思っていた以上に今の攻撃がダメージとなった証。

「ふうん。オデブちゃんと違って『胸の顔は飾り』じゃ無かったって事かな？」

仲間と言えなくもないイマジンの、「胸の顔は飾りだ」と言う言葉に引つ掛けているのだろうか。くすりと笑いながら、ウラタロスが言った。

既に彼らにはわかっていたのだ。

今回の勝負の行方が。

『FULL CHARGE』

パスをセタツチした後、もう1度……今度はエネルギーのチャージされたハンドアックスをケルベロスの胸部の顔へ、半ば投げつけるように振り下ろす。

だが、同じ攻撃が通用するはずも無い。紙一重でケルベロスはその攻撃をかわした。

「残念だったな。そう何度も当たる私ではないのだよ」

肩で息をしつつも、ケルベロスは不敵に宣言する。今の攻撃が、ジークの渾身の一撃であった事に気付いていたのだろう。

しかし、ジークも、そしてその様子を見ているウラタロスとキントロスも、かわされた事に焦った様子は無い。むしろ余裕すら感じられる。

「残念だったのはお前の方だ」

「何……？」

ケルベロスが訝るような声をあげたその時だった。その背に、鈍い音と激しい衝撃が走ったのは。

「こ、これは……!?!」

ケルベロスが、驚愕の声をあげ、首を振って自身の背に刺さった物に視線を向ける。

襲った物の正体……それは、最初にかわしたはずのブーメラン。それが今更のように返ってきたのだ。……フルチャージと言うおまけ付きで。

「世界は、私の為に回っているのだ。……分かったらそこを退け。頭が高い」

腰の後ろに手を当て、がくりと膝を付いているケルベロスを見下ろしながら、ジークは悠然と言い放つ。

予想外のダメージだったのか、ケルベロスは膝をついたまま肩で息をしている。そして、何度目かの深呼吸の後……その足元に1枚のカードが落ち、彼の姿がケルベロスから人間へと変わった。

それに満足したのか、ジークはベルトを外すと、もはや興味も失せたと言わんばかりに男を見向きもせず、スタスタとその横を通り過ぎる。

「ねえ、ちよつとジーク！ こいつどうするのさ？」

「放つといたらまた襲ってくるかも知れんで？」

「世界が必要としていないなら、いずれ排除されるだろう。私が手を下すまでも無い。襲って来たらお前達で何とかしろ」

ウラタロス達の言葉に、彼独自の論理で返すジーク。

「……？ 何をぼやっとしているのだ。行くぞ、お供その2、その3」

「……はいはい」

「しゃあないなあ……」

そう言っつて、彼ら3人はその場を後にした。

後ろで悔しそうに何かを言っている男の言葉など、気にも留めず

\*

自分を見向きもせずに行ってしまった3人の後姿を悔しげに見つめつつ、天王路は上がっていた呼吸を整える。

今のは、油断したからだ。相手を甘く見すぎていた。彼らは、自分が神になった時に消せばいい。当面の目的はアンデッドの封印。ほんの遊びに過ぎない

そう思う事で、自分の心の平静を取り戻そうとしていた。

自分を迎えに来た黒い車に乗り込み、彼はもう1度ケルベロスのカードを見つめる。

…… BOARDの作りし仮面ライダー達を、この世から葬り去るために……

## 閑話：依頼、元オーナーから

「おや？」

いつもの如く旗の立ったプリンを食べていたオーナーが、食堂車に入ってきた女性を見て声をあげた。

オーナーの反応からすると、彼の知り合いらしいが……ナオミには見覚えが無い。

限りなく白に近い銀髪は腰まで伸びており、その髪色に合わせるかのような白のパンツスーツ姿。キリとした表情と言えば聞こえは良いが、はつきり言ってしまうえば無愛想だ。

「コーヒー、いかがですか？」

「……貰う」

ナオミのにこやかな呼びかけに、女性は淡々と答える。

笑顔の可愛いナオミとは対照的に、笑うと言う事を忘れてしまっているかの表情。

1度見ていれば、間違いなく記憶に残る美女であるが、ぴりぴりした雰囲気と無愛想さのためにその魅力が半減している。

ひよつとすると、ただ無愛想に見えてしまうだけなのかも知れないが、第一印象としてはあまりよろしくは無い。

「珍しいですねえ。貴女がここにいらっしやるなんて」

「少々お前に手伝って欲しい事ができたのでな」

彼女は無表情のままオーナーに言いつつ、窓側の席からその外を眺めた。

視界の先に広がる光景は、時の砂漠と線路のつながらぬ無数のトンネル。それを見て、彼女の眉間に寄っている皺が更に深くなる。

「……トンネルの数が増えているな」

「今、この列車の乗客に調査をお願いしているところです」

溜息混じりに放たれた、問いにも似た言葉に、オーナーもプリンから……正確にはそこに立っている旗から目を離さずに声を返す。

彼女の方はそんなオーナーを気にする様子も見せず、窓から見える一番大きなトンネルに視線を注ぎ続けている。

そのトンネルは、どの路線ともつながっていない。ナオミもここ最近になって急に大きくなったその存在を、少々不気味に感じていた。

……まるで、この「時間の中」さえも飲み込もうとしているかのような、そのトンネルに。

「まずは『こちら側』の西暦2005年1月から、か。随分と持つて回った事をする」

「彼らにはその少し前の時間から調査してもらっています」

トンネルの入り口は、この時間で言う2005年1月23日に限りなく近い所に存在している。

彼女はそれを知っていて、そう言ったのだろうか。

「……それにしても『月の子』らに行かせるとは。随分と思いついたことをする」

「意外、ですか？」

「いや、適任だろうな。実際に、私の知る歴史とほぼ変わり無く動いている」

「モモタロス君が烏丸さんを助ける事も……？」

そつとプリンを救い上げながらオーナーが言った瞬間、薄くではあるが彼女の口の端に笑みが浮く。

だからと言って優しいとは言いがたい。どちらかと言えば不敵と言ふ表現の似合う表情だ。

「烏丸啓が死ぬのは2004年ではないからな。時間そのものが、もつとも自然な流れとなるべく彼らを引き合わせたんだろう」

「では、ジーク君がケルベロス……いえ、天王路さんを弱らせたのも、起こるべくして起こった事だ？」

「そうだろうな。天王路博史はあの場でヒトの姿に戻る。……ケルベロスの姿のまま、橘朔也達を追いかける事は無い」

まるで全てを……モモタロス達の行動も、そしてその先の未来を

も見通しているかのように、彼女はオーナーに言葉を返す。

確かに、西暦2008年からすれば、2004年に起こっている事は「過去」の出来事であり、知っていてもおかしくは無いのだが……

それにしても詳しすぎる、とナオミは感じていた。だが、オーナーの方は彼女が知っていて当然とも思っているのだろうか。特に怪しむ雰囲気も無く、ただいつも通り飄々とスプーンを掬い上げては口元へと運んでいる。

「それで……私に頼み事、でしたねえ」

「そうだ。『月の子』と『皇帝の愛娘』に、この時間を見せて欲しい。そうだな、ギラファが封印された後で良い」

そう言うと、彼女はオーナーの目の前に立ち、2枚のチケットを差し出した。

日付は2005年1月23日の物と、2008年4月18日の物だが、チケットにはその日付の他に、何かを捕えるような鎖の絵が描かれてはいるが、その鎖の奥には何もいない。

「これは？」

「今回の歴史で『選ばれなかった時間』……そこへ向かう事が出来るチケットだ」

「『選ばれなかった時間』……つまり、あのトンネルの向こう、ですか」

その言葉で、ようやくプリンから大きく口を開けたトンネルに視線を向けなおし、オーナーは珍しく驚嘆したように言う。

それだけ、彼女の渡したチケットの特異性が高いと言う事なのか。「壁の向こうは、異なる時空……異世界のような物。そこに関する記憶が無い限り、そんな場所へ向かうチケットがあるとは思えないのですがねえ」

「フン。私を誰だと思っている。それに、事実そこには正規のチケットとして存在しているだろう？」

言われても、まだ不審そうな表情を崩さないオーナー。しかし彼

女は全く気に来ていない様子で先程まで座っていた座席に戻り、視線をトンネルの方向に向け直した。

憤怒、懐古、悲哀……そう言った感情を視線に混ぜて。

「お待たせしました。コーヒーどうぞ。」

「すまんな」

普通の人間なら一瞬でドン引きできる、カラフルなクリームに乗ったコーヒーを差し出されても、彼女は特に驚いた様子も無くそれを眺める。

……眺めるだけで、口をつける事に関しては躊躇っているようだが。

「しかし……これは本来、貴女が動く事では無いはずです。統制者が動けば良いのでは？」

そろそろ倒れそうなプリンの旗と格闘しつつ、オーナーは彼女に問う。

「残念な事に、モノリスを通じた干渉は封じられている。故に統制者……陛下ではなく、その下僕である私が動くしかない」

「それはまた、異例な事ですなえ」

「そう、今回の歴史は異例な事だらけだ。ほぼ全てのアンデッドが『彼の者』に支配されてしまっている上に、支配された達はその事に気付いていない」

この時初めて、彼女の表情があからさまに変化した。先程までの薄い変化とは明らかに異なる。

眉根を寄せ、心の底から不快そうな表情に変わる。まるで、憎い相手を目の前にしたかのようなその顔。その感情が周囲の空気にも伝わって、そこだけ気温が下がったようにすら感じられた。

「それに、常に『他者』からの干渉を受けるなど、今までには無かった事だ」

ようやくコーヒーを一口含んだ後、彼女はまたトンネルへと視線を向けた。いや、向けたと言うのは正しくない。カップから視線を反らした先が、偶々トンネルだったと言うべきか。

コーヒ―の味に関して、特に感想は無さそうであるが……それ以上カップに口を付けない所を見ると、彼女の味覚には合わなかったのかも知れない。口元を押さえ、うろつろと視線が彷徨っているのは、吐き出すか吐き出すまいか迷っている証拠だろう。

……線路のつながっていない、無数のトンネル。その中でも一際大きい2005年1月のもの。

「あのトンネル……この時間を、飲み込もうとしてるんですかね？」  
つい口をついて出てしまったナオミの問いに、彼女は初めてナオミの方を向いた。口の中のコーヒ―をようやく嚥下できたのか、ふと口の端で軽く笑い……

「それは違うな。あれが飲み下したいのは時間ではない」

「じゃあ、何なんですか？」

「この世界、その物だ」

それが当たり前だと言わんばかりに、彼女はあっさりとそう言った。

世界その物を飲み下そうとするトンネル。それが何を意味するのかは理解しにくいが、とんでもない事なのだろうと言うのは本能的に理解出来る。

時間の中だけでなく、時間の外……「今、起こっている事」までもを飲み下し、変える。それは大規模な時間の変換と同じなのではなからうか。

「まあ、そうはさせないための私なのだがな」

「……笑うと綺麗なんですから、怒った顔は勿体無いですよ」

「そうか？ 自分では意識していないのだがな。とは言え、この顔もこれで固定されているような物だから……今更表情筋を鍛えるのも難しからう」

ナオミに言われ、彼女は困ったように声を返す。

その声に、ナオミは彼女の頬を摘み、無理矢理その顔を笑みの形へと変形させる。ナオミの中から、最初に抱いた「怖そうな女の人」という印象が消え、どこと無く可愛さすら感じられる「不器用な女

の人」と言う印象に置き換わる。

最初に見たあの無愛想な表情は、ひよっとすると真剣に物事を考えていたからなのかもしれない。

それに、トンネルの事を快く思っていないようだ。嫌いな物が目の前に沢山あつたら、誰だって不機嫌になるだろう。きつと、最初の表情はそのせいだ。

「……そろそろ、相川始が目を覚ます頃だな」

ナオミの手をそつと外すと、彼女は自身の腕時計を見つめてそう呟いた。

時の中にも関わらず、何故そんな事が分かるのか……そもそも、彼女はどうしてその事を知っているのか。その時間、その場所にいなければ分からないはずなのに。

「……では、頼んだぞ。私は次の準備がある」

「次、ですか」

「そう、次だ。奪われた『自己』の奪還、破壊された『石』の修繕、現在に残る『未来の遺産』の回収、消し去られた『記憶』の修復。

それらを同時にせねばならん。……あの連中がサボらなければ、私とてこれ程苦労せんものを」

「人の記憶を修復するなど、おこがましい事では……？」

「オーナーの言葉に、彼女は一瞬寂しそうに笑い……」

「フン。承知の上だ。だが全ての咎は『彼の者達』を止められなかった自分にある。彼らが受けるべき罰はない」

「傲慢ですなえ」

「それが私だ」

堂々と言い放つと同時に、彼女は席を立つ。

その顔に、不安や迷いは無い。むしろ慈愛に満ちた笑みさえ浮かべている。

「消えなければ、また来る」

「……またのご利用を、お待ちしております」

オーナーに言われ……小さく笑って、彼女はデンライナーの停車

とほぼ同時に時の中に降り立った。

その堂々とした後姿が、一瞬だけ異形の者のように見えたのは…  
…ナオミの気のせいだったのだろうか……

## その8：ライダーは駒だったのに

トンネルの向こうは、異なる世界。

トンネルの向こうは、遙か過去。

トンネルの向こうは、遠い未来。

普段は閑散としている道路を、4台のバイクが横一列になって並走している。

その向かい側からは、黒塗りの高級そうな車が、車線を跨いで走ってきている。

それを見ると同時に、車に突っ込みかねない勢いでバイク達はスピードを上げた。

このままでは衝突する……そう思えるほど近くまでバイクと車が接近した時、彼らは左右に2台ずつ展開して車をかわし、すれ違う。それと同時に車とバイクが共にブレーキをかけ、甲高い摩擦音を立てながらその場から少し離れた場所に止まった。

ほんの僅か、路面にタイヤの黒い痕跡を残して。

「ライダーシステムを返還する気になったのかね」

悠然と車から降り立った男……天王路が、手を差し出しながらそう切り出す。

しかし、バイクの4人組……剣崎、始、橘、睦月達は、自身のマシンに跨り、彼に背を向けたままでその問いには答えない。それどころか、逆に問うような声をあげた。

「……お前がバトルファイトの勝者になった時、何を願う？」

「無論、平和だ。2度と人間が、互いに争ったりする事の無いように」

剣崎の声に、天王路は平然と答える。

トリアルシリーズは広瀬柔の大切な過去を穢し、ティターンは

4人の間に不和をもたらし、そしてケルベロスは様々な人の命を奪った。

それらを作った……争いの種を蒔いた張本人が、何の臆面も無く「平和を願う」「争いを無くす」などと言った事に、剣崎は怒りを覚えざるを得ない。

大事の前の小事とでも言いたいのか。誰かの命を、そして心を犠牲にしてまで得た平穏は、何の意味を持つと言うのか。少なくとも今の剣崎にはその意味を理解する事は出来そうにない。

「そのために、現在の人類を全て滅ぼす」

「当然だ！ 今の人類は邪悪な心に満ちている！ 全てを滅ぼし！ 新たな平和を求める人類を誕生させる！」

静かに言った始とは正反対に、それまで余裕を見せていた天王路の声が荒くなる。

……彼は、今の人間に絶望している。だが、人間以外の種に期待している訳でもない。そんな彼が辿り着いた答えが、「ヒト」という種の作り直し。

「そして、お前がその支配者となる」

睦月の言う通り、ケルベロスと同化した天王路が「最後のアンデッド」として残った時、彼の作った新たな種は……彼の支配下に置かれる。

「何故BOARDを作った!?!」

「全ては計画通りだ。広瀬はアンデッドを解放し、君達は効率良く封印してくれた！ お陰で私は、ケルベロスを完成させる事ができた。感謝してるよ！」

「俺達は最初からお前の欲望の為にだけに動かされていたと言うのか。俺達の理想は、正義は……！」

「全て幻」

最も長くBOARDに勤め、この場にいる誰よりもBOARDという組織を信じていた橘に、天王路は酷薄な笑みと共にそう返す。

そして……これ以上、話す事も無いと思ったのだろうか。天王路

は袖をたくし上げ、その腕に埋め込んだライダーへケルベロスのカードを挿し入れる。

「変身」

その言葉と同時に、天王路の姿がケルベロスの……アンデッドの姿へと変化した。

仮面ライダー達とは異なり、エネルギーの幕は降りない。代わりに、上級アンデッドが姿を変える時のようにゆらりと姿が揺らめく変化。

もはや天王路にとって不要と……いや、邪魔にすらなった、仮面ライダーと言う名の「駒」を排除するために、その身を変えた事は明白。

そして、それに応える様にライダーもまたその身を変えた。

『変身！』

4人の声が重なる。直後、それぞれの姿が変化した。

剣崎一真は、スペードのスーツを使うブレイド……剣と死を意味する印を頂く者に。

相川始は、ハートのスーツを使うカリス……聖杯と愛を意味する印を負う者に。

橘朔也は、ダイヤのスーツを使うギャレン……金貨と財を意味する印を担う者に。

上城睦月は、クラブのスーツを使うレンゲル……杖と智を意味する印を持つ者に。

それぞれの鎧を纏い、乗っていたバイクを反転させ、悠然と立つケルベロスと言う名のイレギュラーへと戦いを挑む……

\*

迷い込んだ家から、物凄い勢いで飛び出していった2人の青年を追いかけて、ようやくハナ達が彼らに追いついた頃。戦いは既に始まっていた。

耳に届くのは金属がぶつかり合う嫌な音。時折異形……昨日と少しだけ姿の異なるケルベロスが放つ衝撃波由来の爆発音も響き、その余波がハナの髪を揺らす。

既に使われていない工場らしく、隠れる場所には事欠かない。しかし逆を返せば、他に誰もいないが故に音が反響しやすいと言う事でもある。彼らに見つからぬよう息を潜め、共にいたモモタロス、そしてリュウタロスと共にその様子を見つめていた。

2人のイマジンは昨日のケルベロスを……そしてそれと戦った戦士達を見ていないせいか、不思議そうな表情でそれを眺めていた。

「電王やキバ以外にも、あんな風に変身して戦う奴がいるんだね」「ケツ。俺の方が数倍格好良いっての」

声を潜めてはいるが、いつも通りの軽い言い合いをする2人に、ハナの口からは軽い溜息が漏れる。

戦いの場にいる者達は、ごく真剣に己の存在を……そして存亡をかけて戦っていると言うのに、後ろのお気楽さは一体何なのか。

いつもなら真面目にやれと一喝するところだが、状況が状況。一喝するのは後にして、今はとにかくこの戦いの行く末を……

と、思った刹那。ふいに、ハナの頭上が翳り……

「ほう？ あそこで戦っているのは、先程の不快な男だな」

白い羽根と共に、不愉快そうなジークの声が降って来た。不愉快そうと言っても、一応戦っている彼らには聞こえないよう押さえてはいるらしい。

声に慌てて振り返れば、今朝方分かれたはずのジーク、ウラタロス、そしてキンタロスの3人が何とも微妙な表情で立っていた。

声に含まれる「不愉快」をそのまま表情にしたようなジーク、そのジークを困ったように見つめる2人。

「あんだ達、どうして……」

「どうしてって聞かれると困るんだけど……強いて言うなら、ジークの勘、かな？」

特に待ち合わせていた訳でも無いのに集った。

分かれた意味が無いと思うと同時に、何らかの意志が働いているのではとも勘繰ってしまふ。

それはウラタロスも同じなのか、普段は伶俐な視線にやや剣呑な色が浮かんでいるのが見て取れた。人を騙し、己の掌で転がす事は好んでも、誰かの掌の上で転がされるのは嫌いなのだろう。

「それにしても……このままじゃ、あいつに負けるかもね。彼ら」  
ちらりと視線を戦いの方へ向け直し、ウラタロスは小さな溜息と共に言葉を吐き出す。

確かに彼の言う通り、数の上ではケルベロスの方が不利。そうであるにも拘らず、劣勢なのは戦士達の方だ。

「何や、あいつジークにコテンパンにされたはずなのに、随分と元気やないか。それとも、あの兄ちゃん達が弱いんか？」

「いいや、単純に回復力の問題だろう。アンデッドと同化しているあの男は、攻撃されても即座に回復する」

キントロスの言葉を、冷静にジークが返す。

言われてみれば、確かに戦士達の攻撃を喰らっても、ケルベロスはすぐに回復しているのが分かる。

斬られ、撃ち抜かれても、その傷は少しの間を置いて何事も無かったかの様に塞がっていく。そこに有利を感じ取ってでもいるのだろうか。どこか焦りが見える戦士達とは裏腹に、ケルベロスの……否、天王路の高らかな笑い声はその場に響く。

「人間とアンデッドが完全に融合した私こそが、最強なのだ！」

己の力を見せ付けるかのように、ケルベロスは近くに立っていた緑の戦士の体を捕え、そのまま打ち捨てるように放り投げる。

その勢いで近くの鉄柱にぶつかる……と恐らくその場にいた誰もが思った刹那。唐突に現れた1人の男が、その体を寸前で受け止めた。

……それは先程ケルベロスに追われていた、「緑色の血の男」。  
確かケルベロスや緑や赤の戦士は、彼の事を「カテゴリーキング」とか呼んでいたか。

しかしキンタロス達が見た、ケルベロスに襲われていたあの時とは異なり、彼が浮かべる表情には余裕が感じられる。

「お前は……」

「何の真似かな？」

彼の登場が意外だったのだろう。戦士達の動揺と、ケルベロスの不信感が伝わってくる。

それは、彼がアンデッドと言う存在だからだろうか。本来なら人と敵対しているこの男が、人を守るために戦っている緑の戦士を助けるはずが無い。

「さつきはこの坊やに助けられたんでねえ」

皮肉気に口の端を歪めてケルベロスに言うと、今度は緑の戦士に向き直って更に言葉を紡ぐ。

「頑張ってくれよ？ 実現させようぜ。君の望んでいた、平和って奴を」

その言葉に、緑の戦士は嬉しそうに頷く。仮面の下で顔が笑みの形をとっているであろう事が、容易に想像できるくらい。

しかし昨日、ハナ達は彼が男に和平を……人間との共存を持ちかけ、その言葉がにべも無く一蹴されたところを見ている。

だからこそ、カテゴリーキングの言葉が信用できない。それに、彼の態度はどこと無くではあるが、大きな嘘を吐く時のウラタロスに通じる所がある。

……だが、戦士達の方は違うのだろう。そもそも身近に嘘を吐く者がいないのか、素直に彼の言葉を聞き入れ……

『RUSH』

『BLIZZARD』

『POISON』

カテゴリーキングの言葉に伝えるように、緑の戦士が、3枚のカードを持っていた杖へ読み込ませると、電子音がカードの能力を知らせ……彼の技と思しき反応が現れる。

『BLIZZARD VENOM』

「『毒の吹雪』…?」

誰にと言う訳でもなく宣言された電子音を直訳し、ハナが軽く首を傾げる。

刹那、緑の戦士の杖から氷が、それこそ吹雪のようにケルベロスに向かつて吹き付けられた。そしてその寒さに凍てついたらしいケルベロスの体に、彼はその杖を深く突き立てる。

技の名前からすると、この瞬間に猛毒がケルベロスに注ぎ込まれているのかもしれない。

思った瞬間、戦士はケルベロスから身を離し、ケルベロスも己を覆う氷を砕いて追撃に入る。それでも、最初に感じた覇気が薄れているように思えるのは、ハナの気のせいか。

何にせよ……場の流れが変わったのを、その場にいた全員が感じていた。

\*

レンゲルの「ブリザードベノム」を喰らってもなお平然としているケルベロスに対抗すべく、ブレイドは己が手札から2枚のカードを取り出し、金色の鎧を纏いし姿……キングフォームへと進化する。それは、本気で天王路を……否、ケルベロスを倒す決意があると  
言う事。

「私を……私を封印するつもりか？ 君達をライダーに選び、その力を与えてやった、私を！」

「全てのアンデッドを封印する。それが俺の仕事だ！」

「違う！ 私と言う、新たな神を生み出す。それが、君達の仕事だったのだ」

「誰に命じられた訳でもない。俺は、全ての人を守りたい。そう願った！」

アンデッドの封印は表向きの理由。真の理由は天王路に時間を与える事。

……それが、仮面ライダーと言う名の「駒」の仕事だったはずだ。少なくとも、天王路はそう思っていた。

だが……仮面ライダーは、物言わぬ「駒」ではなく、自我を……  
確固たる意思を持つ「ヒト」。それ故に、何もかもが天王路の思い通りになる謂れなど無かったのだ。

その事に今更のように気付き、ギリリと天王路は奥歯を噛み締める。

自分の計画は、最初から致命的な欠陥があったと言うのか。否、そんな事は無い。甘言で誑かし、財力で頬を叩く事で服従させてきたはずだった。

それなのに……

何を、どう違った!?

思いつつ、よろめく体を何とか起こしてケルベロスは再度攻撃態勢に入る。

だが……ケルベロスが体勢を整え直しきるよりも先に。

「剣崎!」

ブレイドの進化に呼応したのか、ハートのキングのカードを使い、カリスもまた、黒から赤へ……ワイルドカリスへと進化した。

それと同時に、彼は持っているカード全てを宙に投げると、投げられた13枚のカードは空中で1枚のカード……ワイルドと呼ばれるカードへと変ずる。

「やれ! 剣崎!」

気がつけば、ケルベロスを挟み込むようにしてブレイドとカリスが立っている。

その位置を利用し、前方からブレイドの放ったロイヤルストレートフラッシュが、そして後方からカリスの放ったワイルドサイクロンが、同時にケルベロスの体を襲った。

2つの強力な必殺技を喰らい、さしものケルベロスも回復力が追いつかないらしく、ガクリとその場に膝を付く。

これ以上彼らと戦うのは不利と判断したのか、それとも生物とし

ての本能か。

半ば強引に立ち上がると、ケルベロスはよろよるとした足取りで建物の外へ向かって歩を進める。

「……馬鹿な……」

建物の中にいた時は気付かなかったが、いつの間にか降りだしていたらしい。激しく叩きつける様に降り注ぐ冷たい雨の中、ケルベロスから人の姿へと戻った天王路が呆然とした表情で眩きを漏らした。

キングの力を持った2つの技を喰らって、それでもまだ生きていられるのは、ケルベロスと融合していたためなのだろう。とは言え、彼がぼろぼろである事には変わりない。

彼の傍らにケルベロスのカードが落ちているのは、天王路にかかるダメージをケルベロスが引き受け、そしてそのダメージの大きさ故に融合に耐え切れなくなったが故なのか。

「天王路！ 諦める！ お前の望みは叶えられない！」

変身を解き、追ってきた剣崎の音が、氷雨と共に天王路の体に突き刺さる……

「何と言う事を……！ 貴様達！ 何をしたのか、分かっているのか！？ そこにいるのは、ジョーカーだぞ！？ ジョーカーだ！ カテゴリーキングも、どこかに……」

「俺の事か？」

意図せず上擦ってしまう声を上げながらも、私は周囲を見回してあの忌々しい皮肉な笑みを浮かべた男の顔を捜す。

そしてその顔から放たれているであろう声は、私の後ろから響いた。振り返り、視線に入る姿はまだ人の物ではあるが、所詮その本性は戦う事しか考えないアンデッド。

仮面ライダー達に紛れて立つジョーカーとて、アンデッドの中で

は飛びぬけて闘争本能の強い存在。

こんな化物に、平和を望む心などあるものか。

「こいつらが残れば……人類は滅びる。世界は滅びる！」

ヒトの始祖たるヒューマンアンデッドが封印されている以上、このバトルファイトにおいて人類の「勝利」は無い。

人類こそが、この星の支配を担うに相応しい種であると言つのに。

……そう。私の作る、新たな人類こそが！

「だったら私が……私が新しい世界をおおつ！ はははははは……」

…ハハハハハハハハハハ！」

……何故、そんな目で見る、ライダー達よ。

私は哀れではない。

私は愚かではない。

私は誤っていない。

個々に違いなど持たせるから、互いに憎みあい、傷つけあい、時には殺しあう。

だからこそ私は、皆が同じ考えを持つ新たな「人類」を作ろうとしていると言つのに。

「今からでも遅くない！ こいつを封印しろ！ 封印しろおおおお！」

そうだ。神はケルベロスの……私の存在を認めたではないか。アンデッドとして存在する事を。

だから、私が残れば良い。そうすれば、人類は残る。世界は残る。新たな人類が、勝者となる！

「封印されるのは……お前だ」

言葉と同時に、今まで人の姿をしていたカテゴリーキングがその本性を現す。

その刹那、相手が手を……否、剣を、振るつた。

私の命を絶つべく。

……何故だ、神よ。

……私に囁いたではないか。

……………封印されたアンデッドを解放し、バトルファイトを再開せよと。

それなのに……………何故、私が死なねばならない……………？

……………ああ、そうか。

……………「駒」だったのは……………

……………私の、方が……………

「……………何故だ……………！」

「何故。何故、無駄に人の命を奪うんだ！」

物言わぬ骸と化した天王路を見つつ、剣崎と橘がギラファアンデッドに問いかける。だが、問われた方は鼻で小さく笑い……………

「奴はアンデッドだったんだぞ？ それだけで充分だ」

「もう、戦う力は無かった！」

「ただの人間だ！」

骸の額から流れる血の「赤」が、死なぬはずの「アンデッド」ではなく、か弱いただの「人間」である事を示している。

……………結局のところ、天王路はアンデッドになる事が出来なかったって事が

己の剣に付いた血と、雨に流れる天王路の血を見比べながら、ギラファアンデッドは心の奥底でせせら笑う。

ケルベロスの存在は、確かに自分にとって脅威だった。純然たる力も、そして特異な能力も。だからこそ、「封印」してもらわねば困る。あんな物騒な「アンデッド」は存在する事が許せない。あれはジョーカーと同じで、バトルファイトの均衡を崩す。

人間として屠る事が出来たのは、彼にとっては幸いだっただ。

「無駄だ。奴はケルベロスを倒すために、俺達に力を貸したに過ぎない」

熱くなっている剣崎達とは違い、始だけは淡々とした様子なのは、

やはり彼が感情が希薄なアンデッドだからなのか。

それとも天王路に対して、特に何も感傷は無いからなのか。彼の表情からは、それを窺い知る事は出来ない。

「そうなのか？ ……嘘だったのか！？ 『平和を実現させよう』って！」

怒りと……そして悲しみの混ざった声で、睦月がギラファアンデッドに向かって怒鳴る。

「嘘じゃないさ。俺はジョーカーを封印し、万能の力を得る。俺の平和に、人類など不要だ！」

そう言つと、ギラファアンデッドは天王路にしたのと同じように、睦月の体に向かってその大剣を振り下ろす。

ただ、天王路の時とは違い、致命傷には至っていない。深い傷ではあるが、命はつながっている。

だが睦月の生死などどうでも良いのか。ギラファアンデッドは足元に落ちるケルベロスのカードを拾い……始に向かって宣言した。

……お前を封印するのは、俺だ、と。

## その9：にじり寄る悪意

「月の子<sup>イマジン</sup>」が動き出す。

それは「皇帝<sup>ライダー</sup>に愛された子」と共にあるためか。それとも「彼の者」の思惑を遂行するためか……

2007年1月28日。

野上良太郎が、初めて電王に変身したその日。

1人の男にイマジンが取り憑いた。

同時に彼の体から大量の砂が零れ、その砂が徐々に形をとる。彼が、最も強く持つイメージの形に。

「お前の望みを言え。どんな望みも叶えてやる。お前の払う代償はたった1つ……」

「俺の、望み……」

自分の眼前に現れたその砂の異形に臆する様子もなく、彼は小さく異形の言葉を繰り返す。

しばらくの間、彼は目を閉じて考え込み……己の心にしまいこんだはずの「望み」を言の葉に乗せた。

「俺は……」

そして。

イマジンが実体化する。

……彼の望みを、叶えるために。

「……やりきれないわね」

少し小降りになった雨の中、ハナがぽつんと呟く。

殆ど流れてしまっているが、彼女の足元には天王路が流した血溜りがある。

「話した事は無かったし、一方的に私が嫌ってただけだけど……それでも……」

眼鏡の男に、もっと注意するべきだった。

彼が緑の戦士に手を貸した事を不審に思っていたにもかかわらず、自分達は何もしなかった。

……勿論、過去に干渉するのが良い事だとは思っていない。ましてそれが人の生死に関わる事なら、なおの事。

だが、それでも……人が死ぬところは、見たくは無かった。

「俺らが飛び出て助けようとしても……多分、間に合わなかったと思うで」

激しく落ち込んでいるハナの頭を撫でながら、キンタロスはいつも以上に低い声で言う。だが、その言葉はハナに向かって言っていると云うよりも、自分に言い聞かせているように聞こえて、彼……いや、彼らもまた、深い後悔に襲われているのだと気付かされた。

……彼らは今まで、覆りよりの無い「人の死」を、見た事が無い。敵のイマジンは倒せば砂と化したし、過去で人が死んだとしても人の記憶による修正が行われ、今の時間、つまり「死」など無かった時間に戻った。仮に修正されなくても、誰かが思い出してくれるまで時の中にいた。

イマジンの首魁であったカイですら、「死んだ」のではなく「存在しなかった」事になって、この世界から「消えた」だけ。

だが、天王路は違う。彼の死は決定されてしまった。

「死んじゃうのって……怖いね」

「……そうだな」

「僕、消えるのも怖かったけど……死んじゃうのは、もっと、怖い」  
言いながら、リュウタロスは自分の存在を確かめるかのように自身の体をきつく抱きしめる。

相槌を打ったモモタロスも、どこと無く暗い表情で立ちつくし……降りしきる涙雨の中、彼らはただ、流されていく死の痕跡を眺めていた……

\*

天王路が根城にしていた廃墟。元はBOARDの所有する隠し研究所だったらしいそこに、何かの痕跡を探す橘がいた。

ケルベロスやティターン、そしてトライアルと言った「人造アンデッド」のデータを探し出し、悪用されぬよう消去する為に。

どれくらいその作業をしていただろうか。ふと背後に人の気配を感じ、目の前の壊れたモニターを見やる。

鏡のようになっていてそれは、橘とその背後の人物……始を映し出していた。

「睦月は？」

「剣崎が病院に運んだ。軽い傷で済んだようだ」

「そうか」

短い始の答えに、安堵したように橘は言う。

橘が剣崎を友人として見ているなら、睦月の事は弟のようなものとして見ているのだろう。

彼に戦い方を教えたのは橘だ。少なからず睦月を守りきれなかった事への責任を感じているのかも知れない。

流された血は多く、それ故に深い傷だと思っていたのだが……どうやら「出血はするが酷くは無い」場所を斬られただけだったらしい。それでも斬られた事には変わり無いのだが、命に関わる様な物でなかったただけ良かったと思う。

ふ、と短く溜息を漏らしてから視線を上げると……その先に、この場に不似合いな物を見つけた。

破壊され、物理的損傷の無い物など何一つ無さそうなこの荒れた施設の中で、悠然と……傷一つ無い状態で存在する「黒い石板」。

「……これも天王路が作ったのかな？」

それに近付きつつ、不思議そうに言う橘。

平板を真ん中辺りで90度捻ったようなその形は、自然界で生み

出された物とは思<sup>がた</sup>い難い。

見た目は趣味の悪いオブジェのようだが、あの男がただの飾りを、こんな室内の中央に置くとも思えない。何らかの意図があって、これを作り上げてここに置いた……そう考えての言葉だった。

だが、その考えは直後に否定される。慄いたような、始の言葉で。「これは！ 統制者の声を伝える物だ」

振り返れば、声だけでなく、その身に纏う雰囲気からもそれを警戒する彼の姿が見て取れる。

いつも以上に見開かれた目から読み取れるのは、畏怖だろうか。

「統制者？ それは何者だ！？」

「……これはかつて、封印の役を果たす物だった」

橘の問いには答えず、始は石に関してのみ軽く説明する。

始も、統制者について詳しい訳ではない。

かつての…… 1万年前のバトルファイトにおいて、この石はバイパスの役割を果たしていた。

統制者と呼ばれるそいつが、この石を通してバトルファイト勝敗を見守り、敗北した者には封印と言う枷をはめていく。

統制者は「神」とも呼べる存在であり、勝利者に祝福を与える、と言う程度の認識しか持っていない。

橘の問いに完璧に答えられるのは、いるかいないかも分らぬ統制者本人と、かつてバトルファイトに勝利した者……ヒューマンアンデッドくらいのもんだろう。だが、彼らに答えを望む事ができないのは始が1番よく知っている。

「天王路はバトルファイトを起こし、統制者とコンタクトを取るつもりだったのか。自分が勝利した時、確実に目の前に現れるように」橘は忌々しげに呟きつつも、天王路の用意周到さには感心する。

何手も先を読み、己の欲望の為に全てを利用した男。

彼とて、彼なりの「平和」を望んでいたのだろう。しかしそれは他者にとっては平和とは言い難い物だった。だからこそ、自分達と戦う事になったのだろうと思う。

それにしても……本当にこんな石板に、そこまでの……世界を作り変えたいと思う程の魅力があると言うのだろうか。

思いながら、橘が「それ」に触れた瞬間。石板は眩い光を放ちその場から陽炎のような空気のゆらめきを残して消えた。

「どこに行った!？」

「……さあな。だが、やがてまた現れる」

「何？」

「近い将来、最後の1体となったアンデッドの前に」

「そのアンデッドの望む物を、与えるために……」

暗い響きを含む橘の呟きに、始は小さく頷いた。

「あの時」に俺……相川始が望んでいた物。

それは、「平穩」だった。

ジョーカーと言うアンデッドとしてではなく、相川始と言う人間としてこの世界を生き抜きたいと、心の底から望んでいた。

……それなのに……何故、あんな結末になってしまったのだろうか。

出来る事ならやり直したい。

あの日、あの時を。

……だが、それは叶わぬ事。誰も過去をやり直す事はできない。今、これを俺が望んで良いのかは分からない。

だが、それを望んで良いのなら……もう1度だけで良い。

会いたい

病院から出てきたのは、頭に包帯を巻き、右腕を吊っている睦月と、その付き添いをしていた剣崎。

始の言った通り、睦月のケガは軽い物だったようだ。

カテゴリーキング相手にそれで済んだのは奇跡、としか言いよう

が無い。

「……俺が甘かったんでしょか？」

ギラファアンデッドにやられたのがショックだったのか、睦月が悲しそうに剣崎に問いかける。それを神妙な面持ちで聞いていた剣崎は、小さく唸り……

「アンデッドが戦いを止めた時、最後に勝ち残る者は無い。お前は正しいと思う。だけど……難しいよな、それ」

最後に残った2体のアンデッド。

一方は人として生きる事を望み、もう一方はヒトを滅ぼして己の理想とする世界を作ろうとしている。

……剣崎の知るアンデッドの中で、ヒトとの共存を望んだ者は本当に少ない。

その少ないアンデッドが他にも残っていたなら、睦月の理想もきつと遂行できたのだろうが……無い物ねだりとも言うべきか。少なくとも一方がヒトとの共存を拒んでいる以上、睦月の願いも空しいだけだ。

「……相川さんには、『甘い』って言われました」

「そうか。……でも、始はお前にそれ言われて、嬉しかったんじゃないのかな？」

言われた言葉に、剣崎はまるで我が事のように嬉しげな顔で睦月に返す。

何もかも信じきった……それでいて、向けられた方も信じなくなるような、笑顔。それを浮かべた剣崎は、やはり誰よりも強くと、睦月は改めて思う。

そんな睦月の思いに気付いていないのか、剣崎は前を向いて言葉を続ける。

「あいつだって、本当は戦いたくない。そう思ってるはずだ」

「……剣崎さんは、どうしてジョーカー……相川さんを、そんな信じる事ができるんですか？」

「え？ そうだな……。何でだろう……？」

睦月に問われ、改めて考える。

最初は敵だと思っていた。

今は友だと思っている。

そしてこれから先も、友であり続けたいと思う。

……親友を信じるのに、理由なんて要るだろうか……

「あの日」、俺が……剣崎一真が本当に願った事は何だったんだろう。

人類の平和のために戦うって言うってたけど、本当は違う事を望んでたんじゃないか。

最近、そう思うようになってきた。

……あの時の俺の望みは、ひよっとしたら……

俺には、ああする以外の方法は思いつかなかったんだ。選んだ結果、誰かが泣く事になるかもしれないと、頭の片隅では分かっていても。

……だけど、許されるなら……たった1度だけで良い。

俺は、始に、会いたい

「ジョーカーが、キングを封印すれば、全てが滅びる……のか……？」

始と別れ、自分の部屋に戻っていた橘は、誰にでもなく眩きを落とす。

ここに来て、橘の思いは揺らいでいた。

彼にとって「ジョーカー」とは、アンデッドの中でも特に危険な存在であり、勝ち残れば全てを滅ぼす者。そう聞いていたし、理論上ではその言い分は正しいからだ。

ジョーカーは、何の始祖でもない。それはつまり「何も生まない」事に他ならない。

だから、人が……世界が存続するためには、彼の者は封印すべきである事も、彼には良く分かっている。

しかし、彼は知っている。

今、彼の者はジョーカーとして生きていく事を拒んでいる事。

そして人の中で、「相川始」と言う1個人として、十分に生きていく事ができる存在になりつつある事。

始が言う所の「統制者」と呼ばれる存在は、最後に残った者の望みを叶える。

それでは、統制者の叶える望みは「相川始」の物なのか。それとも……始の内に潜む「ジョーカー」の物なのか。

「俺は……」

どうすれば良い？

唇の動きだけで咳きを落とすが……その問いに返ってくるのは、沈黙と写真立ての中のみ存在する笑顔だけであった……

3年前の「あの日」の事を、今でもはつきりと思い出す。

俺が……橘朔也と言う人間が、不甲斐ないばかりに、剣崎に全てを押し付けてしまった事。

幾人もの人間が「あの日」の事を後悔している。

だが、俺には後悔する資格は無い。「あの時」に間に合わなかった、俺には。

だから今、俺は俺の出来る精一杯をしている。

それでも……俺は願わずにはいられない。

俺の友が、心の底から笑えるように

恋人である望美の作った弁当をぱくつきながら、睦月は平穏な時間を過ごしていた。

あまりにも久し振りすぎる「平穏」。以前は何の変化もない、単

調な日々だと思っていたのに、仮面ライダーとして戦いに身を投じるようになってからはこの単調さが懐かしく、そして大切なのだと感じていた。

「あのさあ、ライダーになれる人間って、限られてるらしいんだ」

「ふうん……………」

「俺は、たまたま偶然なれる人間で、選ばれて、ライダーになって……………これって、運命って奴だよな」

「うん。そう思う」

「でも……………選ばれただけじゃ、本当はライダーじゃないって、本物のライダーになりたいって思った。逃げ出しちゃいけないって。運命なら、負けちゃいけないって」

かつて、自分は封印したはずのカテゴリーエース……………蜘蛛の始祖、スパイダーアンドレッドに心の闇を引き出されそれに囚われた。

闇は「最強」に拘り、1人で勝つ事に執着し、仲間を……………そして横に座る最愛の少女をも傷つけた。その結果背負ったのは、言葉ではとても表しきれない程の業。

……………そこから救い出してくれたのは、2人の気高いアンドレッドと傷つけられてもひたむきに自分を信じ続けてくれている、望美だった。

だからこそ、彼女の前では弱さを曝け出す事が出来るし、自分の考えている事を口に出す事ができる。

「でも……………もうすぐライダーにならなくて良い時が来る。それって、運命に勝ったって事なのかな？ それとも……………」

それすらも、運命の一部なのか。

そう言いかけて、睦月はふと空を見上げた。

声に出してしまっただら……………言葉にしまっただら、それこそ運命に負けるような気がして。だから、言わない。

言わなくても、きつと望美は分かっている。

「……………その答えを見つけないんだ」

「じろりと寝そべり、見上げればそこには青い空。

……どこまでもいけそうな……青い、空。

「あの戦い」から、もう3年も経った。

俺の……上城睦月の就職活動だって、そろそろ佳境に入ってきている。

……多分、これが「平和」って事なんだろうけど……

でも、あの日から、俺は何か物足りないような感覚に囚われている。

戦いを望んでる訳じゃない。

優しい時間のままでいい。

……でも、やっぱり俺……

もう1度、ライダーだった4人が揃った状態で、過ごした

い

\*

「すみませんねえ、呼び出してしまつて」

あまりすまなそうな感じも無く、オーナーはデンライナーへ帰還してきたハナ達へ開口一番そう声をかけた。

……ライスの真ん中に旗が刺さったカレーを食べながら。

「いいえ。それで、緊急の用つて……？」

緊急の用ができたので、1度デンライナーに戻ってきて欲しい、そう言った内容の電話を受けて、戻ってきた訳だが……呼び出した張本人であるオーナーがカレーと格闘しているせいも、あまりにも緊張感が無い。

「1つ、頼まれて欲しい事が、あるんです」

「……おっさんが!？」

「僕達に!？」

「頼み事やて!？」

初めての経験に、思わず後退りながらそれぞれに上ずった声をあげるモモ、ウラ、キンの3人。

声には出していない物の、ハナも今の発言には驚きを隠せないらしく、パチパチと目を瞬かせて声の主を見つめていた。

「で？ 何を頼まれれば良いのだ？」

「いえ、歴史が変わらないように人を1人、助けて頂ければ良いんです」

やや半眼気味の目で問うたジークに、オーナーは視線も上げずにさらりと答えを返す。

過去の時間へ干渉する事を良しとしない彼が、今回ばかりは関われと言う。しかも関わる事でこの時間が変化しないと言っているから妙な話だ。

桜井侑斗が一時消えた時ですら、彼はただ傍観し「桜井侑斗の存在しない時間」を平然と受け入れていたというのに。

「あの、トンネルの事と何か関係があるんですか？」

「当然、ありますよ。その人がいなかったら、この時間はあの……」  
ちらりとオーナーが視線を向けた先にあるのは、この数日でますその口を広げた「西暦2005年のトンネル」。

それは確実にこちら側へ侵食を進め、既に山の半分以上の大きさにまで穴を広げている。

「向こうに飲み込まれてしまうでしょうねえ。そしてそれは、あってはならない事です、絶対に……」

口調はいつもと変わらないが、その声は間違いなく真剣その物。

それほどまでに、トンネルに繋がるのは危険な事なのか。

「それで？ 誰を助けたら良えんや？」

「それは……」

オーナーが口にした名。それはモモタロス達にとって、とても意外なものだった……

## その10：1番大切な者

相川始。

ハートのエースに選ばれた者。

「始」とははじまり、物事の最初。

軽快なシャッター音が連続して聞こえた後、それまで動きを止めていた天音が、始の方へと駆け寄っていく。

「じゃあ今度はお店をバックに撮って」

「わかった」

にこやかな笑顔で、嬉しそうにねだる天音に、普段では……他の人間の前では絶対に見せる事の無い、穏やかな笑顔を浮かべ、始は再びカメラを構えた。

「この辺で良い？」

他愛の無い会話。

ファインダー越しに見える、天音の明るい笑顔。

彼が浮かべている穏やかな笑顔が物語っているように、今やそれは、守るべき「日常」と思えるようになっていた。

だが……心の中では分かっていた。

自分はアンデッド……それも全てを滅ぼすはずの存在ジョーカーであり、カテゴリーキングが自分と敵対する気である以上、それと戦わねばならぬかもしれない事。そして……どちらが勝っても、自分に笑顔を向ける少女の前から姿を消さねばならない事も。

いつまで……このままでいられる？

願わくはこの時間が、永遠に続かん事を……

西暦2007年。

行動を開始したイマジンは、真つ先に「JACARANDA」という名の喫茶店を覗いた。

ゆっくりと巡らせた視線の先に見つけたのは、女店主とそれを手伝う娘。更に数人の男性客。それらの中に、彼は目的の人物がいる事を見止める。

「……見つけた、契約の対象……」

口元だけで小さく笑うと、その存在が1人になるのをじっと待つ。……大勢に騒がれて、自身の「敵」に嗅ぎ付けられては面倒だと彼はそう判断したのだ。

「意外と、契約完了は早そうだな……」

人目につかぬよう、物影に身を潜めながら……彼は、小さくそう呟いた。

ハナ、キンタロス、そしてジークの3人は、デンライナーから再びこの時間……2005年1月9日に降り立ち「JACARANDA」という名の喫茶店に入っていた。

この時間は、「天王路の死」から2週間ほど経っているのだが、デンライナーに乗ってこの時間まで来た身としてはその実感は無い。ハナ達の体感時間は、せいぜい2時間強と言ったところだろう。

今回はオーナーに依頼された、「ある人物の護衛」組と、今まで通り「トンネルについて調べる」組の2手に分かれて行動している。なお、ハナ達は後者である。

ここに来た理由は特に無い。強いて言うなら、やはり「ジークの気まぐれ」と言ったところか。

「ふむ、いい味だ。香りも申し分無い」

「ありがとうございます」

この店主らしい女性の入れたコーヒーを、ジークは珍しく素直に褒める。

一方でキンタロスには、人間の飲むコーヒーの味が美味しいとは思えない。とりわけ不味いとも言わないが、好んで飲もうとは思わない。表情には出さないが、首を軽く傾げてカップの中の闇色の液体を見つめるだけに留めていた。

そもそも自分はイマジンなのだから、人間と味覚が合わないのは当然のはずなのだが……何故、ジークの味覚は人間に近いのだろうか。やはり人から「生まれた」イマジンだからだろうか。

ぼんやりとそんな事を考えていた時、カラン、とドアベルが鳴った。

何の気なしにその方向を見て……ハナとキンタロスの2人は啞然とする。

……入ってきた人物。それは天王路博史を死に追いやった存在……カテゴリーキングと呼ばれていた者の、人間体だったのだから。

何の躊躇いも無く、真っ直ぐにカウンター席に座る男。彼はその口の端に薄い笑みを浮かべたまま、ぐるりと店内を見回すと、店主に「コーヒーを注文した。」

「あいつ……なんでこんなトコにおるんや？」

一瞬、無差別殺人という単語が3人の脳裏に浮かぶ。

今、この場で変身できるんは俺だけや。もしもの時は、何とかせな

男に気取られぬよう、キンタロスはゆっくりとした動作で自分の懐にあるパスケースを取り出す。万が一の場合に備え、いつでも変身出来るように。

だがその瞬間。再びドアベルが鳴り、2人の人間が「ただいま」と言う声と共に帰ってきた。

1人は今のハナと同じ年くらいの少女。店主の親類……もっと言えば娘なのだろうか、どこことなく雰囲気似ている。

そして、彼女と共に入ってきたもう1人……それは、天王路と戦っていた「黒い戦士」に変身していた者。そして、「ジョーカー」とも呼ばれていた男……確か、始と呼ばれていたか。

それを見た瞬間、3人は理解した。

……カテゴリーキングは、彼……相川始に会いに来たのだと。

「お前は」

「始さん、お知り合い？」

「ああ、そうなんだ」

始が答えるよりも先に、男は笑顔で少女の問いに答える。ただ、その笑みは彼の正体を知る者にとって、あまりにも白々しい物であったが。

しかし、少女は彼の正体を知らないし、始の醸し出す緊張感にも気付いていないのだろう。にこりと笑うと、純粋な興味からなのか、軽やかな足取りで男に駆け寄り問いかける。

「どう言うお知り合いですか？」

そして彼女が男の手が届く範囲まで駆け寄ろうとした直前。

始が、それを制すかのように腕を彼女の前に出して少女の動きを止めると、鋭い目付きのまま男を睨み付け……

「……下で話そう」

どうやら彼の部屋はこの下の階にあるらしい。

顎で階下を示す始に対し、やれやれと言わんばかりの表情で、男は彼の後を追って下に降りていく。

「……お友達でも、何か剣崎君達とは雰囲気違うわね？」

「始さんもいつもと違う」

少女はふてくされたように、自分達の近くのテーブルに腰掛け、突っ伏した。

その様子に、この時間に来てから何度も感じていた「嫌な予感」が、今またハナの脳裏をかすめた……

\*

「この間まで、俺はお前を封印する事はできなかった。だからあの時も、お前の前から逃げるしか無かった」

アンデッドは基本的に、他のアンデッドを封印する事はできない。故に、かつてはあの黒い石板が、負けたアンデッドを封印していた。戦いに勝利しても、石板が現れなければ、獲物に逃げられてしまふ事もままあった。

唯一、例外として他のアンデッドの力をコピーして使役するジョーカーは、石板の力抜きで相手を封印出来た訳だが……

今、金居は「切り札」を持っている。もはやジョーカーに恐れを抱く事は無い。

思いながら、足元に目を落とすと……そこには1葉の写真があった。

反射的に落ちていたそれを拾い、眺めて……金居は皮肉気に口の端を歪める。

そこに映っているのは、まだ天音の父が生きていた頃に撮ったのであろう、家族3人の笑顔。

「……ほう？ これはあの雪山の時の……」

……天音の父、栗原晋一郎は、ギラファアンデッドとカリス……いや、カリスに扮したジョーカーとの戦いのとばかりで死んだ。

今、金居が手にしている写真はその際に始が栗原から託された物……今の彼にとって、非常に大切な物である。

それを始が奪い返すと、金居は面白そうな顔で部屋の扉の前に立つ。

「お前がここに住み着いた理由がわかった。父親を殺したのは自分だと、教えてやらないのか？」

「貴様……」

金居の言葉は、「相川始」の逆鱗に触れた。それが、戦いの始まりの合図であるかのように……

\*

少女が泣きながら、どこかに電話をかける。

「虎太郎！ 始さんがいないの。連絡も取れなくなつて……どうしよう、またいなくなつちゃつたら……」

先程、始の様子を見てくると言つて下の階に降りたのだが、その時にはもういなくなつていたらしい。

以前にも、彼はふらりと消えてしまつた事があるのか、少女は電話の相手に縋る様に泣きついている。それでも電話口の相手が必死に宥めていたのか、徐々に少女は落ち着きを取り戻すと、まだ少し目に涙を溜めたままこくりと小さく頷き……

「……うん、信じてるからね。絶対だよ、虎太郎？」

そう言つて、静かに受話器を置いた。

どうやら電話の相手が、彼を探す事を確約してくれたらしいが……それでも不安なのだろう。堪えきれなかつた涙はぼろぼろと零れ落ち、切つたばかりの電話を凝視している。

「……涙はこれで拭いとき」

「え？」

見かねたキンタロスが差し出した懐紙を見て、少女は驚いたように目を丸くした。

少女だけでなくハナも、その突飛な行動にかなり驚いていたが。

「これ？」

「知らんか？ 『懐紙』つて言うてな、昔の人は、これをティッシ

ュやハンカチの代わりに使うたんや」

「へえ……ありがとうございます」

につこり笑い、少女がキンタロスの手から懐紙を受け取り、目元を拭う。

「ようやく笑うたなあ。女の子は泣くより、笑うた方が絶対に良え」

「ハンカチじゃなくて、懐紙つて辺りが、あんたらしいわね」

手元にあるオレンジジュースを飲みながら、ハナはにこやかに声をかけ、言われた方は「そうか？」と呟きながら少女の頭を優しく撫でる。

「……ふむ。では、そろそろ私達も行くか」

空気を読めないのか、それともそもそも読む気がないのか。

ほのぼのとした空気を怖し、コーヒを飲み終わったジークが実にマイペースな調子でそう言葉を放つと、優雅な仕草で席を立った。「行くつて、どこによ」

「どこ？ 愚問だよ、姫」

ばさりと羽のマフラーを翻し、ジークはスタスタと店の外へと歩き出す。もはやこの場所に居る理由は無いと、言いたげに。

「おい、ジーク……軸！ どこ行くんや!？」

「ちよつと軸！ 金！ ……あ、ご馳走様でした、おいしかったです。お代、ここに置いていきますから」

慌てながらもハナはその場に代金を置き、さっさと店外に出て行ってしまふジークとキンタロスの後を追った。

彼女達の後ろで、少女が面白そうにその様子を見ている事など、露程にも思わずに……

\*

「お前は俺を封印する事はできない。俺を封印した時、お前の勝利が確定する。ジューカーの勝利……それはバトルファイトのリセット。全ての生命の消滅を意味する。あの親子も消滅する。お前のせいで。ジューカー。それがお前の宿命」

木々の合間を縫いながら、カリスとギラファアンデッドが戦いを繰り返していた。

その中で淡々と言われ、カリスの動きが止まる。

そこにすかさずギラファアンデッドは斬撃を繰り出す。

慌てて反撃に出ようとするが、そのような暇を与えるギラファアンデッドではない。容赦なくカリスを痛めつけ、終いにはこんな事まで言った。

「人間になど、愛情を持ったのが間違いだ」

……純粹に、戦う事のみ考えていた頃の「ジューカー」なら、こ

んな事にはならなかった。

カテゴリーキングと云えど、まともなぶつかって勝てる相手ではなかった。

それが今や、この体たらく。心など持つから……人など愛するから、弱くなったのだ、と。

声には出さず、心の内でのみギラファアンデッドがせせら笑った刹那。

「始を封印などさせない！」

木々の間から現れた剣崎が、ギラファアンデッドの意識をカリスから離すかのように声をあげた。その後ろには、慄いたように腰が引けている虎太郎もいる。

一瞬だけ沈黙が落ちる。だが、すぐにその沈黙も、ギラファアンデッドの哄笑によって破られた。

「ふ。ハハハ……ここにもいたなあ。ジョーカーを庇い世界を滅ぼしてしまおうとする馬鹿者が」

「変身！」

その笑いが不快だったのか、それとも単純に相手の気をこちらに反らす為の手段だったのか。掛け声と共に、剣崎はブレイドへと変身し、ギラファアンデッドに斬りかかる。

しかしギラファアンデッドは、カテゴリーキングの名に相應しい、圧倒的な力でブレイドを遠くへ弾き飛ばすと、カリスの方に向き直り……一枚のカードを見せるようにして掲げた。

……天王路を殺してまで奪った、彼の「切り札」……ケルベロスのカードを。

「そのカードは！」

驚きの声を上げるカリスに、フンと軽く鼻で笑うと、ギラファアンデッドは彼に向かってそのカードを投げた。

……ブレイド達がアンデッドを封印する時と同じように。

だが、ケルベロスのカードがカリスに触れる直前、ブレイドが彼を庇うように立ち塞がり……

こつん、とケルベロスのカードが当たった瞬間。

ケルベロスの持つ特異な力が働いたのだろう。……ブレイドの化身が、解けた。

強制的に解かれたせいか、剣崎が苦悶の表情を浮かべてその場に膝をつく。

「ケルベロスは他のアンデッドを吸収し、封印する能力を持つアンデッドだった。その力は生きている！」

アンデッドが持つ特異な力は、カードに封印されても使える。

……ケルベロスの力があれば、自分自身に封印する力が無くとも他のアンデッドを封印できる。その為に、天王路を殺してこのカードを奪ったのだから。

「ジョーカー封印！」

気を取り直し、再度カリスに……否、ジョーカーに向けてカードを投げようとしたその時。

先程まで苦しんでいた剣崎が、ギラファアンデッドの動きを止めるかのように、その後ろから掴みかかり、その体を押さえつける。

「始、行け！」

剣崎の気迫にその背を押されたのか、今まで見ていただけだった虎太郎も彼を手伝うべくギラファアンデッドの右腕にしがみついてその動きを鈍らせる。

そして、どこか悔しげな表情をカリスに向け……

「君はヤな奴だけど、いなくなると天音ちゃんが悲しむからね。行けよ！」

恐らく、白井虎太郎は相川始の事を、先の言の通り好ましく思っていない。それでも始を助けようとするのは、天音と言う自身の姪の泣き顔が見たくないからと……虎太郎自身の親友でもある剣崎が、助けようとしているからなのだろう。

その複雑な想いを、ほんの僅かにではあるが理解して……カリスはくるりとギラファアンデッドに背を向け、その場から走り去る。

どれだけ走ったのか。木々の合間を抜け、山道に辿り着いた所で

……追ってくる気配が無い事に安堵したのだろうか。始は意識を手放した。

その中で思い出すのは、彼が今、最も大切に想う者……栗原天音の笑顔。

天音ちゃん

## その11：望みを叶えよう

橘朔也。

ダイヤのエースに選ばれた者。

「朔」とは新月、月の最初。

林の中で倒れていた始を見つけたのは、剣崎達の所へ向かおうと  
していた睦月だった。

彼はすぐに始を人目につかない廃墟とも高架下とも思える場所へ  
運ぶと、彼の師匠たる橘に連絡して彼の到着を待つ。そして橘が到  
着するや否や、始の容態を伝えた。

「かなりのダメージを受けています」

「カテゴリーキングが追っている。ヤツを封印するために」

「あいつが……?」

「……こっちに来い」

やや悲しげに目を伏せて呟く睦月を誘い、眠っている始から離れ  
る様に2人は奥の方へと向かう。

何の躊躇も無く離れていく橘と、少しだけ始を気にかけてつその  
後を追う睦月。

「剣崎から電話があった。白井とこっちに向かっている。『それま  
で始を頼む』と言ってたよ」

「……はい!」

「だが」

勢い良く返した睦月の声は、橘の短い否定によって遮られた。

そしてそれを聞いた途端、嫌な予感が睦月の胸の内をかすめる。

「……睦月。リモートのカードを渡せ」

「……何を言っているんですか、橘さん!」

「ヒューマンアンデッドを解放する。その上でジョーカーと……カ

テゴリーキングを封印する。そうすれば勝利者はヒューマンアンデッドだ。人類は滅びない」

カテゴリーキングを封印した時、最後の勝利者は相川始……ジョーカーとなる。

その時、統制者が叶える望みは「相川始」の物なのか、それとも「ジョーカー」の物なのか。

始の望みを叶えるならば構わない。彼の望みは「人として生きていく事」だ。恐らくは今と変わらぬ平穏な日々が訪れるだろう。

……だが、叶える対象がジョーカーの望みならば、それは世界の破滅を意味する。

そんな不確定で危険な賭けに出る程、橘は始を信用出来ない。

人類が、確実に生き残る方法は……もはや、「人類の勝利」に頼るしかない。

……それが、橘朔也と言う「科学者」が出した結論だった。

「剣崎さんは……承知しているんですか？」

必死に冷静を装おうとしているのか、震える声で睦月が問う。だが、それに返すのは沈黙。

それでも睦月にとって、それは十分な答えだった。

橘はこの事を、剣崎には話していない。

「……………嫌です」

「わかっているだろう。あいつはジョーカーだ！」

「だけど！ 『相川始』はどうなるんですか！ ……剣崎さんは、信じています。ジョーカーは世界を滅ぼしたりしないって」

ただひたすらに、真っ直ぐに。剣崎が始を信じている事を、睦月も橘も知っている。

例えあいつの正体がジョーカーだとしても、あいつは人間になるうとしている。自分の運命と戦っているんです

かつて、剣崎がそう言っていた事を思い出す。

そしてその思いは、今でも恐らく変わっていない。ひよっとすると、もっと強くなっているかもしれない。剣崎一真とはそう言う男

だ。1度信じたら最後まで信じ抜こうとする。

そしてその真っ直ぐな想いは、やがて他人に伝播し、更に周囲を巻き込んで、いつの間にか大きな流れへと変わっていく。

そして……今の睦月もまた、その「想い」の伝播を受けたのだから。真っ直ぐに橋を見つめ返すと、自身の拳を軽く握り締め……

「俺も……信じたい」

睦月のその言葉には何も返さず、ただゆっくりとギャレンバックルを構える橋。

「誰でも、運命と戦う事はできるはずです。……違いますか!？」

橋に対抗するように、睦月もレンゲルバックルにチェンジスパイダーのカードをセットする。

変身したのはほぼ同時。

そして勝負は一瞬だった。

大きくロッドを振り下ろしたレンゲルに対して、ギャレンは滑り込むようにして体を倒すと、左足でそれを止め、逆に相手の胸めがけて銃弾を打ち込んだ。

変身しているとは言え……そしてカードによる強化がされていないとは言え、超至近距離からの発砲をまともに喰らったのだ。レンゲルの体はくの字に曲がり、小さな呻き声はその口から漏れる。

「……やっぱり、強いですね……橋さんは……」

その声に悔しさなど微塵も無い。むしろどこか嬉しそうにレンゲルはそう呟くと、睦月の姿に戻ってその場で気を失って倒れこんだ。

「馬鹿野郎……」

倒れた睦月に対し、優しい気にギャレンはそう呟く。

そして、視線をいつの間にかそのやり取りを見ていた始に持つていくと、ゆっくりと近付きながらその腕を伸ばして銃口を相手に向ける。

始の顔には、怒りも、絶望も、悲哀も無い。寧ろそれが当然と言わんばかりにその銃口を見つめ返し、ギャレンも引鉄を引こうと指をかけた……その時だった。

始の携帯電話が鳴ったのは。

『もしもし始さん？』

「……………天音ちゃん」

着信画面を見ずに電話に出た途端、電話口から響いたのは始が最も大切に思う少女の、心配そうな声だった。

『やっと出てくれた。始さん、今どこにいるの？』

「うん、ちよつとね。買い物があつてさ」

『買い物？ だったら私も行く！』

「ダメ。内緒の買い物なんだ」

『え……………？ もしかして……………私の進級祝い！？』

「……………ははっ……………ばれちゃった？」

『うわあ、楽しみ。ねえねえ、何買ってきてくれるの？』

「それは後のお楽しみ」

『早く帰ってきてね？ …… 剣崎さん達と一緒になの？』

その言葉に、一瞬だけ始の言葉が詰まる。それまで続いていた会話が止まり、ギャレンの銃口に向けていた視線も揺らぐ。

その表情が「迷い」を示している事に、ギャレンは瞬時に気付いてしまう。

それは自らが吐いている嘘に対してか、それとも、出来ぬ約束に對しての罪悪感からか。

「……………うん。すぐに帰る。剣崎も……………皆一緒に」

『約束ね』

「約束する」

上辺だけは穏やかな声でそれだけ言うと、始は電話を切り、もう1度真っ直ぐにギャレンへ視線を向け直す。

向けられた方の表情は、仮面に隠れてよく分らない。だが、銃口は微塵もぶれずに始に向かって狙いをつけている。

……………重苦しい沈黙だけが、その場を包んだ……………

西暦2007年1月。

仕事場からようやく家へ帰り着いた橘を、異形が出迎えるようにその姿を現した。

過去に見た事がある姿形。それは封印したはずの、あるアンデッドの姿その物だった。

「お前は……！ 何故解放されている!？」

「何の事が分からんな」

驚く橘に短く答え、そいつは彼に向かって右手を突き出した。

その仕草は危険なものだと、橘の勘が告げる。それと同時に、条件反射でその「攻撃」を避けた。

よく見ると、左腕には彼の知る人物が抱えられている。

変身をしたくても、手元にギャレンバツクルは無い。橘は相手を見据えつつその距離をとった。

疑問に思う事はいくつもあるが、相手は答えてくれそうにない。

抱えられた人物を見捨てて逃げるべきか、それとも助けるべきか。迷っている間にも、異形は橘との距離を詰め……

「全く。契約の邪魔を、するな」

苛立った様に異形……イマジンはそう言って、再び橘に右手を向ける。

……一刻も早く、己の契約を遂行するために。

\*

「……まあモモタロスと一緒に？」

「露骨に嫌がつてんじゃねえよ、この洩垂れ小僧」

眉根を寄せ、カ一杯つまらなそうに言うリュウタロスに、不機嫌な声で返すモモタロス。

「先輩もリュウタも、喧嘩はやめようよ。とにかく今は、『あの人』探さない」と

オーナーの言っていた人物を探し、モモタロス達3人は海辺を歩

いていた。海辺とは言うが、彼らがいるのは砂浜ではなく岩場。少し離れた所には切り立った崖も見える。

オーナー曰く、「その人物」は海の近くにいるとの事だったのだが……

「大体、居場所知ってんなら正確な場所教えるよな、あのおっさん……」

足元に転がる石を蹴り飛ばしつつ、ブツブツと文句を言うモモタロス。

そう言いたくなる気持ちも、分らなくもない。そもそも、本当に妙な事だらけなのだ。

トンネルが増えている原因を調べていたはずなのに、いつの間にか「アンデッド」とか言う存在を調べているし、しかも今度はそれに関わる人物を助けると言う。

トンネルの正体を知っているくせに、何も語ろうとしないオーナーに、モモタロスは苛立ちを覚えていた。

「大体、トンネルが増えて、何か問題でもあんのかよ」

「鬱陶しいじゃん」

「確かに。けどよ……おっさんの物言いからすると、それだけじゃ無さそうじゃねーか」

「これは、僕の推測だけど、トンネルは『別の世界』と繋がってるんじゃないかな」

何の気なしに放ったモモタロスの問いに、いつもより少しだけ低い声でウラタロスが返す。

その声の低さに驚いたのか、不思議そうな表情でリュウタロスは声の主へ視線を向ける。向けられた方は、自身の顎を指でなぞりながら、瞑目して何かを考え込んでいた。

「別の世界……？」

放たれた言葉に、今一つ実感が湧かないのだろうか。モモタロスの方は足を止め、眉を顰めてその言葉の意味を理解しようと考え込む。

「そ。僕達の知る『今』とは全く違う『今』が存在する世界」

「違う『今』って、つまり違う『時間』って事？」

「……どうだろう。例えば、あるトンネルの向こうでは、リュウタがダンスを踊れなかったり、あるいはキンちゃんや標準語でマシンガントークしてたり、かと思えば先輩の頭が異様に良かったり……」

「うわ。ありえない」

「をい待て亀公。何だその例えは」

「……そもそも、最初から、良太郎が存在していない世界かもしれない」

「……………え？」

「良太郎が存在していない世界」。

その言葉を聞いた瞬間、今まで純粹に楽しそうだったリュウタロスの表情が一転して寂しそうな物へと変わった。

同時に、ツツコミを入れていたモモタロスの顔もまた、厳しい物へと変化する。恐らく、その「可能性」が孕む危険に気付いたからだろうか。

「……………良太郎のいない世界なんて、そんなのつまんないよ……………」

「深刻なのはそこじゃ無えだろ。そんな世界と繋がっちゃったら……………」

「先輩も気付いた？ 本当に怖いのはね、リュウタ。もしそんな世界と繋がったら……………最初から、『無かった事』になっちゃうって事なんだよ」

「……………どう言う、事？」

震える声で問いかけるリュウタロス。そしてそれに答えたのは、深刻な表情のモモタロスだった。

「良太郎が最初っからいねえって事は、だ。俺達が電王になる事も……………良太郎に憑く事も無えんだよ。当然、俺らがこうやって、この姿で歩く事すら無え」

普段こそ、猪突猛進、脳みそ干物、考えても即座に考えるのをやめる傾向にあるモモタロスだが、こう言った「良太郎に関する事」

に関しては頭が回る。

野生の勘なのか、それとも本当は頭の回転が速いのにそれが長続きしないのかは不明だが、時折彼の「頭の良さ」にはウラタロスも驚かされる。

先を越され、ほんの少しだけ感じた悔しさを顔には出さずに、ウラタロスはリュウタロスの顔を見つめる。

その、心なしに青褪めたように見える顔を。

「……う、嘘だ。だって僕、ちゃんと良太郎に憑いたもん！ お姉ちゃんにも会えたし、モモタロス達とだって……！」

「そう。『この世界』ではね」

今にも泣き出しそうなリュウタロスの頭を撫でながら、ウラタロスは優しい声で答える。

その声の中には、ほんの少し、安堵が混ざっていたのを感じたのは、モモタロス自身もウラタロスと同じ気持ちだからだろうか。

「でも、トンネルが増えてるって言う事は、そういう『もしかして』の世界と繋がってしまう可能性が高いつて事なんだ」

もしそうだったら、今の自分はどうなるのだろうか。

記憶が書き換えられて、「この時間」、「この世界」の事を忘れてしまうのだろうか。

それとも「今」の自分のまま、「違う世界」を生きる事になるのだろうか。

はたまた、自分の存在そのものが、カイの様に消えてしまうのだろうか。

どの結果になっても、今の自分はそれを受け入れる事が出来そうにない。ならば、そうならないように努力するのみ。

「とにかく……俺らが『アイツ』を助ける事で、その可能性の1つを潰せるって事だろ」

「あれ？ 先輩にしては頭の回転速いじゃない？」

「うるせえ。俺だって考える時は考えるんだよ」

ようやくいつもの調子を取り戻したのか、自身のこめかみを人指

し指で軽く叩きながら言うウラタロスに、フンと鼻で笑ってモモタロスが返す。

オーナーは言っていた。

「その人物」を助けなければ、あるトンネルに飲み込まれると。ならば裏を返せば、そのトンネルの侵食を防ぐ事ができると言う事では無いのか。

ようやくその考えに到ったのか、それまで暗く落ち込んだような色を浮かべていたリユウタロスの顔に、ぱつと光がさす。

それは、他の2人が「いつも通り」でいてくれた事も大いにあるのだろう。だから、彼も「いつも通り」にしようと顔を上げた刹那その視界の先……離れた崖の上に、目的の人物を見つけた。

「あ、みーっけ!」

その人物が、今まさにクライマックスを迎えようとしている事など、その時の彼らは知る由も無かった……

\*

ゴツゴツとした岩肌を、金居は苦も無く登っていた。

目的はただ1つ。ジョーカーを封印するため。

だが、登りきった彼の前に現れたのはジョーカーではなく……その存在を目の敵にしているはずの、橘朔也だった。

「……何のつもりだ?」

「ジョーカーは……相川始は、渡さない」

「良いのか? 俺を封印すればその瞬間ジョーカーは勝利者となる。

バトルファイトはリセットされ、人類を含むこの世界は消滅する」

「そうなるとは限らない」

その橘の言葉に、金居は呆れたようにため息を吐きだす。

彼が知る橘朔也と言う男は、ライダーの中で唯一ジョーカーの危険性を考慮し、それを倒さんと奔走してきた者だからだ。

それなのに今、彼はジョーカーをかばおうとしている。

……愚か、としか言いようが無かった。どうしてヒトは、いつも間違った選択をするのか。理解できないし、したいとも思わない。

「信じてるのか？」

「俺の友がな！」

金居にそう返すと同時に、橘はギャレンへ変身する。

間を置いては危険と判断したのか、即座に醒銃・ギャレンラウザーを金居に向かって連射しながら、相手の出方を窺う。

一方の金居は、自身の周囲にバリアを張りつつ、仮の姿から本来の……ノコギリクワガタの始祖たる姿へと戻した。

それを見届けると、ギャレンは銃を撃ち続けながらもプラスパーツであるラウズアブゾーバーへ、ダイヤのクイーンとジャックの2枚のカードをセット。

『FUJON JACK』

電子音と共にギャレンの背に優美な羽根が広がり、ピーコックア宁德ッドの力を融合させた、高機動型のジャックフォームへと変化。その力を使って空中へ飛翔しながら再度銃撃を行う。

だが、その攻撃の悉くがギラファア宁德ッドのバリアに弾かれ、通らない。

通らないとは言え、いい加減その銃撃も鬱陶しくなってきたのか。ギラファア宁德ッドは飛び上がり、宙を舞うギャレンの足を掴むと、手に持っていた剣でギャレンの背中の翼を斬り付けた。

翼を斬られた事で飛行能力を失い、バランスを崩して地面に倒れたギャレンを、ギラファア宁德ッドは容赦なく斬りつける。

「馬鹿な奴らだ！ ジョーカーのために命を捨てるのか!？」

嘲るように、ギラファア宁德ッドが言う。その間も斬撃は止めない。

ジョーカーを守った所で、待っているのは死だと言うのに、何故それが分らないのか。ここでギラファア宁德ッドに殺されるか、それともジョーカーの勝利によって絶滅の道を歩むかの違いこそあれ、ギャレンを……橘朔也と言う人間の死は、確定しているような物だ。

ならば、いつその場でその命を止める。

ギラフアアンデッドが勝利しようが、ジョーカーが勝利しようが、ヒトと言う種は滅ぶ。それは確定している。だが、自分が勝てば全ての種の絶滅と言う、最悪の事態は免れる。

そんな思いを振り下ろす剣に乗せ、ギラフアアンデッドはひたすらにギャレンの体を刻む。

幾度目かの剣撃に耐え切れなくなったのか、ギャレンはふらりと近くにあった岩に座り込んだ。否、恐らくは倒れこみそうになったと言っべきだろうか。彼の膝は笑い、立っているのがやっとの状態なのはもはや明確だ。

倒れなかっただけ流石だが、その様子は好機ギラフアアンデッドにとつては好機。その左手にケルベロスのカードを持ち、ギャレンに向かつて悠然と近付く。……これ以上、仮面ライダーにジョーカーの封印を邪魔されぬように。

ケルベロスのカードが、仮面ライダーの変身を解除させる事は先程ブレイドで確認済み。ましてこれだけのダメージを与えた状態なら、ギャレンもしばらくは動けまい。その間にジョーカーを封印するのが得策か。

思いつつ、ケルベロスのカードをかざしかけた……その時だった。ギャレンが、かざされたその左腕を押さえたのは。

「この距離なら、バリアは張れないな！」

半ば叫ぶように、ギャレンはギラフアアンデッドの腹部に銃口を押し当てると、ほぼゼロ距離で銃弾を放つ。

だがギラフアアンデッドも、その思いがけない銃撃を喰らいながら、剣を携えた右手を幾度と無くギャレンの面に振り下ろす。

……それは、どちらが先に力尽きるかの根競べのように見えた。

何度目かの剣撃で、何かが壊れる鈍い音が響く。それは、ギャレンの仮面の左半分が破壊された音らしい。そこから覗くのは額から血を流す橘の顔。

「俺は全てを失った。信じるべき正義も、組織も、愛する者も、何

もかもを。……だから最後に残ったものだけは、失いたくない。……信じられる、仲間だけは！」

咆哮にも似た叫びと同時に、ギャレン……否、橘は掴んでいたギラファアンデッドの左腕を離すと、両手で銃を構えて相手を撃ち抜く。

突発的な攻撃である事と、橘の気迫に圧された事で、距離が開いていくにも拘らずバリアを張れないギラファアンデッド。

やがて……ダメージが一定値を超過したのか、彼の腰のバックルが開く。それはつまり、橘が彼を封印できるところまで追い詰めた事。

自身の間近に迫る敗北を悟ったのか、ギラファアンデッドはフン、と鼻で笑い……

「ジョーカーが残り、世界は滅びる。……馬鹿だな、お前は」

皮肉気で、しかしどこか嬉しそうなギラファアンデッドを封印すべく、橘は自分の持つ最後の、何も封印されていないカード……プロパーブランクを構える。

だが、世界への執着からか。ギラファアンデッドは構えられていたそれを払いのけ、崖の下……海の中へと落とした。

……これで、封印される事は無い。そう思ったのか、姿をギラファアンデッドから金居へと変えると、彼は幾度となく見たシニカルな笑みを浮かべて橘を見下ろす。

さあ、どうする？

言外にそう問われているような錯覚が、橘を襲った。ひよつとすると、実際に相手はそう思っているのかもしれない。

この期を逃せば、金居を封印できない。そして彼を封じない限り、相川始に安息は無い。

そんな考えが浮かんだのと、体が動いたのはほぼ同時だった。

「……………うおおおおおおおっ！」

……橘が、咆える。同時にギラファアンデッドに体当たりを食らわせ、崖下に向かって落とす。

……自らの体と、共に。

「貴様……血迷ったか!？」

「お前を、封印する……! そのためなら、命は惜しくない!」

プライムベスタは海の中。ならば、ギラファアンデッドも海の中に落とせば良い。逃げられないよう、自分の体で押さえつけて。

……それからほんの数秒後。眩い光が、崖の下から生まれた。

それは、アンデッドが封印された時に生まれる光。

橘朔也は、カテゴリーキング……ギラファアンデッドを封印した。

「橘さん! どこですか!」

「剣崎君、キングのカードが! 他のカードもある!」

虎太郎の叫びに、睦月と剣崎がその場に駆け寄る。

そこにあるのは、海の中を漂う、キングを含むダイヤスートのカード13枚。

ギャレンに変身するために必要な、エースのカードも、そこに漂っていた……

「橘が……死んだ……?」

崖から少し離れた場所で、始が呆然と眩きを落とす。

今まで感知できたカテゴリーキングの気配と共に、橘朔也の気配もふつりと途絶えた。

それは、自分の感知できる範囲から消えたか、あるいは死か。

だがそれを確認するよりも早く、彼の背後に黒い石板が現れた。

……統制者の声を伝える、あの石板……「モノリス」と呼ばれる「それ」が。

お前の望みを言え。どんな望みも叶えてやろう……

頭の中に、古代の言葉でそう言われるのが分かる。

だが、その声に含まれる冷酷な響きに、始は気付いてしまった。

こいつは……モノリスの向こう側にいる「何者か」に、「相川始」の願いを叶える気はない。叶えるのは「ジョーカー」の願いだと。

「やめろ……俺は何も望んでいない……」

嫌そうに首を振り、じりじりと後ろへ下がる。

橋に銃を向けられても一切動じなかった始が、ここに来て心の底から恐ろしい物に出会ってしまった。

情け容赦ない、実に公平な「神」に。

「やめろおおおおおつ！」

彼の悲痛な叫びも虚しく、「相川始」から「ジョーカー」へと姿を変え……モノリスは、破壊の使徒を吐き出した。

……「ジョーカー」の、眷属として……

その12：失って、たまるか

事は「彼の者」の思惑通りに運んでいる。

少なくとも「彼の者」自身は、そう思っている。

だが……残念ながら、そうではない事を……すぐに、思い知る事になる。

余計な時間を食ったと、イマジンは思いながら盛大に溜息を吐き出した。

これは1度、契約者の所へ向かった方が良いかもしれない。

下手に動かれると、探すのが面倒だ。

自分の足元で倒れている橘朔也を眺め、彼は再び、今度は小さな溜息を吐く。

「……敵に気付かれずに契約を完了するのは、骨が折れる」

\*

モモタロス達が「その人物」……ギャレンに変身した橘朔也を見つけた時、彼は丁度その近くにある岩に座り込む所だった。

最初、オーナーからその名を言われた時は、助ける必要は無いのでは、と思った。

何故なら橘朔也は変身できるし、見た限りそれ程弱いようにも思えなかったからだ。

だが彼は今、肩で息をし、目の前で何かを構えるカテゴリーキングに抵抗する様子も無い。かろうじて右手に銃を持ってはいるが、それを持ち上げるだけの気力も無いように見えた。

「っ!? おい! ありゃピンチなんじゃねーか!？」

何かに気付いたらしいモモタロスに言われ、ウラタロスとリュウ

タロスも目を凝らしてよく見れば、カテゴリーキングがかざしているのは、彼が天王路を殺した時に奪ったカード。それを、ゆっくりとした動作で橋に当てようとする。

その行為が危険な物だと、3人のイマジンは本能で感じていた。

だが、今から向かつても間に合わない。自分達の行動の遅さに苛立ちながら、それでも一縷の望みを賭けてウラタロスはパステースを取り出した……その時だった。

「この距離なら、バリアは張れないな！」

橋の叫び声が聞こえ、その直後に銃声が響く。

遠目からで良くは見えないが、どうやら左手でカテゴリーキングの動きを封じ、右手で銃撃を放っているらしい。だが……相手も、剣を携えた右手を幾度と無く赤い戦士の面に振り下ろしている。

「……あつ！」

何らかの異変に気付いたらしいリユウタロスが声をあげる。それにつられるようにして見れば、赤い戦士の仮面の左半分が、カテゴリーキングの与える衝撃に耐え切れなくなったのか、大きく破壊されていた。

そこから覗くのは、額から血を流す橋の顔。その顔は与えられる痛みからなのか、どこか辛そうに歪んでいた。

「これって、ちょっとまずいかも……！」

決して軽症とは呼べない状態である事に慌てたのか、ウラタロスはベルトを装着し、先程取り出していたパステースをセタツチする。「助ける事」が目的なのだから、多少の干渉は許容範囲……そう考えたのだろう。

『ROD FORM』

ベルトから電子音が響くと同時に、ウラタロスのチャクラが青いオーラアーマーとなって彼の体を包む。電王・ロッドフォーム。その名の通り、ロッド……即ち、杖を武器とするフォームである。

……もっとも、ウラタロスは「杖」ではなく「竿」と呼んでいるようだが。

「……亀ちゃんずるいー。僕が行きたかったのにー」

出遅れてふてくされるリュウタロス。だが、彼も事の重大さはわかってるのだろう。変身するような気配は無い。

そんな彼に、軽く笑い声を返しつつ、ウラタロスは視線を橋に向け直し、歩みを進める。

慎重に……だが、確実に橋朔也を助けられる範囲にいられるように。その刹那。

「俺は全てを失った。信じるべき正義も、組織も、愛する者も、何もかも。……だから最後に残ったものだけは、失いたくない。……信じられる、仲間だけは！」

その宣言と共に、橋は掴んでいたカテゴリーキングの左腕を離し、両手で銃を構えて撃ち抜く。バリアを張れず、まともに喰らうその連射の反動で、相手は後ろへと下がっていき……

唐突に橋は銃撃をやめると、1枚のカードを構えた。

ウラタロスは以前、ケルベロスがカードに封印される瞬間を見た事がある。きつと、カテゴリーキングもそのカードに封印されるのだろうと思ったその瞬間。

生への執着からか、カテゴリーキングはそれを払いのけ、崖の下……ウラタロス達の目の前へと落とす。

「何だ、これ？」

「カード？」

自身の足元に落ちてきたそれを拾い、しげしげと眺める2人。

何も書かれていない……強いて言うなら限りなく黒に近い灰色の闇が描かれたカード。

「先輩、それ貸して！」

唯一その正体を知るウラタロスが、何かを察したのか、モモタロスの手からそれをひったくるように奪い……

「……………うおおおおおおおっ！」

咆哮が聞こえると同時にカテゴリーキングに体当たりを食らわせ、自分ごと崖下に相手を落とす橋の姿が視界の端に映った。

「ええっ！？ ちょっと……！」

ここで死なれたら困るんだって！

橋の思いがけない行動に、慌てて自分の車両……デンライナー・イスルギを呼び、その一部である亀型の飛行艇、レドームに飛び乗る。

「間に合つてよ……！」

そして橋の体が崖から落ちきる前……つまり海面に叩きつけられる直前で、ウラタロスの竿が彼の体をギリギリで捕らえた。

彼が押さえ込んでいた、カテゴリーキングと共に。

がくと2人の体が揺れ、一瞬ウラタロスの体勢も崩れる。その瞬間、ロッドがベルトに触れたのか、それともそのときの衝撃が共用範囲を超えたのか。橋の変身が解除され、彼の持っていたカードがばらばらと海の中へ落ちていく。

しかし今はそれを気にしている場合ではない。一刻も早く橋を引き上げなければ。

「ちよっ……流石に2人は重いかもっ」

力仕事は僕の担当じゃないんだけど、などと誰にと言う訳でもなく文句を垂れつつ、ウラタロスは何とか2人をレドームにまで引き上げ、ほっと1つ息を吐き出す。

「お前、は……！？」

「僕の事は良いから、早く彼を封印した方が良くんじゃない？」

そう言つて、先程モモタロスからひったくったカードを橋に渡す。

一瞬、何故それを持っているのかと言う戸惑いを見せたが……黙つてそれを受け取ると、橋はそれをカテゴリーキングに投げた。

瞬間、眩い光がカードから放たれ……カテゴリーキングは、カードの中へと吸い込まれる。

しかし、もはや自分の手元に戻つて来るカードを受け取る力も無いらしい。そのカードは、誰にも受け取られぬままひらと海中へ落ちた。

「すまない、助かった」

「……これって、助けた事になるのかなあ？」

ようやく安堵したのか、レドームの上に座り込み、吐き出す様にして言った橋に、ウラタロスは一瞬と唸りながら、壊れたベルトを指差す。

緑地にダイヤのマークが描かれていたはずのバツクル部分は、右上からやや灰色がかった煙を上げた配線が顔を覗かせている。

「カードも海の中だし。まあ、潮の流れから考えると、少し待てば海岸に運ばれるんじゃないかな？」

苦しそうな表情を浮かべる橋を見ながら、できるだけゆっくりとしたスピードで岸に向かう。

見たところ、かなり傷が深い。目立つのは額の傷だが、それ以外にも先程付けられた傷が痛々しいまでに残っている。血塗れと言うには語弊があるが、このまま街中を歩けば確実に通行人の手で救急車、もしくはパトロールカーを呼ばれるであろう事が容易に予測出来る程度には血がついている。

さて、このまま病院に連れて行くべきか、あるいは誰かに押し付けるか

「……！ あれは！」

「え？」

橋の驚いたような声に思考を中断され、ウラタロスは彼の視線の先に目を向ける。直後、リュウタロスの悲鳴が聞こえた。

「ちよつと飛ばすよ……！」

レドームのスピードを上げ、急いで悲鳴の上がった先へと向かう。慌てて向かったそこには、一人の中年男性とそれを庇う様に立っているモモタロス、そして異形の怪物に羽交い絞めにされているリュウタロスの姿。

「リュウター！」

レドームに橋を乗せたまま、ウラタロスはそちらに向かって走り出す。

「遅えぞ亀公！」

「そんな事言ってる場合じゃ無いでしょ先輩！ リユウタを助けな  
いと！」

異形を睨みつけたまま抗議の声を上げるモモタロスに声を返すもの、相手には一切の隙が無い。苦しそうにもがくリユウタロスの姿に歯噛みしながらも、ウラタロスは必死に策を練り始める。

リユウタロスが捕まっていると言うのも問題だが、相手が何者なのかその予測も付かないのも問題だ。相手の秀囲気は、どこも無くケルベロスに似ている。となると普通に攻撃して倒せるかどうか……  
「トライアルAと同じだ。基本的にはあのベルトの中央部分を破壊すれば良い」

モモタロスの後ろにいた男が、ウラタロスの耳に届く程度の声で言った。

「それが出来れば良いんだけど……リユウタが捕まってる今の状態じゃあ、ちよつと難しいんじゃない？」

何とかしてリユウタロスをあの手から引き剥がさなければならぬが……殴る、突くが主体となる自身の武器では、無傷でリユウタロスを助けるのは難しそうである。

思考をフル回転させていた、その時だった。

…… 1発の銃声が、その場に響いたのは……

\*

橘が見たのは、見た事の無いアンデッドのようなもの……恐らくは自分達が見過ぎてしまっていたトライアルシリーズ……が、かつて出会った青年、龍太を人質に取る瞬間だった。

「ちよつと飛ばすよ……！」

助けてくれた青いライダーが言うと同時に、乗り物が速度を上げる。

今まで俺の体調に合わせていたのか？

陸地が近付くと同時に、そのライダーは身軽な動きで彼らの元に

駆け出す。

よく見れば、トライアルの視線の先に龍太と同じ顔をした赤目の青年と、彼に庇われるようにして立っている中年男性……烏丸啓の姿があった。

「烏丸所長……！」

彼らの元に向かおうとして……鈍い痛みが全身を襲う。

先程カテゴリーキングにやられた傷が、今になって痛みを呼んでいるらしい。

青いライダーも、龍太を人質にとられているせいか身動きが取れないように見える。

「どうすれば良い……どうすれば……！」

悩んでいる間にも、トライアルは彼らとの距離をじりじりと詰めている。このままでは、間違いなく烏丸が……そして龍太や赤い瞳の青年、更には青い仮面ライダーがやられる。

……そう思った時だった。

自分の手に、何かが当たったのは。

「これは……」

そこにあっただのは、奇跡的に無傷の状態で残っていた、醒銃・ギヤレンラウザー。

……本来なら、変身していなければこの場にあるはずの無いそれが、自分の手元にあるのは偶然か、それとも神の悪戯か。

だが、今はどちらでも構わない。

体の痛みを堪えながら、橘はトライアルのこめかみの部分に照準を合わせる。

少しでもずれば、龍太に当たる。それだけは避けねばならない。今の自分の体調を考えると、1発が限界。その1発を、外す訳には行かない。

「……当たれ！」

祈るように呟き、その引鉄を引く。刹那、体を襲う鈍い振動。

……ギヤレンラウザーの反動は、こんなに大きいものだった。

うか。

ぼんやりと思いながらも、弾丸の行き着く先を見届ける。そして見事に、彼の狙った場所へと着弾した。

……橘朔也が覚えているのは、そこまでだった。

\*

銃声の一瞬後、怪物の頭が何かに殴られたように傾いた。同時に、リュウタロスを手掴んでいた腕の力も緩む。

「小僧！ こつち来い！」

モモタロスに言われ、彼は大きく頷くとお返しとばかりに怪物を1発殴り飛ばしてから、ウラタロスの後ろに隠れるように立った。

「亀ちゃん、やつちやえ！」

「ベルトの中央部分、ね……」

見たところ、頭を撃ち抜かれたにも拘らず平然と立っている様子。と言う事は後ろの男の言う通りにしてみる価値はあると言う事か。

「……お前、僕に釣られてみる？」

ウラタロスのその言葉に、ほんの僅かに怒気が含まれているのは、大事な弟分であるリュウタロスの人質に取られたからか。

容赦ない杖捌きで、幾度となく相手の弱点……腰のベルト近辺を攻撃する。

「それじゃ、佃煮にでもしますか」

『FULL CHARGE』

パスがベルトにセタッチされ、エネルギーがデンガッシャー・ロッドモードにチャージされる。

「はあっ！」

ウラタロスがそれを怪物に向かって投げると同時に、エネルギーの網が展開、怪物の動きを拘束する。

そしてそのまま……ウラタロスのキックが、デンガッシャーを怪物のベルトの中央部分に蹴り込む。同時に、怪物は爆発、四散した。

ジリジリと音を立てながら、怪物がこの世から完全に消え去ったのを確認した後、ベルトを外したウラタロスはレドームの上で気絶している橋を担ぎ上げた。

「おい亀！ そいつ大丈夫か！？」

「大丈夫。気絶してるだけだよ先輩。あの状態で銃を撃った反動だろうね」

「でも……そのお陰で僕、助かったんだよね。………ありがとう、橋」

ウラタロスに担がれている男に、聞こえていないとは理解しつつも、リュウタロスは本当に小さな声で呟く。

「さてと。それじゃあこの人、近くの病院に運ばないとね。流石にこの怪我は放つとくのはまずいでしよう」

「それなら、俺の車を使え。近くに止めてある」

それまでモモタロスの後ろにいた男が、服についた埃を叩きながらそう言った。

「本当かおっさん！」

「……おっさんと呼ぶなど、前に言ったはずだがな」

「悪い」

「あれ？ 先輩、知り合い？」

2人の会話で、ようやくモモタロスとこの男が知り合いだと気付いたのか、ウラタロスが不思議そうに声をかける。

それもそのはず、ここは西暦2005年。つまるところ、自分達イマジンが現れるよりも更に「過去」。顔見知りがある事自体、おかしいのだ。

「……おう。この間、俺が変身した時に助けた」

「烏丸啓だ。橋の上司に当たる」

「ふうん。それじゃあ、後は任せて……僕達はそろそろ行くかうか」

烏丸の車に橋を乗せ、ウラタロスは自分の後ろにいる2人にそう言った。

橋を助けた以上、ここにいる必要はもう無いし、烏丸に追及され

るのは非常に面倒な事になりそうである。

「え〜？ もうちょっとここにいっても良いじゃん」

「そも行かないんだよりユウタ。オーナーに言われたでしょ、  
事が済んだら戻って来い』って」

「ちえ。つまんないの」

心底つまらなさそうに、リュウタロスは足元の小石を蹴飛ばしな  
がら言う。

だがそれ以上駄々をこねる様子も無い所を見ると、彼もそれなり  
に長居をしてはいけないと理解しているのだろう。

モモタロスも特に異議はないらしく、むしろ積極的に烏丸達から  
離れようと既にくるりと背を向けている。

「桃」

「あん？」

「お前は……いや、お前達は、何者だ？」

「別に。単なる通りすがりだ。じゃあな、おっさん！」

首だけを烏丸に向けて答えると、ひらひらと手を振ってモモタロ  
スはスタスタとその場から立ち去る。それに続くように、ウラタロ  
スとリュウタロスも車から離れた。

これ以上、この時間の人間と関わる事の無い様に……

海岸沿いの廃墟とも廃墟ともつかぬ「どこか」の中を、ジークは  
ただ無言で歩を進めていた。

後ろで、ハナが怒った様な顔をしているがそんな事を気にかけて  
いる様子は無い。

「やめろおおおおおつ！」

唐突に響き渡ったその声に、ハナ達は聞き覚えがあった。

確か、先程の店にいた……始、という名の青年の声。

慌ててその声のした方に向かい……そして、見てしまった。

相川始が、ジョーカーへと変貌する瞬間を。同時に、奇妙な形を

した黒い石板から、ゴキブリに似た人間大の黒い怪物が無数に現れるところも。

「何や、あれ……!」

思わずあげたキンタロスの声に気付いたらしく、その異形達は一斉にこちらを見る。

その光景に生理的な嫌悪感と生命の危機を覚え、ハナは思わず数歩後ずさる。

……しかし、それらが襲ってくる事はなく、ただ彼女達を見ているだけにとどまっている。

「これが、お前の望みか？」

ゆっくりとその異形達を見回しながら、ジークが静かな声でジョーカーに問いかけた。

まるで、何が起こったのかわっているかのように。

「……違う。俺は……こんな事を望んだんじゃない」

「だが、ダークローチはこの通り存在しているぞ？」

いつもと同じ高圧的な、それでいてどこか憐れんでいるかのような表情で、ジョーカーから視線を離さない。

仕草は優雅だが、どこかいつもの独裁的な雰囲気欠ける。

「……統制者が叶えるのは『アンデッドの望み』。『俺』の……『相川始』の望みじゃない」

「……お前は……忘れているのだな。自分が何者なのかを」

ジョーカーの言葉を聞いて、どこか悲しそうに呟くジーク。その言葉は、まるで他に……ジョーカー以外の何か別の正体があるかのように聞こえる。

その事に気付かないのか、ジョーカーは一瞬だけ視線を床に落とし……しかしすぐに顔を上げると、真っ直ぐにジークを見つめ、苦しげに声を吐き出した。

「俺は……ジョーカーだ」

「ふむ。お前がそう思うならばそれでも構わん」

「俺は、世界を滅ぼしたくない」

「……この世界を愛し、それ故に『奴』に縛られたか、アンデッドとして」

会話がかみ合っていない。だが、お互いにそんな事はどうでも良いのかもしれない。

それだけ言うと、ジークはくるりと踵を返す。それを好機と取ったのか、今まで黙って見ていた異形……ジークはダークローチと呼んでいた……が彼らに襲い掛からんとする。だが。

「頭が高い！」

ジークが怒鳴ると同時に、それらが途端に小さくなる。

「……戻るぞ、姫、お供その3。これ以上ここにいる事は好ましくない」

「あなた……」

何のつもりか、と聞こうとして、ハナは思わず言葉に詰まった。

……ジークが、今にも泣きそうに見えたから……

### その13：簡単にいかない結末

様々な世界を統治する、22の存在。

その中の1人が、この世界を統べている。

その中の数人が、この世界を欲している。

「どう言う事だよ……!？」

デンライナーに戻ってくるなり、モモタロスは叫ぶようにそう言った。

彼の視線の先には、以前見た時よりも更に大きく口を広げている

「2005年のトンネル」。

「橘を助けたら、あのトンネルは消えるんじゃないの!？」

「そんな事は言ってませんよ？　ただ、橘さんを助けなければ、トンネルに飲み込まれる、と言っただけです」

リュウタロスの抗議の声に、淡々と答えるオーナー。

「それってつまり、彼を助けなければ確実にあのトンネルの向こうに繋がったけど、助けたから繋がる可能性が少し減ったって事が。

僕とした事が、まんまとオーナーに釣られちゃったみたいだねえ」

よく考えれば、分かる事であったはずなのに。

言葉遊びが得意なウラタロスでさえ、オーナーの言葉を曲解していたのは、それだけオーナーの言葉が巧みだったのか、あるいはそんな簡単な事にも気付かぬ程、ウラタロスが焦っていたのか。

「侵食のスピードは格段に落ちましたけどねえ」

そうは言うが、彼の視線の先にあるトンネルの大きさは異常だ。

既にこの時間の半分近くまで侵食している。

そのトンネルを見ているだけで、嫌な感じがするのは何故なのか。「スピードが落ちたって……まだあのトンネル、広がっているんですか!？」

「おやハナ君、お帰りなさい。……ええ。広がっていますよ。少しずつ……少しずつ」

いつの間にか戻ってきたハナの問いかけに、オーナーの表情が曇る。

まるで、自分では止められない事に苛立っているかのよう。

「せやけど、あの向こうってホンマにどないなってるのやろうな？」

「おや？ キンタロス君。……見たいですか？」

興味本位で言ったキンタロスの言葉に、オーナーがずいといと詰め寄りながら返す。

「でも、行けねえだろ？ トンネルの向こうに行けるチケットなん

て……それこそ、神の路線でも使わねえ限り無理だろうが」

「……ありますよ、あの向こうに行くためのチケットなら」

「……え？」

ケツ、と顔を顰めながら言ったモモタロスの言葉に、思いもかけなかった返事を返され……言った本人とナオミ以外の声が綺麗に八モる。

普段はあまり驚かないジークですら、きよとんと目を見開いてオーナーの顔を凝視しているのだから、余程の事なのだろう。

「トンネルの向こうは、『異世界』に繋がってるんだって思ったんだけど……僕の勘違いだったのかな？」

「いいえ、違いますよ。ウラタロス君の言う通り、あのトンネルの向こうは違う時間、違う空間……言わば『異世界』とも呼べるべき場所。本来なら、あの向こうに行く事はできませんし、このチケットも存在しない物なのですが」

「異世界」という単語に、全員の顔が強張る。

そんな物が本当に存在するとは思っていなかった者もあれば、その存在に危険を感じている者もあるし、あるいは未知なる物への期待感を抱く者もいるようだ。

「そのチケットってえ、あの人が持ってきた物ですよ？」

「そう。彼女が持ってきた、正式なチケットです」

「彼女？」

ナオミとオーナーの会話の意味がよく分からず、ハナは不思議そうに口を挟む。「彼女」と呼ばれるような存在に、心当たりが全く無い。デンライナーの中は、基本的に女性人口が圧倒的に少ないのだ。

「ハナさん達が外で調べてくれている間に、お客さんが来たんです。すつごく綺麗な人でしたけど……あれ、結局誰だったんですか？」

「……デンライナーの製作者であり、元の所有者オーナーです。色々とお忙しいそう、私にデンライナーを預けてからは、滅多にいらっしやいません」

「ええ？ あの人、オーナーだったんですか？」

「フーか、おっさんが最初からこの列車のオーナーじゃなかったって方に驚きだな」

今まで考えてもみなかったが、オーナーとて人間である………多分。

生まれた時からデンライナーのオーナー、と言う訳でもないだろうし、この列車の昔のオーナーがいたとしても、何の不思議も無いのではあるが……

想像できない、と言うのが正直な感想ではあった。少なくとも目の前にいるオーナーの子供時代と言うのは、何一つ想像出来ない。最初から今みたいないな掴みどころのない存在だったように思える。

「……とにかく、チケットがあるからには、あの向こうに行く事もできます」

「異世界かあ……面白そうですねー」

人指し指を口元に当て、心底面白そうにナオミが言う。

だが、この場で楽しそうなのは彼女だけ。他の面々はあまり乗り気では無さそうな表情でオーナーの差し出すチケットを見つめていた。

特に、いつもなら最も乗り気になりそうなりユウタロスが黙っているのは……余程、「野上良太郎のいない世界」の話が怖かったか

らなのだろう。

「……あの向こうへ行つて、何が分かるってんだよ」

「それは私も分かりません。私もあの向こうに行った事がありませんからねえ。行った事があるのは、このチケットを持っていた彼女だけ、でしょう」

そう言つと、オーナーは小さく溜息を吐き……持っていた2枚のチケットを投げ、モモタロスが着ているジャケットのポケットへ放り込んだ。

ストンと吸い込まれたそれを取り出すと、日付以外には何の絵柄も書かれていない。書かれた日付は2005年1月23日と2008年4月18日。

その日付が、何を意味するかは分からない。

「それを使うかどうかは、君達に任せましょう」

「これ使つて……帰つて来れるのかよ？ この時間……つて言うか

『この世界』に」

「……さあ？」

ひょいと肩を竦めてそれだけ言つと、彼はひらひらと手を振つて食堂車を後にする。どうやら言葉通り、どうするかをモモタロスに一任したと言つ事が。

その後姿を見送り、最初に口を開いたのはウラタロス。彼は軽く苦笑を浮かべつつも、ほんとモモタロスの肩に手を置き、問いを放つた。

「……で？ どうする、先輩？」

「何で俺に言うんだよ」

「何言つとるんや。渡されたんはお前やで、桃の字。お前に任せるのが筋つてモンやろ……ぐ」

うん、と大きく1つ頷いたかと思いきや、そのまま腕を組んで眠るキントロス。そしてその脇では悠々と羽根を撒き散らすジークと、どこかつまらなそうにこちらを見るリュウタロスが、口々に無責任な事を言い放つ。

「好きにしる、お供その1」

「それ使って戻れなかったら、僕怒るよ？」

「……………だあああああつ！ お前ら好き勝手言いやがって！ こ  
うなったらごちゃごちゃ考えるのは止めだ！ 使ってやるうじゃね  
ーかよ、この訳わかんねえチケットを！」

周囲にプレッシャーをかけられた為か、それとも本当に考えるの  
を止めた<sup>や</sup>だけか。

とにかく、モモタロスは渡されたチケットのうち、2005年1  
月23日の方をパスケースに収め、運転室の方を向く。

それでも、不安はあった。

トンネルの向こうへ行っても、自分は「自分」のままではいられ  
るのだろうか、と。

「……………おい、ハナクソ女。お前に頼みたい事がある」

「……………何よ？」

ハナクソ女と呼ばれ、一瞬グーで殴ってやるうかとも思ったが…  
…普段聞かないモモタロスの真面目な声に、ハナはぐっと思ひ留ま  
る。

……………殴るのは、いつでもできるから、とりあえず今は話を聞こう  
としているだけなのかも知れないが。

「もし俺が…………俺達が、お前の知ってる『俺達』で無くなったら…

…その時は、デンライナーを『この世界』に戻せ」

「ちよっ……………！ ナオミちゃんに頼みなさいよ。私じゃデンバード  
に足が届かないし……………」

「良いか？ 良太郎が乗ってねえ今、特異点は……………『絶対に変わら  
ねえ』って言い切れるのは、お前だけだ。だから、頼む」

真剣な表情でそれだけ言うと、今度こそ本当に、モモタロスは運  
転室へと向かって行く。

恐らく……………他のイマジジン達も、モモタロスと同じ気持ちなのだろ  
う。各々が険しい表情で席に着いている。

自分が、自分じゃ無くなる

……それは、彼女が先程見た、相川始も、ある意味においてそうだったのではなからうか……

「……起きたか。面倒だな」

「JACARANDA」から連れて来た存在が目を覚ましたらしい。

動けないようにしてあるとは言え、移動中にジタバタされるのは非常に面倒かつ厄介である。

そんなイマジンの苛立ちなど知った事かと言わんばかりに、相手は自由の利かない体を大きく揺さぶり、何とかその腕から逃れようともがいている。

「おい、暴れるな。お前を連れて行かないと、契約が完了しないんだ」

「契約……?」

「そう。契約が完了すれば自由にしてやる。それまでじいっとしている……」

契約と言う単語が不可解なのか、不審そうに呟くその人物に対し、イマジンは軽く笑ってそう答えた。

マシンデンバードに跨り、モモタロスはパスケースをセットする。それと同時に、デンライナーの行き先も決まる。

……トンネルの向こうの、西暦2007年1月23日に。

それが確定した瞬間、デンライナーの前の空間にレールが敷設され、普段と変わらぬスピードで指定された場所へ向かう。

そこまでは順調だった。だが、トンネルに入ったその瞬間。

『PRISON』

唐突に、車内に電子音が響く。おまけにそれはチケットを入れたパスケースから聞こえたような気がしたが、気のせいだろうか。

ぎよつと目を見開いて驚きの表情を浮かべるモモタロスを嘲笑うかのように、デンライナー全体を乱気流にも似た風が覆う。

……風など起こるはずの無い、この「時間の中」で。

「何だ何だあ！？ 一体何が起こったって言うんだよ！」

その異常な事態に、思わず彼は声をあげる。

「ちよつと先輩！ 何に捕まったの！？」

「捕まったって、何の事だ！？ って言うか、入って来てんじゃねえよ亀公！ 気が散るっ！」

「そんな事言ってる場合じゃないって！ さっきの『プリズン』の意味、知らないの？」

「知るか！ 『プリン』なら知ってる！」

珍しく慌てた様子で入ってきたウラタロスに、振り返りもせず返すモモタロス。それもそのはず、彼は今、運転するのに忙しいのである。

急に現れた風に車体が煽られているのが、下手に気を抜けば脱線しないとも限らない。操縦桿を押さえていないと、風に持っていかれそうになっている。

……仮に持っていかれてしまったら、元の世界に戻る事すら危うくなる。それは避けたい。

「ああ、やっぱり。そうだよな、分つてたらそんなに落ち着いてないよね。って言うかプリンって……最近先輩の脳みそは、干物じゃなくてプリンが詰まってるんじゃないかって思えて仕方ないよ」

「そんな誉めるな。で？ その『ずんだプリン』ってのは何だ？

随分美味そうじゃねーか」

「誉めてないし、そもそも『プリズン』だから。ちなみに意味は、『牢獄』」

「へえ、『牢獄』。……って、何いいっ！」

事の重大さに気付き、思わずウラタロスの方を向きかけるが、デンライナーの状況を考えそれはやめる。

デンライナーを覆う風の膜のせいで、車体はがくがくと小刻みに

揺れ、それに併せて操縦桿もフラフラと左右に振れる。

操縦桿を押さえていないと、そのままトンネルの内壁に激突する恐れもある。

「くそ……！　まるでデンライナーが暴走した時みてーじゃねえか！　しかも『牢獄』だあ？　冗談じゃねえぞ！」

「方向転換とかできない？」

「無理だ！　ハンドル握ってトンネルにぶつからねえようにするの  
で精一杯だよ！」

少しでもハンドルを切ろうとすれば、周囲の風に煽られているせいか、強い力でハンドルを元の位置に戻される。そもそもトンネルの中で方向転換と言う器用な真似は難しい。

「……こうなったら、とことんまで付き合っしか無さそうだね」  
トンネルの出口を見据えながら、ウラタロスが諦めたように眩きを落とすのだった……

\*

「全てのアンデッドは封印した！　残っているのはジョーカー！  
君1人だ！」

降りしきる雨の中、天王路が殺された場所と似たような工場跡で、  
剣崎一真は怒鳴るようにそう叫ぶ。

その体は傷だらけで、押さえている右腕が、特に痛々しい。

相手は、相川始。

……いや、ジョーカーと呼ぶべきなのか。

瞬きを一切せず、その構えに人間らしい物は感じられない。

「……出来れば君とは戦いたくない！」

「戦う事ですか……俺とお前は語り合えない」

泣きそうな顔で放たれた言葉に対して返ってきたのは、あからさまな拒絶。そしてその言葉を放つと同時に、相川始の姿が変わった。何のカードを通じた気配も無いのに、相川始からカリスへと。そ

れを見て、剣崎もはや戦うしかないと悟ったのか……咆哮にも似た叫び声を上げ、ブレイドに変身しながら彼に立ち向かう。

それに対して、カリス……いや、「彼」は、「ジョーカー」と言う名のアンデッド」としてブレイドを迎え撃つ。

「どうした！？ その程度か！？ いくらお前が手加減しても、俺は……容赦はしない！」

その言葉通り、ジョーカーは情け容赦無く、反撃の暇も与えぬよう、幾度と無くブレイドを殴り飛ばす。

そうだ、こいつはアンデッドなんだ。倒さなければならぬ相手なんだ！

殴られた事で、「彼」の決意を理解したのか。今ようやく、ブレイドも……剣崎一真も決意した。

目の前にいる存在を、アンデッドとして「封印する」事を。

繰り出されたジョーカーの攻撃をかわすと、ブレイドは一旦距離をとり……ジョーカーに向かって勢い良く駆け出す。

ジョーカーも、それに呼応するようにブレイドとの距離を詰めるべく駆ける。

ブレイドもジョーカーも、武器を持っていない。互いの拳で、蹴り……相手を攻撃していた。

殴って、蹴って、そしてその度に空から降り注ぐ水と足元に溜まった水が跳ね上がり、彼らの視界を濡らしていく。

やがて、ブレイドが大きく飛び上がった。

ラウズカードを読み込んだ様子は無いのに、その足には彼の持つスペードの6……サンダーの力が宿っているように電光が奔っている。

……ブレイドのキックが、ジョーカーに極まる。

それは、ブレイドの渾身の一撃だったらしい。ジョーカーは一瞬だけその場に膝をつくが、再び立ち上がると、ブレイドを倒すべくよろよろと前へ進む。

「……………」

だが、ジョーカーがブレイドの側まで歩み寄るよりも先に。無言のまま、ブレイドはプロパーブランクを投げつけた。

ひゅん、と風を切り、カードは豪雨を切り裂くように飛んで……ジョーカーの胸の飾りへ突き立つと、光を放ち始める。

……それは、ジョーカー封印の瞬間。

「……天音ちゃん……」

カードに完全に封印される前に。

確かに、相川始がそう言ったように聞こえた。

そして剣崎一真もまた。

カードを受け取る事無く力尽き、足元に広がる水溜りの中へ、派手な音を立てて倒れこんだのである。

……全てのアンデッドを封印すると言う結果を以って、このバトルファイトは終焉を迎えた……

\*

「おい、これ……本当に『異世界』なのかよ？」

ブレイドとジョーカーの戦いを、デンライナーの中から見ていたモモタロスが、思わず呟く。

相変わらずデンライナーを風の膜が覆ってはいるが、外の様子は見ることができず、音もきちんと届く。

デンライナーから外に出る事だけではできないが、様子を知る分には問題ないようである。

「僕達も特に変わった様子は無いし……」

「心配損やったな」

ウラタロスとキンタロスも、拍子抜け、と言った風に外の様子を眺めている。

「アイツ……封印されちゃったね」

「ジョーカーは、世界を滅ぼす。それを防ぐには、封印するしかないもの」

リュウタロスの言葉を、ハナが冷静に返した。

「ダークローチの群れを見た彼女にとって、ジョーカーは危険な存在であると言う認識がある。」

剣崎の行動は正しい。そう思っていた。

「だが、やはり異世界だ。ジョーカーも、そしてあの戦士も。元の世界の紛い物に過ぎん」

他の面々が観光気分にいる中、ジークだけは心底不愉快そうな表情で外の様子を眺めていた……

## その14：突きつけられた現実

異世界における、真の終焉。

本来の世界における、新の終焉。

隠れた敵は、欺瞞に満ちて……

「あかん。ピクリとも動かん」

運転席から出てきたキンタロスが、むうと呻きながらぼやく。

未だにデンライナーを風が覆っているため、外に出る事が出来ないのは仕方無いとしても、デンライナーその物が全く動かなくなってしまったのだ。

力自慢のキンタロスですら、デンバードのハンドルを動かせなかったと言っただから、相当な物である。

「おい熊公、パスは抜いてみたか？」

「……何言つとんのや桃の字。パス抜いたら動かんやろ」

「何か引つかかる事でもあるの？」

軽く眉を顰め、訝しげに問うキンタロスとは対照的に、ハナは神妙な面持ちでモモタロスの顔を見やった。

その視線を受けてなのか、見つめられている方はカリカリと軽く自身の頬を掻きつつ、記憶を辿るかのように言葉を吐き出す。

「いや、この風が出てくる直前に、『プリズン』って聞こえただろ？」

「うん。そしたら亀ちゃんが慌ててモモタロスの所に行ったんだよね？」

「あの音な、パスの中から聞こえた気がしてよお……」

モモタロスが言い終わるか否かの内に、ハナが運転席に向かって駆け出す。もしモモタロスの言った通りなら、自分達を覆っているこの風は、チケットのせいで起こった事になる。

チケットのせいで起こったパニック……それはかつて、カイが仕掛けた「デンライナーの暴走」と同じではないのか。

……あの時は、駅その物とも言える「キングライナー」のお陰で時間の中を彷徨わずに済んだが、今回はあの時とは状況が違う。あの時は「暴走」だったが、今回は「停止」だし、何より自分達がいるのは「異世界」……キングライナーの助けは期待できない。

「……っ！ これって……」

デンバードに差し込まれていたパスケースを抜き取り……ハナは驚いたような声を上げた。

「どう、ハナさん？」

「……チケットが変わってる。……ううん。チケットじゃなくなってる」

モモタロスがセットしていたのは、日付だけ書かれたデンライナーのチケット。

そのはずなのに……今、パスケースの中にあるのは「Common Blank」と書かれたカードであった。それを見て、ウラタロスの顔から血の気が引く。

そのカードに、見覚えがあつた。門を縛る鎖の色と書かれた文字こそ違い、そのカードは橘朔也に渡したカードと同じ物。

「このカード、アンデッドを封印するための物だよ」

「そう言えば……でも、何でそんな物がここにあるのよ！？ そもそも偽造チケットじゃデンライナーは動かないはずよね？」

「何でここにあるのかとか、何で動いたのかとか、流石にそれは分からないけど……どうやら元オーナーって人、オーナーにも内緒で何か企んでいるみたいだねえ」

そもそも、そのチケット……いや、カードを渡したのは元のオーナーだと言っていた。その人物が何を考えているのかは知らないが、このままではどうしようもない。

おまけにデンライナーは今、「時間の中」ではなく「現実空間」に存在している。人気がないとは言え、誰に見つかるとも限らない

し、今まで気付かれていない事自体が不思議なくらいだ。

「僕、踊らされるのは好きじゃないんだけどね」

苦笑気味に呟くと、ウラタロスはハナと共に食堂車へ戻り、モモタロスの前で止まる。

「……何だよ、亀」

「もう一枚のチケットを使わないと先に進めないみたいだよ、先輩」  
そう言いながら、彼は手に持っていたパスケースを見せる。

見せられた方はその中にあるカードを見て顔を顰めたが、唯一ジークだけはふむ、と感心したように唸ると、そのカードをパスケースから取り出して机に乗せた。

「ここにはもう、見るべき物は無い。だからこれ以上は動かないのだろっ」

「それ、どう言う意味よ？」

「そのままの意味だよ、姫」

意味深にそう言うと、ジークはひらりとマフラーを翻し、食堂車の出入り口へと歩を進める。

「ねえねえ鳥さん、どこ行くの？」

「散歩だ。小坊主、お前も来るか？」

「外に出られないの？」

「この列車の中でも、散歩は充分に出来る」

無邪気に問うリユウタロスに、無意味に彼らを見下すようにしながら言葉を返す。言われた方はそんな態度を気に留めず、一瞬だけ考えたが……特に興味は無いらしく、つまらなそうに行かないと答えた。

「そうか。では、私1人で行ってこよう。この列車はお前達の好きにするが良い」

それだけ言うと、ジークは食堂車から姿を消す。

「……とにかく、次のチケットを使うしかねえ、か。こーなったら自棄だ！ やってやるうじゃねえか！」

ジークのマイペースぶりに当てられたのか、言葉通り自棄気味に

そう言うと、モモタロスは持っていたもう一枚のチケット……2008年4月18日の物をパスにセットし、再び運転席へと向かって行った。

「隠れていないで、出てきたらどうだ？ 『皇帝の下僕』よ」

デンライナー・ゴウカの4両目。バーディーミサイルと呼ばれる、対ギガンデス武器の格納されている車両。

普段なら誰も入る事のない場所だけに、電灯は点いていない。明かりと言えば窓から入る光のみで、とても明るいとは言えないそこへ足を踏み入れた途端、ジークはその薄暗い空間に向かって呼びかけた。

彼の呼びかけに応じるように、薄闇の中から女が姿を現す。彼女はデンライナーの元オーナー。トンネルの向こうへ続くチケットをオーナーに渡した張本人だ。

彼女は深々とジークに一礼すると、どこか皮肉気な笑みを浮かべて言葉を紡ぎだす。

「……よく、分かったな」

「そなたの気配は、特徴があるからな。……この列車を作り、我らをこの世界に導いたのもそなたであろう？」

「そうだな。……導いたと言うには、多少強引な手段を用いた訳だが」

ジークの問いに短く答え、彼女はするりと窓の外に視線を向ける。デンライナーが、今いる世界……「トンネルの向こう」の2008年4月に向かって実感するためか。

「偽りの世界など見せて、どうするつもりなのだ？」

「……確かに、この世界は偽りだ。だが『この世界』で起こる事は、『我々の世界』でも起こった事……そして、起こる事でもある。それはあなたもご存知だろうか？」

「……ふむ。ここでの出来事は、遙か過去であり、遠い未来でもあ

ると。そう言いたいのだな」

「その通りだ。現に何度か前の……そして、何度か後の歴史につなげようとするトンネルも、数多く存在している」

窓の外を見たままジークの言葉に返し、彼女は不愉快と言わんばかりの表情を浮かべて見えない何かを睨みつける。

彼女はどうかやら知っているらしい。元の世界で、トンネルが増えてきているその理由を。そして、それから守るには、自分だけではどうしようも無いと言っ事を。

「そなたの仕事は終わったのか？」

「殆ど。あとはモノリスを奴から……『月』と呼ばれし存在から奪い返すのみ」

「……その為に、そなたもこの列車に乗ったのだな。ご苦労」

「お褒めに預かり光栄だ。ついでに手伝って頂けると涙が出る程嬉しいのだが」

ジークのやる気の無さそうな声に、彼女は無表情のまま、皮肉気に言葉を返す。だが、聞いているのかいないのか、ジークは楽しそうな笑みを浮かべ……

「私は、私の気の赴くままに動く」

「……知っている。言ってみただけだ」

彼女の言葉と同時に、デンライナーの速度が落ちる。どうやら目的の時間がすぐそこまで迫っているらしい。

「さあ、そろそろ開演時間だ。偽りの世界で演じられる『悲劇』の、な……」

「その悲劇とやらの主人公は、剣崎一真か？」

「『剣崎一真』と『相川始』だ。……少なくとも、私の知る歴史通りならば」

瞑目したその表情は、嘆きかそれとも悲しみか。どちらとも取れそうदैいて、どちらにも取れそうに無い声でそう言うと、彼女はゆっくりとジークに向かって再び一礼をし……

「もう、食堂車に戻られてはいいかがか？ いつまでもこのような所

にいては、怪しまれるぞ」

「それもそうだな。では、戻って見物するでしょう。この茶番劇をくるりと踵を返し、ジークはさっさと食堂車の方へ戻っていく。それを見届けて……彼女は、また窓の外に目を向ける。

「……『永い間生きているのは退屈』……か」

「こことは別の世界で、誰かが言っていた言葉。

「……『あいつ』も……そう思ったのだろうか？」

視線の先にいる、「この世界の」剣崎一真を眺めながら、ぼつんと呟く。

仄暗い闇と真紅の兵器だけが、今の彼女の問いを聞いていた。

がくん、とデンライナーが止まる。

相変わらず、デンライナーを包む風の膜は消えないし、現実空間に停車しているにも関わらず、誰もこちらに気付いている様子は無い。い。

近くを通る者は皆、風が強いとぼやいて上手い具合にデンライナーを避けて通っていた。

「どうやら、次の時間に着いたようだ。丁度良い具合に今回の主人公の側でもある」

いつの間に戻ってきたのか、食堂車の隅でぶどうジュースをワイニンググラスに注ぎつつ、ジークがいつもの口調で言い放つ。車内散歩でだいぶ気が紛れたのか、先程見せた不快な色は無くなっていた。

今回の主人公？

ジークの言葉を不審に思い、全員がつかられる様に窓の外を見て……驚いたように息を呑んだ。

すぐ目の前に、ジョーカーを封じた者……剣崎一真がいたのだから。

\*

「あーあ……皆変わっちゃったよなあ。橘さんは行方がわからないし」

寂しさと侘しさの混ざった声で、剣崎は目の前にいる男……白井虎太郎に向かってそう言った。

全てのアンデッドを封印してから、今年で4年目になる。

その間に、剣崎はゴミの清掃員に、虎太郎はベストセラー作家になっていた。睦月は就職の真っ最中で、広瀬に至っては近々結婚すると言っ。

今度、栗原天音の誕生日パーティーをやる……という名目で、虎太郎が知人達に声をかけたのだが……

橘は、カテゴリーキング封印以降、その行方をくらませており、生死不明。

睦月は、自分が普通の大学生に変わったと……だからこれ以上、関わるなと言っていた。

広瀬は、普通の女の子に戻って、今度は可愛いお嫁さんになるのだと、嬉しそうにはしゃいでいた。

……それが、剣崎には寂しかった。まるで、知らない人と話をしているみたいで。

「確かにもう俺達はライダーじゃない。ベルトも、カードも烏丸所長に返して、ライダーが必要無くなって、良かったとは思うけどさ。たまには、昔を思い出したって良いと思う」

「うん」

「今の仕事嫌いじゃないし、プライドを持ってやってるんだけど、時々思うんだよね。仮面ライダーとして、アンデッドと戦っていた頃が、一番幸せだったかなあ……って」

心底懐かしそうに、どこか遠くを見ながら言う剣崎。

確かに、あの頃は平和とは言えなかった。その点では今の方が良いに決まっている。

それでも、あの頃は分かり合える仲間がいた。自分が、生きてい

ると実感できた。

「お帰り」と言ってくれる人がいたのは、家族を幼い時に亡くした剣崎にとつて本当に幸せだった。

「うん、わかるよ」

「本当にわかんのかよ？」

「実は、僕もそうなんだ。……急に本が売れて、皆にちやほやされてさ。……悪い気分じゃないんだけど、何か……本当の自分じゃないような気がするんだよねえ……」

「そっか……」

ベストセラー作家となつた虎太郎もまた、剣崎と同じ寂しさを抱えていた。

自分の本が売れて、夢にまで見たベストセラー作家になつて、そして思い切り贅沢の出来る身分になれたのは、ありがたい話である。

お金は欲しいし名誉も欲しい。おいしい物だつて食べたいし豪華な服だつて着たいし、女の子に騒がれるのも満更じゃない。

だが、近付いてくる人間は欲にまみれ、自分もまた欲に塗れてしまっている様な気になっていた。

そういう点では、アンデッドと戦う剣崎をサポート……もとい、取材していた頃の方は本当に楽しかった。

そんな感傷に浸りかけたその時だった。唐突に、悲鳴が聞こえたのは。

何事かと思つて反射的に見やつたその視線の先にいたのは……人を襲っている、アンデッドの姿だった。

「どういう事さ！？ 全部封印したんだろ！？」

「ああ。しかもあれはカテゴリーエース。……俺は奴を封印したカードを使って、ブレイドに変身していたんだ！」

言い終わるかどうかのうちに、剣崎はカテゴリーエース……ピートルアンデッドに向かって駆け出す。

勝てる算段がある訳ではない。ただ、無意識の内に体が反応していた。

よく見れば、そこにいるアンデッドはそれだけではなかった。

ローカスト、カプリコーン、モス、ゼブラ、バッファロー……見ただけでもそれだけのアンデッドが、そこにいる人々を無差別に襲っている。

手近にあつた木の棒を振るい、剣崎はビートルアンデッドに向かってそれを振り降ろす。流石に甲虫の祖と言うべき存在。硬い感触を知覚した直後、ジンと痺れるような感覚が彼の手を襲う。

舌打ちしたい気分には駆られたが、そんな暇も与えてくれず、相手は鬱陶しそうに剣崎の体を払い、体は大きく吹き飛ばされるだけ。

「一体何がどうなってるのさ!？」

「分からない! 何が何だか!」

助け起こしに来た虎太郎の問いにそう答え、剣崎は未だ暴れ続けるアンデッド達を睨みつける。

そして……その時だった。3台のバイクがこちらに向かってきたのは。

近くにバイクを止めると、逃げ惑う人々の流れに逆らい、アンデッドに向かって歩き出す3人の若者。いずれも10代後半か20代前半。1人は誠実そうな好青年、1人は生意気そうな青年、そしてもう1人は気の強そうな女性。

一見するとサークル仲間か何かのように見える3人組だが、その手にはライダーのバックルと思しき物がある。彼らはそれに何かのカードをセットすると、アンデッドの方に何の迷いも無く歩み寄っていく。

「あ、あれは!？」

虎太郎が、不思議そうにそう呟いた瞬間。3人はそのバックルを腰に当て、ベルトとして自分に装着されるのを待ち……

『変身』

『OPEN UP』

バックルを開き、エネルギーの壁が展開。それはやって来た3人を見た事の無いライダーへと変身させた。

「仮面ライダー!？」

3人の姿はほぼ同じ。マスクの横の部分に「A」の文字を連想させる飾りが大きく施されており、胸の辺りにも同じような飾りがある。

彼らを見分けるには、単純にアーマーの色で見た方が良さそうだが、誠実そうな青年は黄色、生意気そうな青年は緑、そして女性は赤。唯一黄色のアーマーの戦士だけは、リーダー格なのか仮面の正面にも大きく「A」が施されている。

瞬時に相手との距離を測ったのか、黄の戦士はビートル、ローカスト、そしてカプリコーンをやや細身の剣で、緑の戦士はモール、ゼブラ、そしてプラントを槍で、そして赤の戦士はイーグル、モス、トリロバイトをボウガンでそれぞれ応戦した。

だが、アンデッド達は分断されるのは得策ではないと判断したらしい。ちらりとそれぞれを見やると、示し合わせでもしていたかのように1箇所へ集まってゆく。

それを逃がすまいと、3人のライダー達も、アンデッド達と入り乱れるようにしながら戦う。混戦になってきたのを見て不利と判じたのか、ビートルアンデッドはライダー達に見つからぬよう、混乱に乗じてそつとその場を離れていく。

そしてすぐに、戦局はライダー達へと流れていった。長期戦は不利と判断したらしく、緑の戦士は持っていた槍に何かのカードを読み込ませ、ローカストアンデッドに向かって突き進む。

『MIGHTY』

電子音がそのカードの名を告げ、エネルギーのチャージされた一撃が、ローカストアンデッドの腹部に命中。倒れたのを見て、緑の戦士はそれを封印し、満足そうに頷き、再び混戦の中へとその身を投じる。

その頃、赤い戦士はやはりマイティのカードを使ってトリロバイトアンデッドを、黄の戦士はゼブラとモスの2体を、それぞれ封印する。

一方、緑の戦士と入れ違つうようにして剣崎と虎太郎がそこへ駆けつけ……剣崎は自分の足元に、1枚のラウズカードが落ちているのを見つけて、拾い上げる。恐らく緑の戦士がマイティのカードを取り出す時に落としたのだろう。

「これは……」

剣崎が拾ったカードは、かつて自分も使っていた物。スペードの3である「ライオンビート」のカードだった。

\*

「どう言う事!？」

あらかた封印され、そして封印を逃れたアンデッドがその場から退却したのを見届けるや否や、ハナは半ば叫ぶようにして問う。だが、その問いに答えを返す者はいない。

「この世界では、アンデッドは、2005年の1月に封印されたはずじゃなかったの?」

「ハナさんが気になるのは、それだけ?」

「どう言う意味よ、ウラ?」

「あの3人……」

変身を解き、それぞれの健闘を称えながら自分達の乗ってきたバイクへと戻ろうとする3人のライダーを半ば観察するように見つ、ウラタロスは言葉を続けた。

「……ケルベロスのカードで、変身してたよね?」

言われてみれば、確かに。彼らが変身した時に現れたエネルギーの模様は、かつて天王路が作った「三つ首の獣」……ケルベロスの絵柄その物だった。

では、彼らは天王路の子飼いの者達だったのだろうか。それともこの世界は、元の世界とは何か異なるのだろうか。

「ちよつと待つてくれ! あんた達は一体……!」

思考の海に沈みそうになるハナを引き戻すのは、こちらと同じく

不思議に思ったらしい剣崎の声。

その場を立ち去ろうとする彼らを引き止め、何者なんだ、とでも言おうとしたのだろうか…… 剣崎のその言葉は、女の放った1発の平手打ちで遮られた。

「何考えてるのよ。素人のくせにアンデッドと戦おうとするなんて馬鹿じゃないのと言わんばかりの声と表情で、女はそう言って踵を返す。まるで、剣崎の存在が邪魔であるかのように。」

しかし、その言葉から察するに、剣崎がかつてブレイドという名の仮面ライダーであった事は分かっていないようだ。

「……ちよつと待てよ……！」

殴られたと言う事実か、それともこちらを見下しきった声にか。

剣崎はほんの僅かにではあるが苛立ったような声で呼び止めると、彼女に掴みかからんばかりの勢いで追い縋る。だが、それを青年の1人……黄の戦士に変身していた方に逆に胸座むなぐらを掴まれ、動きを封じられた。

……その気迫に、剣崎は一瞬気圧され……それを見て取ったのか、青年もバイクの方に向かって歩き出した。

それに乗って走り去る彼らを眺め…… 虎太郎は何かを思いついたように、そして剣崎を気遣いながらも、去っていく3人の後を追っていく。

「……僕、あいつら嫌い」

小さくなっていく3人の背中を睨みつつ、リュウタロスがそう宣言する。眉間に皺を寄せ、外に出れば無条件に攻撃しそうな雰囲気醸し出している。

「何や。いきなり打ったからか？」

「熊公。だったら真っ先に嫌われんのはハナクソ女……って、ごはあつ」

「……先輩、ホント良い加減学習しようよ」

余計な事を言ったせいで、顔面にハナの裏拳を喰らって倒れたモモタロスを、呆れた表情で見下ろすウラタロス。そんな小脇で展開

されるベタなどつき漫才には興味ないのか、リュウタロスは更にキ  
ユウと眉根を寄せ……

「それもあるけど……それ以上にあいつら、何かすつごく嫌な感じ  
がした」

「嫌な感じ？」

あからさまに不機嫌そうなりリュウタロスを宥める為なのか、コー  
ヒーを出したナオミが鸚鵡返しに言葉を返す。

言葉では答えず、ただ黙って首を縦に振るリュウタロス。彼は本  
質的に、ああ言った存在が嫌いらしい。……相手を見下すように見  
るしか出来ない存在が。

だが、彼が感じているのはそれだけなのだろうか。彼の言う「嫌  
な感じ」とは、もっと別の何かでは……と、思っても答えなど出な  
い。ちらりと外を見ると、そこには剣崎一真が1人取り残されてい  
るだけ。

「どうして仮面ライダーが？ 何でアンデッドが？ 何がどうなっ  
てんだよ、一体……」

訳も分から無いと言ったように剣崎が呟く。そして、混乱してい  
るのは、デンライナーの乗客とて、同じ事だった……

その15：つまらない、全てが

この歴史では、世界はもう1度アンデッドの脅威にさらされる。それは、ある1人の存在のエゴのために。

……何度歴史を繰り返しても、結局はこの終焉に行き着くのか。

何とも言えぬ空気が満ち始めた刹那。唐突にデンライナーが動き出した。

全員が食堂車にいる以上、運転席には誰もいないはず。だから、動くはずなど無いと言っのに。

「まさか……また暴走ですか!？」

デンライナーが暴走した時の事を思い出したのか、ナオミが悲鳴にも似た声をあげる。

「いや。次のシーンに移るのだろう。我らに見せるべきと判断したシーンに」

「判断したって……誰がや？」

「決まっているだろう？ チケットの渡し主だ」

さも当然と言わんばかりに、ジークはキンタロスの問いに対して楽しそうに返した。

「前から聞こうと思ってたんだがな……お前、何を知ってやがる？」

ようやく復活したのか、ハナに殴られた顔をさすりながら起き上がるモモタロスが、ドスのきいた声で問う。が、そんな脅しにも似た彼の声など歯牙にもかけぬ様子で、ジークは楽しそうな笑みを浮かべるだけ。

そんな態度のジークに何を聞いても無駄であると分かっているのか、問うた方はちいと小さく舌打ちをすると、近くの席にどすんと腰を下ろした。

デンライナーが勝手に動いている以上、マシンデンバードのコン

トロールも利かないだろう。

それは、この世界に最初に入った時……トンネルの中で、風がデ  
ンライナーを覆った時に、嫌と言うほど実感した。

「一体何考えてるんだろうね、そのオーナーだった人って」

画用紙に絵を描きながら、リュウタロスが不思議そうに呟く。

「僕達をデンライナーに閉じ込めて、自分の都合で電車を動かして、  
よく分からない物見せてさ。アンデッドが解放されたからって、僕  
達が何かできる訳じゃ無いのにな」

言いながら、描き終わったらしい絵を周囲に見せる。

そこに描かれているのは、多数のアンデッドと思しき異形達と、  
それと戦うブレイド。そしてそれを電車の中から眺める自分達の姿。  
そこに先程の「仮面ライダー」がいないのは、やはり彼らに嫌悪  
感を抱いているからか……

「今度の舞台はここ、なんか？」

ゆっくりと止まったデンライナーの外にあつたのは……「J A C  
A R A N D A」と書かれた看板を掲げる、ログハウス風の店だった。

\*

もやもやとした感情を抱いたまま、剣崎と虎太郎は「J A C A R  
A N D A」で天音の誕生日パーティー用の飾り付けをしていた。

正確には、飾り付けをしているのは虎太郎だけで、剣崎はぼんや  
りとドアの前で外を見ているだけだったが。

「それで、どう？ 天音ちゃん。しばらく会ってないからなあ……  
もうお年頃でしょ？」

「……………まあ」

「どうしたの？」

何とも言えぬ表情で言葉を濁す姉に、不信感を抱いたのか、飾り  
付けていた手を止めると虎太郎は心配そうに振り返って問いかける。  
「それがね……最近ちょっと、あの子おかしいの」

目を伏せ、どこか寂しそうに……栗原遥香は弟の問いに短く返す。何がどうおかしいと、はつきりとは言えないらしい。ありがちな反抗期と言う可能性も考えられなくは無いが、彼女の雰囲気から察するにそんな可愛いものでは無いのかもしれない。

それに、何を返せば分からなかったのだろう。虎太郎は休めていた手を再び動かし始め……

カラン、とドアベルが鳴る。そしてそこから入ってきたのは……スーツを着た、上城睦月だった。

「睦月……来てくれたのか」

「すみません、剣崎さん。この間はちよつと言い過ぎました」

嬉しそうな剣崎に、心底すまなそうに睦月が返す。

この間、とは誘われた時の事を言っているのだろう。

「俺、仮面ライダーだった頃の思い出が強すぎて、なかなか社会復帰できなくて……それで何とか忘れようとして……」

「仮面ライダーである事」は、「尋常ならざる力を得る事」である。そしてその力は諸刃の剣。

使えばどの様な敵も倒せるが、同時にその力に取り込まれ、溺れ、そして堕ちて行く。……気がついた時には、元に戻る事が難しい程に。

睦月は戻る事が出来た。だがそれでも、4年経とうとしている今でもその記憶に苛まれ続けている。

忘れたいと願うが故に、剣崎達が目の前に現れた時、また「かつての自分」に戻る事を恐れた。だから、やってきた時は突き放した。しかしもう、アンデッドはいない。自分があの力に……仮面ライダーの力に振り回される事は無い。

かつて共に戦った仲間と、昔を懐かしむのも良いかもしれない。そう、あれはもう「過去」の出来事……

そう思っていた睦月に、剣崎は非情とも取れる言葉をかける。

「睦月。もし……まだ戦いが終わってなかったら……どうする？」

俺達の他に、仮面ライダーが、いたら」

「どう言う意味ですか、それ？」

きょとんと目を見開き、睦月はじつと剣崎を見つめる。彼の言った意味が、純粹に分からなかった。だが、おそらくは言葉通りの意味なのだろう。

とは言え、アンデッドは剣崎が封印したジョーカーが最後のはず。それで戦いは終わったはずではなかったのか。

瞬時に様々な思考が巡る。だが直後、剣崎の表情が険しい物へと変化した。

不思議に思うと同時にドアベルが鳴り、睦月の後ろから3人の若者達が店内に入ってくるのが視界の端に映った。

「……どう言う事だ？ 何でお前達が！？」

「僕が招待したんだ。昔のライダーと、今のライダー。やっぱり仲良くした方が良いじゃない？ それに、皆で対談でもやってもらおうと、新しい本のネタになるんだよねー」

「ちよつと待って下さいよ、今のライダーって……？」

視線を剣崎と見知らぬ3人との間に動かしながら、虎太郎の放った言葉にオロオロする睦月。だが、剣崎と3人の間に流れるギスギスとした空気は感じ取れた。どう考えても、そしてどう見ても剣崎と目の前の3人は友好的とは言えない。

「白井さんから聞きましたよ。まさか貴方がブレイドだったなんてお会いできて光栄です」

たれ目気味の、誠実そうな青年が言う。だがその声音は、言葉をそのまま受け取れるような色合いが見えない。

恐らくは皮肉交じりの言葉なのだろう。

「しっかし想像してたのとは全然違うよな」

「……なんだと！」

生意気そうな青年の言葉に、剣崎が苛立った様に声をかける。こちらは明らかに剣崎に対して敵意を剥き出しにしている。

「ほーんと。なーんか頼りない」

そして女は、あからさまに見下した風に言う。

初めて出会った睦月でさえ、彼らが自分達に対して良い印象を抱いていない事が分かる。いや、もっと言えば、彼らは完全に「過去のライダー」である自分達を見下している。

「お前らいい加減にしろよ!? 俺達は先輩だぞ。もっと尊敬しろ、尊敬」

「はいはい」

怒って隙が出来たのを見て、女が剣崎のズボンのポケットからライオンビートのカードを抜き取り、それをひらひらと剣崎の目の前で見せびらかす。

「残念ですが剣崎さん、我々は忙しいんだ。今日もこのカードを返しにもらいに來ただけで。尊敬はしてますけど、所詮、貴方方は過去の人だ」

「そう言う事。じゃあねえ」

本当にカードの回収だけが目的だったのだろう。彼らはあつさりと言を返すと、時間の無駄と言わんばかりに店の外へと出て行く。

「ふざけんな! 色々と話したい事があるんだ!」

苛々した声でそう言うと、剣崎はおろおろと見つめる虎太郎と、慥然とした表情で3人の後姿を見つめる睦月を引き連れ、彼らの後を追う。

…… 1人残された遥香だけが、娘の誕生日祝いに起こった最初の波乱に、小さく溜息を吐いた。

まさか、これが最大の波乱の幕開けになるなど…… 予想もせず

「ここが奴らの……」

3人が入っていった建物を見上げつつ、剣崎が小さく咳きを落とす。

建物の基本色は白。都会から少し離れた所に相応しく、高さはあまり高くない。採光の関係からか、ガラス張りの部分が多いが、それなりにおしゃれである。

「ようこそ先輩達。紹介しますよ。俺達のチーフを」

「チーフ……？」

剣崎達が彼らの後を追ってきたのは分かっていたらしく、3人が横1列になって剣崎達と対峙した。口の端に、奇妙な笑みを浮かべながら。その3人の後を訝りながらもついて行く剣崎達。

彼らのチーフが何者なのかは知らないが、おそらくはBOARDの関係者だった人物だろう。そうでなければライダーシステムを新規に作れるはずなど無い。では、その人物は一体……？

やがて、半ば緊張の面持ちで歩く剣崎達を出迎えるかのように、1人の男がこちらに向かって歩いてくる。黒いスーツに、表情を隠すかのような黒いサングラス。だが、そのシルエットは間違いなく……

「……………橘さん……………」

カテゴリーキング封印以降、行方不明になっていた橘朔也その人だった。

「一体どう言う事なんです！？ 何で橘さんが……………！？」

信じられないと言いたげに問う剣崎には答えず、するりと建物の中へ入ると、橘は抑揚の無い声で事の次第を説明し始める。

「53体全てのアンデッドを封印し、我々のライダーとしての仕事は終わった。いや、終わったはずだった」

「『はずだった』……………？」

「アンデッドが1体残っていたんだ。もう1体のジョーカーがな」  
「始の他に、ジョーカーがもう1体！？」

睦月の問いに間髪入れず、橘は事も無げにそう答える。

予想していなかった事実を突きつけられ、剣崎はうろたえ、思わず声が上がってしまう。声だけでは無い。視線も同じようにうろたえると周囲を彷徨い、続けたい言葉を探している。

「そして、私と烏丸所長が全てのカードを永遠に封印しようとした、あの日」

橘の話によると、その日、彼と烏丸は襲撃を受けたと言う。

……まるで、彼らが来る事が分かっていたかのように待ち構えていた、「白いジョーカー」に。

「全てのアンデッドを封印した」と思い込んでいた2人にとってそれは予想外の事で……全ては、その「白いジョーカー」の思惑通りに事が運んでしまった。

「烏丸所長が命を落とす、53枚のカードの内、半数以上が再び解放されてしまった」

「そんな……そんな、何で言ってくれなかったんですか、橘さん！？」

「無駄だ。ブレイドとレンゲルに変身するために必要なカテゴリーEースも解き放たれてしまったんだ。君達はもう、変身する事はできない」

淡々と突きつけられる事実。

確かに、剣崎はビートルアンデッドが解放された事をその目で確認している。その力を使って変身していたのだから、変身する事が適わない事も分かっている。だが、いくら変身できないとはいえ、サポートに回る事くらいはできた。かつての仲間なのだから、言うて貰えば、いくらでも力を貸した。

それなのに……言ってくれなかった事が、剣崎には寂しかった。

「つて事で、今は私達が仮面ライダーって訳」

「改めて紹介しよう。志村純」

「誠実そうな青年が、小さく会釈。」

「禍木慎」

「生意気そうな方の青年が、半歩前に出る。」

「三輪夏美君だ」

「女が、皮肉気な笑みを浮かべ……」

「よろしく。そしてサヨナラ」

「よせよ。お年寄りには労わるもんだろ？」

それが却って剣崎の神経を逆なですると分かっているのか……高慢に言い放つ夏美に対し、志村は真面目な顔で彼女を諷める。

「……誰が年寄りだ。いい加減にしるよ」

「いい加減にするのはそつちだろうが。いつまで先輩面してんだ、お前」

剣崎の怒りの言葉に、彼らの存在自体が気に喰わないらしい禍木が突っかかる。

「……図に乗るなよ？」

「大変だ剣崎君！」

少し前にかかってきた電話に出ていた虎太郎が、慌てたように声をかけた。

今のライダー達との間にある、ぎすぎすした空気を感じてはいるが、彼にとつてはそれ以上に大変な事が起きたらしい。

「今忙しいんだ、邪魔すんな！」

「天音ちゃんが警察に捕まっただって！」

「そんな事……」

今はどうだって良い、そう言おうとしてもう一度虎太郎の言葉を考えた時……剣崎は、その意味をようやく理解した。

「……何だって……!？」

\*

「天音ちゃんって……あの店の娘さん、よね？」

「JACARANDA」の店主が、先程それらしい事を言っていた。

元の世界の西暦2005年1月では、今のハナと同年くらいだったから……この時間では中学2年生と言ったところだろうか。

あの時見た感じでは、素直な、感じの良い女の子だと思ったのだが……

「そつみいだねえ。僕達は会った事が無いから良く分からないけど」

元の世界で出会った事のあるハナ達にすれば意外なのかも知れない

いが、面識の無いウラタロス達からすれば、「天音」と言う少女が警察に捕まった事など良く分からないし、極端に言えばどうでも良い。

「……この世界じゃあ、烏丸のおっさんは死んじまつたんだな……」  
「橘も、何か変わっちゃったし。……違う世界だからかな」

どこと無く寂しそうに呟くモモタロスとリュウタロス。  
救いがあるとするならば、今、自分達がいるこの場所は、異世界であると言う事。元の世界とは何かが異なっていると言う可能性は非常に大きい。

そこに思い当たった時、ふとある疑問がウラタロスの脳裏をかすめた。

……何故、元のオーナーとやらは最初から「この時間」……この世界の2008年4月18日に自分達を連れてこなかったのだろうか。

何も、剣崎がジョーカーを封印する瞬間……2005年1月25日を見せなくても良かったのではないか。

勿論、それを見たが故に、1度は「全てのアンデッドが封印された」と言うことを知る事が出来たのだが……

だが、それを知らせるためにだけにチケットを用意するとは思えない。

相手の意図が読めない、分からない。そう言う、ウラタロスにもある程度の答えが出せない事が起きている場合、往々にして厄介事に発展する。

「……ちよつと、嫌な予感」

苦笑気味に小さく呟き……再び彼は視線を窓の外に向ける。

……動き出したデンライナーの向かう先を……ひいては、自分達をこのような状況に置いた人物の意図を見極めるために。

## その16：瓦解するキモチ

「月の子」は、この世界の事を気付くだろうか。

「愚か者の欠片」は、この世界を見限ったのだろうか。

「皇帝の愛娘」は、この世界の真実を知るのだろうか。

天音が捕まった理由は窃盗罪。とある百貨店で、万引きを働いたと言っ。

初犯と言っ事もあり、今回は説諭のみであっさりと釈放されたが、警察署から出てきた天音に反省の色は無い。

それどころか、迎えに来た遥香達に対してすら刺々しい態度をとっていた。

帰ろうとする虎太郎に車を止めさせ、まるでその場から逃げるかのようにしながら近くにあった小さなゲームセンターに入り、クレインゲームで仔猫のぬいぐるみを半ば睨みつけるように見つめながら狙っのだが……

彼女の後をついてきたらしい剣崎が、不意に声をかけてきた。

「大きくなったなあ、天音ちゃん。でも、どうしちゃったのかなあ？」

「もう！ ウザいんだよ！ 放っというて！ ……ホント、ウザい……」

猫撫で声を出す剣崎とは対照的に、天音は今にも泣きそうな声でキツイ言葉を返す。その理由はクレインゲームに失敗したからなのか、それとも子供扱いされたからか。あるいはもつと別の……

考えたところで、その理由は天音にしか分からないのだが。

「……そんな訳には行かないよ。心配なんだよ、天音ちゃんのこと……」

「もう、嘘！ どうでもいいと思ってるのに？ あんたも虎太郎も

お母さんも！……始さんだつて……」

「っ……始……？」

畳み掛けるように放たれる名前の羅列の中に、自分がかつて封印した存在が出た瞬間、剣崎の声が意図せず下がる。

だが、天音はそんな事に気付いた様子も無く、言葉を吐き続けた。「始さん、私の事守るとか言つといて、突然いなくなつて……！」

そこまで言つて感情が抑えきれなかつたらしい。天音は剣崎から……そして自分の言葉から逃げるようにその場を後にする。

「天音ちゃん！」

何を言えば良いか分からない。それでも、何かを言おうと剣崎が彼女を追いかけ、その名を呼んだ刹那。2人の目の前に、複数の異形が姿を現した。

基本色は白に限りなく近い灰色。どこと無くゴキブリを想像させるフォルム。

それを見た瞬間、天音は嫌悪からか思い切り悲鳴を上げた。

「こつち！早く！」

慄き、竦む天音に言いながら、剣崎は彼女の肩を抱き、異形のいない方向へと駆け出す。

流石にかつてはライダーであつただけあつて、異形を眼前にしても冷静な判断を下せる辺りは、少なからず天音にとって心強く感じられる。

とは言え、異形はわらわらと自分達を追つてきている事に変わりはない。人気の少ない方へと逃げながら、2人はとにかく相手を撒こうと必死に駆けた。

「天音ちゃん早く！」

突き当たった行き止まり……のようになっているフェンスの上に彼女を押し上げながらも、剣崎が声をかける。相手の動きは見た目程すばしこくは無い。むしろ緩慢だ。走っている間にかかりの距離を広げたが、フェンスを越えると言うタイムロスの間にも異形達は距離を確実に縮めてきている。

先に天音がフェンスを越え、そして追いつかれる本当に直前で剣崎もフェンスを乗り越えて再び駆け出す物の、異形達はその数の圧力に物を言わせてそれを倒し、更に彼らを追い詰める。

そして……どれだけ走っただろうか。逃げる彼らのすぐ目の前に、まるでこちらを待っていたかのように多数のアンデッドが姿を見せた。互いに、古代の言葉で何かを言いながら。

その会話で剣崎が聞き取れたのは、「ジョーカー」と言う単語だけ。しかし戦う術のない彼にとって、今最も重要な事は天音を安全な場所へ逃がす事。悠長にアンデッド同士の間話を聞いている余裕は無い。

だが……妙な感じがした。違和感、と言っても良い。今までのアンデッドとは何かが違う。普段なら無差別な攻撃を仕掛けるはずの彼らが、今はまるでこちらを……天音だけを狙っているかのような動きを見せている。

とは言え、考え事をしている余裕はない。一刻も早く天音を安全な場所へ逃がし、この状況を打破しなければ……

そう思った時だった。

背後から迫ってくる白い異形達を、3台のバイクが跳ね飛ばしたのは。

バイクから降り立ったのは、志村達3人。

「変身」

ライダーに変身し、3人はそれぞれアンデッド達に向かって攻撃を仕掛ける。

もう、大丈夫か？

剣崎が訝りながらも安堵の表情を見せかけた刹那。彼らの後ろから、ライダーの攻撃をすり抜けたのであろう、無数の白い異形達が襲ってきた。

「いやあああつ！」

己の見込みの甘さを呪いつつ、剣崎は悲鳴を上げる天音を連れ、近くにあった廃工場に逃げ込む。

その理由は、障害物が多いため。相手の足止め程度になると思っ  
たからなのだが……その考えはやはり甘かったらしい。相手の内の  
数体が、ブンと羽音を響かせて空中からこちらを追い詰めにかかる。  
それを見て取ったのか、志村……グレイブ達が、彼らを守るかの  
ように白い異形を慌てて薙ぎ払う。

「逃げろ！」

剣崎にそう言つと、グレイブは再びアンデッド達に向き直つて攻  
撃を再開する。

……剣崎も、その場にいる事で足手纏いになる事が分かっている  
らしく、小さく肯くと天音を連れてその場を後にする。

悔しいが、彼らの実力なら、任せても平気だろう……そう思った  
矢先だった。

彼らの攻撃を逃れた白い異形達が、2人に襲い掛かってきたのは。

まずい……！

剣崎の眼前にまで、異形が肉薄したその時。それを排したのは自  
分達の後を追ってきたらしい睦月だった。

「剣崎さん！」

「睦月！」

睦月も、かつては戦士として戦ってきた存在。

それ故、この状況は見過ごす事はできないし、無力な人間を見捨  
てるなどと言う事もしたくない。

こちらに向かつてくる3人のライダー……黄色のグレイブ、緑の  
ランス、赤いラルクも、異形達を攻撃しているのが見える。

それを見て、理解する。……異形達は、明らかにアンデッドとは  
異なっている事を。

倒しても死なない……封印するしか手立ての無いアンデッドとは  
異なり、そのゴキブリのような異形達はライダー達の攻撃を喰らう  
と、緑の炎のような物に包まれた後、骨格を残して消滅したのであ  
る。

何なんだあれは。アンデッドと何か関係があるのか！？

答えの出ない疑問を心の中でのみ浮かべつつ、剣崎、睦月、そして天音の3人は何とか工場の外に出る。だが、当然のように異形達もライダーには目もくれずこちらの後を追ってきている。

こいつらの目的は何だ!?

これまた答えの出ない疑問を浮かべた瞬間。1体のアンデッドが3人の眼前に立ち塞がった。

「……お前は……!」

声を上げたのは睦月。それは見覚えのある……いや、忘れられるはずが無い存在。

……クラブスートのカテゴリーエース。蜘蛛の始祖、スパイダーアンデッド。

忘れられなくて当然だ。かつてはその存在の力を使って変身し、そしてその存在に……闇に操られたと言う忌まわしい記憶があるのだから。

だが、そいつの方は睦月には何の興味も示さず、ゆっくりと天音と剣崎の方に向き直り……

「きゃああああっ」

「天音ちゃん!」

庇うように、天音に覆いかぶさる剣崎。

これで終わるのか!?

剣崎が自分の死をも覚悟した、その時。

1台のバイクが、スパイダーアンデッドを跳ね飛ばした。

「……橘さん!」

バイクのドライバー……橘は、無表情に剣崎を一瞥すると、すぐに視線をスパイダーアンデッドに戻し……

「変身」

抑揚の無い声で宣言。ゆっくりとスパイダーアンデッドに近付くと、キックを主体とした攻撃を繰り返した。

『FUSION JACK』

ラウズアブゾーバーにジャックのカードを読み込ませ、ギャレン

はジャックフォームにチェンジすると、3枚のカードを取り出し……

『BULLET』

『RAPID』

『FIRE』

ダイヤスートの2、4、6。そのカードの組み合わせにより、技の名前が告げられる。

『BURNING SHOT』

ジャックの力も加わって、ギャレンはスパイダーアンデッドと共に上昇しながら、相手の腹部に銃弾を撃ち込む。

そして……銃撃の反動によって相手が地面に叩きつけられ、ヒクヒクと痙攣しているのを見ると、悠然と着地しながらカードを投げ……事も無げにスパイダーアンデッドを、封印した。

「睦月！」

そのカードを睦月に向かって投げるギャレン。

チェンジスパイダーのカードは、睦月がレンゲルに変身する時に用いていた物。

「変身するんだ」

さも当たり前のように、ギャレンはそう言い放ち……いつの間にか持っていたレンゲルバツクルも、カード同様睦月に向かって投げ渡した。

……俺は、ライダーだった過去を忘れたかった。

普通の生活に戻るために。

けど今、俺は襲い掛かってくる異形達と戦う力を渡された。

……今度は、間違えない自信がある。力の使い方を、間違えない自信。

自分のために……最強であるために力を振るうのではない。

守りたいもののために、力を振るう。

……忘れるという事は、ただ逃げているだけだ。

だから……

俺は、もう1度、運命と戦う！

「変身！」

「元の世界」の西暦2007年1月30日。

上城睦月は、テスト終了の開放感に包まれていた。

後は、単位が取れているかどうかだが、その辺りはもはや自分がどうこう出来る問題ではない。

とりあえず、実質今日から春休みな訳だし、橘さんの手伝いでまして、あわよくばアルバイト料でも貰おうかな……

などと考えつつ、睦月は橘の家に向かう。

「お邪魔します、橘さん……ん………？」

しかし彼の目に飛び込んできたのは、意識を失っている橘と、左脇に誰かを抱えている、アンデッドに良く似た異形の姿。

浮かれ気分の混じった表情が、一気に緊張感溢れる物へと変わり、反射的に拳を握って身構える。

「お前は！」

睦月が声をあげると同時に、そいつは橘の時と同様に、右手を彼の方に向け……睦月を、攻撃した。

突然の出来事に対応しきれず、睦月はそれをまともに喰らう。おまけに相手は狙っていたのか、睦月の体は近くの壁に激しくぶつかり、打ち所が悪かったのかそのまま意識を失ってしまう。

「騒がれると面倒だしな……」

イマジンはそう呟くと、再び右手を睦月と橘に向かってかざした

……

\*

トンネルの向こう、西暦2008年4月18日。

睦月が変身出来た事もあって、並居る敵を倒した物の、結局剣崎がブレイドになるためのカテゴリーエース……ビートルアンデッドには逃げられてしまった。

「さっきの白いゴキブリもどき……同じような黒い奴を見たなあ」

「ふむ、ダークローチの事だな。モノリスが生み出していただろう」  
キンタロスの言葉に、ジークが答える。

言われてハナも、元の世界の相川始がジョーカーへと変貌した瞬間に現れた存在の事を思い出した。

確かその時も、ジークはあの異形の事を「ダークローチ」と呼んでいた。

「今度のアレは白いからな。アルビローチとでも言うか」

「あるび……？」

「白いジョーカーの事は、アルビノジョーカーと呼ばれているからな、それに合わせた」

「……ホント、何でも知ってるよねえ、ジークは。ちょっと不自然なくらい」

皮肉を込めてウラタロスが言うが、言われた方は小さく肩をすくめてコーヒーを一口啜るだけ。

知っている理由を答える気など、毛頭無いらしい。

「……もつとも、それは今に始まった事では無いのだが。」

「そもそも、お前達が『知らない』方がおかしいのだ」

「何で？」

「……………」

リュウタロスの言葉に、ジークが返すのは意味深長な沈黙のみ。知っているのに、答えない。

それはオーナーもそうだった。

教える気が無いのか、それとも、教える事のできない理由でもあるのか。

「……俺らには、良太郎に憑く前の記憶が無い。……過去が無いん

や。仮に昔、この事を知ってたとしても、今の俺はここを知らん。忘れとる」

恥じる様子も無く……むしろ、堂々とした態度で、キンタロスは言い放つ。

他の3人も同様らしく、その言葉に小さく頷いた。

「そう、だったな。『お前達』と私は『違う』のだったな……」

その様子を見て、ジークは寂しそうな……しかしどこか嬉しそうな声で、そう小さく漏らす。俯き、影になっていしまっているせいで、顔はよく見えないが。

「……とにかく、今は彼らの様子を窺うしかないわよ。何か、『元の世界』との違いが分かるかもしれないし……」

「でもハナさん、さっきの人達、建物の中に入っちゃいましたよ？」  
ナオミに言われ、ハナと5人のイマジンは我に返った様に窓の外を見る。だが彼女の言う通り、既に戦士達は建物の中に入ってしまったっており、会話を聞くどころか様子を窺う事さえできない。

外に出る事が出来ない以上、建物の中に入られてはこちらからは手の打ちようが無い。

「こつなつちやうと、どうしようも無いよねえ？」

ひよいと肩をすくめながらウラタロスが溜息混じりに言った瞬間、デンライナーを取り巻いていた風が、一瞬だけ妙な音を上げて揺らいだ。

それとほぼ同時だっただろうか。建物の中と思しき風景が、デンライナーの壁に映し出されたのは。

「うおっ!?!」

「ええっ!?!」

「何や?」

「うわぁ……映画みたい! 面白い!」

「ほう?」

まるでこの状況に合わせたかのように、剣崎達が映し出される。おまけに音声まで届いているのだから奇妙な話だ。

一体、どうなってるの？

不審に思いながらも、他に情報を知る術は無い。踊らされているような嫌な印象を受けた物の、ハナは映し出された彼らの様子を見つめる事にした。

元の世界との相違点を、見極めるために。

「橘さん！ 聞きたい事があります」

映し出されると同時に響くのは、剣崎が橘に詰め寄る声。どこか切羽詰ったように感じるのは何故なのか。

「……俺が封印した、始は？ ジョーカーはどうなっただんです？」

「ジョーカーのカードなら僕が持つてるよ」

答えたのは橘ではなく志村。

確かに彼の手には、緑色のハートのような模様の描かれた、ジョーカーのカードがあった。

「何だよ、何、気にしてんだよ？」

「いや、別に……」

訝しげな禍木の問いかけに、剣崎は目を伏せて答える。

……もしもジョーカーも……相川始も解放されていたなら、きっと彼を天音に合わせる事ができたのに。そうしたらきっと、彼女も昔のように、心を開いてくれるのに。

そんな剣崎の考えが、デンライナーにいる全員に、伝わってくるようだった。

「しっかし驚いたよねえ。まさかもう1人ジョーカーがいたなんてでも、何なんだろう？ もう1人のジョーカーの狙いつて」

「一緒に来い」

能天気にも聞こえる、虎太郎の素朴な疑問。

それに答えるかのように、橘は建物の更に奥の方へと歩き出した。虎太郎の疑問は、ハナも思っていた事だった。もしも「元の世界」と同じならば、相川始……ジョーカーが封印された時点で、もう1人のジョーカー……アルビノジョーカーの勝利が確定し、万能の力を得る事が出来たはずである。

それにも拘らず、アルビノジョーカーは他のアンデッドを解放した。

欲しいのは、世界を自分の思うように変えられる力じゃ無かったって事？

そう思った時、巨大な石板……否、石碑と呼べる程の大きさを持つ「それ」が映し出された。

相川始がジョーカーに戻った時に見かけた、黒い石板ではない。薄茶色の石に、何かの文字らしき物が刻まれている。大きさは3メートル程だろうか。薄闇の中で微かな灯りに照らされているせいか、妙な存在感を醸し出している。

「これは……？」

「谷川連峰で発見された超古代のレリーフだ。これに刻まれている古代文字によると、『古代のバトルロワイアルに生き残った者に、偉大な力を与える』とある」

「偉大な力？」

「それが何かは分からない。古代の戦いにおいて勝利した人間は、その力を得る事を拒み、自らの力で進化する道を選んだ」

「じゃあ、ジョーカーの狙いは……！」

「そう。恐らく、眠り続ける古代世界の力を、自分の物にする事」  
流れるように交わされる言葉。

だがここに来て、デンライナーの乗客達が知る情報とは異なる情報が現れた。

元の世界では「古代世界」などと言う概念は無かったし、どうやらこの「偉大なる力」とヒューマンアンデッドが勝ち得たと言う「万能の力」は別物のようだ。

それは単純にここが「違う世界」である事を示しているだけなのか、それとも何か別の意味があるのか……

「でも、その古代の力を得るためには、一体どうすれば……？」

「……4年前、53枚全てのカードが揃った時、不思議な現象が起こった。4枚のキングが新たなカードを生み出した。何も描かれて

いないバニテイカードだ。だが、ジョーカーに襲われたあの日、アンデッドの復活と共にバニテイカードは消滅した。恐らくはあのカードがキーになるのでは、と我々は考えている」

橘が、淡々と説明する。

アルビノジョーカーに襲われた時の事を説明した時もそうだったが、橘の様子は、やはりおかしい。

以前の……元の世界の橘なら、もっと感情的に物を言っていただろう。リュウタロス達の知る橘は、冷静ではあったが冷淡ではなかった。

……そもそも、バニテイカードとは何なのだろう。

自分達をこの世界に連れてきたチケットのなれの果て……「Common Blank」と書かれたあのカードとは別物なのか。

想像したくても、いかなせん情報が足りなさ過ぎる。だが、その一方で分かった事もある。

『じゃあ、もう1度4枚のキングを集めれば……！』

デンライナーの中にいたナオミと、壁に映し出された虎太郎の台詞が寸分の狂い無く重なった。……どうやら、2人の思考回路は似通っているらしい。

「そう言う事だ。今の所、2枚のキングは志村が持っている」

「あとの2枚はアンデッドとして解放されたままですがね」

ズボンのポケットの中から、志村が2枚のキングを取り出してそう言った。

彼が持っているのはスペードとハートのキング。ダイヤとクローバーのキングは、解放されたままなのだろう。

「橘さん、俺も一緒に戦わせて下さい。俺、普通の生活に戻りたいと思ってました。でも、普通の生活に戻るためにも、今の世の中を守らなきゃって思うんです」

「俺も力を貸します。橘さん」

睦月と剣崎がそう願ひ出る。

彼らは、何が起こったかを知ってしまった。それ故に、今の状況

を放っておく事が出来ないのだろう。

……その意思是、どこか良太郎を思い出させる物であった。

僕に出来る事をやるだけなんだ

気弱そうで、だけど芯のある者にしか浮かべる事の出来ない笑顔で、かつて良太郎はそう言っていた。

モモタロスも、ウラタロスも、キンタロスも、リュウタロスも……

…そしてハナも、その「芯」に心打たれ、協力していたのだから。

それを今、彼らは思い出した。

剣崎達の真剣な眼差しが、そのときの良太郎と重なったから。

「笑えるわよねえ。変身もできないのに」

そんな彼らの思いとは裏腹に、夏美が相変わらず馬鹿にしたように剣崎に向かって言葉を投げつける。口の端に冷たい笑みを浮かべながら、見下し気味に彼らの姿をねめついている。

「例え変身できたってお断りだぜ。後からしゃしゃり出てきて先輩面されちゃたまんねえからな」

夏美に同調するように、禍木も言う。見下している夏美とは異なり、禍木のそれは嫌いだから、という感情がはっきりと分かる。今にもその場で唾棄しそうに眉を顰めている。

「よさないか」

「でもチーフ。見ての通り先輩たちと一緒にじゃチームワークが乱れる可能性があります。……僕達は、僕達だけで今まで上手くやってきたんだよ」

「そつよ。足引つ張られちゃ困るし」

志村の言葉を継いで、再び夏美が口を開く。

その言葉にまた、怒り狂うかと思いきや……剣崎の反応は意外と冷静だった。

「……勝手にしろよ。アンデッドと戦っていくのに、何もお前等と手を組む必要はないんだ。俺達は、俺達だけでやっていける」

流石に、この状況でいがみ合う程愚かではないらしい。剣崎は睦月と虎太郎を引き連れてその場を後にした。

その瞬間にデンライナーに映し出された映像が消え、自分達のすぐ横を建物から出てきた剣崎達を通り抜けた。

「……先輩だったら、完全に掴みかかっているよねえ、あの物言い」「その前に僕がやつつけてるよ。やっぱりあいつら、嫌い！」

剣崎の姿が、どこと無く良太郎と重なって見えていたせいか、剣崎が馬鹿にされた事が心底気に入らなかつたらしい。リュウタロスがふいとそっぽを向き、窓の外の建物に向かってイーッと歯を見せている。

「……こう言う事になるのを予想して、私達を閉じ込めてるのかしら……？」

見たことも無い元オーナーとやらに、初めて感謝しつつ、ハナは小さく溜息を吐いた。

またしても勝手に動き出したデンライナーに、ちよつとした諦めを感じながら……

\*

「始さん……」

家に帰ってくるなり、天音はかつて始が使っていた地下の部屋に閉じ籠り、4年前に始と共に撮ったアルバムを眺めていた。

あの頃は、本当に楽しかった。

優しく強い始が、本当に好きだった。思えば、あれが初恋だったのかもしれないくらいに。

だからこそ、ある日突然いなくなってしまったのが悲しかった。

悲しくて、悲しくて……そして、その悲しみはいつの間にか、怒りに変わってしまった。

突然いなくなった始へ。

始がいなくなっても、平然と日常を送っている母や剣崎達へ。

そして何より……彼を引き止められなかつた自分自身への怒りが、彼女の心を満たしていた。

自分がどうでも良い存在だから、始は唐突に姿を消したのだ。  
自分など、始にとって守る価値の無い人間だったのだ。

……そう、思うしか出来なかった。今でも彼が姿を消した理由はわからない。剣崎の様子を見ると、彼は知っているらしいが……4年前も、そして今も、彼はその理由を明かそうとはしてくれない。ただ、辛そうに俯いて黙り込んでしまっただけだった。

「天音ちゃん、開けてくれないかな？」

突然、ノックと共に剣崎の声がした。

部屋の外に、剣崎が立っているらしい。きっと、母に頼まれたのだらう。

「嫌！ 誰とも話したくない！ もう放つといて！」

彼女の気持ちは、その一言に集約されている。

この部屋の中なら、始がいた頃に戻った気がする。  
優しい記憶に浸っていられる。

……アンデッドに襲われた時、恐怖した。何故、自分が襲われるのかと言う疑問もあった。

だが、それと同時に期待もしていた。

……始が助けに来てくれる、と。彼はかつて、自分を守ると約束してくれたのだから。

だが……来ては、くれなかった。それが、天音を絶望させた。

昔に、戻りたい

素直に笑う事の出来た、あの頃に。

……大切にされているんだと実感できた、あの日々に……

## その17：力、集え

「劍崎一真は、何を望む？」

「相川始は、何を願う？」

「そして私は、何を求む？」

次いでデンライナーが停車したのは、先程までいた時間よじから1日程度経ったところ。

窓から見える細い並木道は、青々と緑が茂って美しい。

普段は木漏れ日の射す静かで穏やかな公園なのだろうが……死屍累々と横たわる人の姿と、その元凶であるう甲虫のような姿の異形、アンデッドの姿のせいで、今はこの場をただの地獄と変えていた。

「カテゴリーエース！」

いくつかの機械が、その出現を告げていたらしい。劍崎と睦月がその前に立ち塞がると、睦月はそのまま飛び込むように変身する。

武器であるロッドを使わずに素手で殴りつけているその様は、どこも無くキンタロスの戦いに似ているように感じられた。

「雰囲気、キンタロちゃんみたいですね！」

「うーん、僕は体型のせいだと思っただけ……」

外の戦いでテンションがいつも以上に上がったのか、拳を突き上げて応援するナオミに、ウラタロスは苦笑で返す。どちらもやや言いたい放題気味ではあるが、当の本人……睦月には聞こえていないので何とも言い難い。

比較されているキンタロスに至っては、あまり興味が無いらしい。いつの間にか、ちゃっかりと眠っていた。しかもいびきまでかいて戦いは、完全に睦月が押している。

武器はロッドと言う中距離格闘型の物だが、どうやら彼はそれだ

けでなく拳を主体とした近距離戦も得意としているらしい。

完全に戦いが睦月のペースになり始めたそこに、3台のバイク……志村達も到着し、そのまま自分達も戦いに興じようとした、その瞬間。

禍木は睦月に弾き飛ばされ、その場にぺたりと尻餅をついた。

「……………の野郎……………！」

余程悔しかったのか、怒りに満ちた声で禍木は呟くと、睦月を絞め殺さんばかりの目で睨みつけてベルトを構える。恐らく、睦月諸共アンデッドを葬ろうと画策でもしているのだろう。だが、睦月も軽く首を禍木に向けるとそんな彼らの動きに鋭い声を飛ばした。

「来るな！　そこで見てろ！」

「……………今まで表に出さなかったけど、彼もあまりあっちの3人の事が好きじゃないみたいね」

「僕も嫌い！　あっち行けー！」

窓の外に向かって、追い払うように手を振るリュウタロス。そんな事しても、相手には見えもしないと分かつてはいるが、やらずにはいられないらしい。

一方で外の睦月は、殴りつけるのを止めてロッドを使い始めていた。恐らく、素手で殴りつけると言う単純な攻撃だけでは、相手を封印するまでには到らないのだろう。

素手とは違い、ロッドを使う分相手との距離が必要になる。その距離を取るべく、アンデッドをそのロッドで突き飛ばし……………

『BLIZZARD』

手元のカードを読み込ませ、突き飛ばしたまま冷気を吹き付ける。その冷たさにアンデッドは一瞬怯み……………その隙に放たれた睦月のキックをまともに喰らって、後方へ大きく吹き飛び、転がる。

そしてそれが起き上がるよりも先に、睦月は別のカードを投げ……………あつさりと、相手はその中へと封印されたのである。

遠くてカードの絵柄はよく分らないが、敵の姿から考えて甲虫の絵が描かれているのだろう。ちらりと赤い模様のような物が見える

が、トランプで言う所のマークだろうか。

「剣崎さん、貴方のカードだ」

そう言うと、彼は剣崎に向かってそのカードを投げ渡す。それを使うべき存在は、封印した睦月自身ではなく、側で歯がゆそうに見つめていた剣崎だと態度にも示しながら。

「……何でわざわざカードを投げるんですかね？ 普通に渡せば良いのに」

純粋な疑問からナオミが言ったその時。今まで眠っていたキンタロスが小さく動いた。

……「投げる」。

その単語が、彼のスイッチを入れたらしい。

「投げる、なげる、なける……泣けるでえっ！」

「黙ってなさい！」

俯き、舟を漕いでいたキンタロスが勢い良く顔をあげ、そのままの勢いで立ち上がり、暴走する……その寸前、ゴツと言う鈍い音と共にハナの踵落としがキンタロスの脳天に極まる。

「ハナさん、机の上に乗るのははしたないですよ？」

「突っ込むトコはそこか、ナオミ……」

「ハナちゃん、怖い……」

「スカートで足を振り上げるのは、いかなものかと思うぞ、姫？ 机に突っ伏し、眠っているのか気絶しているのか、それとも永眠しているのかよく分らない状態のキンタロスを横目に見ながら、他のイマジンは各々、とぼちりを食わないようそそくさと窓の外に目を向ける。

その時見たのは、戦いが終わったのを見計らった禍木と夏美が、睦月に向かって駆け出すところだった。

怒りに満ちた表情で、変身までして。

そして……禍木が睦月に1撃を加えると、心底怒った声で怒鳴りつけた。

「俺達の邪魔すんなって言っただろっが！」

「そうそう。大人しく引退してれば良いのよ」

いつの間にか夏美も変身している。どうやら2人は、ここで剣崎達を潰す気らしい。

「何考えてるんだお前等！」

剣崎がぎよつとしたように声をあげる。

気に食わないからと言う理由だけで、仮面ライダー同士が潰しあうのは馬鹿げている。彼らの敵はあくまでアンデッドであり、ライダーでは無いはずだ。

しかしそんな剣崎など眼中に無いかのように禍木と夏美は睦月に向かって攻撃を再開する。

2対1。いつか、リュウタロスがアントホッパーイマジンに襲われた時と同じ構図。

「……あ……」

その時の事を思い出したのか、彼は小さく声をあげると1歩だけ窓から離れ……一瞬後、瞳に怒りの色を宿し、睦月を襲う2人を睨みつけた。

睨み付けても何も変わらない。分かっているが、睨まずにはいられなかった。

流石にライダー2人の相手は辛いのか、アンデッドに対しては圧倒的優位に立っていた睦月が、徐々に圧されはじめ。反撃の暇を与えられず、ロッドで相手の攻撃を防ぐので精一杯と言った所か。

「やめろ！」

その様子を見かね、苦しそうな顔で剣崎が叫ぶ。

変身して睦月を助けるべきか否かを迷っているのが見て取れる。

だがその逡巡も、直後に見た睦月の姿で吹き飛んだらしい。

「……変身！」

意を決したように剣崎が変身し、なおも睦月へ攻撃を続ける2人の間に割って入る。

「やめろ！ どう言いつもりだ!？」

剣崎が入った事で、実質的には2対2。数の上では対等になった。

それをどう思ったかは分からない。少なくとも禍木は、間に入つた剣崎も敵とみなしたらしく、彼に攻撃を仕掛けたが……その刹那だった。

「禍木！」

今まで変身もせずに傍観しているだけだった志村が、禍木を制止する。

だが……それが戦いを止めるための制止で無い事は、デンライナーの乗客にも伝わった。

「……見せてもらいますよ剣崎さん。貴方の力を」

言うのが早いか、志村もまた、変身をして剣崎に向かって剣先を向け振りぬく。しかし向けられた方も反射的に自身の武器を振ってその剣を止める。

ギン、と金属同士のぶつかる嫌な音が響く。しかし互いの体にその切っ先が当たる事は無い。寸前で互いの刃を止め、弾く。その繰り返しだ。

「流石ですねえ、ブレイド！」

鏝迫り合いながらも、志村が剣崎に向かって感嘆の声を上げた。

彼らの実力は五分……少なくとも、ハナの目にはそう映るが、話をする余裕がある分、ひよつとしたら志村の方が上かもしれない。

そう思った時、ライダー達に向かって、どこからか散弾の様な攻撃が放たれた。

攻撃してきた方に視線を向け、その相手を確認した時……ハナははつと息を呑み、目を見開いた。

金色を基調とした体色、両手には大振りの2本の剣、クワガタムシを連想させるフォルム。元の世界でも見た、その異形の姿は……

「カテゴリーキングか！」

剣崎が、誰にと言う訳でもなく叫んだ。

……そう。元の世界では、最後の最後まで残ったアンデッド。

天王路を殺し、彼の作ったケルベロスのカードを奪ってジョーカーを追いつめた存在であった。

「そう言えば彼、ダイヤのキングだったっけ。解放されていてもおかしくは無いよねえ」

唯一、彼が封印されたカードを見たことのあるウラタロスが呟く。とは言え、今の今までそんな事実は忘れていたし、そのカードを見たのもほんの一瞬。この可能性に思い当たれ、と言う方が無理な話だろう。

そんな風に思っている間に、カテゴリーキングは素早い動きで剣崎と志村の2人を他の3人から引き離す。

だが、その行動に出た異形の姿に、ハナは微かな違和感を覚えた。「何か変じゃない？ 私達の知っているアイツの性格からすると、勝ち目が無きや姿を現すとは思えないんだけど……」

「確かに、ハナさんの言う通りかも。ひよっとすると、何かこの状況をひっくり返す策でもあるのかもね」

「それとも、『異世界だから』ってか？」

だとしても、様子がおかしい。可能性を挙げはしたが、言ったウラタロスとモモタロスも自分の言葉に納得しかねているように見える。

彼らの知るカテゴリーキングは、いつもシニカルな笑みを浮かべ、夏美以上に他人を……否、人間を馬鹿にした態度をとっていた物の、どこかその馬鹿にしている人間に近い、打算的な部分があった。

だが、今日の前にいるギラファアンデッドは違う。

人間性の欠片も無い、ただの獣。

他のアンデッド同様、低い唸り声を上げて闇雲にライダー達に……剣崎と志村の方へ攻撃を仕掛ける。その動きに計画性の欠片も無い。

この性格の違いも、『異世界だから』の一言で済まされるのかしら？

不審に思いながらも、ハナはカテゴリーキング達の様子を窺う。

「本当に、何を見せたいのよ……？」

\*

突っ込んできたギラファアンデッドに押される様に、ブレイドとグレイブの2人は他のライダー達から引き離されてしまった。

しかし、アンデッドの方からこちらにやって来たのは、ブレイド…… 剣崎としては好都合だった。

ライダー同士で争う事は、あまり良いとは思えない。

仮面ライダーが戦う目的は、あくまで「アンデッドの封印」…… いや「人類の平和」の為だと、彼は思っているからだ。

「はあっ！」

ギラファアンデッドに斬りつけながらも、剣崎の口からは、思わず気合が漏れる。

戦ってみて、わかった。

グレイブ…… 志村は、強い。

普段はチームで戦っていたから分らなかったが、彼は…… いや、彼らは単身でも十分に強い。剣崎達を馬鹿にしていたのも、あなたが慢心からではなかったのだろう。

一緒に力を合わせて戦う事が出来たら、きっと

それに、志村は順応力も高い。即席とは言え、今も自分と絶妙なタイミングでギラファアンデッドに剣戟を繰り出している。

そう、思った時だった。

その場から逃げ出そうとするギラファアンデッドを追おうとして、別のアンデッドに行く手を遮られたのは。

その間に、ギラファアンデッドは、それを追ったグレイブと共にどこかへ消えてしまう。

グレイブ1人でも封印する事は出来るだろうが、相手が相手なだけに、やはり心配である。しかし、そう簡単に彼らを追わせてくれる程、目の前にいるアンデッド…… 蜥蜴の始祖、リザードアンデッドとて甘くは無い。

やはり、こいつを封印してから追うしかないか！

無論、劍崎にアンデッドを野放しにする気は無い。

即座にギラファアンデッドを追う事を止め、劍崎は目の前に立つリザードアンデッドに集中する。

そして集中した時の劍崎は、強い。何合か打ち合いながらも、彼の剣技の方がリザードアンデッドの動きより数段早く、既に相手の体には幾筋かの切り傷が体につつすらと浮かんでいる。

何度斬りつけた後だったか、劍崎は大きく揺らいだリザードアンデッドの体に向け、ここぞとばかりに渾身の一突きを繰り出す。それによって弾き飛ばされ、倒れこむリザードアンデッドに向かって3枚のカードを取り出した。

『KICK』

『THUNDER』

『MACH』

スピードスーツの4、6、9のカード。その組み合わせで繰り出される技は、ブレイドの持つ蹴り技の中でも最強の部類に属す攻撃。

『LIGHTNING SONIC』

電子音が技名を告げると共に、ブレイドは大きく上へと飛び上がると、ふらつきながらも何とか体を起こしたりリザードアンデッドに向かって、速度と電撃を纏った蹴りを叩き込んだ。

それにより、リザードアンデッドの敗北及び封印が確定したのである……

睦月……レンゲルは、ギラファアンデッドを追っていた。

突き飛ばされたものの、それ程大きなダメージはないし、何より彼もまた、アンデッドを見過ごす訳にはいかないと思っていたから。

途中、ブレイドがリザードアンデッドによってギラファアンデッド達と引き離されたのを見かけたが、あの程度の相手なら劍崎1人で何とかなる。むしろ、カテゴリーキングと1対1になった志村の

方が危険であると判断したのだ。

正直、新世代ライダーである志村がどうなるかと睦月の知った事ではないが、見殺しにするような真似もしたくない。

息を切らしながらも、ようやく見つけたその時。

彼の目に飛び込んだできたのは、何故か恐れ慄いている様に見えるギラファアンデッドと、それを追い詰め、プロパーブランクを構えるグレイブの姿だった。

妙だ

その様子にどこか奇妙な気配を感じ、思わず相手の死角へ身を隠すレンゲル。

追い詰められながらも、必死に古代語でグレイブに何かを訴えるギラファアンデッド。

人間に、古代語など分かるはずが無い。

しかし、そんなレンゲルの思いとは裏腹に、グレイブは感情を感じさせないような声で……こう、返した。

「ダン・ピラ・ファリキ」

現代人の耳には、そう聞こえる言葉。

それは紛れも無く古代の……アンデッド達の言語。

現代人では到底扱えぬであろうその言語を発すると同時に、グレイブはカードを投げ、ギラファアンデッドを封印すると……そのま、レンゲルのいる方向とは逆の方へと去って行ってしまった。

……残るキングは……あと1枚。

「さっきは済みませんでした。やっぱり僕達は思い上がっていたのかも知れない。剣崎さんがいなかったら、今頃僕はどうなっていたか分からない」

戦いが終わり、橋がいる研究所へ戻ってきた志村は、ついて来た剣崎に対し、うなだれる様にそう言った。

今、この場には志村と剣崎しかいない。

橘は相変わらず地下に籠もりきりだし、禍木や夏美はやはり剣崎達と共闘する事に抵抗があるのか、どこかへ行ってしまった。

「……橘さんが言ってたように、力をあわせて……」

この研究所に戻ってきてすぐ、橘は志村達に対し「5人で力を合わせれば、仕事も早く片付く」と言った。

その言葉を受けてだろう。剣崎が、どこか嬉しそうに言いかけたその時……

「駄目だ剣崎さん！ そいつはアンデッド！ もしかしたらジョーカーかもしれない！」

「え？」

睦月が、彼等の側に駆け寄りながら、剣崎の言葉を遮った。その表情は真剣そのものだ。

言われた方……剣崎は、意味の把握が出来ていなく、睦月の方を見ながら不審そうな声を上げるのが精一杯だった。

「見たんです、さつき。そいつはアンデッドと話していた。キングのカードを集めるために、人間の姿を借りて、仮面ライダーになったのかもしれない」

睨み付けてくる睦月の言葉を聞きながら、志村はどこか悲しそうな表情で俯く。

一方、アンデッドと話していたと言う事実と、睦月の述べる可能性を聞いていた剣崎の顔は、志村とは逆に徐々に険しくなっていく。確かに、睦月が言うような可能性はある。

2体目のジョーカーの狙いは4枚のキングのカード。それを効率よく集めるためには、人間として……ひいては仮面ライダーとして戦っていった方が、カードを集めるのに都合が良いに違いない。

ジョーカーやカテゴリージャック以上の上級アンデッドと呼ばれる存在ならば、ヒトの姿を取る事など造作も無い。

その上、そう言った事が出来るアンデッドは、ヒトの心理につきこみ、騙す事も厭わない。

その事実を知っている以上、アンデッドと会話していたという志

村は、限りなく怪しく見えてしまう。

「それは違うぞ睦月」

……しかし、否定の言葉は思いも寄らない所から上がった。

睦月とは逆方向から現れた、橋の口から。

「志村が古代語を話せてもおかしくは無い。元々大学で古代語を研究していたんだからな」

考古学の1つと考えれば、古代語を研究する大学があってもおかしくは無いが、それが事実であるとも限らない。

しかし……橋にそう言われては、信じるしかない。いや、信じたい。

かつては共に戦い、今もなおアンデッドと戦う橋の言葉を。

しかし、1度撒かれた疑惑の種は、どんなに足掻いても刈り取る事はできないのも事実。

それを分かっていてなのか……志村は、相変わらず悲しそうな表情のまま、剣崎達を見ながら口を開いた。

「……………」『アンナサン・フワ・ウンムルハルグ』。『疑惑は争いの母』、と言う意味です」

「何か気に喰わねえよなあ。今更ブレイドだのレンゲルだの」

志村達からは少し離れた場所で。禍木と夏美は不機嫌を隠そうともせずに佇んでいた。

単純に、禍木は剣崎達が気に入らない。

確かに禍木は、元は普通のウェイターだった。それが、アンデッドに襲われ、才能を見込まれ、今の力……ランスの力を得るに至った。

自分がアンデッドに襲われた時、助けてくれたのは志村……グレイプであって、ブレイドやレンゲルでは無い。だからこそ、禍木は志村をそれなりに尊敬しているし、頼りにだってしている。

しかし剣崎達は違う。

自分達が戦っていたのに、後からやってきて、まるで自分の方が上だとも言わんばかりに横柄な態度。

確かに彼等もアンデッドと戦った経験があるのかもしれないが、自分達が襲われている時は何もしてくれなかった。

それどころか、全てが終わったと勝手に思い込み、のうのうと平穏な日々を送って来たではないか。

それなのに真実を知ったら、自分にも戦わせると言う。

「今の仮面ライダー」である自分達など不要と言わんばかりにチーフ……橘に取り入って。

のほほんとしたあの表情も、正義感に満ちた言動も……何もかもが、気に入らない。

そんな風に感情が表に出る禍木とは対照的に、夏美はじっと己の足を暗い瞳で見つめ、眩きを落とす。

禍木の言葉に返しているようにも、独り言のようにも聞こえる眩きを。

「……あんな奴等には負けたくない。もっともっと……強くなりた  
い。もっと、もっと……誰よりも……」

夏美は、禍木とは違う。

純粹に戦いを楽しんでいる節ふしのある彼とは違い、彼女の目的は「力」であった。

〇しをやっていた彼女が、志村に誘われて仮面ライダーになった……他人とは異なる「力」を得た時、彼女は「力」その物に魅せられた。

力を得る事が目的であり、手段として「力」を使う剣崎達が疎ましかった。

今、仮に彼女の望みを叶えてくれる存在があったとしたら、迷わずこう答えるだろう。……「誰にも負けない力が欲しい」と。

だが、そんな……望みを叶えてくれるような存在はいない。

ならば、自分で「力」を得るしかない。

……かつて、睦月がそうであったように……彼女もまた、急激に

得た「力」の間に、飲み込まれていた……

\*

「何か、怪しい事ばかりですねぇ？」

禍木と夏美の呟きを聞いて、ナオミが首を傾げながらそう言った。無論、志村にかけられた疑惑も彼らは把握済みである。

「そうだね。あの志村って人、アンデッドと話してた辺り、いくら何でも怪しすぎだよなぁ」

顎をさすりながら、ウラタロスが目を細めて言う。

「夏美って女も、どうかと思うんで？ 『強さ』は、あんな顔して求めるもんとちゃう。きちんと修行するべきや。与えられた力に頼るようではまだあかん！」

キンタロスは夏美の抱いている間に気付いているのか、唸るように言う。

「禍木って野郎は単純でわかりやすいんだけどよぉ……あとの2人は何を考えてるか、わかつたもんじゃねえな」

好きにはなれそうに無いが、禍木に関しては胡散臭さを感じていない様子のモモタロス。それは、自分もまた単純にできているがためにわかる事なのかも知れないが……

「モモタロスも単純じゃん」

「リユウタ、先輩は単純なんじゃなくて単細胞なだけだよ」

「桃の字に単純で言われたら、お終いやで……」

「うるせえっ。俺のどこが単純なんだよ!？」

他の面々に言われ、ドスの聞いた声で脅しつけながらも、手近にいたウラタロスに掴みかかろうとした瞬間、スパアーンと言う軽やかな音と共に、モモタロスは後頭部をハリセンで叩かれた。

「全部よせ・ん・ぶ」

殴られた勢いでうつ伏せに倒れてピクピク痙攣しているモモタロスを踏みつけ……と言うよりは踏み躪りつつ、ハナはトントンと持

ついている武器ハリセンで肩を叩きながらそう答えを返す。

……答えられた方に、その声が届いているかは甚だ疑問ではあるが。

「でもお、一番怪しいのはあの橋って人ですよねえ」

「……………え？」

元の世界の橋を知らないナオミの一言に、全員が……………ジークすらも……………間の抜けた声を返した。浮かんでいる表情も、声と同じ間の抜けたもの。しかしそれを気にせず、ナオミは己の考えを口に出す。「だってそうじゃないですか？ 何かずっと無表情だし、いつも絶妙なタイミングで現れるし、何考えてるかわからないし。それに、そもそもジョーカーって言うのに襲われた事があるんですよねえ？」

「うん。確か……………そう言ってたわね」

「だったらあ、その時に本物は殺されちゃって、ジョーカーって言うのがその人に成りすましてるのかも！」

カウンターに腰掛け、足をぶらつかせながら、いつも通り何の危機感も感じさせない口調で言い切る。それは、元の世界の「橋朔也」を知らないからこそ辿り着いた考えなのかもしれない。

実際、ナオミにそう言われるまではその可能性を誰も考えてなどいなかった。

元の世界に存在しているのだから、この世界にいる「橋朔也」も、元の世界の「橋朔也」と同じだと……………無条件に思い込んでいた。

だが、言われてみれば納得できる部分は多々ある。

仲間であつたのなら、アンデッドが解放された時、真っ先に知らせるべき剣崎達には何も言わず、自分の事をよく知りもしない別の人間達にアンデッドを封印させていた事、今になって剣崎や睦月をアンデッド封印に関わらせている事などを考えると、ナオミの指摘した「可能性」が現実味を帯びていく。

「じゃあ……………本当に『変わっちゃった』のかな？」

この世界に来てからすぐ、リュウタロスは確かに呟いていた。「橋も、何か変わっちゃった」と。

その時は「異世界だから、元の世界と少し変わっていて当然」という理由で納得したのだが……

もし、本当に「違う存在」に成り代わっていたら……？

「くそっ！ 何で俺達は見てるだけなんだよ……！」

干渉が出来ないと言うのなら、何故こんな物を見せるのか。

この世界に来てから、何度も思った疑問。

答えてくれる者の存在は……期待できない。

## その18：遠雷、願いをも流して

そろそろ、始めなければならぬ。

私がこの世界に来た目的を果たすために。

そのために、この列車に……「この車両」に乗ったのだから。

元の世界、西暦2007年1月30日。

剣崎一真は、バイクを走らせていた。

……かつて選んだ「結末」を、後悔した事が無いと言えは嘘になる。だが、少なくとも今は悔いていない。あの時は、あの方法しか思いつかなかった。

あの結末を迎えた事で、人類は平和を勝ち取った……と、最初のうちは信じていた。だがそれは違うのだと、すぐに思い知らされた。全てが終わった後に出た旅の最中に、アンデッドとは異なる異形と幾度と無く遭遇してしまったから。

ある者は巨大な妖怪のような、ある者は昆虫に良く似た、ある者はステンドグラスの模様のような体をした異形。

それらと出会う度、「人類の敵」であるらしい彼らと戦い、排除してきた。

そして、今も……

アンデッドに良く似た、しかしそれでいてアンデッドでは無いと分かる異形の姿が、彼の目の前にあった。

「ようやく見つけたぞ」

「俺に、何か用なのか？」

口の端を歪め、凄絶とも取れる笑みを浮かべる異形……イマジンに言われ、剣崎は冷静に返す。

相手の醸し出す邪気に反応してなのか、反射的に戦闘体勢を取り、ゆっくりと相手との距離をとりながら。

「お前と戦うつもりは無い」

「こちらの警戒に気付いてなのか、そう言つとイメージンは静かに腕に抱えていたモノを放り投げた。

「……！」

それを見た瞬間、剣崎の表情が凍りつき、取っていたはずの警戒態勢もするりと解ける。……それ程の衝撃が剣崎を襲ったと言つ事実に、剣崎自身は気付いているだろうか。

放り投げられたのは人。それも、見覚えのある顔。

「……あ……！」

「必要な者は揃った。あとは、繋がるのを待つだけだ」

驚愕の声を上げる剣崎とは対照的に、心底愉快そうに小さな笑い声を漏らし……イメージンは彼の顔を見ながらそう言った……

\*

「……ふうむ。それにしてもこの現象……異なる世界に干渉してはならないと言つ警告か？ それとも、副作用として手が出せないだけなのか？」

「……あん？ どう言つ意味だ、鳥野郎」

意味深長なジークの小さな呟きを聞き止め、それまで自身を押しさえ込んでいたハナの足から逃れると、モモタロスはこの日何度目かの問いを放つ。

背中にくつきりと小さな足跡が付いてさえいなければ、その表情だけで竦みそうになる程の険しい顔つきで。しかしジークの方は、その表情に怯むどころか呆れと哀れみの混じった視線を返すと、深い溜息を1つ吐き出し……

「気付いていないのか？ お供その1」

「何をだよ？」

「この列車を包む『風』が、我らを守るために張られた物だと言つ事を、だ」

「それ……どう言う意味？」

言われた意味を理解しきれないのか、軽く眉を顰めてきよとんとするモモタロスに代わり、不思議そうにハナが問う。そんな彼女に、ジークは恭しくその手を取ると当然と言わんばかりの表情を作り……  
「ここに来る前に、お供その1が懸念していただろう？」 『異世界に行ったら自分は変わるのではないか』と」

「まあ、実際は先輩の杞憂に終わった訳だけどね」

「残念だが、お供その2。この風の結界が無ければ、本当に変わってしまふのだよ。それも恐らく……」 『野上良太郎という存在を忘れる』と言う形に」

さらりと放たれた言葉に、放った本人以外の表情がぴたりと凍りつく。

言い放たれた「それ」は想定しうる事態の中でも、最悪の形。

「……嘘……何、で……？ 何で僕達が良太郎の事、忘れるのさ！

僕、絶対に忘れないよっ！」

「この世界には、『野上良太郎』なる人物が存在しないからだ。存在しない者を『覚えて』いられるはず無かるう？」

今にも泣き出しそうな声で問うたりユウタロスに、ジークはまるでそれが当たり前の事であるかのように答える。

先程も言ったが、「野上良太郎が最初から存在していない世界」の事は、確かに最悪の形として懸念していた。

しかし、それがこの世界だとは思っていなかったし、心のどこかではそんな世界があるはずが無いと思っていた。それだけに、ジークの言葉は衝撃を通り越して現実味の無い……どこか遠い出来事のようにしか思えなかった。

それが分っているのだろう。ジークはすりとハナを抱えて席に着くと、硬直している面々を見回しながら言葉を続けた。

「風の結界のお陰で、この列車の中は『元の世界』と同じ状況を保っていられるのだ。それが無ければ、この場で『野上良太郎』の事を覚えているのは、特異点である姫だけになるだろうな」

「……ちよお待て。何でそんな事、お前が知ってるんや？」

「『そんな事』とはどんな事だ？」

いち早く硬直から抜け出したらしいキンタロスの問いに、いい加減ぬるくなつたコーヒ―を口に含みつつも、小首を傾げながら彼に問い返す。

「そんな事」と言われるような心当たりはいくつかある。いくつがあるが、それをわざわざ挙げて質問攻めにされるのは面倒臭い。

そんな彼の態度に気付いていないのか、キンタロスはむうと小さく唸ると、一瞬だけ顔を歪め、心底言い難そうに声を絞り出した。

「その……この世界に、良太郎がおらんつちゆう事や」

「簡単な事だ。私は、元はこの世界の住人。そしてそれを覚えている。それだけだ」

苦しそうなキンタロスとは対照的に。あまりにも衝撃的な事実をジークは事も無げに口にした。

あまりにあっさりとしたその物言いに、一瞬全員の表情が固まったが……同時に、様々な事に納得も出来た。

他のイマジンとは、どこかかけ離れた存在である事や、この世界に来てからの態度などを考えればそれもわかる。

……イマジンには過去が無い。それ故に、自分に関する過去は覚えていない。

しかしジークは違う。つながった路線では無いとは言え、ここにかうして「この世界」が存在している以上、ジークの過去はきちんと存在している。だから彼は、初めて出会った時に自分の名前を「ジーク」だと言えたのではなからうか。

「じゃあ……あなたは何らかの理由があつて、元の世界に来ちゃつて、イマジンになつたつて事なの？」

「そう思ってくれても構わないよ、姫」

穏やかな笑みを浮かべ、ジークは八ナに一礼すると……何かに気付いたように窓の外に視線を向けた。

「ぶむ。どうやら、物語の節目を迎えるようだな……」

ジークに言われ、他の面々も窓の外に目を向ける。  
そこにいたのは、新世代ライダーの1人……禍木慎が、なにやらぶつぶつ言いながら崖の方へ歩いていくところであった……

\*

「ったく。何で俺達があんな奴等と手を組まなくちゃなんねえんだ  
よ」

俺って信頼されてねえのかなあ……

チーフはしょうがねーよ、あいつ等と昔、つるんで戦ってたんだから。

でも、志村まであいつ等と手を組みそうな感じなのがなあ。

俺等、仲間じゃん？

今までだつて3人で上手くやってきたつて言うのによお。

あんな連中いなくなつて、俺と夏美でサポートできんのに。  
つて、こんな夜の丘の上で1人愚痴つてるのも情けねえ……

「はあ……」

なんて思つてる矢先だつた。

不意に後ろから足音が聞こえたのは。

音の感じからすると夏美や志村じゃあ無え。それに、殺気なんてあいつ等が出すはずが無え。

それなら、ブレイドとかレンゲルとか、あの辺の連中か？

いや、それならもつとけたたましい。馬鹿みたいな声で声をかけてくるはずだ。

だとすると……

ひょいと、俺は後ろの奴の攻撃をかわし、その姿を確認する。

青い色をした、蜘蛛を髭鬚ほっぺとさせるフォルム。蜘蛛と言えばレンゲルになる為のクラブのリースと、クラブの最上位であるクラブのキングの2体。けど、カテゴリーリースであるスパイダーアンデッドはチーフが封印して、今はレンゲルの野郎が持っているはずだ。

……って事はこいつ……

「カテゴリーキングか！」

俺が言つと、そいつは正解だと言いたげに俺との距離を詰めるべく走って来る。が、それを許す俺じゃねえんだよ！

『OPEN UP』

変身すると同時にエネルギーが展開。

俺をケルベロスの力の仮面ライダー……ランスに強化する。

ランスとは槍の事。その名の通り、俺の武器は槍だ。

「最後のキング！俺が封印してやる！」

そう宣言すると、俺はその槍を構えてキングに何発か攻撃をぶち込む。しかし流石はキング。普通ならよるめき位はする俺の攻撃を受けても、あまり堪えた様子が無い。

ブレイド達なら、封印したアンデッドの力を使って相手を弱らせるとか言う手段に出れんだろうが、俺達が扱うマイティのカードは切り札だ。使うタイミングは今じゃない。

もう少し、もう少し。キングの動きを止めてから……

なんて思った時。キングが槍の穂先を掴み、俺に攻撃……っつか、打撃を加えてきた。殴ってきた、と言っても良いと思う。

槍を掴んだと言ふ事は、自分から動くつもりは無いって事だ。つまり今が、マイティを使うタイミング！

俺が1人でもキングを封印できるって事……あんな奴等よりも頼りになるって事、見せてやる！

『MIGHTY』

カードを読み込ませ、俺は押さえられていた槍先をキングに向けて突き出す。

槍は本来、「薙ぐ」、「殴る」為の武器じゃあない。「突く」為の武器だ。それを失念して穂先を掴んだのがこいつの敗因。

エネルギーチャージがされてんだ、喰らって無事であるはずが無い！

案の定、キングは草の上に倒れて……

封印するなら、今しかねえっ！

「おおおおおっ」

口から勝手に雄叫びが洩れるが気にしない。俺はカードを投げて……最後のキングを、封印した。

「やったあ……やったぜ！」

俺が封印したんだ！

誰の力も借りず、俺だけの力で。

これで、志村だって気付くはずだ。

1番信頼できる仲間、誰かって事にさ。

俺と、夏美と、志村。仮面ライダーはこの3人で充分だろう？

チーフも、ブレイドも、レンゲルもいらぬ。

……なんて、思っている間に。

不自然なまでに濃い霧が、俺の周りを取り巻いていた。

……何か、ヤバイ。

そう思い、俺は周囲を見渡す。

霧のせいで視界が狭い。おまけにいきなりの雷雨と来たもんだ。

だけど……その雷のお陰で、俺は相手を見つけた事が出来た。

白い影に、胸元の赤い宝玉。頭から伸びた、長い2本の触角のせ

いなのか、どこと無くカミキリムシのようなフォルム。

チーフから聞いていた姿と一致する。間違い無え……今、俺の目

の前には……

「貴様は……ジョーカー！」

鎧を纏っているんだから、雨が当たってる訳でもない。なのに……

……妙に冷たい空気が肌を直接撫で回しているような錯覚。

咄嗟に俺は武器を構えて……

負けた。

最後の最後、ソイツは俺のよく知る人物に姿を変えて。

「嘘……だろ？ なん、で……」

聞いても、ジョーカーは答えてくれない。

いや、聞こえない、だけか。

相手の唇が何か言葉を紡いでいるのが見える。けど、その視界もちよつとぼやけてきた、かも。

俺は、きつと死ぬ。

でも、知らせねえと。

託さねえと。

何とか逃げ切つて、建物の中に戻る。

アイツ以外なら誰でも良い。早く来てくれよ。

思つてたら、倒れた俺の後ろに、誰かの気配を感じた。

うん。こいつは、ジョーカーじゃねえよな……？

「ジョーカーが、現れた。これ……これを……」

俺の後ろから現れたそいつ……夏美にそう言つと、俺は手に持っていたキングのカードを彼女に渡す。

良かったな、夏美。これで強くなれるんじゃないの？

強くなりたいって言つてたもんな。

でも……

「逃げろ……。奴の狙いは……これだ」

俺さ、お前の事、本当に好きだったんだ。だから頼む。逃げてくれ。

……生きてくれ……

無表情な夏美が去つていくのを感じて、俺は最後の賭けに出た。

ブレイド、レンゲル。俺、お前等の事、嫌いだけど……

教えてやらねえと……

俺を殺した、ジョーカーの正体。

最後に見た、「あいつ」の名前。

……悪いなあレンゲル。

アンタのカード、借りっ放しだったわ。

……ああ、死にたくねえ……

死にたくなんか、ねえよ……

「おい！ しつかりしろ！」

夏美に連れられ、倒れた禍木に駆け寄る志村。その後ろには剣崎と睦月がいる。

志村に続き、剣崎も駆け寄り彼の名を呼ぶが……一切、反応が無い。肌が冷たいのは雨に濡れているせいなのか、それとも……

嫌な予感に押され、剣崎がゆっくりと首の脈を測る物の、本来あるはずの鼓動を感じ取る事は出来なかった。

「……そんな……」

剣崎の呟きに、緊張の糸が切れたように、夏美は志村に抱きついて悲鳴を上げる。

それは仲間を失った悲しみか、それとも人間の死体を目にしたが故の恐怖からか。

そんな夏美とは逆に、剣崎は意外にも冷静だった。

人の死を目の当たりにして、気持ち良い訳が無い。しかし今は、取り乱すよりも先にすべき事がある事もまた、剣崎はわかっていった。

禍木の手握られていた1枚のカードを抜き出し、見る。

抜き出されてはじめて、その存在に気付いたのか、志村も驚いたような表情でそのカードを見つめた。

クラブのジャック。封印されているのは、エレファントアンデッド。

それが禍木の残したカード。

「一体、誰が!？」

志村が、悲痛な叫びを上げる。

だが、彼は気付いていなかった。

彼に抱きついた女が、そのポケットからこっそり3枚のキングを奪った事に。

そしてその時、彼女が浮かべた表情が……満面の笑みであった事にさえも……

橋は、1人最深部にあるレリーフを見上げていた。  
上での騒ぎ……禍木慎の死など、気にも留めぬ様子で。

まるで豪雨にでも打たれたかのように、ずぶ濡れになった体から、  
ぼたぼたと水滴を落として。

そして……くるりと踵を返すと、無表情のまま彼はどこかへと歩  
き始めた……

馬鹿な禍木。

キングを封印しても、死んじゃったら意味無いじゃない？

純粹な純一。

でもポケットにキングのカードを入れておくのは無用心よ？

2人のお陰で4枚のキングが揃っちゃった。

これで私は強くなれる。

あんな奴等よりも。

そして、純一よりも。

私は、純一の事が好きよ。

でもね、私より強いつて言うのは許せないの。

私が1番強くなきゃダメ。

超古代の力にも興味あるけど、この4枚だけでも充分に強くなれ  
る。

仮面ライダーに選ばれたときから、私の中に響く声。

強くなりたい。

私、こんなに上昇志向強かったっけ？

1番でいたい。

これってライダーシステムの副作用？

でも良いの。私が1番である事で、誰にも迷惑なんてかけてない  
んだから。

そう思った時。見覚えのある人影が私に近付いてきた。

「あら……?」

ゆっくりとした足取りで、こっちに近付いてくる。

でも、様子がおかしい。何だか分らないけど、怖い……

怖い?

強くなったのに、怖い?

どんなに振り払おうとしても、私の中から恐怖は消えない。

まさか、ジョーカー……?

禍木はジョーカーが現れたって言っていた。ジョーカーの狙いが、4枚のキングだとも。どうしよう。私、今4枚とも持つてる……

……そうよ、怖いなら、捨てれば良いじゃない。

嫌よ、せつかく手に入れた「力」なのに。

……でも、死んじゃったら終わりよ?

死ぬはず無いじゃない。

私は強くなったのよ。

それじゃあ、何で私は「彼」から逃げてるの?

「あ、あ……」

ほら、恐怖で声も出ないじゃない。

禍木は、こいつに、殺された。

逃げなきゃ。

逃げなきゃ。

雨の中、私は逃げた。でも、相手に威圧されて、足が竦んで上手く動けない。

ゆっくりとした動作で、「彼」の手が私に伸びてくる。

ころされる

「……きゃああああああっ!」

そうね、こんな悲鳴を上げるのが精一杯。

だからキングのカードを奪われて、首まで絞められているのよ。

すうっと、満面の笑みを浮かべている「彼」の顔が、一瞬だけ白いジョーカーへと変わる。

……ああ。

禍木の残したカードの意味、そう言う事、だったのね。  
なら、私が残すカードは……

……スピードスート……ブレイドのカードじゃないの。

お願い、気付いて。

このカードで。

手遅れに、なる前に……

私は

強くなりたかった

ただ、それだけ……

「夏美まで……そんなあつ！」

呆然と、豪雨の中で倒れている夏美の亡骸を眺めて、志村が眉根を寄せて嘆き悲しむ。慟哭にも似た嗚咽が、一瞬だけエントランスに響く。

今度は橘も傍らに立っていた。だが、その顔は他の面々とは異なり、無感情に近い。

……夏美も、禍木の時と同様に、その手にカードを握っている事に気付き……剣崎はそのカードをそつと彼女のてからそれを抜き取る。

スピードの4。封印されているのはローカストアンデッド。

それが、三輪夏美が最後の力を振り絞って残したカードだった。

誰も何も言わない。

誰も何も言えない。

激しく窓を叩く雨音と、周囲に轟く雷鳴だけが、その場に響く……

## その19：敵はこの中に

もう1人のジョーカー。

それは悲しみの産物。

……終焉を望む者。

「盗まれた？」

「はい。消えてるんです。キングのカードが3枚とも」

低い声で……しかし視線は窓の外に向けたままで放たれた橘の問いを、志村は緊張の面持ちで肯定した。

「可能性は2つ。カードを盗んだ誰かを追いかけて夏美は殺されたか、あるいはカードを盗んだ夏美を、誰かが殺したか……」

志村のその言葉……正確には「カードを盗んだ夏美」と言う一言を聞いた時。

橘を見ていたリュウタロスが、彼のほんの僅かな変化に気付いた。それまで何を言われても窓の外を眺めていた橘が、無表情のまま志村の方に顔を向けたのだ。しかしそれは一瞬の事。なおも続けられる志村の推論を聞きながら、橘は何かを思うように窓の外に再び目を向ける。

「何れにせよ、その誰かがジョーカーである可能性は強いと思います」

志村のその言葉に、返って来たのはただの沈黙だけ。

剣崎達も……そしてデンライナーにいる者達も、それに返す言葉が見つからなかった。

「クソ！ 一体誰がジョーカーなんだよ……！」

沈黙に耐えかね、苛立ったように壁を殴りつけながら、モモタロスは悔しそうに咆える。

それは禍木と夏美の2人の死を、指をくわえて見ているしか出来

なかったと言う無力感と、見ていながらもジョーカーの正体を暴けなかった事に対する苛立ちか。

「……やっぱり、ナオミちゃんの言った通り……橘がジョーカーなのかな……？」

「何でそない思うんや？」

「だって……禍木って奴が殺された時、何か凄く濡れてたし。それに……自分の部下が2人も死んじゃったのに、無反応だし」

「そうとは限らないよりユウタ。……僕は、どちらかと言うとあの志村って人の方が、よっぽど疑わしいと思うけどね」

沈んだ声で言ったりユウタロスに、ウラタロスはいつも通りの口調で返す。

「だって、あの夏美ちゃんがカードを盗んだって言う選択肢が拳がる事自体、おかしいじゃない？」

「でも実際、盗んだのはあの人よ。あんただって見てたじゃない」

「まあね。でもハナさん、僕達は見えていたから知っているんだよ？普通思わないよ、見てもいないのに、仲間がカードを盗んだなんて。普段から彼女に盗み癖があるって言うならともかく」

確かに、ウラタロス達は夏美が志村からキングのカードを盗んでいた事を見ている。

だがそれはデンライナーの中で見ていたから知っているのであって、あの時志村は盗まれた事に気付いていなかったはずだ。

あくまで志村としては可能性の1つなのだろうが、死者を……まして仲間だった者を貶めるような可能性を口にするだろうか？

それがウラタロスには引つかかっていた。

「嘔吐き亀がよく言うぜ」

「嫌だなあ先輩。僕は人を騙す事はしても、盗みはしないよ」

「えー？ でも亀ちゃん、良太郎に最初に憑いた時に尾崎って人から財布貰ってたじゃん」

「………何でリュウタがその事知ってるの!？」

「良太郎の中から見てたから」

心当たりがあるのか、驚いたように言ったウラタロスに、リュウタロスは当然と言わんばかりの表情でそう答える。

しかし他の面子はその意味を理解しきれなかったのか、不思議そうな顔をするだけ。

「僕が良太郎に憑いたのは、亀ちゃんが憑く直前だったもん。……忘れてたの？」

「……そう言えば、そうやったな」

「ごめん、最後に出てきたから、てっきり最後に憑いたと思い込んでた」

「って言うか、ガキ丸出しだからな。あまり最初の方から良太郎の中に居たって感じがしねーんだよ」

普段から末っ子気質全開でいるせいか、2番目に憑いたと言う事実を忘れられていたらしい。それぞれの言葉を聞きながら、リュウタロスはふてくされた様にそっぽを向いた。

……その方が彼らしくはあるのだが。

「それにしても、何で2人はあのカードを残したんでしょね？」

「ダイイングメッセージという奴だな。誰がジョーカーか、教えたかったのだろう」

相変わらず能天気な声で問うナオミに、ジークは小首を傾げながら答える。

「ジークはジョーカーが誰か、知ってるの？」

「残念ながら。そこまでは知らないし、知ろうとも思わない」

聞いてきたハナに、苦笑気味に言葉を返すと、彼は小さく欠伸をして……

「悪いが姫、そしてお供達よ。私はそろそろ、お昼寝の時間だ。休ませて貰う」

そう宣言し、深々と一礼すると……彼は当たり前のように別の車両に移ってしまった。

「……ちよっと待て、この鳥野郎！ お昼寝って時間じゃねえだろ！？」

「ええ？ 突っ込むところはそこなの、先輩？」

「わーい、お昼寝ー！」

「ぐおー……」

「って熊公！ テメーも何寝てんだよっ！」

……いつの間にか、重苦しい空気は無くなって。

デンライナーの中は、いつもの賑やかな雰囲気に戻っていた。

\*

晴天の下、天音はぼんやりと噴水を眺めていた。

春先だというのに、日差しは暖かいを通り越して暑いくらいで、まるで初夏のような気温。

今まで、こんな暑い自分の誕生日があっただろうか。

「天音ちゃん」

「……ホントしつこいよね。放つと言ってって言ったのに」

ふらりと現れた剣崎に声をかけられ、天音は不快な表情をはつきりと浮かび上がらせる。

1人になりたいのに、どうしてこの男はこうも自分に構うのか。自分には何か、発信機のような物でも付けられているのかと疑いたくなる。

「いや、実はさ」

天音の様子を気にも留めないかのように、剣崎は嬉しそうな表情で、持っていた布の鞆の中から何やら取り出す。

かさかさとビニールの擦れ合う音がしたかと思うと、出てきたのは先日ゲームセンターで天音が取ろうとしていた仔猫のぬいぐるみ。

「ご丁寧にも透明なビニール袋と水色のリボンで愛らしくラッピングされている。」

「にゃーお。誕生日プレゼント」

「……馬鹿じゃないの？ いつまでも子供扱いしないで！」

「天音ちゃんごめん！」

不快感を露にし、その場を早足で去ろうとする天音を慌てて追いかけてながら、剣崎は謝罪の言葉を口にする。

「でも天音ちゃん、本当に大人なのかな？ 他人ひとの気持ちがわかるのが、大人だと思うけど。例えば、お母さんの気持ちとか」

お母さんは心配してるんだよ、と言外に言いたかったし、察して欲しかった。自分を詰るのは構わない。男だし、年頃の女の子の気持ちなど理解できないのも分る。

だが、彼女には家族が……母親がいる。それは剣崎にとって、求めても手に入らない物。だからこそ、天音には大事にして欲しいと願う。それ故の言葉だったのだが……

心は、声にしなければ届かない。剣崎の言葉に何を思ったのか、天音はぴたりと足を止めて振り返る。

そこに浮かぶ表情は、不快を通り越して怒りの色さえ見えた。

「何よそれ？ 説教臭い事言わないでよ！ ム力つくなあ！」

そう、半ば怒鳴るように言い放つと、天音は視界から剣崎を消す為に走り出す。これ以上剣崎と一緒に居ても、不快感が増すばかりだ。

……他人の気持ちがわかるのが、本当の大人だと言うのであれば。今の自分の気持ちをわからない剣崎も、大人では無いと言う事にならないのか。

いや……本当の大人など、この世にはいないのでは無いのか。

なおも何か言おうと、走って追いかけてくる剣崎が、鬱陶しい。そう思った瞬間だった。

いつか見た白い異形……アンデッドによく似た「何か」が、無数に襲い掛かってきたのは。しかもその殆どが、自分に……天音に向かっている。

「きゃあああああっ！」

逃げなければ、と言う本能が、彼女の足を動かす。

何故、自分ばかり狙われるのか。

何故、自分の方にしか来ないのか。

そんな疑問が脳裏に浮かぶが、それ以上に異形に対する恐怖心の方が大きかった。

「変身！」

後方で剣崎の声がする。同時に自分を追いかけていた異形達が弾き飛ばされ、変身した剣崎が自分の肩を抱いて守るようにしながら走る。

この時ばかりは、剣崎がいてくれた事に感謝した。剣崎には、彼等と戦う力がある。

……仮面ライダーと言う名の力が。

……ただ……本当に大丈夫なのだろうか。

いくら剣崎が強いとは言え、数があまりにも違いすぎる。彼の死角から襲われたら自分は……

そして……天音のその懸念は当たってしまった。

数に物を言わせ、アンデッドが四方から自分めがけて襲い掛かってきたのだ。

「きゃあっ！」

口から、悲鳴が洩れる。

恐怖のあまり、堅く目を閉じたその瞬間。

数発の発砲音と共に、自分の眼前に迫っていたアンデッドが弾かれたように倒れた。その直線上にいるのは、ギャレンに変身していた橋。

いや……彼だけではない。レンゲルとグレイブもまた彼らの存在を察知し、天音達を助けるために、無数に存在する異形と交戦していた。

それでも、アンデッド達は天音を執拗に狙っていた。それに気付いたのか、ギャレンは天音の側へ寄ると……

「天音ちゃん、こっちだ」

冷静な声でそう言うと、彼女を守るようにして戦線を離脱した。

……まるで、人目につかない場所へと彼女を連れ去るかのよう

\*

「何や、もう次に着いたんか？」

「とつくに到着してるよキンちゃん。今、橋って人が天音って女の子を連れて戦線離脱したトコ」

剣崎達の戦いの側で停車したデンライナー。

その戦いの気配に目を覚ましたのか、大きな欠伸をしながら問うキンタロスに、ウラタロスが呆れたように答えた。

そして、当たり前のように壁に映し出されたのは、変身を解き、アルビローチ達の手を逃れ……廃墟に天音を連れ、壁際に彼女を立たせた橋の姿。

「やけに、霧が深いねえ……」

ウラタロスの呟きは、その場にいた全員を代表するもの。

まるで禍木が殺される直前のような、霧の深さ。

建物の中のライトだろうか。どこからか差し込む緑色の光のせいで、どこと無く橋の表情が不気味なものに見える。

まさか本当に、橋がジョーカーなの？

誰もいないかを確かめるかのように周囲を見渡す橋を見つつ、リユウタロスが心の中で呟く。

そうであって欲しくない。だが、そうかもしれない。

少なくとも、今の橋からは、冷たい雰囲気しか感じられない。

「橋さん……？」

天音も彼の異様な雰囲気気がついたのか、やや怯えた様な表情で声をかける。

「君は不思議に思うだろうな。何故君が何度もアンデッドに狙われるのか」

天音に背を向けたまま発せられたその声は、思った以上に低かった。

「キングのカードが4枚揃ったんだ」

この世界に来て、初めて。

橘が嬉しそうな笑顔を見せた。

「だけどそれは……この場には不釣り合いすぎた。思わず、背筋が凍りつきそうな程に。」

「……何で……?」

「あん?」

「何で橘がその事知ってんの……?」

泣きそうな声で、リュウタロスが呟く。  
知っているはずが無い。

最後のキングを封印した禍木は死んだのだし、それを託された夏美もまた、何者かに殺された。唯一、4枚のキングが揃った事を知っているのは彼女を殺した存在だけのはず。

そしてそれはきつと、アルビノジョーカー。

嫌だ、そんなの……絶対に嫌だ!

元の世界の橘を知っている上、リュウタロスにとって橘は恩人である。

それが殺され、ジョーカーに成り代わられているなどと言う事は、彼には良太郎が存在しないとと言う事実の次に認めたくない事であった。

それでも、橘の宣告は続く。

まるで、天音に……そして自分自身に言い聞かせるように。

「後は君の命が必要なんだよ。古代の偉大な力を解放するためには」「何を言っているんですか? 橘さん……?」

淡々と述べられたその言葉の意味を、天音は理解できなかったらしい。口の中が渴いているのか、彼女の声も乾いている。

そしてそれはデンライナーの乗客と同じ。彼の言葉の意味を理解できず、ただ押し寄せる「嫌な予感」のせいで口内が、そして喉が妙に渴いていく

天音も……そしてハナ達も、不審そうな表情で橘の様子を窺った。

「古代のバトルロワイアルにおいて、勝利したのは人間だった。人間の命を捧げなければ、偉大な力は解放されない!」

興奮した口調で、橘は天音にそう語りかけた。

イマジンの契約の代償は自分の時間だったように、古代の力を得る事にも、代償は必要だったのだ。

……「ヒト」の命と言う、人間にとっては大きな代償が。

だが、天音には何の事が分かるはずがない。

にもかかわらず、橘は言葉を続ける。

「だが、誰でも良いと言う訳では無い」

話が、核心に迫っているような気がした。

異様な空気が漂う中、全員が黙って橘の言葉を待つ。

「君のお父さんは、谷川連峰で死んだんだよね？」

「何の関係があるんです？」

「同じ山で古代のレリーフが発見された。レリーフを封印していた扉は壊されていた。……それと知らず、君のお父さんが扉を開いてしまったんだよ」

……何となく、ぼんやりとだが、話が見えてきたような気がした。「偉大な力を得るためには、封印を解いた者の命を捧げなければならぬ」

そこまで言われて……デンライナーの乗客全員が、天音が狙われる理由を理解する。

「それって、身代わり……って事、ですよね？」

「ああ、多分な」

いつに無く悲しそうな声で落とされるナオミの言葉に、モモタロも低く暗い声で返す。

捧げなければならぬ命は、とうに失われていた。

ならば、どうすれば良いのか。

……最も近い存在を、代わりにすれば良い。

そう。本来の贖の、たった1人の血族……娘である、栗原天音を。

「君はお父さんの代わりなんだ」

「……わからない。何でそんな……」

淡々と告げられた橘の言葉に、天音は首を横に振りながら問いか

ける。

何でそんな事を告げるのか。

何でそんな事になるのか。

そして、橘は自分をどうする気なのか。

半ば彼女がパニックになりかけているのが、乗客には分かったが

……手を出す事は、出来なかった。

悔しさで、ハナが叫びそうになったその瞬間。

「チーフ！ 僕達だけじゃとても無理です！ 来て下さい！」

変身を解いていた志村が、必死な形相でその場に現れ、橘を呼ぶ。

その表情に危機感を感じたのか、橘は天音の方をチラチラと振り

返りつつも、志村の後を追って建物から出て行く。

霧の深い、建物の外へと。

橘達が天音の前から立ち去ってから、そう時間を置かず。

天音は自分に向かって近づく足音を聞いた。

「どうしたんですか……？ あの……？」

近付いてくる人影。

「けどそれは徐々に「人影」ではなくなつて……」

「きゃああああああつ！」

今日、何度目の悲鳴になるだろう。

栗原天音は、ライダー達より一足早く、アルビノジョーカーの正  
体を知った……

## その20：贅の少女を

1人で在る事は、あまりにも寂しく。  
1人で居る事は、あまりにも悲しく。  
1人で得る事は、あまりにも虚しい。

橘朔也が戦線を離脱してほんの少し後。

禍木と夏美の残したカードの事を広瀬栞に伝えに行つたはずの虎太郎が、車の助手席にその広瀬本人を乗せて現れた。

今日が、結婚式の当日であつたにも関わらず。

そして、「普通の女の子」に戻つたと宣言したにも関わらず。

広瀬は、かつての仲間を見捨てる事が出来なかつた。

……禍木と夏美が残したカードの意味に、気付いてしまったから。望んで手にした「普通」を、放り投げてまで。

「分かつたんだ剣崎君！ ジョーカーの正体が！」

「なんだって!？」

アンデッドのうちの1体と切り結びながら、虎太郎の方に顔を向けブレイドは叫ぶようにそう返す。

そのまま近くにいるアンデッドを斬り捨てると、ブレイドは虎太郎達の方に駆け寄つた。

「広瀬さんが気付いたんだ、2人が持っていたカードの意味！」

「多分、間違いないと思う」

自信に満ちた表情で、広瀬ははっきりと言い切る。

それはかつて、剣崎と共にアンデッドを追っていたあの時の表情。

「……ありがとうございます、広瀬さん」

「……そんな事言つてる暇があつたら、早くジョーカーを見つけ。アンデッドサーチャーに引つかからないんだから」

剣崎の知る、気の強そうな口調で……でもどこか照れくさそうに、

広瀬はそう言った。

2体目のジョーカーを、見つけるために。

元の世界、1月30日。

「始……!？」

剣崎は、自分に向かって放り投げられた人物の名を呼んだ。  
見間違うはずが無い。

それは、かつての自分の友。

……相川始であった。

イマジンがそうしたのか、始の体は完全に拘束されており、身動きが取れないらしい。目隠しもされているから、自分がここにいる事は始には分かっているまいだろう。

意識はあるらしく、しきりに拘束を解こうともがいているが、解けるどころか緩む気配すらない。むしろかえって締まっていくようにも見える。

思わず始に触れそうになったが、剣崎はそれを寸前で止めた。

……触れてはいけないと、自分の本能が告げているから。

「……何で、始が……?」

「それが、望みだったからだ」

イマジンが、薄く笑いながら告げる。

「何?」

「契約者が、会いたいと願った。だからここまで連れてきた」

言うが早いか、イマジンは素早い動きで剣崎の眼前に迫る。

イマジンの顔が、自分の耳元に近付いていた。

「こいつに聞いた。2年も会ってなかったのだろう? それなら、

お前も会いたかったよなあ?」

まるで、誘惑するかのように。

イマジンはねっとりとした口調で囁きかける。

その瞬間。

腹部に感じた鈍い痛みと共に、剣崎一真の意識は闇へと墮ちていった……

「天音ちゃん！」

「天音！」

「大丈夫、気を失っているだけだ！」

剣崎が虎太郎と広瀬を連れて天音のいる廃墟に踏み込んだ時、既にそこにはぐったりした天音とそれを抱きかかえている志村の姿があった。

気を失っているとは言っても、完全に意識を手放していた訳では無いらしい。彼女の意識はあるようだが、声が出ないほど衰弱しているようにも見えた。

「天音ちゃん！」

「一体何があつたんだよ！」

「わからない。悲鳴を聞いて駆けつけた時にはもう……！」

虎太郎の問いに志村が答える。

自分の大切な姪だけに、虎太郎の声に焦りや怒気のようなものが含まれていても、おかしくは無いだろう。いつものひょうきんそうな彼からは予想できない程、虎太郎の顔は真剣その物だった。

そのやり取りの間にも、天音は呼吸を荒げながら剣崎に手を伸ばす。……まるで、彼に救いを求めているかのように。

それに気付いたのか、剣崎はそつと彼女の手をとり、握り締めた。

「橘さんは!？」

「さっきまで一緒だったんだけど……急に居なくなつて！」

思い出したように言った広瀬に問われ、小さく首を横に振りながら志村は答える。

「まさか……まさか、橘さん……！」

「探すんだ! 天音ちゃんを頼む！」

志村の肩を叩き、剣崎達はその場を後にする。

それが不安なのか、天音は剣崎達に手を伸ばすが……そこが精神的にも肉体的にも限界だったらしい。今度こそ本当に、彼女は気を失った。

それを見て……志村がゆっくりと立ち上がる。

遠ざかっていく足音と影。

それが完全に消えるのを確認すると、彼は無表情に天音を見下ろし……

「志村純一」の姿が揺らいだのは、その時だった。

今まで「志村純一」が立っていたその場所には。

白い体に赤い爪。同じように赤い胸の宝玉。そしてどこかカミキリムシを連想させるフォルムの異形……相川始とは異なる、もう一体のジョーカーが立っていた。

「貰うぞ。貴様の命」

低く、「志村純一」と同じ声でそう呟くと、そいつはゆっくりと天音に近付き……その指先が彼女に触れようとした瞬間。

廃墟の奥……出入り口とは逆方向から、何者かのキックを喰らい、その体は結局天音に触れる事無く大きく吹き飛ばされた。予想だにしていなかった出来事に驚いたのか、そいつは天井にべたりと張り付くと、自身の体を蹴った存在に視線を向ける。

ここに居るのは、先程橋を探しに行つたはずの剣崎一真。彼の後から虎太郎と広瀬も姿を現し、天音の方へと駆け寄ってきた。

「やっぱり……お前がジョーカーだったのか！」

剣崎の表情には憤怒の色が濃く表れていた。一方のジョーカーは、再び姿を「志村純一」に戻し……しかし天井に張り付いたまま、心底不思議そうな表情で3人を見つめる。

「何故分かった？」

「殺された2人が握っていたカードよ。4とJ。あれはイニシャルだったのよ。『志村純一』を表すね」

「志村」の問いに答えたのは広瀬。

4と「し」というのに関して若干無理があるような気もするが、

それ以外に考えようが無かつたし、そう考えれば納得が行つた。  
「貴様あつ！」

橘と睦月も、奥から姿を見せる。どうやら広瀬の推理を聞いた睦月が、橘を探し出して伝えたらしい。

……橘は今までの無表情から一転して、怒りを露にしていた。騙されていた事や、烏丸を殺された怒りと言つのもある。だが、橘が怒っている理由はそれだけでは無い。

今までは、新世代ライダー達のチーフという立場があつたから、感情を殺してきた。

上に立つ者は、常に冷静でなければならぬと思つていたから。しかしそれもここまでの話。もはや感情を殺すべき理由も無くなつた。

それに何より。こいつは、自分を仲間だと信じていた禍木と夏美を殺したのだ。

……それだけは、どうしても許せなかつた。

「全員集合と言う訳か。……だが！」

「志村」はそう言うと同時に、ストーンと地面に降り立つと、持っていたバツクルをスライドさせてグレイブに変身する。

あえてジョーカーではなく、仮面ライダーとして。お前達の……

「ヒト」る言う種の時代は終わるのだと、引導を渡すかのごとく。

「既に4枚のキングは俺の手の中にある」

その言葉と同時に、部屋の奥の方から無数……と言つ言葉では生温いくらいの数のア宁德ッドが、彼らを挟むように出現した。

\*

バーディーミサイル格納庫にいた元・オーナーはぼんやりと窓の外を眺めていた。

外は先程まで溢れかえっていたアルビローチの姿が煙のように消え、静かで穏やかな風景が広がっている。

「……また、来たのか？」

背後に生まれた気配を察し、彼女は振り返りもせず気配の主……  
ジークに声をかけた。

「うむ。ここは私の散歩コースなのだ。寝覚めの軽い運動にはちょうど良い」

「そうか」

「……何を見ている？」

「何も。強いて言うなら……悲劇の前兆、と言ったところか」

その言葉に納得したのか、それとも単純な反射運動なのか。ジークはふむと頷くと彼女の隣に立つ。

「この世界のアンデッドは……54体」

唐突に彼女が漏らした言葉の意味を汲みきれず、ジークは不思議そうな表情で、視線を外の景色から彼女へと移す。

確かに彼女の言う通り、この世界のアンデッドは52体の様々な種の始祖と2体のジョーカーの計54体。

しかしそれが、どうしたと言うのだろうか。

「では……元の世界のアンデッドは、何体だと思う？」

「それは謎かけか？」

だが、薄く笑みを浮かべるだけで、彼女はジークが答えるのを待つ。どうやらジークの問いに答える気は無いらしい。

少なくとも、彼女が何かを口にする様子は全く無かった。

「……ふむ、この間の様子からして、ジョーカーは相川始だけのよ  
うだからな。『正式な』アンデッドの数は52体だろう」

「正式な」の部分強調し、ジークは彼女の問いに答える。しかし彼女は一瞬だけきよとした表情になり……小さく笑った。

「それもそうか。さすがに貴方でも、全てを知っているはずは無い  
か」

「当然だ。何もかも知ってしまったては、面白くない。しかし……  
そなたのその様子からすると、外れたようだな」

「貴方が私を、『皇帝の下僕』と呼ぶから、てっきり知っている」と

「私も一応、『イメージ』だ。落とした記憶の方が、多い」  
あまり威張れた事では無いのだが、堂々と胸を張ってジークはそう答える。

モモタロス達のように、自分の過去の全てを無くした訳ではないが、ジークもイメージである以上、いくらかの記憶の欠如は否めない。忘れてしまった事が、瑣末な事なのか重要な事なのかも忘れてしまっている程度に。

それに納得したのだろうか。彼女は無表情のまま恭しくジークに向かつて一礼を返すと、そのまま言葉を吐き出した。

「では……改めて自己紹介をさせて頂こう。この列車の製作者にして、全てのライダーシステムに関わりし者。スピードスーツのカテゴリーパージ……」

言葉と同時に、彼女の目の色が変わっていく。

…… 比喩ではなく、本当に。

ネコ科の生物のような縦に長い瞳へ、そして黒目部分は金色に。いや。変化していたのは、瞳だけではなかった。彼女の首から下もまた、変化していたのである。

人型のままではあるが、変化した体はどこと無く獅子を思わせ、背には鷲の翼のような物が生えている。白銀の体色が純白の翼に映えて、荘厳さすら感じられた。

「スフィンクスアンデッド。それが私の正式な名だ」

あっさりと、彼女……スフィンクスアンデッドは自らの本性をジークに曝け出した。

だが……何故だろうか。彼女もアンデッドであるはずなのに、敵意や闘争心と言った物は一切感じられない。彼女を獣と呼ぶには、どこか遠慮したくなる雰囲気がある。

「ほう？ 『ページ』と言う物ははじめて聞くな。何なのだ、それは？」

「そうだな。カードで言えば、10とジャックの間に位置する。カードには省かれているが、タロットの小アルカナと呼ばれる物には

入っており、訳すと『小姓』になる。だから……我々アンデッドは各スート14体、全部で56体だ」

「成程な。……では、そなた達『カテゴリーページ』とやらの役割はなんなの？ 仮にもアンデッドなのだから、そなた達もバトルファイトの参加者ではないのか？」

その問いを聞いた時、彼女の瞳が一瞬だけ、遙か遠い所を見た。それに気付かぬジークではないが、今は彼の好奇心から来る疑問に答えてもらう方が先決らしく、何も口にはしない。

「まず、後半の質問の答えから言えば『我々はバトルファイトの参加者ではない』。我々カテゴリーページは他のアンデッドと異なり、バトルファイト開始時には封印され、バトルファイト終了と同時に解放される。その理由が前半の質問の答えになる。我々の役目は『バトルファイトの勝利者とその種の守護』だからだ」

「……バトルファイトの勝利者が、孤独にならんように、か」  
「そうだ」

心のある者は、孤独には耐えられない。まして……それが無限に続く時間ならば、なおの事。その「孤独」を癒すために存在するものが、彼女とその仲間……カテゴリーページと呼ばれる存在なのだろう。

しかし、彼女達の存在理由を聞いて……疑問に思う事もある。

「バトルファイトの勝利者とその種の守護」が彼女達の役目ならば、なぜ彼女はヒューマンアンデッドが封印される事を防ぐ事ができなかつたのか。

そう問おうとしたのを察したのか、ジークが言葉を発するよりも先に、スフィンクスアンデッドは口を開いた。

「確かに、ヒューマンを守る事ができなかつたのは私の落ち度だ」

「ふむ。己の過ちを認めるのは良い事だ。だが……そうか、思い出した」

「……何を？」

唐突なジークの言葉に、彼女は顔を訝しげに歪めて問う。

彼の今の反応は、彼女にとってかなり予想外の物だったのかも  
れない。しかしジークは、当然と言わんばかりの表情で先程思い出  
した事を口にした。

「『皇帝の下僕』とは、アンデッドの事を指し示す言葉だったと言  
う事実を。全てのアンデッドは、<sup>すべ</sup>く彼<sup>か</sup>の世界を守るための存在  
だったのだな」

「そう。ジョーカーを除く、全てのアンデッドは、皆『皇帝の下僕』  
だ。しかしジョーカーは『皇帝の下僕』では違う。『皇帝』同様、  
世界を造り、統治する権限を持ちながらも未だ自らの世界を造らず、  
様々な世界を見聞きする者……『愚者』。その方が我々の世界に遣  
わした存在。それがジョーカー……『愚者の欠片』」

まるで歌うように、スフィンクスアンデッドは朗々とした声でジ  
ョーカーの真実を語った。

……こんな話がある。

プレイング・カード……一般的にトランプと呼ばれる物は、往々  
にして数字だけであった。

春夏秋冬を示す4つの印を作り、そのそれぞれに13枚を振り分  
けて1年間……52週と同じ数である52枚で遊んでいた。

しかし、全ての数字を足し合わせて出来上がったのは、1年間…  
…365日より1だけ少ない364と言う数字。ならば、「遊び」  
としての要素に「最強の札」を取り入れ、それで欠けた1を補おう  
と思った時……タロットカードの大アルカナと呼ばれる、世間で知  
られている、絵の描かれたカードを思い出した。

その中でも、別格扱いの「0」と言う番号を付けられた「愚者」  
を、その「最強」に宛がってはどうか、と。

それが「ジョーカー」の由来であると言われている物の、歴史的  
に関連が無いため、間違いとされている。

だが、アンデッド達においては、それは「間違い」ではなかった

らしい。

爪弾き者の「0」番である「愚者」は、「皇帝」の統治する世界を知りたいがために、彼の存在が作った下僕……アンデッドに似せた己の分身を送り、その見聞を広めようとしたのである。

その、「アンデッドに似せた存在」こそが、ジョーカーであると……そう、彼女達は言いたいらしい。

「運悪く、バトルファイトの最中に来てしまったものだから、『アンデッドとして』封印されたがな。似せすぎるのも考え物と言う事だ」

「……だからこそ、モノリスを『月』に奪われた今、厄介な事になっておるのだらう?」

「仕方あるまい。『月』すらも、ジョーカーをアンデッドだと思い、そしてジョーカー自身も、己がアンデッドであると思込んでしまっているのだから」

「その代わり、そなた達はアンデッドと思われていないようだな」  
「……慣れている。むしろその方が好都合だ。動きやすくて良い」  
言葉の割には、どこか不快そうにそう言うスフィクスアンデッド。

言いながら、徐々に彼女の姿がアンデッドからヒトの物へと変わっていく。

アンデッドとしての自分に誇りを持っているが、元の姿では行動し辛い事もまた、彼女は知っているのかもしれない。

「そろそろ戻られてはいいかな? 未来の遺産の1つが、しばらくすればお目見えだ」

「……そなたはどうするつもりなのだ?」

「私は、モノリスを奪還する。そのために、ここにいる」

意味深な笑顔をジークに向け、彼女は改めて深々と一礼をする。

だがそれは、以前ジークが見た物とは違い、何かの決意を感じさせるものであった。

「……では、また会おう、『皇帝の下僕』よ」

「お会いする事が、出来る状態ならば」

頭を下げたまま、彼女はジークに言葉を返す。

それに満足したのか、ジークは小さく頷くと食堂車の方へと戻っていった。

「……また、お会い致しましょう。『この』世界に送られ、そして見限った……『愚者の欠片』様」

見えなくなつたジークの背中に向かって、「スフィンクス皇帝の下僕」は「愚者の欠片」に向かつてそう呟いた。

『変身！』

剣崎、橘、睦月の3人は、変身すると同時に何の打ち合わせもなく、自分達の後ろの壁を各々の武器で同時に攻撃、破壊して退路を作った。

その目の前に広がるのは、やたらと障害物のある部屋。

どうやら、剣崎達はそこでアルビローチを喰い止める気らしい。

「逃げる！」

言われ、非戦闘員である広瀬と虎太郎の2人は剣崎に向かって頷きを返し、未だふらついている天音を守るようにしてその建物から逃げ出す。

そんな彼らを……否、天音を追うように後ろから迫ってくるアルビローチ達を薙ぎ払い、打ち倒し、叩きのめす仮面ライダー達。

彼らの、ブランドを感じさせない戦いが繰り広げられる。

「橘がジョーカーじゃなくて良かった……」

心底ほっとしたように、リュウタロスが呟きを落とす。

だが同時に、ある疑問が彼の頭を過ぎった。

……オナーは何故、橘を助けるように指示したのかを。

橘朔也を助けなければ、「この世界」と「元の世界」がつながると言っていた。恐らく橘が「死ぬ」事で、アルビノジョーカーが成り代わりやすくなるからだと思っていたのだが……

だが、悠長に考え事をしている状況では無い。

志村が、一直線に剣崎めがけて斬りかかって来たのが見えたから。  
「あいつ……何で剣崎さんばかり狙うのかしら？」

鏝競合う剣崎と志村を見て、ハナが誰にと言う訳でもなく問いかける。

剣崎がブレイドに変身できるようになった時も、志村は睦月には目もくれず、剣崎にのみ戦いを仕掛けた。まるで彼の強さを確認するかのよう。

あの時は本当に確認の為に戦ったのだろうが、彼の強さを分かっている今、剣崎に構う必要は無いのではなからうか。

「確かに、ちよつと不自然だよねえ」

ハナの疑問の意味を理解したのか、ウラタロスもそれに同意する。  
「どう言う事や？」

「志村……いや、アルビノジョーカーは、彼と戦う必要が無いって事だよ」

「何でだよ？ 邪魔な奴はぶっ飛ばすのが基本だろ？」

心底不思議そうなモモタロスの問いに、ウラタロスは溜息と共に呆れたような表情を浮かべ、哀れみの視線を送りつつも、彼にも理解できるようと自身の考えを口に出す。

「あいつの目的は、『古代の力』でしょ？ 僕なら剣崎のまほろに構わず、天音ちゃんのところへ直接向かうよ」

言われ、モモタロス達は納得したようにぼんと手を打つ。

確かに、アルビノジョーカーの狙いは天音であって、剣崎ではない。

邪魔ではあるが、それはアルビローチ達に任せればいくらでも足止めは出来る。その間に天音を狙い、彼女の命を捧げれば良い。

その事に気付かぬ志村では無いはずなのに……何故、わざわざ剣崎と剣を交えているのだろうか。

そんな事を考えている最中。

「志村あつー！」

剣崎と斬りあっていた志村に、少しでも余裕の生まれた橋が叫びながら連射。その衝撃で志村の持っていたカードの内の何枚かが床にばら撒かれた。

流石に、キングのカードは無かったが……

それでも、剣崎は気が付いたようだ。

そのカードの中に、かつて自分が封印した、「最後のアンデッド」のカードがあった事に。

「これは……！」

慌ててそのカードを拾うと、すぐに体勢を立て直して志村の剣を受ける。そして、ほんの少し後に。

「きゃあああああ」

「天音ちゃん！」

天音の悲鳴が響いた。

だが、剣崎や橋、睦月では彼女を救うのに到底間に合わないし、何より今は手を放せない。

「おい！ ヤベエンじゃねえのか!？」

「成程ね。アルビノジョーカー自身が行かなくても、彼女を捕まえる事が出来たって訳、か」

窓の外の光景と、壁に映された映像を交互に見ながら、苦々しい表情でウラタロスは呟く。

窓の外にいるのは、アルビローチに囲まれて気絶している天音。

彼女を守っていたはずの虎太郎と広瀬は、アルビローチに吹き飛ばされたらしく、苦悶の表情を浮かべながら少し離れた所に倒れている。

「ねえ、このままじゃ、あの子死んじゃうよ！」

「わかってる！ けど、仕方ねえだろ！ 俺達はデンライナーの外には出られねえんだぞ!？」

「でも！ こんな目の前にいるのに!? 僕だってモモタロスだって亀ちゃんだって熊ちゃんだっているのに!? 何もしないで見てるだけなんて……それでまた、人が死んじゃうなんて、もう嫌だ!」

「馬鹿野郎！ そんなのはなあ、俺達だつて同じなんだよ！」

この世界に来て何度、自分達の目の前で人が死んだ？

禍木や夏美だけではない。

アンデッドに襲われて死んだ人間が、大勢いる。

人の死は、人の死。そこに異世界も元の世界も関係無い。

手を伸ばせばきつと届くのに、それが出来ない今の状況が、どうしようもなく歯痒くて……悔しかった。

そんなモモタロスの気持ち伝わったのか、リュウタロスははつとした表情になって……小さく、ごめんと呟いた。

だが。そんなデンライナーの乗客達とは対照的に、剣崎の方は諦めていなかった。

「睦月、睦月！」

何かを思い立ったかのように、剣崎は睦月に呼びかける。そして

……彼は、何の躊躇も無く、言葉を放った。

「始を……カリスを復活させる！」

そう叫ぶと、先程拾ったカード……『JORKER』と書かれたそれを、剣崎は睦月に向かって放り投げる。

そして、そんな剣崎の言葉に迷う事無く。

『REMOTE』

睦月は、剣崎の投げたカードを解放した。

解放されたその存在は、一瞬だけ周囲を見渡すと……すぐに状況を理解したらしい。

自分を見つめている剣崎に向かって小さく頷くと、自分の持っていたカードをバツクルに通し、窓の外へと消えていった。

\*

一陣の黒い風が、天音に群がっていたアンデッドを薙ぎ払う。

それは、漆黒の体に金の模様。手には弓のような鎌のような、何とも言い難い武器。見た目は蠅螂を思わせるフォルム。

それは……ようやく現れた、ハートースートの戦士……カリス。  
「この子に……近付くなあっ！」

咆えるようにそう叫ぶと、カリスは圧倒的な強さでアンデッドの群れを瞬殺し、気を失っている天音を抱えてその場から離れる。

まるで、彼女を慈しむかのよう。

そして……どれだけ離れただろう。近くの川を上り、かなりの上流にまで来た時点で、カリスは川原に天音をそつと寝かせる。

服が汚れるかもしれないが、もう1体のジョーカーから守り、隠す事を考えれば、いつまでも自分が抱えている訳にはいかない。

気を失った天音の頬を撫でるその姿は、いつの間にかカリスから人間……相川始へと変化していた。

……天音ちゃん。綺麗になつた……

久し振りに見た天音は、かつての面影を残しながらも、「可愛い少女」から「綺麗なお嬢さん」へと変わっていた。

……剣崎に封印されてからも、天音の事は忘れなかった。封印と言う深い眠りの中で見たのは、栗原母娘と過ごした、短くも優しい時間。彼女達の存在があったから、今の自分がいる。

そんな風に、心に暖かい物を感じたその瞬間。

背中に襲い掛かる衝撃と痛み。それを感じ取り、反射的に振り返ると……剣崎達を取り逃がしてしまったのだろうか。白いジョーカーが、川の中で悠然と立っていた。

「油断したな」

「貴様……！」

栗原天音の命を、奪いに来た。

それが分かっているのだろう。始はゆっくりと立ち上がると……その姿を、ジョーカーへと変貌させる。

……カリスとして戦っても敵わないと思ったのか、それとも単純に自分に似た姿のその存在が、自分と真逆の考えを天音に抱いている事が気に入らないからか。

咆哮に似た声をあげ、白いジョーカーに襲い掛かる。だが、白い

ジョーカーはそれを軽くかわすと、逆にその勢いを利用してカウンタキックをジョーカーに見舞う。

川に突っ伏しながらも、それでもよろよろと立ち上がろうとするジョーカーを……白いジョーカーは無慈悲にも自らの放つ何発もの衝撃波で、完膚なきまでに叩きのめした。

俺は、「栗原天音」を犠牲にする。

………全ての終焉のために。

そのために俺は、禍木と夏美すらも、この手にかけてのだから。

4枚のキングをかざし、彼女をカードに封じ込める。

「天音ちゃん！」

後ろで、相川始の音がする。苦しそうな、悔しそうな、悲しそうな……切なそうな声が。

ジョーカーの姿から、人の姿に「戻った」らしいな。

今なら、ジョーカーを封印できる。

だけど……封印しない。

お前を封印したら、誰も俺を止められなくなるだろう？

それと、キングのカードは置いていつてやる。俺にとつてはもう必要ないし……人間にも、可能性を与えておかないとフェアじゃない。

バシャバシャと水音を立てながら、ライダー達もやってくる。

だけど……もう遅い。俺は彼女を封じ込めた。後は偉大なる力を手に入れるだけだ。

「……早く……終わってしまえば良いんだ」

ライダー達には目もくれず、その場を後にしつつ俺は小さく呟く。自分でも驚く程、低い声で、だったけど。

「さあ、俺のモノとなれ、偉大なる力よ。お前の復活のために、『人間』の命を捧げよう」

カードをレリーフに嵌め込み、俺は誰にと言う訳でもなく宣言す

る。

同時に、強大な力が俺の中に流れ込んできたのがわかった。

俺は、アルビノジョーカー……世界を破滅に導く者。

それで、良いじゃないか。

徹底的に悪役になれば……良い。

## その21：お前の仕事

元の世界とは始まりの地。

異なる世界とはその写し身。

数多の可能性が、事実として存在する場所……

「何だ、あれは！」

アルビノジョーカーが消え、少ししてから現れ出たのは、巨大な異形。

それを見て、剣崎が声をあげた。無論……デンライナーの乗客達も。

恐らく「それ」が、アルビノジョーカーが望んでいた物……「偉大なる力」とやらなのだろう。

「イメージが暴走したイマジンに似てるけど……」

「外見はね。でも、全然違う。大きさとか……」

「多分、強さもな」

「それ」の胸の辺り……と表現するのが正しいのかどうかはわからないが、とにかく異形の中央近辺に、「それ」と融合したアルビノジョーカーがいる。

「それ」は4本の腕を持ち、上の右腕には剣、下の右腕には盾、上の左腕には聖杯型の何か、下の左腕には棍棒をそれぞれ持っている。

「それ」の危険性がわかっているのか、いつもなら間違いなく窓辺にくっついて外の様子を窺うであろうナオミでさえ、カウンターから窓の外を覗くだけに留まっている。

「……成程。古代の力とは、14の事だったのだな」

そんな緊張に満ちた空気の中、ようやく「お昼寝」から戻ってきたジークが入ってくるなり感慨深げにそう言った。

「14……それが、あの怪物の名前？」

「その通りだ、姫。アレはこの世界に存在する、破壊兵器だよ」

ハナの問いに恭しい態度でそう答えると、彼は優雅な仕草で窓際の席に腰を下ろす。

……彼は、わかっているのだろうか。

この戦いの、結末を。

「蘇ったんだ！ 眠っていた古代の力が！」

「何だ」と言う剣崎の問いに答えるように、橘が怒鳴るようにして返す。

14が現れた瞬間から、周囲は暗雲が立ち込め、激しく雨が降り出している。声を張り上げなければ剣崎達に聞こえないと思ったのだろう。

彼らとデンライナーの距離は10メートルと離れていないにもかかわらず、橘の声は轟々と吹く風の音に掻き消され、吹き散らされて聞き取り辛い。映し出された映像越しでも、何とか聞こえる程度だ。

「もはや誰も俺の力を封印する事はできない！」

豪雨の中、アルビノジョーカーの高らかな笑い声だけが大気を震わせ、彼らの鼓膜を叩く。

骨を連想させる白い色合いと、昆虫の殻のような物に覆われた細長い体。4本の腕は巨大な体躯に見合わぬくらい細い。巨体をくねらせ、向かい来る剣崎達を尾の部分で蹴散らすと、間髪入れずに右手の剣で薙ぎ払い、更には左手の聖杯型の「何か」……電撃発生装置を用いてダメージを与える。

……まるで、新しい玩具を得た小さな子供のように、アルビノジョーカーはその力を楽しんでいる。その一方で、攻撃された剣崎達は、与えられたダメージ故に変身解除に陥っていた。

仮面ライダーとして力を強化した状態でも歯が立たないと言うのに、生身の状態で持ち堪えられる道理は無い。

だが、諦める訳には行かない。

人類の未来のために。

「どうすれば良い！？ 何かあいつに……弱点はないのか！？」

「……ついて来い！ 最後の望みだ！」

剣崎の問いに、始が叫ぶように答える。

それを聞くと、橘と睦月にその場を任せ、2人はどこかへ向かって駆け出した。

「一体、どこへ？ それに、最後の望みって……」

軽く眉を寄せ、ハナが不思議そうに呟いた瞬間。ここから離れて行ったはずの剣崎と始の様子が、デンライナーの壁に映し出される。どうやら古代の遺跡から見つかったレリーフの元へ向かっていたらしい。映像の端に、半壊したレリーフが映っていた。しかし見た限りでは、天音の封じられたカードから下は特に損傷は無い。それは不幸中の幸いと言うべきだろうか。

淡いピンク色に光りながらも、天音の命を吸う事で力を発し続けるカードの様子に、ハナは悔しそうな表情を見せた。

レリーフの前に立つや否や、始は単刀直入に話を切り出す。もはや一刻の猶予も許されぬ状況にある事を、アンデッドとしての本能で察しているのだろう。

「扉が開かれた今でも、奴の力はこのカードによって維持されている。カードに宿った命を殺せば、奴の力は弱まるはずだ！」

……一瞬、始が何を言っているのかデンライナーの乗客にはわからなかった。

あれほどまでに大切にしていた少女を、あっさりと見捨てると言うのか？

剣崎も同じ事を思ったのか、怒ったように始に喰いかかる。

「殺すって……！ この中には天音ちゃんがいるんだぞ！？」

「お前が入れ替わるんだ！」

だが、そう返される事は始にとって予想の範疇だったのだろう。間髪入れず、剣崎に言葉を返した。

「出来るのかよ！？ そんな事が！」

「こいつは人間の命を求めるカード。お前が自分を投げ出せば、カードはお前を求める。その時、身代わりの命を差し出せば！」  
始の言葉の内には、確固たる自信があった。

だがそれは、同時に剣崎に「死ぬ」と言っているのと同じ事。  
……大切な少女と、大切な友を天秤にかけ、大切な少女を取ったのか。

「どっちも助かるって選択肢はねえのかよ……！」  
「ねえ、剣崎、死んじゃうの？ あいつ、剣崎の事、殺しちゃうの！？」

モモタロスとリュウタロスが、苦しそくに言葉を紡ぐ。

だが…… 2人にもわかつている。

栗原天音を助けるには、「人間」である剣崎が、己を投げ出すしか方法が無い事は。

そう。ジョーカー…… 「アンデッド」である始が命を投げ出したとしても、カードは反応しないのだ。

ただ、頭では理解できても心は納得できていない以上、他の方法を模索したがるのは当然かもしれない。

「……どうした？ 怖いのか？」

しばし無言でいた剣崎に、始が静かに問う。

だが、剣崎の沈黙の意味は「恐怖」ではなかったらしい。真剣な表情で、彼は始を見て……

「……………頼むぞ、始。後の事は」

「……………ああ」

それは、デンライナーの乗客が今まで見た事の無い、相川始の笑顔だった。

それでも、友が命を投げ出すのは見たくないのか、彼は石碑に向かって歩を進める剣崎に対し、きつく拳を握って背を向ける。

「あいつも、辛いんやな……」

「そうね……」

キントアロスの言葉に、力なく同意するハナ。始の表情は影になっ

てよく見えない。だが、微かに震える肩が、彼の苦悩を、そして嘆きを表しているように見えた。

「さあ！ 俺の命を代わりに！」

己の命を投げ打つかの如く、両の腕を<sup>かいな</sup>広げ、剣崎は「人の命を求めろカード」に向かって言い放つ。

その声と本気に応えたのか、カードからは薄桃色の光の壁が彼の前に展開し、それに向かって1歩、また1歩と歩みを進める。

そして……ゆっくりと目を閉じ、その光の壁に剣崎が取り込まれようとしたその刹那。

今まで剣崎に背を向けていた始が、くるりと踵を返し、剣崎に……その光の壁に向かって駆け出す。

そして彼を横へと突き飛ばし……光の壁の中へと吸い込まれていく。

全ては一瞬の出来事のはずなのに……デンライナーの乗客達には、その一連の行動がスローモーションのように見えた。

「っ！ 始ええええ！」

そして剣崎もまた。始がとった行動をようやく理解したのか、吠えるように親友の名を叫ぶ。

その声に応えるかのように、始と入れ替わりで今までカードに捕らえられていた「命」……栗原天音が解放される。

用済みとばかりに放り出された彼女を抱きかかえ、剣崎は何度か彼女の名を呼ぶ。何度目の呼びかけだっただろうか……天音は、苦しそくに咳き込んだ。

意識が戻った訳ではないが、命に別状は無いようだ。

それを確認すると、剣崎はほっとした様に彼女を抱きしめ、やがて光の壁……いや、始の方に目を向けた。

そこに映っていたのは、「相川始」ではなくジョーカーであったが……その意識は、間違いなく始の物であると、剣崎は確信しているようだ。

「始！ お前どう言うつもりだ!？」

「身代わりの命は……俺で良い」

最初から、彼はそれを狙っていたのだろう。

その声はあまりにも穏やかだった。

「やれ、剣崎。……何を躊躇っている？　俺は1度、お前に封印された事がある。同じ事をすれば良いんだ」

「始……」

「早くしろ！　人間を守るのが、お前の仕事じゃなかったのか！？」  
剣崎の唇が、視線が。微かに震え、戦慄いた。始を封印した後の感情を思い出し、困惑しているのだろうか。

だが、ここで何もしなかつたら、全ては死に絶える。そしてそれは、彼が命を投げ打ってまでも助けようとした少女を死なせる事にもつながる。

……彼の意思を、無駄にしてしまう。

一瞬だけ思考を巡らせ、そして剣崎が出した答えは……

「……………許せ、始……………」

そう言っ……苦しそうな表情で、剣崎が光に向かって剣を突き出した。

それは確かに「剣崎一真」のままで行っているはずなのに……青い戦士に変身していたように、ハナの目には映る。微かに震えた剣の切っ先は光の壁を捉え、ジョーカーの……始の命を断ち切った。

その瞬間。

デンライナーはその車体を地上から空中へと移す。同時に、車体が大きく揺れ、何かが爆発するような音が響いた。

「……………え！？」

慌てて窓の外に目を向ければ。

デンライナーゴウカは、その巨大な異形……ジークが14と呼んだ物に対して、総攻撃を行っていた。

ドギーランチャー、モンキーボマー、バーディーミサイル。その全てが発射され、14にダメージを与えている。

その攻撃すらも風の結界とやらのお陰か、戦士達の目には映って

いない様子だが。

「ちよつとモモ！ あんた何やってるのよ!？」

「俺じゃねえだろ、どう考えても！ デンバードの遠隔操作は出来ねーんだから！」

「じゃあ、一体誰が……」

言つて、ハナは周囲を見回す。

イマジンは全員いる。

ナオミもカウンターに捕まりながら、この激しい揺れに必死に耐えている。

オーナーは確か一般車両に行ったから元の世界にいるはずだし、仮に彼がここにいたとしても、異世界に干渉するような事をするとは思えない。

そう……誰も、運転席には行っていない。

ならば、恐らくはあのチケットのせいだろう。だが、何故そんな事をする必要があるのか。

いや、そもそも……

「ねえ、これって大丈夫なの？ この時間に……異世界に干渉する事にならない!？」

「それはない。この世界の者達は、支えていた力を失ったせいで、力の暴走が起こっていると思込んでいるようだからな。あの爆発は、その影響だ……と思わせておけば良い」

1人優雅に窓の外を眺めながら、ジークは振り返りもせずハナに答える。

いつもの彼なら、ハナの目を見て答えそうなものだが、何か思う所があるのだろう。声にも、どこか張りが無い。

「それにしても……そうか。だからあの者はあの車両にいたのだな……その時ジークの目に映っていたのは。

バーディーミサイルの上に立ち、「この世界」のどこかへと向かうスフィンクスアンデッドの姿であった。

\*

「橘さん！ 睦月！」

「剣崎！」

「剣崎さん……」

天音を安全な場所に移し、剣崎は橘と睦月の元へと戻ってきた。始の遺志を、無駄にしないためにも。

大切な友人を、本当に失った事への悲しみは消せないのだろうけれども。少なくとも今は、悲しんでいる場合では無いと分っているから。

だから……

「戦うんだ、もう1度！ 俺達の力で！ 俺達と……始の力で！」  
もがき苦しむ白いジョーカーを見上げながら、剣崎がキツパリと言い放つ。声を張り上げていた訳では無いのに、その声だけが何故か妙にクリアに聞こえたのは、豪雨の音を掻き消すように吹いた一陣の風のお陰か。

剣崎の言葉で……そして一緒にいたはずの始がいない事で、何があつたのかある程度察したらしい。橘と睦月は、小さく頷きを返し……  
『変身！』

3人の声が重なる。そして、変身もほぼ同時。

『FUSION JACK』

『FLOAT』

ブレイドとギャレンは飛翔能力のあるジャックフォームへ、飛翔能力の無いレンゲルは、ハートの4……「FLOAT」のカードを使って、空中から異形を攻撃する。

だが、最後の抵抗とばかりに相手もその巨大な体をくねらせて3人のライダーを叩き落とす。

大地に叩きつけられたブレイドは、それでもよろよろと立ち上がると……カードを1枚取り出した。

『EVOLUTION KING』

電子音が告げると共に、ブレイドの周囲をスピードスートの13枚のカードが取り囲んで……それらが金色に光りながら、ブレイドの鎧に取り込まれていく。

……それは、アンデッド13体の力を取り込んだ、ブレイドのみに許された進化。

限りなくジョーカーの力に近い、諸刃の剣。

そして、最後に残された切り札。

金色の剣であるキングフォームとなったブレイドは、当然のように高く飛び上がり……5枚のカードを、リーダーに読み込ませる。

『SPADE TEN、JACK、QUEEN、KING、ACE』

電子音がカード名を告げる度、相手とブレイドの間に、そのカードを模したエネルギーの幕が降りる。

その幕を纏い、ブレイドは半ば落下するようにその距離を詰め……

『ROYAL STRAIGHT FLASH』

5体のアンデッドの力によって強化された攻撃が、巨大な異形を上から2つに切り裂いていく。

「うああああああああああつ」

ジョーカーの断末魔が聞こえる。

それと同時に雲が切れて晴れ間が覗き、大地に降り立ったブレイドを照らす。

……まるで、この世界の未来が明るい物であると、暗示しているかのように。

\*

ああ、これでやっと……

「え？」

やっと、死ねるんだな

巨大な異形の声が、デンライナーの乗客全員に、届いたような気

がした。

耳に届く断末魔とは逆に、とても落ち着いた……心の底から嬉しそうな、「彼」の声が。

退屈な日々の終焉が、俺の死……か。悪くないなあ。結局は人間が守られたんだから

古代の力……14と呼ばれるそれが、爆発する直前。ハナとアルビノジョーカーの目が合った。

こちらに気付くはずは無いのに、彼は一瞬だけアルビノジョーカーの姿から「人間」の姿に変わり……にっこりと、微笑むと、何事かを呟いた。

それが……「この世界」で、ハナが最後に見た光景。

信じられないような……信じたくないような、「彼」の最期。

「嘘……何で……？」

ハナには分からない。

何故、アルビノジョーカーが最期にとった姿が「志村純一」ではなく……「剣崎一真」であったのか。

そして、どうして彼が最期に「ありがとう」と呟いたのか。

……だけでも少なくともそれは。

儚くて悲しい、たった1人のエゴの終焉……

## その22：時の守護者、合流

「皇帝に愛された子」。

それは世界を守るために存在する者達。

力と心の両方を兼ね備えた、強き者。

西暦2008年4月20日。

野上良太郎は、珍しく暇を持て余していた。

店を手伝おうとも思ったが、「今日は大丈夫よ」のひとことでは  
っさり切られてしまったし……仕方がないので、近所をの公園をぶ  
らぶらしていた。

「モモタロス達、今頃どうしてるかなあ……」

きっと彼らの事だから、今頃デンライナーの中で騒いでいるに違  
いない。そして、ハナに殴られているのかもしれない。

空を見上げ、そんな「いつもの光景」を思いながら、良太郎は小  
さく笑う。

だが、刹那。

どこか牛の鳴き声にも聞こえる、聞き慣れた汽笛の音が響き、見  
上げた空の一部に歪んだような虹色の円が浮かぶ。同時に、そこか  
ら猛スピードで駆ける黒い影が螺旋を描くようにして自分の背後へ  
と滑り込んできた。

「今のつて……」

ぎょっと目を見開いて振り返ると、そこには予想通り……牛を思  
わせる、黒い電車が停車していた。……デンライナーと同じく時の  
列車の1つであるゼロライナーだ。

桜井侑斗と彼のイマジンが乗り、そして時の中へと帰って行った  
はずの列車か、そこにあった。

「何で……」

「野上！」

何故、今また自分の目の前に現れたのか。そんな疑問を口にするよりも早く、1人の青年が大きく腕を振ってゼロライナーから降り立つ。

長い茶髪には1房だけ明るい緑色の髪が混ざっており、瞳の色も同じ鮮やかな緑に輝いている。

何が嬉しいのかわからないが、物凄い満面の笑みを浮かべ、勢い良くこちらに向かってくるその青年を、良太郎は知っていた。

「……デネブ？」

それはゼロノスに変身していた、桜井侑斗と契約していたイメージ……デネブが、侑斗に憑依した姿だ。

「野上、久し振りだなあ。元気だったか？」

「うん、まあ、そこそこ」

「そうか！ あ、これデネブキャンディー。新作だ」

「ありがと……」

良太郎の手に水色の包みのキャンディーを握らせ、デネブは嬉しそうに彼の顔を見る。

「おい、暢気に飴なんか渡してる場合じゃないだろ！」

「え……？」

自分の背後から響いた声に、良太郎は思わず振り返る。

そこにいたのは、デネブと同じ顔の青年。ただし、髪は短く、瞳の色も緑では無い。

「……正真正銘、桜井侑斗がそこに立っていた。」

「え……ええ！？」

「よくわからないんだけど、いつの間にかこの姿になってた」

自分と侑斗を交互に見つめ、ぽかんと口を開ける良太郎。その疑問を感じ取ったのか、デネブは何故か照れたようにそう答えた。

「デネブの姿とか、そう言った話は後回しだ。野上、デンライナーのパスは持つてるな？」

「う、うん。一応持つてるけど……」

「なら良い。とにかく、ゼロライナーに乗れ。話はそれからだ」  
「ちょ、ちょっと待って！ まさか、またイマジンが何か……？」  
「……来ればわかる」

そう言つと、侑斗はかなり強引にゼロライナーへ良太郎を引き摺りこむ。

何かなんだか、よくわからない。

何かに巻き込まれるのはいつもの事だが、今回の事は尋常ではない。

それは、侑斗の声の感じや眉間に寄る皺の深さからも良く分かる。分かるが……せめて、軽く説明くらいしてくれても良いのに……そう思いながらも、良太郎は成すがままになっていた。

西暦2007年1月30日。

アンデッドに似たイマジンは気を失わせた剣崎と、未だもがき続ける始を抱えて、近くの山小屋のような所に入った。

あまり使われていないのだろう、土間や囲炉裏の辺りには蜘蛛の巣が張られ、床の上に積もった埃は分厚い層になっている。

そこへ剣崎と始の2人を投げ捨てるように放ると、今度は天井に吊るしていた睦月と橘に顔を向けた。

吊るされている方はその顔を憤怒と当惑で歪め、自身に絡む拘束を引きちぎろうともがき続ける。

だが、そんなささやかな抵抗も空しいだけ。もがく度に拘束は思惑とは逆にきつさを増し、自身の体重を支える鴨居が、みしみし、ぎしぎしと嫌な音を立てる。

しばらくの間そうしていたが、やがてそれも無駄だと判じたのだろう。橘はふうと溜息を吐き出すと、ギロリとイマジンを睨みつけ口を開いた。

「貴様の目的は何だ!？」

「目的? 契約者の願いを叶え、過去へと飛ぶ事だ」

「契約者？」

「過去へ、飛ぶ……？」

「最初に言っただろう」

心底不思議そうな表情で、橘と睦月が口々に問う。だが、それ以上は答える気がないらしい。イマジンは口の端を歪めて笑うと、ゆつくりとした歩調で始に近付き彼の目隠しと猿轡を取った。

瞬間、殺気立った眼差しでイマジンを睨みつける始。

同時に彼の姿がゆらりと歪み……

「駄目です相川さん！ ジョーカーになつては！」

睦月に言われ、不思議そうな表情で辺りを見回し……そして気付いた。

手を伸ばせば届く距離に、剣崎一真がいる事に。

「剣、崎……？」

その眩きは、どこか嬉しそうで……だが同時に、どこか絶望しているようにも聞こえる。

……イマジンはただ、ニヤニヤとその様子を眺めているのであった……

ゼロライナーに乗せられた良太郎が見た物は、大小様々な、沢山のトンネル。しかし不思議な事に、どこからも線路が延びていない。

「トンネルが増えてる……？」

「确实にな。しかも、アレはただのトンネルじゃない」

「え？」

「ゼロライナーのオーナーの話じゃ、『異世界への出入口』らしい」

突拍子も無いその一言に、一瞬、良太郎の思考が停止した。

電王に変身する事になった時も、同じようになつた事があるが、今回はそれ以上に突拍子も無い気がする。

「異世界の出入口」と言われても、実感が湧かない。

「俺も半信半疑だったんだけどな。実際に連れてかれたら、信じる  
しかないだろう?」

「……行ったの? 線路も無いのに?」

良太郎の問いに、苦々しい表情で頷く侑斗。

「ネガタロスと戦う少し前に、ゼロライナーのオーナーに連れられ  
てな」

「あの時は、大変だった」

良太郎にコーヒーを渡しながら、しみじみといった風に言うデネ  
ブ。

イマジンとしての姿とは違い、人間の姿なので小さな表情もすぐ  
分かる。

「……モモタロス達も、人間の姿になってるのかな?」

「多分な。今は2005年のトンネル近辺にいるらしいから、行け  
ば会えるだろ」

「え?」

モモタロス達に会えるかもしれないと言う喜びと、何故そんな事  
を侑斗が知っているのかと言う疑問が、同時に浮かぶ。

だがそれを口にするより先に、侑斗が真剣な表情で口を開いた。

「野上、俺達はこの『異世界の出入り口』を塞がなきゃならない」

「……異世界と繋がったら、今度こそ、確実に『人間の未来』じゃ  
なくなる」

「それ……どういう事?」

2人の言わんとしている事の意味を図りきれず、思わず良太郎は  
そう問いかけていた。

折角イマジンを……カイ達を倒したと言うのに、まだ何かあると  
言うのか。いや、確かにカイを倒した後も色々あったが、「人間の  
未来じゃなくなる」と言わしめる程の大きな事件は無かったはず。  
「とにかく、お前のイマジン達と合流する。話はそれからだ」

「ちょ、ちょっと待って……」

「西暦2005年1月23日。そこに行けば、お前も嫌でも分かる

さ。……トンネルを塞がなきゃならない理由がな」

慌てふためく良太郎の意思などお構い無しにそう言うと、侑斗は問答無用でゼロライナーを駆り始めた……

アルビノジョーカーが完全に消滅すると同時に、デンライナーは元の世界へと向かっていった。

トンネルの中ではまだ「風の結界」が張られていたが、トンネルを抜けると同時にその風も消えてしまい、パスケースに残されたのは、やはり「Common Blank」と書かれたカードだった。「どうやら、元の世界に戻ったみたいだね」

窓の外の景色が、見慣れた時の砂漠になったのを見て、ウラタロスが疲れたように呟く。

戻ってくる際の激しい揺れによる身体的な疲労もあるのだろうが、何より彼らは精神的に参っていた。

ただ見ているだけと言うのは、あれ程までに辛い事だとは思っていないかった。

干渉出来ないもどかしさは、それを経験した者にしか分からない。「……結局、何だったんだろうね。僕達にあの世界を見せた意味って」

「……『異世界とは、遙か過去であり、遠い未来でもある』」  
ウラタロスの言葉に答えるように、ジークが小さくそう呟く。

その言葉の意味が今一つ分からず、きよとんとした表情で、全員が彼を見た。

「それ……どう言う意味なの？」  
「言葉通りだよ、姫。あの世界は、今回選ばれなかった時間であると同時に、この世界が辿った過去の歴史の一部であり、これから辿る未来の可能性でもある」

別の世界とは、選ばれなかった時間。

それは以前から、ウラタロスも予測していた。つまり、今回見た

「結末」は、この世界では選ばれなかった結末と言う事になる。

では……この世界では、何が選ばれなかったのか。

そして、何を選んだが故に、あの世界になったのか。

何よりも、今のジークの言葉……「この世界が辿った過去の歴史の一部であり、これから辿る未来の可能性」というのが引つかかる。それは、ウラタロスだけではなくハナもそうだった。

アルビノジョーカーのとった最期の姿の意味が、まだ分からない。自分の知らない「何か」が、まだこの世界の過去に……西暦2005年1月にあるのでは無いだろうか。

それを知るためには、自分はその過去しかんに行かなければならない。そんな気がする。

「ま、何にせよトンネルが増えてる原因ってモンを調べなあかん。

また2005年の1月に向かう必要があるやろ」

「ええ。出来れば2005年の1月16日に向かつて頂けると、ありがたいんですがねえ？」

キントロスの問いに答えたのは、いつの間にか定位置に座っていたオーナーであった。

「うおわっ！ おっさん、いつからそこに!？」

「ジーク君の『異世界とは、遙か過去であり』の辺りからですかねえ」

「……氣い付かんかった……」

自分の存在に驚く……と言うよりもビビるイマジン達を尻目に、オーナーはゆつくりとカウンター席の方へと移動する。

「2005年1月16日……」

「ダークローチが現れてから1週間程でしょうか。あ、ナオミ君。ババロアをお願いします」

「はい」

奇妙な抑揚を付けて言いながら、オーナーはしゅるりとナプキンナプキンを首にかける。

相変わらず、重大な事を言われているはずなのに、彼の仕草のせ

いかあまり危機感を感じられない。

「ねえねえ、何で僕達に橘を助けさせたの？」

「トンネルが繋がらないようにするため、と言ったはずですが？」

「うん。でも、トンネルの向こうでも橘は生きてたよ？」

「烏丸のおっさんは死んじまってたけどな」

リュウタロスの言葉をモモタロスが継ぐ。

もし、この世界の烏丸啓も殺されてしまつと言うのなら、歴史を変える事になつても助けたいと、モモタロスは決心していた。

もう、ただの傍観者でいる事だけはしたくない。

だがしかし。オーナーの答えは、予想していない物だった。

「……橘朔也さんが『生きている事』が重要では無いんです。彼の怪我が『軽い事』が重要なんですよ」

ナオミの出した旗の立っているババロアを掬いながら、彼はそう事も無げに言う。

「肝心なのは、彼が2005年1月23日に間に合うかどうかです」  
「何で？」

「彼が結末を急かすから、ですよ」

……デンライナーの乗客達はまだ知らない。  
知っているのはオーナーだけ。

この世界が迎えた、バトルファイトの結末を……

### その23：失う物を選べ

上城睦月。

クラブのエースに選ばれた者。

「睦月」とは1月、年の最初。

オーナーに急かされるように、2005年1月16日に降り立った物の、ハナ達はどこに向かえば良いのかまるで見当も付かない状態。

なので、とりあえず近くのビルに入ろうと言う話になり……しかし足を踏み出した途端、先頭に立っていたハナを、モモタロスが腕を引いて半ば強引に引き止める。

「ちよっ……何よ？」

「おい、変だと思わねえか？」

「何が？」

「……静か過ぎるだろ、いくら何でも」

低く静かな声で、モモタロスはそうハナに囁く。

言われて見れば、確かに静か過ぎる。

休日とは言え、ビルには多少の人間はいるはずだ。ならばある程度の話し声や足音と言ったざわめきが聞こえてもおかしくない。

ここが廃墟だと言うなら話は分かるが、見たところ真新しい感じの建物で、廃墟と呼ぶには無理がある。

他のイマジン達も気付いていたのか、いつの間にかハナを囲むようにして、厳しい表情で周囲を見渡していた。

「……あんた達も、気付いてたの？」

「先輩がハナさんを止めるまでは気付かなかったけどね」

「桃の字の野性の本能を信じて注意したら、確かに敵がぎょうさん居る」

「姫、危ないから私の後ろに隠れると良い。家臣一同、姫をきちんと守るのだぞ？」

イマジン達の口調は軽いが、声に含まれる緊張感から、今の状況が危険な物だと分かる。

仮に今襲われたとしたら……変身できるのはキンタロスとリュウタロスの2人。出来る事なら変身するような事態は避けたいが……そう思った時、1台のパトカーが、そのビルの地下駐車場に向かって行くのが見えた。

「おいおいおい。警察の手に追える相手じゃねえぞ、この感じは！過去に関わる事が良くないのは分かっている。しかしこの場が危険な事も分かっている。分かっている上で見過ごすなど……今の彼らには、出来ない話だった。

こっそりと、パトカーに気付かれないように、物陰に隠れながらその後をつける。

駐車場の真ん中辺りでパトカーは停車し、その窓を開けて、ほんの僅かな警戒を見せながら警官は周囲を見回した。

「本当にいるんですかね？ 人間を襲うような大きな生き物が」

そうパトカーの中で言った若い警官の姿を見て……思わずハナははっと息を呑む。

それは、トンネルの向こう側ではアルビノジョーカーだった人物

……志村純一だったからだ。

まさか、この世界にもアルビノジョーカーがいるって言うの！

？

思うと同時に、ハナの脳裏にあの時の……アルビノジョーカーの最期の姿が蘇る。

何故か剣崎一真の姿になり、そして「ありがとう」と呟いて散っていった、あの姿が。

「あいつ、人間だ……」

そう小さく呟いたのは、リュウタロスだった。

その言葉に同意するように、イマジン達も小さく頷く。

「何で分かるのよ？」

「似てるんだよ、アンデッドの臭いとイマジンの臭いが。アンデッドの臭いの方が、どっちかってーと弱いけどな」

それ以上適切な表現が見つからなかったらしく、モモタロスは困ったような表情でそう答える。

「臭い」と言われてもハナには感知出来ないのだが、彼らの……特にモモタロスが持つイマジンの「臭い」を感知する鼻は信頼できる。そしてその鼻には、アンデッドの「臭い」も、同じように感じ取れているらしい。

しかし「アンデッドとイマジンの臭いが似ている」とは、一体どういう意味なのか。問い質したいが、時間もないし、何よりモモタロス自身もその事を不思議に思っているらしい。

聞くだけ無駄と判断したのか、ハナも黙って警官達に視線を向けた。

「気をつける。正体不明だが、既に何人も襲われたと通達があった」  
もう1人の警官に言われ、彼らは腰に下げていた拳銃の弾丸を確認すると、ゆっくりと車を降りる。

「おーい。誰がいるか？」  
そう言って周囲を見回すが、特に人影はない。  
ハナ達も物陰に隠れているので、彼らには見えないうつ。

「やっぱり悪戯ですかね？」  
「ああ」

返事が無い事で「何も無い」と判断したのか、彼らが踵を返したその瞬間。その頭上から、ぼとりと音を立てて何かが落ちた。

「何、あれ……？」  
目を凝らしてよく見れば……それは白い靴。

何で靴が上から？

警官達もそう思ったのか、彼らは己の頭上を見上げ……天井にひしめくように存在する、無数の黒い異形の姿を見つけてしまった。

……いや、見つかったのは、彼らの方だったのかも知れない。

黒い異形……ダークローチ達は彼らと目が合ったのをきっかけに、一斉に2人に向かってその圧倒的な数を以って襲い掛かる。

「あかん！」

2人を助けようと、キンタロスがパステースを構えた……その瞬間。

「変身！」

キンタロスが変身するよりも僅かに早く。この場にバイクで駆けつけた剣崎一真の声が、周囲に響く。そして彼は青い戦士に変身すると、警官に襲い掛かっていたダークローチのうちの数体を斬り伏せた。

「お前達が何匹いようと、すべて倒す！」

そう宣言し、今度は自身に向かってくる異形を倒す。

「逃げる！」

自分が守った警官達にそう言うと、剣崎はその群れに向かって突っ込んでいった。恐らく自分が突っ込む事で、警官とダークローチの間にある距離を稼ぎ、巻き込まないようにと言う考えなのだろう。「仮面、ライダー……」

剣崎の勇姿に心打たれたかのような声で、志村がそう呟いたのを……リュウタロスは聞きつける。

向こうの志村……実際はアルビノジョーカーだった訳だが……は、あまり剣崎を尊敬していなかった。だが、今の彼の呟きには、尊敬と憧れが含まれているように、リュウタロスには感じる事が出来た。……たったそれだけの事だが、今のリュウタロスには何故か嬉しかった。

一方の剣崎は、警官達が逃げるのを確かめて、残ったダークローチを一掃すると、疲れたようにその場に倒れこみながら変身を解除する。

額に浮かぶ汗と、荒い呼吸が彼の疲労を物語っている。

しかし……彼に休息など与伦とばかりに彼の携帯電話が鳴り響き、辛そうに何かを呟くと……フラフラと、どこかへ向かっていっ

てしまった。

\*

日常の風景を、山中望美は眺めていた。

どこの部活だろう、ジャージ姿の女子達が一生懸命に走り込みをしているのとすれ違った。

きつともうすぐ、睦月のランニングに付き合おうようになる。以前と同じ生活が来る

そう思うと、自然と笑みがこぼれた。

だがその矢先。先程すれ違った少女達の悲鳴が響く。思わず振り返り……そして、彼女は見た。

見た事の無い、黒い異形達を。そして、それに襲われている少女達を。

そこに、レンゲルに変身していた睦月が現れる。

「またお前等か！」

忌々しげにそう言う、レンゲルは杖を構えてその異形達に立ち向かう。

数が多いが、それ程強くはないらしい。レンゲルはあっさりとそれらを撃退する。全てが終わったらしいのを見計らい、思わず望美は彼に声をかけた。

「今の奴等は何なの!？」

その問いには答えず、睦月は変身を解いて彼女の顔を見遣る。

その表情に、どこか疲れの色が見えたのを、望美は見逃さなかった。それは恐らく、この前にも戦っていたからなのだと理解出来る。

「……睦月、もう戦いは終わりって言うてなかった？」

「……危ないから家に戻ってた方が良く。学校も駄目だ。奴等はヒトの集まる所を狙ってくる」

「何故あんなのがまだいるの?」

その問いをかけた時、睦月の携帯電話が鳴る。

それは、広瀬からの支援要請。剣崎が1人で苦戦を強いられるらしい。

倒しても、倒しても……いつまで続くんだ！

心の内でのみ舌打ちをしつつ、彼は呼吸を整えてバイクへ向かう。一瞬だけ、心配そうに望美に向かって視線を送って。

「……もう行かなきゃ」

「行かないで！」

それは、望美の本心。

今まで押さえていた、彼女の切なる願いだった。

これからはずっと一緒にいられる。

睦月が危険な目にあわなくて済む。

そう思っていたのに、まだ彼は戦わなくてはいけないのか。

自分でも、言うつもりは無かったのだろう。はっとした表情で、

望美は自分の口元を押さえた。

……望美が自分を案じてくれているのは、睦月にもよくわかっている。

だけど……だからこそ、自分には行かなければならない。

自分は、仮面ライダーなのだから。

そして何より……彼自身、望美がとても大切だから。それを、守るためにも。

「あいつ等は……1匹2匹じゃない。何千もいるかもしれないんだ。俺達が戦わなきゃ」

「わかっている。でも……一緒に居て欲しいの」

睦月の立場や決意は、望美も理解している。だが、納得しているかどうかは別の問題だった。

「必ず……帰ってくる」

彼女を安心させるようにそう言って、バイクを走らせる睦月。

その姿を……望美は寂しそうな、不安そうな表情で見つめていた

……

西暦2007年1月30日。

「どういう事だ!? 何故剣崎がここにいる!？」

「言っただろう? 契約者の望みだからだ」

始の怒号に、平然と答えるイマジン。

その背から生える複数の脚のようなものが、かさかさと蠢く。紫色の、光のような3つの目が真つ直ぐに彼の契約者を捕らえた。

「お前が願っただろう? 『また4人で過ごしたい』と」

……彼の元になったモノ……スパイダーアンデッドには無かった口元が、笑みの形を作る。

契約者……上城睦月に、言い聞かせるようにしながら。

「良かったなあ。これなら4人ずうつと一緒にだ。誰もここからいなくならない。誰もここから消える事は無い。……身動きが出来ないんだから」

「違う! 俺が望んだのは、こんな事じゃない!」

確かに彼は、イマジンに望んだ。

また、仮面ライダーだった4人で過ごしたい、と。

叶わぬ願いと分かっている、それでも願わずにはいられなかった。

だがそれは、少なくともこんな強制された状態ではなかった。

身動きを一切とれず、ただ「同じ部屋にいるだけ」の状態を望んでないなかったのに。

「だが、これも『一緒にいる事』だろう? 契約違反では無い」

「屁理屈を……!」

「何とでも言え」

橘の言葉を一蹴し、アンデッドイマジンはゆっくりと睦月に近づく。

そして……

「契約、完了」

呟くと同時に、睦月の「扉」を開き、彼のもっとも強く想う「過

去」へと向かった。

西暦2005年1月16日の夜。虎太郎の家で、剣崎と睦月は疲れきった表情でソファアに腰掛けていた。

「この1週間で、俺と剣崎さんが倒した黒い奴は……」

「100体をとくに超えてるわ。だけど……倒せば倒す程、どこから現れる」

「もう限界です。いつか俺も剣崎さんも、力尽きる。そうになったら……。その前に手を打たないと！」

「黒い奴を見つければ次第倒す。それしか手は無いだろう」

「……剣崎さんだっけわかってるはずです！あいつ等が発生している原因は……ジョーカー。相川始だ」

ダークローチと呼ばれた、その黒い奴らは、どこからか現れ、圧倒的な数で人類を襲い始めていた。

1週間前、剣崎達はいかに、52体全てのアンデッドを封印した。しかし、その代償に仮面ライダーギヤレン、橘朔也を失った。

だがそれだけではなかった。

同じ頃、ジョーカー、相川始もまた、姿を消した。

橘が命を懸け、守り抜いたはずの始までも。

……その日から、大量のダークローチが街に出現した。

倒しても倒しても、数を増やす敵を相手に、剣崎と睦月はいつ終わるとも知れぬ戦いを続けるしかなかった。

「ジョーカーが最後に残った時、世界が滅ぶ。それって、あの黒い奴が現れるって事だったんですね」

「そうね。あれが世界中に溢れたら……人間の世界は終わる。これが、ジョーカーの役割……」

「まだそうと決まった訳じゃない。始は人間を滅ぼす事など、望んじやいなかった」

「気持ちわかるけど……」

そうとしか、考えられなかった。  
剣崎の気持ちは分からなくも無い。  
親友とも言える相川始を、信じたいと言う気持ちは。  
だが間違いなく、事の大元はジョーカーである。  
ダークローチの存在が、始の意志による物かは別として。

\*

「何、あれ……」

2005年1月のトンネルの近くに来た時、良太郎が不思議そう  
な……それでいて緊張感に満ちた声でそう言った。

そのトンネルの巨大さも然る事ながら、そこから出てきているモ  
ノに対しての問いらしい。

人間より少し大きいくらいの、どこかゴキブリに似た異形が、大  
量にトンネルから湧き出し、現実世界へと向かっていたのである。

「まずいな、あれだけの数がいたら、人間の歴史はマジで終わるぞ」  
「侑斗、あの怪物の事知ってるの？」

「俺も詳しく知ってる訳じゃない。あいつらがダークローチって名  
前で、見ての通りトンネルの向こうからこっちの世界を侵略するた  
めに来ている存在だって事くらいだ」

緊張した面持ちでそう言い放ち、侑斗はゼロノスのベルトとカー  
ドを構える。

それを見て、ぎよつと良太郎は目を見開き……

「侑斗、それ……」

ゼロノスのカードは、人の中にある自分に関する記憶と引き換え  
に力を与えるもの。使えば使うほど、他人の中から「自分」が消え  
ていくものである。

しかしゼロノスのカードは、カイとの最終決戦の時に全て使い切  
ったはず。

ネガタロスと戦った時も思ったのだが、一体何故、侑斗がその力

ードをまだ持っているのか。

良太郎の聞きたい事がわかったのか、侑斗は小さく笑い……

「安心しろ、こいつは俺に関する記憶じゃない」

「じゃあ……誰の？」

「……ゼロライナーのオーナーに関する記憶らしい」

問いには、デネブが答える。

赤の他人の記憶を犠牲にするのが心苦しいのか、2人ともどこか辛そうな表情で。

「良く分らないが……彼は、『ヒトから忘れられた方が良い』と言って、侑斗にカードを渡した」

「お陰で変身出来るって訳だ。……あまり良い気分じゃないけどな」  
侑斗も、本当はあまり使いたくないのだろう。だが、使わなければまともに戦えない。だから、使う。

例えどんなに嫌だと思っても、それしか方法が無いのなら。

「とにかく、俺と野上はあの連中を止める。デネブはゼロライナーでトンネルを破壊だ」

「了解！」

「うん」

侑斗の言葉に力強く頷き、良太郎もパスとベルトをセットし……

『変身！』

『LINER FORM』

『ALTAIR FORM』

良太郎と侑斗の掛け声が重なり、各々のベルトが電子音でそのフォーム名を告げる。

良太郎の、デンライナーを模した、憑かず離れずの電王・ライナーフォームと。

侑斗の、機動力を重視した緑のフォーム、ゼロノス・アルタイルフォーム。

「行くよ、侑斗」

「ああ。しくじるなよ、野上」

軽口を叩きあいながらも、良太郎と侑斗はゼロライナーから時の中へと降り立った。

……この世界の過去を、守るために……

\*

ジョーカー、お前の望みを言え。どんな望みも叶えてやる。

お前の払う代償はたった1つ。お前の、「未来」……

……声が、聞こえる。統制者の声が。

望みを叶えると言いながら、自分の未来を代償に差し出せと。…

…自分の望みは、「平穏な未来」だと言うのに。

俺の未来を差し出せと言うのなら

絶え間なく聞こえる「声」に絶望し、彼は己の喉を持っていた刃で思い切り突く。普通の生物なら、喉を突けば死ぬ。これで死ねば、彼は未来を差し出した事になるのでは無いか。自分のこれからの生と引き換えに、望みは叶う。大切な者を守りたいと言う望みは。

そう思っていたのに……「声」が聞こえなくなったのは一瞬だけ。すぐさま再開される「声」を聞くと、彼は己の血が付いた刃を見下ろして自嘲気味に呟く。

「アンデッドが……死ぬるものか……」

それと同時に、視界の端に剣崎と睦月が映る。

自分が自殺を図った事に驚いたのか、その目は驚きに見開かれた後、すぐに悲しそうに歪められる。

「始……またその姿に……」

「……剣崎……」

剣崎の声に、苦しそうに呟くジョーカー。

だが、その言葉は「破壊の獣」ではなく、剣崎一真の親友……「相川始」の物であるを指していた。

「始……お前なんだな!? 一体どうして!?!」

「剣崎さん！」

ジョーカーに……始に近付こうとした剣崎を、睦月が止める。彼が……いや、彼らが見たのは、ジョーカーの影から生み出される無数のダークローチ。

しかも、それらはまるでジョーカーを守るかのように彼らの前に立ちはだかった。

「その黒い奴は何だ！？ お前が生み出してるのか！？」

「ジョーカーが勝ち残った時、ダークローチが生まれる。……全ての命を滅ぼすために」

「始……嘘だろ？」

投げやりに……そしてどこか他人事のように呟く始に、それでもまだ希望を捨てきれない剣崎が何かを言おうとした時。

彼の迷いを感じたのだろう。睦月が剣崎よりも半歩だけ前に出る。

「剣崎さん。俺がやります」

そう言うと、睦月は迷い無くレンゲルに変身し、襲い来るダークローチ達を薙ぎ倒して、ジョーカーに近付いていく。

しかしダークローチの数は、一向に減る様子が無い。倒しても倒しても、まるでジョーカーを守るのが使命であるかのように、彼をジョーカーに近付かせない。

「待て睦月！ まだ手はある！ 『REMOTE』だ！ アンデッドを解放するんだ！」

その言葉に、はっとしたように顔を上げるレンゲルとジョーカー。今までその可能性を考えていなかったのだろう。変わらぬはずのその目には、微かにではあるが希望の光のような物が見え隠れしていた。

「他にもアンデッドがいれば、ジョーカーが勝ち残った事にはならない。世界が滅びる事も無いはずだ！」

剣崎の言う通りかもしれない。

アンデッドが2体以上いれば、決着した事にはならないはず。

その可能性に賭け、レンゲルはクラブスートのカテゴリーキング

を……かつて、嶋昇と名乗った、数少ない人間との共存を望んだア  
ンデッドを解放すべくリモートのカードを使う。

だが……アンデッドは解放される事無く、カードはただ虚しく地  
に落ちるだけ。

「何故だ？ 解放されない……」

「……無駄だ。52体が封印された時点で、バトルファイトは決し  
た。もう彼等を解放する事はできない」

それは、剣崎にとっても……そして始自身にとっても絶望の宣告。  
この1週間で、彼は嫌と言う程、神の無情さを思い知った。

自分をジョーカーとしてしか見ていない神。

望みを叶えるために、未来を代償に差し出せと言い続ける神。

ヒトと共にある事も、死ぬ事も許されず……そして、希望を持つ  
事すらも許されない。

「じゃあ……どうすれば良い？ 始、どうやったらこいつらを止め  
られるんだ!？」

「答えは1つです！ ジョーカーを封印する!」

「俺がやる！ 俺の責任だ!」

そう言つと、剣崎はブレイドに変身し、一気にジョーカーへ肉薄  
する。

ジョーカーも……始もそれが最善だと思っているのか、そこから  
動く気配が無い。ジョーカーを封印する、最大のチャンス。

ブレイドはブレイラウザーを構え、ジョーカーにそれを突き立て  
……られなかった。

彼の存在は、栗原親子にとって大きいものだと知っていたから。

そして何より……相川始は、剣崎一真にとって、最も大切な親友  
であつたから。

大切だからこそ、失いたくない。

大切に思われているからこそ、消えてはいけない。

その想いが、彼の動きを止め、さらにはブレイドと言う鎧を脱が  
せてしまった。

「剣崎……」

変身を解いた剣崎に触れるように、ジョーカーはゆっくりと手を伸ばし……そして、思い切り殴りつける。

彼の爪にでも引っかかったのか、剣崎の頬には一筋の赤い線が走った。

始にとつても、剣崎の優しさは嬉しい。

だが同時に、自分の苦しみを長引かせるだけの行為でもある。

……真に自分の事を案じているなら、封印するべきだったのに……それをしなかった事が、始には腹立たしかった。

迷っているのは駄目なのだ。迷っているのは、「ジョーカー」と言う名の獣」を倒す事は出来ない。

くるりと踵を返すと、レンゲルと剣崎を置いてその場を去る。

「待て……待てエッ！」

レンゲルは叫びながら、ジョーカーを追いかける。

それを、ただ見るしかない剣崎。

殴られた時にできた頬の傷から流れる血を拭い……そして気付いた。

たった1つだけの、彼の望む「結末」を迎えるための方法に。

その方法が……自分の未来を代償とする物だとしても。

\*

海辺の近くで、ハナ達は足を止めた。

そこに、相川始の姿を見て取ったから。そしてその目の前に、上城睦月が厳しい表情で対峙している。

「ハナさん、隠れて」

近くの草むらに身を隠し、彼らの様子を見る。

「何故来た？」

「貴方はもう相川始じゃない。完全にジョーカーに戻ってしまったんだ」

「あつはっはっはっは………だつたらどうする？」

「貴方を、封印する」

場にそぐわぬ朗らかな笑い声を上げる始とは反対に、睦月のその言葉には、揺ぎ無い決意と厳しさが感じ取れた。

「この世界じゃ、ジョーカーを封印したのは彼って事……？」

「分からないよ、ハナさん。最後まで見ないと」

「……そうね」

ウラタロスの言葉にこくりと頷き、ハナは黙って彼らの様子を窺う。

「お前には無理だ」

「アンデッドを封印する。それが『仮面ライダー』だ！」

「一旦戦いを始めれば、俺はお前を倒すしかない。俺の体は、意思とは関係なく動く」

「剣崎さんに代わって……俺が戦う！」

睦月のこの口調からすると、剣崎には彼を封印できなかつたのかも知れない。

少なくともこの世界の剣崎は、トンネルの向こうの剣崎よりも、相川始と仲が良いように見える。

中途半端に仲が良ければ、向こうの剣崎のように始を封印したのかも知れない。だが、真に仲が良ければ、それすらも出来ない。

そう思っているうちに、変身した睦月が「相川始」の姿をしたそれに殴りかかり、体勢を崩したところにブリザードクラッシュを喰らわせようとする。

だが、一瞬だけ彼がジョーカーの姿に戻る方が早かった。

そのジョーカーの影からは、再び無数のダークローチが現れる。それこそきつと、ジョーカーの意思とは無関係に。

「こいつ等は全ての人類を滅ぼす。あんたが守ろうとしていた、あの親子も！ それでも良いのか！？」

「俺には……止められない！」

それが、最後の大技への合図。

ジョーカーの放った光弾が、睦月に直撃し、彼の姿が緑の戦士から上城睦月へと戻る。

「止められない」と言ったその言葉通り。己が身の内から迸る力を、自身の意思では止められないように見えた。

「……う、あ……………望美……………」

どさりと倒れこむ睦月の腹からは多量の出血。離れた場所にいるハナ達にすら、潮風に乗って血の臭いが届いていた。

ジョーカーも、それ以上は興味が無いのか、倒れた睦月を一瞥するとどこかへ去ってしまう。

「病院に連れて行かないと……………」

そう言つて、立ち上がりかけ……………ハナはすぐに、そこに向かう人影に気付いた。

……………剣崎一真が、やってきたのである。

「……………始か」

「あいつは……………完全に、ジョーカーです」

「喋るな！　すぐに病院に連れて行く！」

「すみません、俺……………」

「喋るな！」

「もう、貴方しか、いない……………。あいつを倒せるのは……………」

まるで遺言か何かのようにそう呟く睦月を抱え、剣崎はハナ達に気付いた様子も無くその場を去る。

……………一刻を争う事態なのだから、ハナ達に気付かないのも道理ではあるのだが。

「……………まさか、これであの世界の景色に繋がるんじゃないでしょうね……………」

思い出せるのは、雨の中で対峙する剣崎と始。

全てのアンデッドは封印した！　残っているのはジョーカー、君1人だ！　出来れば君とは戦いたくない！

戦う事では、俺とお前は分かり合えない

少なくとも、人間の生き残る未来になるには、それしかないので

はないか。

ジョーカーが、封印されるといふ結末しか。  
しかしその結末は、栗原天音の心に大きな傷を残す事も知っ  
てる。

「例えアルビノジョーカーがいなくても……あの子が傷つく事  
には変わらないの……？」

大切な人を失う悲しみは、ハナも知っている。

そしてその悲しみがいつか、怒りへと変わっていく事も。

トンネルの向こうにいた栗原天音は実際にそうだった。

今の彼女達に何が出来るのか。

この世界は、どの様な結末を迎えるのか。

……ハナにはまだ、知る由も無かった……

## その24：別離と再会

スフィンクス  
謎かけの獣は月に問う。

何故、世界を欲するのか。

何故、ヒトを滅ぼしたがるのか。

西暦2005年1月16日、とある病院のベッドの上で、橘朔也は目を覚ました。

「……ここは……」

「気が付いたか」

「……烏丸所長！……ぐうっ」

聞き覚えのある声に目を向ければ、そこにBOARDの所長であった烏丸の姿を見止め、思わず橘は起き上がるうとする。だがその瞬間、全身に激しい痛みが走った。

下手をすれば再度口から漏れそうな悲鳴を噛み殺しながら、彼は視線を烏丸から自身の体に向けて落とす。体中のいたる所に包帯が巻かれており、いきなり動いたせいで傷が開きでもしたか、じんわりと白地に朱が滲んでいる。

「無理はするな、橘。1週間経った今でも、お前の傷はまだ完全に癒えていない」

「1週間！？俺はそんなに眠っていたんですか！？」

「カテゴリーキングとの戦いで激しく傷ついた上、生身でギャレンラウザーを使ったんだ。むしろその程度で済んだ方が奇跡に近い」

烏丸の言葉に驚き、思わず目を見開く。自分が眠っている1週間の中に何が起こったのかも気になるし、剣崎達に自分の無事を知らせなければならぬ。

だが、確かに烏丸の言う通り、崖から落下し、生身でギャレンラウザーを使ったにしてはこの程度の傷で済んだのは奇跡に近いだろ

う。

ただその反動は大きいらしく、痛まぬ所が無いと言っても過言では無い中でも、両肩が特に痛む。

「実際、あと1時間処置が遅ければお前は死んでいたかもしれないと、医者に言われた」

「……すみません、所長」

苦笑混じりに放たれた言葉に、俯き謝罪の言葉を放つ。

彼には迷惑をかけっぱなしだ。昔も、今も。心底申し訳ない気持ちに陥り……ふと、最後に見た光景を思い出す。

トリアルシリーズと思われる存在の人質となっていた、紫の瞳の青年の姿を。

「……そうだ、龍太は？ 紫の瞳の青年はどうなりましたか？」

龍太を助けようとしてギャレンラウザーを放ち、トリアルのこめかみに向けて1発おみまいした所までは覚えている。だが、その直後からの記憶は無い。

烏丸がここにいると言う事は、あのトリアルを退ける事が出来たと言う事なのだろうが……だとしたら、誰が退けたのか。

「無事だ。トリアルも、あの時の青いライダーが倒した」

「青い、ライダー……」

曖昧な記憶を辿り、ようやくその存在に思い当たる。恐らくは自分が崖から落ちる所を助けた彼だろう。

あの時は深く考えていなかったが……と言うか、心身ともそんな余裕は無かったが、今にして思えばどこかで彼の声を聞いた事があるような……

そこまで考えた時、最初にケルベロスと相見えた時の事を思い出す。あの時に出会った、龍太と同じ顔をした青い瞳の青年。その青年の声と言いどこかはぐらかすような話し方と言い、あの青いライダーとよく似ている。確か、青年は共にいた少女からウラと呼ばれていたか。

そう言えば、龍太が人質に取られていた時、やはり同じ顔をした

赤い瞳の青年も見ただ記憶がある。

「だが、今は彼らの事よりもこの反応だ」

橘の思考を遮るように、烏丸は手元の携帯電話のようなものを見せる。だが、それが携帯電話でない事は、橘にもよく分かっている。橘自身も持っていた携帯型アンデッドサーチャー。

カテゴリーキングが封印された今、これに反応するのはジョーカーとBOARDのライダーシステムで変身した仮面ライダーだけのはず。

だが……そこに点在していたのは、無数の「正体不明」のアンデッドと、それと戦っているらしいブレイドとレンゲルのマークー。

「これは!?!」

「……カテゴリーキングを封印した時から、この反応が頻繁に現れるようになった。巷ではダーククローチと呼ばれている。恐らく、ジョーカーの眷属だろう」

「そんな! こうしてはいられません、俺もすぐに……ぐっ」

淡々とした物言いの烏丸とは対照的に、血相を変えて慌てて立ち上がるうとして……再び橘の全身に痛みが走る。

「くっ……この程度の痛み……」

「……仮に剣崎達の元へ向かえたとしても、今のお前には変身する術は無い。行っても足手纏いになるだけだ」

諭すように言われ、橘はぐっと言葉に詰まる。彼が言う通り、ギヤレンバツクルは壊れた。とは言え、修理できる技術者はいても、修理に使える部品が無い。修理が完了しない限り、ギヤレンには変身できない。それは分かっているが……何もしないでただのんびりと寝ているだけなど、橘には出来ない。

……例え戦えないとしても、仲間のフォローに回る事くらいは出来る。

「橘。どうしても行くと云うなら……そしてフォローに回るつもりなら、まずはその怪我を回復させる」

こちらの考えを理解しているのか、なおももがく橘を押し留めて

烏丸が口を開く。それが決め手となったのか、今まで出て行くこと  
していた橘の体から余計な力が抜けた。

「……………分かりました。怪我の回復に専念します」

本当は今すぐにも剣崎達のフォローに回りたい。

だが、少し動いただけで激痛が走るような体では、剣崎達の元に  
辿り付く前に果ててしまう。

……………悔しいが、それでは本当に足手纏いになるだけだ。

「……………剣崎達を信じる、橘。あいつはそんなに弱い奴じゃない。そ  
れは、共に戦っていたお前が1番よく知っている事だろう？」

烏丸のその言葉に、橘ははつとする。

そつだ。剣崎達は、強い。

仲間なら、彼らを信じるのも戦いなのでは無いか。

自分の体が回復して、それでも戦いが終わっていなかったその時  
こそ……………剣崎一真のフォローに行くこと。

そう、考えていた……………

\*

「くそ！ 倒しても倒しても限キリが無い！」

時間の中でダークローチと切り結んでいた侑斗が、憎々しげに吐  
き出す。

「野上、そつちはどうだ!？」

「な、何とか……………倒せてるけど……………って、うわあつ」

良太郎も侑斗に顔を向けて返すが、すぐに別方向から来たダーク  
ローチに押されてたたらを踏む。

「実力はそれ程じゃねえけど、こいつら、数が半端じゃない」

「うん。しかも、どんどんトンネルから出て来てるし」

背中合わせに立ちながら、良太郎と侑斗は襲い来るダークローチ  
の群れを幾度と無く斬り払う。彼らが倒した数は3桁を優に超えて  
いる。それ以上をカウントする気は無いし、そんな事をしている余

裕もない。

それだけ斬り伏せていても、トンネルから現れた全てを倒す事は不可能であった。

既に数え切れない程のダーククローチを、現実世界に逃がしてしまっている。

とは言え、そいつらを追っていけば、それこそ何千、何万ものダーククローチが西暦2005年に現れる事になる。それだけは、何としても避けねばならない。

「やっぱり、トンネルを塞ぐ事の方が先かも」

「だろうな。けど……」

言って、侑斗はちらりとゼロライナーを見る。

先程からゼロライナーは、全武装を使ってトンネルの破壊を試みているが、塞ぐどころかトンネルに傷1つ付ける事が出来ていない。その事実に関心なく舌打ちしながら、侑斗は時間の中から抜け出すようにするダーククローチを撃ち抜く。

「とにかく、俺達が今出来る事は、この連中を出来るだけ2005年1月に送らないようにする事だ」

「でも、2005年に行った怪物は……」

「少し位なら大丈夫だろ。ゼロライナーのオーナーの話じゃ、その時代にも俺らみたいな奴がいるらしいからな」

「僕達みたいなの……？」

どういふ意味か問い返したいが、襲い掛かってくるダーククローチを殲滅するのに手一杯で、それ以上は口に出す事は叶わなかった。

デンカメンソードを振るい、必死にダーククローチ達を食い止めるものの、やはりその脇をすり抜けて何体かのダーククローチが時間の中から時間の中から消えていってしまう。

もう、何体のダーククローチを逃したか分からない。

ゼロライナーの攻撃に、全く反応の無いトンネルを見ながら、それでも良太郎と侑斗は絶望せずに戦っていた。

\*

西暦2007年1月30日。

剣崎が目覚めたのは、イマジンが睦月の「扉」を通り、過去へと飛んだ正にその瞬間だった。

「睦月！」

イマジンに飛ばれたせいも、呆然とした表情の睦月に駆け寄り、彼の体に掛かっていた糸の様な物を引きちぎってその場に降ろす。同様に橋と始の戒めも引きちぎる。

純粹なジョーカーであるはずの始ですら、引きちぎる事が出来なかったと言うのに。

「剣崎、お前は……」

「……もう2度と会えないと思ってたんだけどな」

ほんの少しだけ距離を置いて、かつての親友は、過去と変わらぬ笑顔で返す。

「睦月、大丈夫か？」

「剣……崎、さん……？」

まだ意識が朦朧とするのか、焦点の定まらぬ目で剣崎を見ながら、睦月は不思議そうに問いかけた。

どうやら怪我は無いらしい。ただ、少しだけぼんやりとしているようだ。

それにほっと胸を撫で下ろすと、剣崎はポケットからある物を取り出した。

それは、1枚のカード。ラウスカードとは明らかに違うもので、始も橋も……無論、睦月も見覚えが無い。

「剣崎、そのカードは？」

不思議そうに問う橋には答えず、剣崎は無言のままそのカードを睦月の額にかざす。刹那、ぼんやりとそのカードの表面に、何かの絵柄が浮き出てきた。

よく見れば、それは先程のイマジンの姿絵と、日付と思しき数字。

「……2005年1月23日。……『あの日』か」  
「浮かんだ日付に思わず剣崎の顔が歪む。それは、剣崎がある「結末」を選んだ日。」

恐らくここにいる4人が、最も強く想うであろう日付だった。

「……これは、今みたいに『過去へ飛ぶ』怪物を追うための『チケット』なんだそうです。……俺が貰ったのは、この1枚だけですけど」

「貰った？ 誰に？」

訝る始の言葉に、剣崎は困ったような、曖昧な笑みを浮かべて……

「……始。またお前に会えて、嬉しかった」

「剣崎？」

「でも、やっぱり……俺とお前は、一緒にいられない。分かるだろ？」

剣崎は悲しそうに笑いかけると、今度は橘の方に向き直る。

「橘さん。あの時は勝手な真似をして、すみませんでした」

「……お前の望んだ結末だ。だが……」

「その後、ある青年に言われました。『勝手にいなくなられるのは、辛くて怖いんだよ』って」

すみません、と謝って、今度は睦月に顔を向ける。

それを見て、睦月は小さく……だが、確かに震えた。別れを告げられる事が、分かってしまったから。

折角、望まない形だったとは言え、4人がまた揃ったのに。

「……やめて下さい、剣崎さん……」

「睦月、俺は……」

「今は大丈夫じゃないですか！ だから、2度と会えないみたいなの言い方はやめて下さい！」

「『今』は大丈夫でも、それは『永遠』じゃない」

分かつてはいる。剣崎がここにいられない理由も、剣崎はここから離れようとしている決意も。

……かつて、ダークローチと立ち向かう時に引き止めようとした

望美の気持ち、今になって痛い程よく分かる。

頭では理解しているけれど、心では理解できない……その感覚が。「それでも……俺、誰かを犠牲にして成り立った平和は、虚しいと思います」

睦月のその言葉に、剣崎は自嘲気味に小さく笑い……小屋の扉へと走る。

同時に、小屋の外で汽笛のような音が響き渡った。こんな山奥に線路など走っているはずも無いのに。

「急げ剣崎！ イマジンが逃げる！」

小屋の扉を開け、そう言ったのは茶髪の青年。その後ろには黒い、大きな乗り物がある。

「ああ、分かっているさ、侑斗」

後ろの青年……剣崎は侑斗と呼んだ……に答えると、剣崎は満面の、だけどやっぱりどこか寂しそうな笑顔を3人に向け……

「……じゃあな。皆」

そう言っ、剣崎はその乗り物……多分汽車……に乗って、侑斗と呼んだ青年と共にどこかへと消え去った……

\*

ハナの持っていた携帯電話が鳴ったのは、剣崎が睦月を連れてその場を去った直後だった。

「もしも……」

『ハナさん、今すぐ戻って来て下さい！』

「ナオミちゃん？」

ハナの言葉が終わるよりも先に、ナオミの切羽詰った声が電話越しに響く。その声にどこか怯えの様な物を感じるのは気のせいかな。

「何かあったの……？」

『大変なんです！ とにかく、迎えに行きますから乗って下さい！』  
「え？」

不思議に思うと同時に、どこから聞き慣れたミュージックホーンが聞こえてくる。

はっとしたように空を仰ぎ見れば、既にデンライナーが自分達の後ろに停車せんと減速している所だった。

普段ならば白地に赤い線の入ったデンライナーだが、今は所々に黒い何かが張り付き、蠢いている。……そしてそれがダークローチであると気付くのに、そう時間はかからなかった。

「な……何や!？」

「うわあっ。気持ち悪い〜!!」

リュウタロスの声に気付いたのか、張り付いていたダークローチ達はデンライナーから離れ、ゆっくりと6人の方へと近付いて来る。その動き方は、トンネルの向こうのアルビローチと同じもの。

体色が黒い分、余計にゴキブリを思わせて気色悪い事この上ない。

「皆さん！ 早く乗って下さい！」

「そんな事言っただって……こいつらを放っておく訳には行かないじゃない！」

離れた事で乗車口を開けても大丈夫と判断したのか、それでも細く開けたそこから叫ぶナオミに、ハナも必死に声を張り上げて答える。

その間にも、ダークローチ達はジリジリとこちらとの距離を縮めているのだが。

「でも、時間の中の方がもっと大変なんです！」

ナオミのその言葉に、ジークはわずかに眉をひそめ……次の瞬間、ハナを小脇に抱え、ダークローチ達の頭上を軽々と跳び越した。

……まるで彼のイメージの元になった白鳥のように、優雅で誰をも魅了する動きで。

一瞬、モモタロス達も啞然とした表情を見せたが……すぐに自分を取り戻し、立ち塞がるダークローチ達を蹴散らしてデンライナーへと傾れるなだ様に乗り込んだ。

「あの連中の事は剣崎に任せろしかねえっ！」

「今は、ナオミちゃんの言ってた事を確認した方が良いと思うよ」  
自分達の行動に、不満の意志を見せる八ナを制すように、モモタロスとウラタロスが言う。

それと同時にデンライナーの扉も閉じる。

……ダークローチ達を、入れないために。

「オーナー！ 皆さん揃いました！」

「では、時の中へ向かいますよう」

オーナーの宣言で、デンライナーはこちらに向かって来るダークローチを振り切るように、現実空間から時間の中へと移動した。

相変わらず、2005年のトンネルは大きくその入り口を広げているのが見える。

入り口の色は、もはや闇よりもなお暗い黒。時々緑色の何かがチラチラと動いて……

「嘘……」

その色の正体に気付いたのか、思わずそう呟いてから八ナは自身の口元を押さえた。

トンネルの入り口だと思っていたそこには。無数……と言う表現では生温い程のダークローチが、ひしめき合うようにして存在していたのだから。

「何でダークローチが!？」

「ねえ亀ちゃん！ あれってジョーカーが作ってるんじゃないの！

? 何でトンネルから出てきてるの!？」

「ぼ、僕に聞かれても……」

「そんな事よりあれ！ あいつらと戦ってるの……良太郎と侑斗じゃねえのか!？」

誰よりも先に気付いたのはモモタロス。

目を凝らして見て見れば、確かにそこにはライナーフォームに変身している良太郎と、アルタイルフォームで戦っている桜井侑斗の姿。

いつからここで戦っているのだろう。2人は肩で息をしながら、

それでもやってくるダークローチ達を斬り散らしていた。

ゼロライナーはトンネルに向かって攻撃を仕掛けていているようだが、傷1つつけられていない。

「モモタロス、良太郎を助けなきゃ！」

「言われるまでもねえっ！ 亀、熊、鳥野郎！ お前らも行くぞ！」「当たり前や！」

モモタロスの言葉に力強く頷き、ジークを除くイマジン全員がデスライナーから降りようとしたその瞬間。オーナーが彼らの通り道を、持っていたステッキで塞ぐと、その視線を先頭にいるモモタロスからそのすぐ後ろに立つキンタロスに移し……

「……行くのは、キンタロス君だけに、してもらえますか？」

「何でや!？」

「他の皆さんには、引き続き調査をお願いします」

「……こんな状況で調査とか言ってる場合じゃねえだろ、おっさん!」

つかみ掛らんばかりの勢いで、モモタロスがオーナーに詰め寄る。他の面々も同じ気分なのだろう、険しい表情でオーナーを見つめている。

だが、そんな事はお構い無しと言わんばかりの表情でオーナーは真っ直ぐに彼らの視線を受け止め、見つめ返している。

「では……ウラタロス君にも行って頂きましょう。これが、私の出来る最大の譲歩です」

「何で僕は駄目なの!？ 僕も、熊ちゃんと同じで変身できるのに!」

「……………」  
リュウタロスの言葉に答えず、オーナーは微苦笑を浮かべて無言を貫く。

答えたくないのか、答えられないのか。どちらなのかは、今のオーナーの表情からは読み取る事が出来ない。

そう言う時のオーナーは梃子でも動かない。それを知っているだ

けに、今度はウラタロスの顔に微苦笑が浮かび……

「リュウタ、行ってきてくれるかな？」

「亀ちゃん……？」

優しい声でウラタロスはリュウタロスの肩を軽く叩いて言う。その青い瞳には、何かを決意した色が浮かんでいた。

……良太郎に憑いている姿のせいか、ウラタロスのはずなのに……良太郎に言われているような錯覚がする。

「大丈夫や。あいつら倒して、すぐに良太郎や亀の字と一緒にそっちに行つたる」

ぼんぼんと、リュウタロスの頭を撫でながら、キンタロスもいつもの調子でそう言葉を放つ。

キンタロスとウラタロス。

かつてイマジンとの……カイとの「最後の戦い」の前に、過去へ取り残す結果になった2人。

リュウタロスの不安げな表情は、それもあるからなのだろう。俯き、何かを堪えるように肩を戦慄かせ……だが、すぐに勢い良くその面を上げると、まるで迷子の子供みたいな表情で問う。

「……………本当に、来てくれる？ 良太郎と一緒に？」

「当たり前や！ 男に二言は無い！」

「亀ちゃんも、ちゃんと来るんだよね？」

「さあ？ 僕はデンライナーの中で、のんびりしようかな」

どんと自身の胸を叩いて答えるキンタロスに対し、ウラタロスは軽く自身の眼鏡のフレームを上げ、フフ、と軽く笑いながら答えた。その表情から、彼の答えがウラタロスらしからぬバレバレの嘘であると気付く。

だが今回ばかりは、その嘘が嬉しかった。

「その代わり、そっちで変身できるのはリュウタだけになるから……」

「大丈夫。本当に危なくなつた時だけ使う」

こくりと頷き、リュウタロスは自分のパスケースを見せる。

未だ、電王ガンフォームの描かれたチケットを。

「ほな……行くで、亀の字」

「りょーかい」

ひらひらと手を振って、キンタロスとウラタロスはデンライナーを降りた。

……良太郎と共に、戦うために……

その25：色々悩んで、そして選んで

剣崎一真。

スピードのエースに選ばれた者。

「一」とは数の頭、全ての最初。

西暦2005年1月22日。

ハナ達はその時間に到着した時、少し離れた場所から怒鳴るような声がした。同時に、何かを斬り伏せるような音も響いている。

不審に思いそろりと顔を覗かせたこそには、まるで何かに取り憑かれたかの様に金色の戦士の姿でダークローチ達をなぎ倒す剣崎の姿があった。

「戦え。俺と……戦え！」

鬼気迫るその迫力に圧され、ハナは思わず後退る。

ダークローチよりも、今は剣崎の方が怖い。

「剣崎君！」

この場にいた全てのダークローチが倒されたのを確認して、剣崎に駆け寄ってきたのは、トンネルの向こうでも剣崎と仲良くしていた男……確か、虎太郎と呼ばれていた……だった。

「そいつ等を倒すより、早くジョーカーを見つけて……！」

彼の言葉には何も返さず、剣崎はただ変身を解除するだけ。

その顔には疲れからか、びっしりと脂汗が浮いている。目もどこか虚ろで、口から漏れる息はぜえぜえと荒い。足に力が入らないのだろう、その場に半ば倒れるように座り込んでしまう。

「始を封印する、覚悟がつかないのかい？ でも！」

「虎太郎！ 俺を殴ってくれ！」

「剣崎君？」

虎太郎の言葉の先を聞きたくないとしても言うかのように、剣崎は

敵しい声で遮ると、真剣な……しかしどこか眠たげな表情で、怒鳴るように言葉を放つ。

「眠くてしょうがないんだ。今眠る訳にはいかない」

剣崎の言葉に、出来ないと言わんばかりに虎太郎は彼から視線を反らす。

その意思が伝わったのか、剣崎は軽く眉を顰めると半ば無理矢理立ち上がり、フラフラとした足取りでその場を後にする。

次の獲物を探す……そんな雰囲気を漂わせて。

「キングフォームのせいだよ！　こんな事してたらまたおかしくなつて、今度こそジョーカーになつてしまつかも！」

虎太郎のもたらした情報は、ハナ達にとって初耳だった。

以前、ハナとウラタロスが最初にこの時間にやってきた時に、それっぽい事を聞いたような気もしたが、ここまでのはつきりとした情報は初めてだった。

また？

おかしくなる？

ジョーカーになる？

「どついつ事……？」

「ふむ。あの金色の姿は、ジョーカーの力に近い」

小声で、誰にと言う訳でもなく問うハナに、やはり小声で返したのはジーク。

こちらを見つめる3人の目など気にしない様子で、ジークは更に言葉を続けた。

「恐らくはヒューマンアンドドの血を色濃く受け継いだのである。他の人間より、アンドドと融合しやすい体質なのだ」

「……それが、何でジョーカーに近いんだよ？」

「今のあの姿は、13体のアンドドと融合している。『何にでもなれる』ジョーカーに、近い力だと思うが？」

言われても、今一つ納得できないのか、モモタロスもリュウタロスも首を傾げている。

良太郎は4人のイメージをいっぺんに受け入れ、戦う事が出来る。だが、だからと言ってイメージに近い存在と言う訳ではない。

金色の鎧も、それと同じような物ではないのだろうか。

そんな考えを抱いているのに気付いたのか、ジークはふう、と深い……それはもう、この上なく深い溜息を1つ吐き出し……

「……教養の無さが、悲しい程に溢れているな、お供その1」

「うるせえ。とにかく、あの姿で戦い続けてたら、奴が2体目のジョーカーになっちまうって事だけ分かってりゃ良いんだろうが」  
考える事を放棄し、モモタロスは頭をかきながらぼやく。

ちよつと待って。2体目のジョーカーに、なる？

モモタロスのぼやきを聞いたハナの脳裏に、トンネルの向こうで、最後に見た光景が蘇った。

……アルビノジョーカーが剣崎の姿となって散っていった、あの光景を。

じゃあまさか、あのジョーカーって……それに、あの世界ってひよつとして……!!

そこまで考えた時、剣崎が辛そうな声で答えたのが聞こえ、ハナの思考は中断された。

「始との決着はつける。……信じてくれ」

背中にかけられた虎太郎の声に、弱々しい笑顔でそう答えると、今度こそ本当に剣崎はこの場を立ち去る。

その様子を、虎太郎はしばらく呆然と眺めていたが、すぐに彼もその後を追った。

「……剣崎、あいつの事封印するのかな？ トンネルの向こうみだいに」

「そりゃあ、そうなんじゃねえか？ 決着をつけるって言ってんだからよ。それに、あいつにはアンデッドになる理由がねーだろ？」  
天王路と違って、と付け足し、モモタロスは近くの壁に寄りかか  
るようにして立つ。

「そう……よね。私の考えすぎよ、ね」

浮かんだ考えを頭から追い払うように、ハナは自分に言い聞かせる。

きつと、考えすぎなのだ。

トンネルの向こうの世界が、遠い遠いこの世界の未来の姿であるなど。

アルビノジョーカーが、この時代にジョーカーとなってしまうた「剣崎一真」のなれの果てであるなど……

\*

「始、お前に世界を滅ぼさせたりはしない。お前だって、そんな事望んでいないはずだ！」

バイクに跨り、剣崎はそう呟く。

剣崎は、今もなお信じていた。相川始は、世界の破滅を望んでいない事を。

……人間の途中で、静かに、穏やかに生きていきたいと願っている事を。

厳しい表情でバイクを走らせていたその時、夜の摩天楼に、再び多数のダークローチが舞い降りる。ヒトと言う種に、滅びと言う定めを与える使徒の如く。

それを前にし、剣崎は再びブレイドへ変身。ブレイラウザーを振りかざし、その群れに向かって突き進む。

何匹かをブレイラウザーで薙ぎ払い、それでもまだ残っているダークローチを斬りつけようとした刹那。その圧倒的な数量を持って、ダークローチ達はブレイドを取り囲み、襲い掛かる。

しかしそれでもなお、剣崎はキングフォームにチェンジする事でその時に発生するエネルギーを利用して纏わりつく相手達を弾き飛ばす。

飛んでいった相手を消滅させた時、ダークローチに襲われる男性の後姿が視界に入った。

「人が……！」

慌てて助けに入り、その人物の無事を確認しようと顔を見て……それが、自分の知り合いである事に始めて気付いた。

「貴方は！」

「剣崎。それがお前のキングフォームか」

どこかシニカルな笑みを浮かべてそう言ったその男は、かつての自分の上司。

……いや、今でも上司だと思い、尊敬して止まない人物。

チベットへ向かったはずの元BOARD所長、烏丸啓だった。

「所長。良かった、無事で。いつチベットから？」

「遅くなってすまなかった。天王路に、命を狙われてな」

それを聞き、何かを言おうとした矢先。

まだ生き残っていたダークローチが、低い唸り声を上げながら2人めがけて襲い掛かってきた。

慌てて烏丸を庇い、薙ぎ払おうとするが……相手もそれほど愚かではなかったらしい。

ブレイドの手を払う事で、彼の持っていたキングラウザーを払い落とし、他所に控えていた2匹のダークローチ達と共にその動きを止め、襲う。

取り落としたキングラウザーを拾おうと手を伸ばすが、距離が遠すぎて届かない。

だが……誰かが、キングラウザーを拾い、ブレイドを襲っていたダークローチを薙ぎ払い、消滅させた。

蓄積された疲労からなのか、剣崎の変身は解除され、鎧越しにだったアスファルトの感触が妙にはつきりと感じ取れた。だが、それよりも気になるのは自分を助けた者。

荒くなる呼吸を無理矢理調えながら向けた視線の先に立っていたのは、行方がわからなくなっていた橘朔也だった。

「橘、さん……？」

「剣崎」

「本当に、橘さんなんですか？ …… どうして……？」

「危ない所だったけど、ギリギリの所で、烏丸所長に助けられた」

「どうして」に続く言葉を、「崖から落ちて無事だったんですか」と取ったらしい。橘は苦笑を浮かべながらも、簡潔に自分が「ここにいられる理由」を説明する。

嘘は吐いていない。実際に橘を病院に運んだのは烏丸だ。その前……崖から落ちた自分を救ったのは「青いライダー」だが、それは告げる必要の無い事だろう。

橘の無事に安心したのか、剣崎はほっとしたような笑みを浮かべ……そのまま、崩れ落ちるようにして眠りに落ちてしまう。

「剣崎！？ おい！」

「剣崎、剣崎！ しっかりしろ！」

橘と烏丸が呼びかけるが、剣崎の眠りは深く、目覚める様子が無い。

それは……剣崎のジョーカー化が、深刻なまでに進んでいる兆候である事を、橘は知っている。

これ以上、剣崎に負担をかけるべきでは無い

そう思いながら、橘は烏丸と共に、剣崎を白井邸に運んでいった

……

\*

ダークローチ達と戦い始めてから、どれ程経っただろうか。

良太郎の体力は、既に底をつきかけていた。

イマジン達と共に戦うようになって以降、それなりに体力作りをしていたとは言え、彼の基礎体力は良くて人並み。下手をすると平均以下かもしれない彼がここまで保った事の方が奇跡に近い。

「野上……無事か！？」

「だ、大丈夫、だけど……そろそろキツイかも……」

「息、あがってるぞ」

「そう言う侑斗だって……足、ふらついてるよ」

肩で息をしている侑斗を見ながら、良太郎も軽口で返す。

良太郎に指摘された通り、侑斗の足も今は覚束ない。膝が笑い、気を抜くとその場に崩れ落ちそうになる。

軽口を叩く余裕など本当は無い。実際、時の中から逃がしてしまうダークローチの数も増えてきてしまっている。

時々、デネブがゼロライナーでダークローチ達を跳ね飛ばし、蹴散らしてくれるが、それでも数が減った様子は見えない。

「野上、前！」

「へ……？」

疲れのせいか、ぼんやりしていた良太郎の前に。

いつの間にかダークローチが肉薄していた。

避けられない！

思い、襲い来るであろう衝撃を覚悟したその瞬間。

がぎんと、金属同士がぶつかるような、奇妙な音が良太郎の頭上で響く。

え……？

いつまでも襲ってこない衝撃と、聞こえてきた音に違和感を覚え、恐る恐る視線を上げた先にあつたは、ダークローチの爪を止める、大型の斧。

その斧の先を辿るように、良太郎はゆっくりと視線を向ける。

そこにあつたのは、自分と同じ顔。

だけど髪は長くて、1房だけ金髪があつて。

瞳の色も、自分とは違う……黄に近い金色で。

「キントロス……」

「良太郎、しつかりせえ！ 相手はまだまだ居る！」

「そうそう。限界が近いんだつたら、僕と代わらない？ 良太郎」

キントロスの叱咤とはまた別の方から聞こえた声。

そこにいるのは、やはり自分と同じ顔で。

だけど七三分けられた前髪に、1房だけ青い髪があつて。

黒縁眼鏡の奥で、青い瞳が光っている。

「ウラタロスも……どうして……」

「ま、成り行き、かな」

ひょいと肩をすくめ、いつも通り本心を覗かせぬ様な物言いをするウラタロス。

だがその言葉に悪意が無い事は、すぐに分かる。

「亀の字！ のんびりしとる場合とちやうで！」

「分かってるって。キンちゃんはホント、真面目だねえ」

やれやれと言わんばかりにウラタロスは肩を竦めると、フフ、と軽く笑い……

「良太郎、体借りるよ？」

「へ？」

良太郎が気の抜けた返事をしたのと、ウラタロスが彼に憑依したのとはほぼ同時。その一瞬後には、良太郎の意思が退いた為なのかベルトに着いていたはずの赤い携帯電話……ケータロスがするりと虚空へ溶け込んだ。

そして良太郎は小さく体を震わすと、ベルトにある青いボタンを押してライナーからロッドへと姿を変える。

一方のキンタロスは、自分のパスとベルトを出し、黄色のボタンを押してからパスをベルトにセタッチし……

「変身」

キンタロスの声にあわせるように、ミュージックホーンが鳴り響き、金色のオーラアーマーが展開、彼の体を包む。

デンガッシャーをアックスモードに組み立て、金色の鎧を纏った近距離戦闘型形態、アックスフォームとしてダークローチ達と対峙する。

「俺の強さは……泣けるでえ！」

首を鳴らしつつ、そう宣言すると、並み居るダークローチの群れを叩き伏せる。

「いつにも増してやる気だねえ、キンちゃんは」

ウラタロス、僕達も……

「……あんまり動きたくないんだけど……」

そう言いながらも、ウラタロスもロッドを揮い、周囲のダークローチを蹴散らす。

少し離れた所では、侑斗もゼロフォームで戦っていた。その動きにいつものキレが無いのは、やはり相当体力を消耗しているからだろう。

いつもならデネブ辺りがサポートに入るのだろうが、今の彼はゼロライナーでトンネルを破壊すると言う仕事に従事している。恐らく、侑斗の体力面のサポートは、彼には期待できないだろう。

良太郎も僕ちゃんも限界超えちゃってるみたいだし、長期戦はやっぱり不利、か。これは「あっち」が決まらないとキツイかな

剣崎とジョーカーの決着がつかない限り、恐らくダークローチ達の襲来は止められないだろう。

だから……

「早く決着してよ……」

祈るようにそう呟き、気を取り直したようにダークローチ達の殲滅を再開した。

\*

「もう剣崎1人の力で、どうにかなる数じゃない」

白井邸にて、橘が落胆したように呟いた。

ダークローチとの戦闘が何とか終了し、眠ってしまった剣崎を運んだ後、橘と烏丸はリビングに入って現状を伝えるニュースを見ていた。

無数、という単語では生温い数のダークローチが人々を襲う姿が、画面に映し出されている。

その現場で必死に惨状を報道していたクルー達も襲われ、彼らはカメラを置いてそこから命からがら逃げだしている有様。

いや、今まで報道していただけ賞賛に値する。

「これ程の大群では、警察も軍隊も無力だ。もはや時間はない。阻止するにはやはりジョーカーを……」

封印するしかない。烏丸が言い切るその前に、橘が机の上にあるブレイバツクルに手を伸ばす。

ギャレンバツクルが壊れている上に、剣崎があの状態である以上、もはや自分がブレイドとなって戦い、ジョーカーを封じるしかない……そう考えたのだ。

「今なら間に合う！」

ヒトと言う種が全滅していない今なら、まだ世界が滅びずに済む。犠牲は、ジョーカーだけで終わる。

そう思い、橘がリビングを出ようとした矢先。

別の部屋に寝かせていたはずの剣崎が橘の前に立ち塞がり、彼の手にあるブレイバツクルを掴んだ。

……まだ、ブレイドとして戦えると、言わんばかりに。

だが、その目はやはりどこか虚ろ。恐らく今の剣崎は、襲い来る眠気と必死に戦っているのだろう。その状況でダークローチやジョーカーと戦おうなど、無謀としか言いようが無い。自身の内と外に敵がいるような物だ。

「……俺が奴を封印する。これは俺達の責任だ！」

ジョーカーを封印できずに放置していたのは、剣崎の責任と言っても良いだろう。彼の迷いが、今の惨状を生んでいる。

だが、そうなった直接の原因を……カテゴリーキングを封印し、ジョーカーを最後の1体として残してしまったのは橘だ。

あの時、睦月に言ったように、先にヒューマンアンデッドを解放し、その上でカテゴリーキングを封印していれば、こんな事にはならなかった。命に別状が無いとは言え、睦月もジョーカーに怪我を負わされずに済んだはずだ。

……その事に、橘は少なからず責任を感じていたのである。

「俺は、考えも無しにダークローチと戦っていたんじゃないやありません

！」

そう言つと剣崎は、橘からブレイバツクルをひったくる。

虚ろだったその瞳の奥に、確固たる信念と……同時に、狂気にも似た何かを宿して。

「戦つて……戦つて！ 待っていたんです」

「待っていた？ 何をだ？」

「………もしも、俺が失敗したら………その時は、お願いします」

橘の問いに答えず、ただ自分の願いを橘に伝える。

信頼する先輩だからこそ、自分が「失敗」した時のフォローを任せられる。

そう信じ、剣崎がそこから立ち去ろうとした瞬間。

何かの可能性を思い当たったらしく、烏丸が真剣な表情で彼に問う。

「剣崎！ 君は本当に、ジョーカーを封印するつもりなのか？ それとも……」

「………やはりその問いには答えず、曖昧な笑みを浮かべて……」

……剣崎は黙って、白井邸を後にした。

## その26：出来すぎたシナリオ

悠久の時は、感情を奪う。

喜び、悲しみ、怒り、妬み……

そしていつしか……「退屈」すらも感じなくなる。

一夜明けた、西暦2005年1月23日。

「トンネルの向こう」では、剣崎一真が相川始を封印したその日が来た。

あの時は土砂降りの雨だったのに、こちらの世界では雲ひとつ無い青空が広がっているのを、ハナはぼんやりと見上げている。

昨日の剣崎と虎太郎のやり取りを聞いて、ずっとハナは1人で考えていた。

剣崎が戦うと決めた理由を。

彼にとって、相川始は親友だ。それは見ていれば充分過ぎる程伝わってくる。だが同時に、人間を守る事も大切に行っている節がある。人間を守る為に親友を犠牲にするか、親友を守る為に人類を犠牲にするか。

これによく似た選択肢を、ハナは知っている。

カイと戦う直前の良太郎が、まさにこれに当たった。

イマジンを倒さなければ自分達の時間は崩壊する。だが、自分達の時間を守ればイマジンは全て消え去る。

……共に戦った、モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、そしてデネブとジークすらも。

その事実を悩み、そして守りたい人の存在に挟まれ。

悩んで悩んで、悩みぬいた拳句、良太郎はイマジンと……カイと対決する事を選んだ。

結果としてイマジン達は良太郎や侑斗とのつながりの強さ……」

良太郎と一緒に過ごした時間」故に残る事が出来たが、それは奇跡的な出来事に過ぎない。

だが、今回はイマジンではなくアンデッド。封印すれば、おそらく解放しない限り2度と会う事は無い。良太郎の時とは、根本的に違う。

剣崎もきつと、良太郎と同じくらい悩んだのだろう。その結果出した答えが「戦う事」。

だがそれは……本当に先程挙がった2択の結果なのだろうか。ひよつとすると彼は、もっと別の可能性に賭けているのでは無いだろうか。

剣崎が、もう1人のジョーカーになる可能性に。

金色の戦士の姿で戦い続ければ、剣崎一真はアンデッドに……ジョーカーになる。そのリスクを負ってでも、彼は金色の戦士の姿でダークローチを倒していた。

……その行動の理由は、おそらく……

「ハナちゃん、アレ！」

彼女の考えを中断させるように、リュウタロスが声をあげ、ある方向を指差す。

その先にいたのは……山小屋に入ろうとする、相川始の姿。そして、彼が向かう山小屋に……リュウタロスはどこと無く覚えがあった。

そこが最初にこの時間に降りた時に、キンタロスと橘が彼を運び込んだ小屋だと気付くのにそう時間はかからなかった。恐らく彼に……否、彼らにとって、あの小屋は何らかの思い入れのある場所なのだろう。

「静かだな。……耳が痛えくらいに」

「……うん」

そこに破滅の使徒など存在しないかのように、周囲は静寂で満たされている。

けれどそれが、嵐の前の静けさと言う物である事も、モモタロス

達には充分すぎる程分かっていた。本当のクライマックスの直前と言う物は、これくらい静かで、妙に落ち着く空気を醸し出す。

相川始は、待っているのだ。

自分を封印できる、唯一の存在を。

自分が封印されても良いと思える、たった1人を。

例えばそれが、彼が愛した人達との別れだとしても、自分のせいで死んでしまうよりは余程良い。

栗原親子が……人間が消えるくらいなら、自分が封印される方が  
良い。

……その結末、残された者の心にどんな影響を与えるかも考えず。ただ、目の前にある平穩のためだけに。

「……来るぞ、隠れる」

何かに気付いたらしいモモタロスに言われ、全員が小屋から少し離れた木の影に身を潜める。

……誰が来たのかなど、考えるまでも無い。この状況なら、来る人物はたった1人しかない。

小屋の中にいる者が待つ存在。

この戦いに、決着をつけるための戦士。

……剣崎一真。この一連の事象における切り札。

\*

剣崎は当然のようにその小屋に足を向け、そしてこれまた当然のように始はそこにいた。

「懐かしいな」

「ああ。この場所から、俺とお前は始まったのかもしれない」

こちらを見向きもせずと言っ始に、剣崎はにこやかな笑顔で答える。

この小屋は、今の剣崎と始の関係を築いた「始まりの地」。そして、様々な出来事を見てきた「思い出の地」でもある。

……だからこそ、始も剣崎もここに足を向けた。

ここが始まりであり、そして……

「だから、ここで終わるんだ」

まるで最初から決めていたかのように、始は何の感情も感じられない表情で言う。

「始、お前は本当に世界を……人類を滅ぼしたいのか？」

「……俺にはもうどうにもならない。俺はそうするように作られた」  
それは、間接的な否定。

相川始は、世界を滅ぼす事を望んでいない。

だが、自分の意志では、滅びを止める事は出来ない。何故なら……

「俺は……ジョーカーだ」

そう、始が宣言した瞬間。唐突に彼は苦しみだし、その姿が歪む。ヒト……相川始の姿から、本来の姿であるジョーカーへと。

そして……その口から漏れる咆哮と共に、衝撃波が放たれる。彼  
の意思とは関係なく、小屋を吹き飛ばすに足る威力の衝撃波を。

剣崎も、そして……放った本人である始さえも、気を失う程の衝  
撃波。

……どの位の時間が経っただろうか。

一瞬？

数分？

吹き飛ばされた側も、吹き飛ばした側も、目を覚ましたのは同時  
だった。

鈍った感覚で空を見上げれば、小屋に来た時と日の高さが殆ど変  
わっていない。ならば、気絶していたのはそれ程長い時間ではない  
のだろう。

視線を瞬時に空から相手……「剣崎一真」と「相川始」の存在を  
確認すると、何も言わず互いに距離を詰める。

剣崎一真は、ブレイドに。

相川始は、カリスに。

変身し、攻撃の応酬が始まった。

防御の様子など微塵も無い。何合、打ち合ったのか定かでは無い。しかし、このままでは決着がつかないと思ったのか、カリスはハートのキング……「EVOLUTION」のカードを腰のベルトに通し、黒から赤……ワイルドカリスへと進化すると、ブレイドをその圧倒的なパワーで吹き飛ばす。

そしてその勢いのまま、ハートスートの13枚のカードを1枚の「WILD」と名付けられたカードにまとめあげた。

それを確認すると、ブレイドはそれに対抗すべくブレイラウザーから3枚のカードを取り出し、読み込ませる。

『KICK』

『THUNDER』

『MACH』

スピードスートの5、6、9。その組み合わせで出来る技は……

『LIGHTNING SONICK』

電撃を纏った、ブレイドの高速の蹴り。

それに対抗すべく、ワイルドカリスはワイルドのカードを読み込ませようとして……考え直したように、カードを放棄、ブレイドのキックを殴る事で弾き返した。

\*

「何なんだよ、この戦い……」

赤い戦士となった始に弾かれ、変身解除された剣崎を見つめつつ、モモタロスは小さく呟きを落とす。

先程、始が……いや、ジョーカーが放った衝撃波に巻き込まれたせいで、彼らも吹き飛ばされたが、打ち身程度で大した怪我は無い。ハナも、ジークがとっさに庇ったお陰でこちらはかすり傷もついていない。

イマジンであるモモタロス達だから打ち身で済んだようなものの、ハナは人間。まともに喰らえば、恐らく大怪我をしていただろう。

それはともかく。

2人の戦いを、少し離れた所からこっそりと見ていたのだが……  
鬼気迫るその戦いに、モモタロスすらも絶句していた。

だが……どこかまだ、全力で戦っているようには見えない。特に、始の方は。

「……本気で戦うつもりは無いのか、始」

攻撃を弾き返され、変身解除状態となった剣崎が、始を睨みつけながら言う。

彼もまた、始が全力で来ていない事に気付いていたのだろう。

……傍で見ているモモタロス達ですら気付いたのだ。戦っていた剣崎が気付かないはずも無いのだが。

「何だと？」

「何故、ワイルドのカードを使わなかった？」

剣崎に言われ、始は赤い戦士の姿から、ヒトの姿になり……

「……気付いていたのか」

「ああ。お前はわざと、俺に封印されるつもりだったんだな」

「それ以外に、方法はあるか？」

薄々、ハナ達も感付いてはいた。始が本気で戦わないのは、自分が封印される事で、世界を守る事が出来るからだ。

そしてきつと……それしか方法が無い事も。

「俺の体は、もう俺の意思ではどうにもならない。攻撃を受ける程俺は、1匹の獣に戻り、戦いの事しか考えられなくなる」

それは、ジョーカーの……アンデッドの本能だから。

だから……

「そんな俺を倒せるのは……お前だけだ」

「……始……」

辛そうに、それでも何かを決意したように。

剣崎は小さく親友の名を呼び……そして、宣言した。

「……アンデッドは全て封印した。お前が最後だ。……ジョーカー」

「俺とお前は、戦う事では分かり合えない！」

それは、トンネルの向こうの世界で最初に見た物と、よく似た会話。

場所や天候、剣崎の口調こそ違うものの、あの時の再現を見ているような気がした。

「始……それで良い。本気で来い！ ジョーカーの力を全て……俺にぶつける！」

ジョーカーと化し、その影から複数のダークローチを生み出すのを見て。

戦士へと変身した剣崎が、満足そうに言葉を放つ。

だが……ハナ達は知っている。ダークローチは、トンネルの向こうからやってきている「侵略者」である事を。

「あいつら……ひょっとして、世界を滅ぼすのを、ジョーカーのせいにしてるんじゃない……」

誰にでもなく、リュウタロスが呟く。

……「ジョーカーが残れば世界が滅びる」と言う伝承にかこつけて、異世界の侵略者が送り込んでいるのだとしたら？

そして、その事実を知らないジョーカー……相川始が、「ダークローチを生み出しているのは自分」だと思い込んでしまったとしたら？

自己暗示……思い込みとも呼べるそれは、時として恐ろしく効く事実、かつてジョーカーに戻る事を恐れた始は、自己暗示をかけて深く眠りについた事があるでは無いか。

思い込み故に、ジョーカー自身もダークローチとこの世界をつなげる「扉」と化してしまっていたら？

何の事は無い。全ての元凶は、「トンネルの向こう」にいる、「誰か」。

それこそが、倒すべき敵であり、トンネルを増やしている張本人では無いのか。

「だとしたら……僕、許さないよ。あいつらも、あいつらを送り込

「…誰か『も』」

「……それ以上に許せねーのがいるだろーが」

暗い声で呟いたリュウタロスに対しモモタロスが、彼らしからぬ静かな怒りを湛えて言う。

「この世界の『神』って奴だ。何でアイツの望みを叶えてやらねーんだよ！」

本来なら、カテゴリーキングが封印された時点で、相川始の願いを聞き届ける「神」がいたはずである。

そして、それが始の願いを聞き入れたならば、こんな事にはならなかったはずなのに……

それを思うと、モモタロスは悔しくて仕方が無かった。

「無駄だ。聞いた話では、世界に干渉するための道具すらも、向こうの『神』に押さえられているからな」

「え？」

その言葉は、リュウタロスの仮説を肯定するものであり、そして今起きている事を把握している事も指していた。

ジークがいつ、どこで、誰からその話を聞いたのかは分からない。

だが、それを問うたところで彼は答えてくれるだろうか。

……多分、答えないだろう。それが例え、ハナからの問いかけだったとしても。

「『神』は有能だが万能では無い。強すぎる力が世界に干渉すれば、世界はその力に耐え切れずに崩壊する。そのためのワンクッションが必要なのだが……」

「それを、トンネルの向こうの『誰か』……『神』が奪った」

「そう。そして逆に、それを使ってあのダークローチを送り込んでいるのだ」

ハナの言葉に満足気に頷き、ジークは憐れむ様に視線を向ける。

その存在故に、運命に……神々に振り回される者達に……

## その27：俺が選んだ「結末」

また、間に合わない。

それでも未来は決まっていない。

彼が、世界に絶望するとは……限らない。

「所長、剣崎が何をするつもりなのか……教えてください」

剣崎が白井邸を後にしてすぐ、橘が軽く顔を顰めて烏丸に問う。

「もしも、俺が失敗したら……その時は、お願いします」

そう言った剣崎の表情が、妙に不安を掻き立てる。

もう2度と会えなくなるような……そんな不安を。

「私が考えている通りなら、確かに人類は救われるだろう。だが……」

烏丸が低く呻く。

余程言い難い事なのか、眉根を寄せ、苦しそうな表情で……それでも、烏丸は自分の仮説を口にした。

「奴は、アンデッドになるつもりだろう」

「剣崎がアンデッドになる!?」

予想もしていなかった事だったらしく、橘も広瀬も虎太郎も、驚愕の表情を浮かべた。

だがその瞳の色にあるのは、「信じられない」ではなく「信じたくない」に近い。

「剣崎は自分から、ジョーカー……アンデッドになるつもりだ」

「だから……わざわざキングフォームでダークローチと戦っていたのか……アンデッドと融合するために」

「折角自分の意思でアンデッドになる事を阻止してきたのに、その逆を!?」

剣崎はキングフォームの力を手に入れた当初、その力の大きさに

取り込まれ、「2体目のジョーカー」へとなりかけた事があった。狂気に満ちた笑い声を上げ、近くにいる者全てを薙ぎ払おうとした事が。

それを、剣崎は強い自制心で押し止めてきた。

しかし今、彼は押しとどめる事を止め……逆に自分の「変化」を、積極的に受け入れたのである。

「もし彼がアンデッドになれば、この世に2体のアンデッドが存在する事になる。ジョーカーはバトルファイトの勝利者では無くなり、世界の滅びが始まる事は無い」

今起きている状況を止める方法は2つ。

ジョーカーを封印するか、アンデッドを2体以上存在させるか。

しかし後者の場合、「アンデッドの解放」と言う手段は取れない事が証明されてしまっている上、ケルベロスのような人造アンデッドを生み出す時間的な余裕も……無い。

だからなのだろうか。剣崎が、「自分がアンデッドになる」と言う道を選んだのは。

「剣崎が……人間でなくなる……?」

烏丸の言葉を聞き、橘が慌てたように……悔しそうにその場を離れる。

恐らくは、剣崎の元へ向かい、彼のやろうとしている事を止めるために。

剣崎の言う「失敗」とは、彼がジョーカーとしての意識に飲み込まれてしまった時の事。

あの時のように、闘争本能のままに、戦う事を楽しむようになってしまう事。

そうなった時、自分と相川始……2人を封印する事を、剣崎は自分に託したのだと、橘は気付いてしまったから。

何故今までその可能性に気付かなかったのか。剣崎一真は、他人の為なら自分を犠牲にする事も厭わない男だと、橘もよく知っていたはずなのに。

それだけ俺も、焦っていたと言う事か。ジョーカーと言う脅威に……！

ギリと奥歯を噛み締めつつ、橘は自身のバイクに跨り白井邸を後にする。アンデッドサーチャーは、既にジョーカー……否、カリスとブレイドが同位置にいる事を知らせている。

一方で白井邸に残った広瀬と虎太郎は、何も出来ない自分に苛立ちながら、それでも祈らずにはいられなかった。

剣崎の無事。ただそれだけを。

「神様……」

「神などいない」

広瀬の呟きに、烏丸が短く返す。

「このバトルファイトも、元はと言えばこの地球に住む生物達が望んだ物だ。己が進化だけを望む闘争本能。それら全てが融合して、バトルファイトと言うシステムを生み出したのではないだろうか」

それが、烏丸の立てた仮説だった。

本当は、神の存在を認めたくないだけなのかもしれない。居たとしても、何もせずただ見ているだけの神など、「神」と呼べるのだろうか。

見ているだけの存在ならば、それはいないのと同じではないか。

もし本当に神がいるのなら、ジョーカーなど……世界を滅ぼす存在など、生み出さなかったのではなからうか。

\*

「結局……剣崎がアイツを封印して、それで終わるのかな。トンネルの向こうで見た時みたいに」

剣崎と始。その2人の戦いを見つめながら、悔しそうにリュウタロスが呟く。

その先に起こるであろう悲劇を、彼らは見てしまったから。

少なくとも、取り残された天音に深い悲しみを背負わせる事にな

るのは間違いない。

しかし……

「あの世界と同じ事になるとは……限らないんじゃない？」

その戦いは、トンネルの向こうで見たものとはまるで違っていた。天候や場所もそうだが、何より戦っている本人達の「想い」が、異なるように見える。

向こうでは「戦いたくない」とすら言っていた剣崎が、こちらでは「本気で来い」と言っている。

向こうでは「容赦しない」と言っていた始が、こちらでは「封印されたい」と願っている。

「例えば……例えばだけど、剣崎さんがジョーカーになったら、この戦いはどうなるの？」

「何でそんな事聞くんだよ？」

「だって……剣崎さんが今の時点でジョーカーになったら、アンデッドは2体になるのよね？」

ジョーカーの猛攻に弾き飛ばされ、剣崎が青い戦士から金色の戦士に変化するのを見ながら、ハナは不安そうに、しかしどこか確信めいた声で言葉を紡ぐ。

「ふむ。封印されたアンデッドを解放できないのなら、新しくアンデッドを作って2体に増やせば良い」

「だから……剣崎が2体目のアンデッドになって戦いを続けさせるでも、決着はつけない……そう言う事、ハナちゃん？」

リュウタロスの言葉にこくりと頷き、ハナは再度剣崎達に視線を向ける。

金色の……ジョーカーに近い力を持つ戦士となった事で、また1歩ジョーカーその物に近付いた剣崎と……それに気付いていないジョーカーを。

\*

「行くぞ、ジョーカー！」

カードを通した気配は無かった。

だが、鎧のレリーフからカード状のエネルギーが展開され……

『ROYAL STRAIGHT FLASH』

電子音が、キングフォームの最強技の名を告げ、ブレイドは躊躇無くジョーカーに向かって突き進む。

ジョーカーはそれをかわす事無く……むしろそれを受け止めると今度はそれと同等のエネルギー衝撃波を放った。

ぶつかり合い、「相殺」ではなく「相乗」されたその衝撃に吹き飛ばされ、2人の手からは武器が離れ、消える。それでも彼等は戦う事を止めなかった。

殴られたら殴り返し、殴り返されれば更にこちらも殴り返す。そんな、戦いと呼ぶ事もおこがましいような、ただの殴り合いが続いた。

互いの力をその身に受け、受けた分だけ相手に返す。そんな喰い合いにも似た熾烈な拳の応酬。

「うああああああっ」

「おおおおおっ」

獣のような2人の咆哮が重なり合い、クロスカウンターの要領で互いの拳が互いの体に炸裂する。ブレイドの拳はジョーカーの顔に、ジョーカーの拳はブレイドの胸に。

それぞれが纏う力が、それぞれの拳を通じて体内で炸裂する。

その刹那。

「うっ……うっ、うっうっ……」

苦しげに呻いたのは、ブレイドの方であった。

よろよろと後ろに後退り、声同様、苦しげに自分の胸座むなぐらを押さえ、それと同時にただだろうか。

ドクン、と、キングフォームのレリーフが脈打った。

まるで鎧そのものが、生きているかのように。

それが自身の鼓動と同調し、鼓動の度に心臓から押し出される血

液の流れを感じる。

だが、そこに微かな違和感を覚え……その正体に思い当たった時、ブレイドは……否、剣崎一真は、悟った。

「……俺は………」

\*

「うおおりやあああああつ」

気合を入れ、わらわらと群がるダークローチを薙ぎ払うキンタロス。

いつもならダイナミックチョップで決める所だが、今回それが使えるのはたったの1度。いつ果てるとも分からぬダークローチ相手に、使う訳には行かない。

「やつぱり……数が多だね」

キンタロスの背中を守るように戦っていたウラタロスが、そうばやいた瞬間。

トンネルの向こうから、怪獣の鳴き声に似た声が響いた。

「ちよつと！今の音って……！」

「嘘やる！？」

思わず声をあげる2人。侑斗も、声こそ出さなかったもののその音の方に向き直り、動きを止める。

聞き覚えのある……いや、忘れなくても忘れられない部類に入るその「音」。

音がした一瞬後くらいだろうか。トンネルの中から、橙と茶の間色の様な色をした、鰐の顔のような列車が顔を覗かせ、ダークローチを蹴散らしつつ、こちら側に出てきた。

あれは！

「『神の列車』！？」

そう。それはかつて、牙王と名乗った時の列車専門のトレインジヤック犯が奪い、そして良太郎達が破壊したはずの「神の列車」…

…ガオウライナー。

現実を喰らい、全てを「時間」へと変えてしまふ凶悪無比の、時の列車の1つ。

しかし今はその牙と顎キバをもつて、並み居るダークローチを喰らい、消滅させていく。既に残っているのは自分達の周囲に群がる数体だけ。

「よっしゃ。これだけの数なら……」

『FULL CHARGE』

ベルトにパスをセタツチすると同時に、エネルギーがキンタロスの持つアックスへと集約されていく。そしてエネルギーが完全に集約されたのを感じ取ると、キンタロスは高く飛び上がってアックスを振りかざす。

普段から豪腕の彼が振り下ろすアックスは十分な凶器だが、そこに集約されたエネルギーの奔流と、落下による速度も加わる。

ダークローチの脳天めがけて振り下ろされたアックスは、勢い余って時の砂地へと突き刺さり、その周囲に衝撃の波紋を広げた。

刹那、その衝撃を直に受けたダークローチの群れが大きな爆音と共にこの世から消滅していく。

「ダイナミック・チョップ」

満足気に技名を言い放ち、こきりと自身の首を鳴らすキンタロス。その一方で、ガオウライナーがトンネルから完全に姿を現したその刹那。

今まで何をしても閉まる気配の無かったトンネルが、急速に閉じていくのが見て取れた。

トンネルが……

「閉じたね、完全に」

「それにしてもあの電車、一体誰が乗ってるんや……？」

しかし、そんなキンタロスの問いに答える事無く、ガオウライナーはそのままだこかへ走り去ってしまう。

まるで、自分の仕事は終わったと言わんばかりに。

気が付いた時には、既に元からそこには山しかなかったかのよう  
な静寂が周囲を包み、電王ロッドフォームとアックスフォーム、そ  
してゼロノスの3人だけが、取り残されたようにぼつんと立ち尽く  
している。

宙では運転席でデネブがおろおろしているのか、妙にその車体を  
くねらせて走るゼロライナーもいる。

ひよっとして、助けてくれたのかな？

「さあな」

良太郎の声に短くそう答えると、侑斗はベルトを外す。

それにならうように、ウラタロスもキントロスもベルトを外し、  
変身を解除した。ウラタロスに到っては、ひよいと良太郎から離れ  
る。

「何であのトンネルが閉じたのか、それとガオウライナーに乗って  
るのは誰なのか、俺にも分からない。けど、これで『次』に移る事  
が出来る」

「次？」

「ああ」

停車したゼロライナーに乗り込みながら言う侑斗に、その後を追  
いつつ良太郎が問う。

その後ろを、ちゃっかりとウラタロスとキントロスがついて来て  
いるが、侑斗は特に気にした様子も無く頷いた。

「剣崎一真つて男を、ゼロライナーで拾う。指定された時間は西暦  
2005年1月23日」

懐中から侑斗が取り出したのは、彼が言った日付と、剣崎が変身  
した姿の描かれているチケット。

「何でそいつのチケットがあるんや!？」

「まさか……彼が、時の住人になるって事!？」

「え……2人とも、その人の事、知ってるの？」

信じられない、という表情で叫んだキントロスとウラタロスに、  
ちよっただけ驚きつつも良太郎が不思議そうに問うた。

良太郎同様、侑斗も不思議そう……を通り越して怪訝そうな顔で、2人を見ている。

「まあ、こっちが一方的に知ってるだけ」

眼鏡をかけなおしながら、ウラタロスは曖昧に答える。彼自身も、何と説明したらベストなのか分っていないようだ。

「……まあ良い。とにかく、行くぞ。……何か、踊らされてる感じだけだな」

不快そうに侑斗は言い……ゼロライナーを、出発させた。

剣崎一真が、何かを悟った瞬間。

そして、時間の中ではトンネルが完全に閉じた瞬間。

ダークローチの群れが、一瞬にして……消えた。

病院に入り込み、意識を取り戻した睦月と、彼についていた望美を襲っていた群れも。

剣崎の元に向かおうとしていた橘を襲っていた群れも。

白井邸に入り込み、虎太郎達を襲っていた群れも。

街中で人々を蹂躪していた群れすらも。

その全てが、同時刻に……消えたのである。

「今だ剣崎。俺を封印しろ」

闘争本能が和らいだのか、ジョーカーが懇願するように言う。

世界を滅ぼすくらいなら、自分が封印された方がマシだ。そして今、自分は封印される程に弱っている。封印出来るのは、今しかない。

だがその言葉に対して剣崎は……封印するどころか、変身を解除し、ベルトを外した。

変身解除したその顔には、自分が殴ったが故にできたのであろう赤い痣と、切れた口の端から流れたらしい赤い血。

それを不審な表情でジョーカーは見つめ……そして、見てしまった。

腕から新たに滴り落ちる彼の血を。

本来ならば赤いはずのその血の色が、アンデッドの血と同じ、濁った緑色をしているのを。

「……剣崎……!!」

投げ捨てられたプレイバックルの下に現れた、自分と同じジョーカーラウザー。

口の端から流れていた血も、今や腕から滴り落ちる物と同じ……  
緑。

それは即ち、剣崎一真という「人間」が消え、新たなジョーカーが誕生した証であった……

## その28：辛くても、運命と戦う

アルビノジョーカー。

それは、剣崎一真が世界に絶望した姿。

白き姿に、人の血を意味する「赤」を纏った者。

『SPIRIT』

ジョーカーから相川始の姿に戻り、彼はただ、呆然とした表情で自分の親友を見つめていた。

「剣崎、お前……………お前は……………！」

自分の手から流れ落ちる血と、剣崎が腕から流す血を見比べながら、相川始は絶望したように呟く。

「アンデッドになってしまったと言うのか」

始の言葉に、剣崎が返したのは……………満足気な微笑だった。

それこそ、始の表情とは対照的に。

「最初から……………そのつもりで……………」

何も言わず、剣崎はただ黙って頷く。

それに、何かを言おうと始が口を開きかけた瞬間。

空から黒い石板……………モノリスが、彼等の前に降り立った。

キーンと耳鳴りのような音が、その場にいる者達に届く。だが、

それが何を伝えようとしているのかを理解出来たのは始だけだった。

「統制者が言っている。『アンデッドを2体確認。バトルファイトを、再開しろ』と」

「最後の1体になるまで……………か」

剣崎の呟きに、始が頷く。

冷酷にして無慈悲な統制者。

絶対にして、公平な神。

それが今、モノリスというデバイスを通して、彼等に語りかける。

戦え、戦え、戦え、戦え、戦え

その声が聞こえたのか。剣崎は何かを決意したように拳を握り、そして……

モノリスを、殴りつけた。

その拳に、モノリスはぶるりと震えると、まるでゲルのように飛び散ってその姿を四散させたが……おそらく、破壊までには至っていないだろう。ただその姿を散らせただけで、未だ統制者の声は響いている。

だがその声を無視し、剣崎は真っ直ぐに……何も無い虚空を見据えて宣言する。まるでそこに、統制者がいるかのよう。

「俺は……戦わない」

剣崎の言葉を聞き届けたのか、四散していたモノリスの欠片が再び元の形に戻る。

平らな物を捻った様な、黒い石板。

そしてそれは、再び宙へと舞い上がり……今度は何も言わずに、その姿を消した。

「剣崎……」

「来るな！」

「剣崎」

「俺とお前は……アンデッドだ。俺達がどちらかを封印しない限り、バトルファイトは決着せず、滅びの日は来ない。だから、俺達は戦ってはいけない。近くにいては……いけない」

ジリ、と始との距離をとりながら、剣崎は寂しげに笑って言葉を放つ。それは始に言い聞かせているようにも聞こえたと同時に、自分自身にも言い聞かせているようにも聞こえた。

人類を守る事と引き換えに。彼は友人と触れ合う事を捨てたのだ。「いくら離れたところで、統制者は俺達に戦いを求める。本能に従い、戦う。……それが、アンデッドの運命だ」

「俺は運命と闘う。そして勝ってみせる」

どこか諦念を感じさせる始とは対照的に、今度は力強くそう言い

きると、剣崎は自身の口元を伝う血を拳で拭った。

誰にでも、運命と闘う資格がある。戦わなければならない時がある。今度は、自分の番が回ってきただけの事。

例えそれが険しい道のりだとしても、彼は闘い抜くだろう。

それが……始には、わかった。

剣崎一真とは、そう言う男である事も。

「それが、お前の『答え』か」

「お前は、人間達の中で生き続ける」

「どこへ行く？」

「俺達は2度と会う事も無い。触れ合う事も無い。……それで良いんだ」

別れの言葉と共に剣崎が見せたのは、晴れやかな……だが、どこか寂しそうな笑顔。

友人との触れ合いだけでなく、彼は、人類全てと決別するつもりなのか。

自分の「闘い」に、誰も巻き込まないために。

「剣崎……」

ゆっくりと、その場を後にする剣崎一真を……ただ呆然と、相川始は見つめていた。

「剣崎！」

我に返った俺は、立ち去った剣崎の名を呼んで奴を追う。

俺達は2度と会う事も無い。触れ合う事も無い。……それで良いんだ

良い訳が無い。俺が「ヒト」になりたいと思った理由の中には、お前と言う存在も大きかったと言うのに。

お前がいたから、俺は「相川始」でいたいと思ったのに。それなのに。

追った先……視界が開けたそこは、崖になっていた。足元に広がる潮騒。あまりの高さに、人間なら落ちれば死を免れない。

……そう、人間ならば。

今の剣崎なら、この程度の高さから飛び降りたところで死ぬるはずも無い。

……俺の、せいで……そうだったのだから。

喪失感と言うのは、こう言う物なのだろうか。自分の胸に、空洞が出来たような……それでいて溶かした鉛を流し込まれたような、ずしりとした重みを伴う感覚。

「始！」

そこにやって来たのは橘朔也。

カテゴリーキングとの戦いの末、死んだと思っていたのだが……どうやら、無事だったらしい。多少の傷は見受けられるが、恐らくは来る途中でダークローチ達に襲われてもしたのだろう。

この男の気配を感じられない程、今の俺は感覚が鈍っていると言うのか。

「剣崎は？」

橘の問いかけに、俺はただ呆然と首を横に振った。

橘には……何が起こったのか、ある程度の予測はついていたのだろう。一瞬だけ俺に絞め殺さんばかりの視線を送り……だが、すぐに苦しそうな表情でそれを外す。

俺にあたっては仕方がないと思ったのか。

それとも剣崎の意思を汲んだのか。

何にせよ、橘がこれ以上俺を責める様な真似はせず、ただ寄せては返す波を見つめている。

ざわ、と木々が揺れる。そこには額に包帯を巻いた上城睦月が呆然と立ち尽くしていた。

……そうか、俺はこいつを殺さずにすんだのか。

安堵と同時に、上城から向けられる敵意に気付く。

……橘も、これくらい真っ直ぐに俺に敵意を向けてくれれば……

楽なんだがな。

「剣崎さんをどこにやったんだ？ 答える！」

詰め寄る上城を、橘が無言で制する。

それで……剣崎が、戻ってこない事を悟ったのか。上城も辛そうな表情でゆっくりと俯いた。

……俺が、封印されれば良かったのに。

そうすれば、橘も上城も、こんな顔をしなかっただろうに。

「剣崎いいいいっ！」

橘の叫び声だけが、そこに響く……

海に、飛び込んだはずだった。

アンデッドとなった身で、死ぬ事はないはずだ。そう思い、あの崖の上から飛び込んだ。

……始とは、2度と会う事が無い、遠い場所へ向かうために。それなのに……ここはどこなのだろう。まるで何かの乗り物、もつとはつきり言えば、電車の中のようなのだが……

自分の置かれた状況が分らず、きよろきよろと周囲を見回す剣崎の前に、2人の青年が口を開いた。

「全く。真冬の海にダイビングなんて、何考えてやがるんだか」

「でも、間に合ったんだから良いじゃない」

「ギリギリだったけどな」

呆れたと言っよりはふてくされたように言った茶髪の青年とは対照的に、心底ほっとしたように黒髪の青年が言う。

2人とも自分より、いくらか若い。睦月と同じくらいか、もう少しだけ上といった所か。

「……君達は？」

「あの、怪しい者じゃありません。僕、野上良太郎って言います」

黒髪の方の青年が、にこやかな笑顔で名乗る。どことなくその笑顔に、人を安心させる何か……友人である白井虎太郎に通じる物を

感じ、つい剣崎も笑顔を返す。

「俺は、桜井侑斗だ」

一方で茶髪の青年は、黒髪の……野上と名乗った彼とは正反対の  
厳しい表情で名乗った。こちらは少し、初対面の時の始に似ている  
かもしれない。

「俺は、剣崎一真。ここは……一体どこなんだ？」

言いつつ、剣崎は近くの窓から外を眺める。

広がる景色は虹色の空と、ただひたすらに広がる砂漠。

時折モニュメントバレーのような山々と、そこに空いた穴……多  
分、トンネルであろう物が見て取れるが、それ以外のものは特に見  
当たらない。

こんな場所、日本に……いや、世界中のどこかにあっただろうか。  
少なくとも、虹色の空は人生で見た事など無い。

オーロラ、という可能性も考えたが、それにしても揺らめきが一  
切無いのが気になる。わけが分らず首を傾げた瞬間、口を開いたの  
は桜井と名乗った青年だった。

「ここは時間の中で、今俺らが乗ってるのは時の列車、ゼロライ  
ナー。この辺は……丁度西暦2005年2月20日前後つてとこだ  
な」

「……は？」

彼の言葉の意味を理解できず、剣崎は素っ頓狂な声をあげる。

時間の中？

時の列車？

冗談……にしては、2人の顔は真剣その物。一方だけが真剣な顔  
をしていると言う状況なら、からかわれているのか知れないと思え  
なくもないが、どうにもこの2人に抱く印象は人をからかうと言う  
物とは無縁に思う。

何より、外に広がる風景は明らかに自分の知らない物であり……  
それに納得できるだけの神秘さがある。

かと言って、理解が出来たとも言えないが。

「いきなり言われても困ると思っんです。僕も、最初はよく分からなかったし……」

「俺は今でもよく分かってないけどな。時間の中って言われて、すぐに理解できる奴なんていないだろ」

剣崎の声に苦笑しつつ、野上と桜井の2人は言う。

彼らもまた、この空間について完璧に知っている訳では無いらしい。

「オーナーなら、説明できるのかもしれないけど……」

「ゼロライナーのオーナーは当てにすんなよ。あいつは絶対はぐらかす」

「ちよつと待つてくれ！ 何が何だか……」

頭の中が混乱する。

分かるのはただ、この2人が自分を案じてくれている事と、ここが自分の知る場所では無いという事だけ。それ以外は理解しようにも話が難解すぎて……と言うよりも常識から外れすぎについていけない。

いや、アンデッドになった俺が、「常識」なんて言っちゃいけないか

困惑しながら自嘲すると言う、ある種器用な事をやつてのけた剣崎に、2人は何を思ったのか。良太郎が眦を下げ、心底申し訳無さそうに頭を下げ……

「あ、すみません。何か、僕達だけで話をしちゃって……」

「いや、良いんだ。それより……何で俺は、ここにいるんだ？」

ここがどこなのかを理解するのは難しそうだが、自分がここにいる理由なら、何とか理解できるかもしれない。

崖から飛び込んだ際、衝撃に備えて目を閉じて……叩きつけられる感覚はなかった。「も」に濁点がつきそうな音が聞こえた直後、何かに引つ張られるような感覚を覚え、目を開けたらここにいたと言つ状態である。

「お前が海に飛び込んだのを見て、慌ててデネブ達が引つ張り込ん

だんだ。俺はゼロライナーの運転があつたからな」  
デネブ？

初めて聞く名前に、剣崎は不審な表情を見せる。この2人以外、この列車にまだ誰か乗っているのだろうか。

無論、列車なのだから乗っていても不思議は無いのだが……この2人以外、人間の気配は全く感じられない。

「君達の他に……誰かいるのか？」

「まあな。入ってきて良いぞ」

桜井の言葉に応えるようにして現れたのは……野上と同じ顔をした2人の青年と、桜井と同じ顔をした青年。

桜井と同じ顔をした方は、桜井とは違い髪が長く、その中に1房だけ緑色の髪がある。瞳の色も、鮮やかな緑に光っている。

野上と同じ顔の方は、1人はやはり長髪で、束ねられたその髪の中にやはり1房だけ金があり、瞳の色も同じ金色。

もう一方は……いつか、どこかで会った事があるような気がした。スタイリッシュに分けられた外跳ねの髪に、やはり1房今度は青い髪があり、眼鏡の奥では青い色の瞳がこちらを見据えている。

だが、どうしてだろう。3人とも人間の姿をしているのに、人間の気配を感じられないのは。

「えっと……兄弟、なのか……？」

「まあ……そんなトコやな。俺は野上金」

金目の青年がぼんと自分の腹を叩きながら自己紹介する。野上……いや、良太郎と違って、その体は割と鍛えられていると思う。

「僕は野上 浦<sup>ウラ</sup>……1度、君とは会ってるよね？」

浦と名乗った青目の青年に言われた時、剣崎の脳裏に浮かんだのはケルベロスと初めて対峙した時。天王路が立ち去った後の光景だった。

それじゃ、僕達はこの辺で失礼しますね

そう言っつて、少女と共に立ち去った青年がいたような……

確かにあの時も、少女にウラと呼ばれていたでは無いか。

「ひよつとして、あの時の……!」

「ああ。ようやく思い出してくれたみたいだね」

「あ、俺は桜井 白尾しろびです。これはお近付きのしるし。侑斗をよろしく」

桜井と同じ顔をした青年が、対照的なにこやかな笑顔で言いながら、剣崎の手に何かを握らせる。

不審に思いその正体を確認すると……それは、キャンディー。

包み紙には何かのマスコットだろうか、烏天狗のようなキャラクタ―と「デネブキャンディー」の文字が書かれている。

「……?」

何で「デネブ」なのかわからない。

そもそもこの烏天狗のキャラクタ―はなんなのか。

確かデネブとは白鳥座の一等星の名前だったはず。ならば、白鳥が描かれていても良いと思うのだが。

と、色々なツッコミ所はある物の、相手の好意を無にするのは気が引けるので、とりあえず剣崎は貰ったキャンディーを口の中に放り込む。

少しして、優しい甘さが口の中に広がる。

普通のミルクキャンディーのはずなのに、今の剣崎にはその甘さが、優しさが、心に染みた。

「侑斗、何でデネブの名前が『白尾』なの?」

良太郎が不思議そうに侑斗に聞く。

しかしその問い方では、まるで白尾の本名が「デネブ」であるかのように聞こえるのだが……

「ん? ああ。『デネブ』って単語には、元々『尾』って意味があるんだよ。有名なのは白鳥座だが、それだけじゃなくて、鯨座や鷲座、海豚座にもデネブはある」

「でも、そもそもは白鳥座の『尾デネブ』からとったから……『白尾』?」

「多分な。名前はデネブ本人が考えたんだ。俺ならもうちょっとマシな名前を考える」

どうやら、やはりデネブの方が本名らしい。しかし何故名を偽る必要があるのか。

理由はわからないが、それなりの理由があるのだろう……多分。だが、不思議な事にこれ以上突っ込んで聞こうと思えなくなっているのも事実で。何を口にしようか迷いながらも、剣崎はもう1度窓の外に目を向ける。

先程と然程変わらぬ景色。ただ、所々に開くトンネルを見て……剣崎は少し、違和感を覚えた。

何だ？ 何かおかしいような

目を凝らして過ぎ行くそれらを観察し……そして、ようやく気付く。どのトンネルにも、線路がつながっていない事に。

もしかすると建設途中なのかも知れないが、いくらなんでも線路の無いトンネルが多すぎはしないだろうか。

何より……何故だろう。あのトンネルを見ると、全身が粟立つような感覚に囚われる。

「……トンネルが気になるのか？」

「ああ。気になると言うか……何だか、奇妙な感じがする」

桜井……否、侑斗の問いに、剣崎は曖昧に頷く。

言葉にしたいが、上手く言葉にできない……そんな感じだ。それでも何とか言葉を探しながら、侑斗達に対して自身の考えを口に出した。

「そうだな……不自然な感じって言えば良いのかな。あそこに存在する事が、妙な気がしてならないんだ」

言いながら、自分でもそれが1番しっくり来ると思う。

そんな彼に何を思ったのか、侑斗達は一瞬だけ目を大きく見開き……しかしすぐにその口元に不敵な笑みを浮かせると、感心したような声の侑斗と、真剣味を帯びた声の良太郎がそれぞれ口を開いた。

「……へえ、やっぱりわかるモンなんだな」

「あれは、『異世界への出入り口』らしいです」

「へえ、異世界の……って、異世界？」

流すに流せないその単語に、ぎよつと目を見開いて問い返す剣崎。

しかし2人……いや、5人は真剣な表情で頷きを返すだけ。

……今度こそ、完全に。

訳がわからず、剣崎の思考は停止した……

## その29：失った時

ブレイドジョーカー。

それは、剣崎一真が運命と闘う事を選んだ姿。

黒き姿に、アンデッドの血を意味する「緑」を纏い、運命を切り開く剣を携える者。

剣崎と始の……この世界における戦いの結末に、ハナ達は呆然とその場に立ち尽くしていた。

ハナが懸念した通り、剣崎一真はジョーカーとなつて世界を救つた。

そんな終わりを始も、橘も、睦月も……誰も望んでいなかったと言つのに。

「これが、終わり……？」

橘達がいるのにも構わず、リュウタロスは思わずそう呟きを落とす。

その声が聞こえたのだろう、呆然と海を見つめていた3人がはつとしたように一斉にこちらを振り返つた。

自分達以外に誰かいるとは思つていなかったらしい。始と睦月は彼らの存在に怪訝そうな表情を浮かべ、橘だけはこちらの顔を見慣れてしまったのか少しだけ考えるような素振りを見せ……

「お前は……龍太？ 何故お前がここに……？」

リュウタロスの「仮の名」に思い当たつたのか、3人を代表するように問いかける。しかしその問いはリュウタロスの耳に届いていないのか、彼はそのアメジスト色の瞳に涙を溜め、橘の肩を掴んで声をあげる。

「ねえ、こんなの嘘だよな！？ 本当は別の所に2体目のジョーカーがいるんだよね！？ あいつがジョーカーになつちやつたって言

うのは嘘だよね!？」

「…………やめる、小僧」

橋に縋りつき、その体を前後に揺さぶるようにしてまくし立てるリュウタロスを、モモタロスが静かに窘め、橋にかかる手を外す。低く、少しだけ震えた声と手で。

「だって！　こんな……………こんな終わり方って無い!!」

「誰よりもそう思ってたのは、そいつらだ。……………お前なら分かんたろ?」

モモタロスに言われ、リュウタロスは肩を震わせながらも、その言葉に頷く。

剣崎がとつた行動は、自分を犠牲にして人類を……………大切な者を守るための物。

それは、かつてキンタロスとウラタロスが、良太郎のために過去に残った時と同じ心境のはず。

そして同時に、リュウタロスは目の前の3人の気持ちも理解できた。

……………自分も「置いていかれた側」だったから。

大好きな人がいなくなる、目の前から消えてしまう事の辛さは、彼も知っている。

「ごめん……………なさい。橋の方が、もっと辛いのに」

項垂れるようなリュウタロスの声に、橋達も僅かに俯く。

彼は、自分達の言えなかった事を代弁してくれたのだ。「こんなのは嘘だ」、「こんな終わり方って無い」と。しかしそれを素直に口に出せる程、彼らは子供ではない。だからこそ、リュウタロスの真っ直ぐな言葉は橋達の胸に刺さり……………無言で彼の言葉を受け止めるしかなかった。

その顔に、申し訳なさが増したのだろう。リュウタロスはそつと橋の腕に手を伸ばし……………その、瞬間。怒鳴るようなモモタロスの声が響いた。

「小僧、そいつらから離れる!」

「え？ 何言ってるんのモモ……」

「イマジンの臭いだ！」

リュウタロスの声を遮ってまで放たれたモモタロスの怒声に、彼はぎょっとした表情で3人を見る。それと同時に、睦月の体から大量の白い砂が零れ落ちた。

モモタロス達にとつては見慣れた光景だが、始と橘にとつては初めて見る物であるせいなのか、2人共ぎょっとした表情で睦月に視線を向け彼に声をかける。

「どうした睦月！？」

「何だ！？」

だが睦月はその声など聞こえていないのか、ただ虚ろな瞳で虚空を見上げているだけ。

やがて睦月の体から落ちきった砂が、盛り上がり、徐々に何かの形をとつていく。

それと引き換えに、睦月の意識がふつりと途切れたらしい。ゆっくりと崩れ落ちる睦月の体を支え、橘はその砂の異形に目を向け……  
「なっ！？ スパイダー、アンデッド……！？」

既に封印されたはずの存在によく似た「それ」を、驚愕の表情で見る。だが、すぐに自分の思っていた者とは違う事に気付いた。

似てはいるが、よく見れば細部が異なる。スパイダーアンデッドと比較して、その姿は更に邪悪さを増しているような印象を受ける。どうやら始の方もその事実気付いたらしい。警戒したようにハ

ートのエース……「CHANGE」のカードを構えた。

「冗談でしょう！？ 何でイマジンがこの時間に！？」

「取り零しだらうな。お供その1に気付かれぬまま、契約を完了させたのである」

驚きながらも警戒する始達とは対照的に、イマジンを見慣れている方もまた、別の意味で驚いたように声をあげる。

いつもの口調で返しているジークの表情にさえ、不快の色がありありと浮かんでいるのが見て取れる。

純粹にイマジンの登場を不快に思っているだけでなく……彼もまた、剣崎一真が選んだ「結末」に怒りを抱いているようだった。

「こんな時に出てきやがって……テーマも少しは空気を読めっただよ！」

なかなか無茶な事をイマジンに要求するモモタロス。

だが、イマジンは何も言わず小さく溜息を吐くと、何も言わずに始達に向けて腕を掲げ、衝撃波を放った。

その意図が分からない。

本来のイマジンの行動は、「自分達の時間」につなげるために、分岐の鍵である……と思っていた存在、2007年の桜井侑斗を殺す事が第一目標であったはずなのに。

この場所に、桜井侑斗がいる様子はないし、仮にいたとしても始達を攻撃する理由にはならない。

何とかその攻撃をかわした橘達を見て、ハナは小さく安堵のため息を漏らすとイマジンに視線を向けた。今までのイマジンと、どこか……何か、違う。

単純に過去を変えようとしているだけなのか、それとも……そう思った時だった。

イマジンが、口を開いたのは。

\*

「『皇帝に愛された子』達に、死を」

「皇帝に愛された子？」

「貴様達のように、仮面ライダーと呼ばれる存在だ」

橘の問いにそれだけ答えると、イマジンと呼ばれた異形はスパイダーアンデッドには無かった口元を笑みの形に歪めると、再び始達に右手を向け、今度は蜘蛛の糸による攻撃を繰り返す。

だがそれが届くよりも先に、橘を龍太が、始を灰目の青年が、そして未だ気絶している睦月を赤目の青年が抱え、横へと飛ぶ事でそ

の攻撃をかわした。

「テムエ……契約者まで攻撃するなんざ、良い度胸じゃねえか。ええ？」

「それで世界が、我々の物へと変わるなら」

「おいおい、分岐点の鍵つてのはこのコハナクソ女だったろうが。勘違いしてんじゃねーぞ！」

「貴様こそ、何を勘違いしている？」

どこか怒ったような赤目の青年の言葉に、イマジンとやはら心底不思議そうに首を傾げる。

「分岐点の鍵などどうでも良い。肝心なのはこの世界の歴史から、

『皇帝に愛された子』を消去する事」

「何い……？」

「それが我々『月の子』<sup>イマジン</sup>に課せられた使命。この世界を我らの神、

『月』の物とするために」

「お前たちの神……『月』だと？」

分岐点の鍵とか、契約者とか、イマジンとか、皇帝に愛された子とか、よくわからない単語の中で唯一引っかかった単語に、橋が小さく反応を見せる。

「神」と言ったつた2音節に、嫌な物を感じ取ったからなのだが……その「嫌な物」の正体までは掴めない。

理解できるのは目の前の異形はアンデッドとは異なる、イマジンとか言う存在だと言う事、そして相手の事を龍太達が知っているらしいと言う事くらいだ。

とは言え、ついていけないこちらに対し、親切に説明をしてくれる訳では無いらしい。イマジンとやはらはクックと喉の奥で笑うと、更に言葉を続けた。

「そう。そのために……この世界を手に入れると言う目的の為に『月』はこの世界に干渉し続けた。封印されたアンデッドの記憶を1万年かけて書き換え、野心溢れる天王路博史を操り、モノリスを己の支配下に置き、ジョーカーを破滅の使徒へと変えようとしたのだ

よ

「な、に……？」

イマジンの言葉の意味が、始には理解できなかった。

……否。理解したくなかった。

今の言い方では、カテゴリーキングが封印された時に出会った「神」が本当の「神」では無かった事になる。

本当の「神」に祈ったならば、剣崎がアンデッドにならずに済んだのでは無いのか。

何よりも、1万年前のバトルファイトが終わった時から、既にその「月」と言う存在の侵略が始まっていた事になるでは無いのか。

アンデッドが書き換えられた記憶とは何なのか。

アンデッドはこの地上の覇権を賭けてバトルファイトを行っていたはずではないのか。

いや、それ以前に。こいつは今「ジョーカー」を破滅の使徒へと変えようとした」と言わなかったか。

その言葉が正しければ、ジョーカーは……自分は元々、「世界を滅ぼす存在」では無かったのでは？

「では、このバトルファイトは……天王路が仕組んだ物では無かったのか！？」

「奴も所詮は『月』が投じた駒の1つ。ヒトに失望し、財力のある人間なら誰でも良かったんだろう」

ニマリと嫌な笑みを浮かべ、イマジンは橘の問いに答える。

まるで、何もかもを知っているかのような笑顔が、生理的な嫌悪感をかきたてる。

一刻も早くこの異形を排除したい、排除しなくてはならないと言う気持ちがある物の、橘にはその手段が無い。壊れたギャレンバツクルは白井の家に置いてきたし、先程剣崎が捨てて行ったブレイバツクルは、彼のジョーカー化の影響に耐え切れなかったのか、ブスブスと白煙が上がっていた。

睦月は未だ気絶しているし、始はイマジンの言葉に愕然としてい

るだけで、「CHANGE」のカードを通す気配が無い。

「ちよつと待ちなさいよ！ あんた達イマジンの目的は、『過去を変えて、現在も未来も変える事』じゃなかったの!？」

「『過去を変えて、現在も未来も変える』。それも、目的の1つだ」  
「何ですって!？」

龍太と共にいた少女が、イマジンに向かって怒鳴る。

彼女もまた、この異形の事を知っているらしく、ひるんだり恐れ  
たりしている様子は無い。むしろ、その瞳の奥には怒りの炎すら宿  
っているように見えるのは、橘の気のせいか。

ゆつくりとこちらに近付いてくるイマジンが、嬉しそうな声で先  
を語る。

「この世界の過去を変え、未来を……先の時間を変える事により、  
我々の世界とつなげやすくなる」

「『我々の世界』ってどう言う事!? イマジンは未来の人間のは  
ずだよね!？」

「鳥野郎は違うらしいけどな」

ちらりと灰目の青年に目を向けながら、赤目の青年が龍太に返す。  
羽マフラーの事を指して「鳥野郎」と呼んでいるようには思えな  
いが、今はそんな事を気にしている場合では無い。

「いいや……我ら全員が『月』の創りし世界の民。即ち異世界の存  
在。無理に空けた時空の穴のせいで、体を捨て、精神体として通っ  
たが故に本来の記憶の多くを失っているが」

「……お前は、忘れていないように聞こえるが？」  
「忘れていたさ。ただ……」

灰目の青年の言葉を否定し、イマジンはちらりと睦月の方に顔を  
向けて……口角を更に引き上げる。

今まで、橘が見た事の無い……悪意に満ちた笑みが、スパイダー  
アンデッドに似たその異形の顔に張り付いていた。

「そいつを通して思い出したのだ。我らの真実を」

「そんなもん、テメーが勝手に言ってるだけだろうが!」

恍惚とも呼べる表情でそう言いきったイマジンに、赤目の青年が呆れたように吐き捨てる。

話が彼らの間で行き交っているせいで、橘達には今の状況がいまひとつ理解できないが……少なくとも、目の前にいる異形が敵である事くらいはわかる。そしてそいつを放って置けば、とんでもない事になるのである事も。

信じられるはずがない。異世界からの侵略者など。

その神によつて、今回のバトルファイトが仕組まれたなど。

そのせいで……剣崎は、人間でなくなつたと言つのに。

だが、その思いを否定したのは異形の方ではなく……

「残念ながらお供その1。奴の言っている事は真実だ」

「おい……何言つてんだよジーク！」

灰目の、ジークと呼ばれた青年は、平然とした表情で言い放ち、それに対して赤目の青年が食つて掛かる。その顔が心なしか青褪めているように見えるのは、彼もまた心のどこかでその言葉を受け入れているからなのか。

「嘘、だよ、そんなの。イマジンが……僕達が、この世界の人間じゃないなんて、そんなの嘘だ！」

「龍太？」

耐え切れなくなつたように今にも泣き出しそうな声で怒鳴つた龍太を見つつ、橘が声をかける。

だが、彼の反応はまるで、彼等もまた「イマジン」と呼ばれる存在のように感じる。目の前にいる龍太や、彼と同じ顔をしたジークや赤目の青年は、どう見ても人間そのものであり、目の前にいる異形とは異なるように思えるのだが……

まさか、上級アンデッドのように人間の姿をとる事ができるのか。それとも何か別の要因があるのか。色々な考えが頭を過ぎるが、考えている場合では無い。それに……少なくとも彼らは橘達の敵でない事は分かる。

剣崎の選んだ結末に、理不尽さを感じ泣きそうになっていた彼等

が敵であるとは……到底、思えなかった。

「因みに言うが、我らが捨てた肉体は、この世界の侵攻の為に送られてきたぞ?」

「え……?」

「ダークローチとして」

混乱して、泣きそうになっている龍太に追い討ちをかけるように、イマジンはニヤニヤと笑いながら、止めの言葉を彼らに放った。

\*

「嘘だ。嘘だ、嘘だ嘘だ……嘘だああっ!」

ダークローチとして、自分達の体がこの世界に送られていた。

その言葉を聞き、リュウタロスはその叫びながら、がくりとその場に膝をつく。

ハナは口元を押さえて後退り、ジークは知っていたのか、渋い顔でイマジンを睨みつけ、モモタロスは……血が滲むほど拳を握り締め、唇をきつくかみ締めていた。

ダークローチとして送られてきたと言う事は、既に体は存在しないと言う事。それどころか自分の意思とは無関係にこの世界を破滅に追い込んでいたと言う事でもある。

そして何より……もしかすると、その「体」を知らぬ間に剣崎や睦月、そして良太郎や侑斗、更にはキンタロスやウラタロスが刻んでいる可能性があると言う事実。知らぬとは言え、それを良太郎達が知ったら……きっと彼は自分を責める。

それが、リュウタロスには何よりも嫌だった。

「……冗談じゃねえぞ」

しばしの沈黙の後、ようやく搾り出すようにモモタロスが吐き捨てる。

その赤く光る瞳に、怒りを湛え、イマジンを真正面から見据えて。「俺の体が、あんなセンスの欠片もねえのでたまるか!」

再び、沈黙が落ちる。

とんでもなく重い話だったはずなのに、その一言で台無しになっ  
たような、何とも言えない沈黙が。

「あんたの怒る所はそこ!？」

「それ以外に何があんだよ。本当は異世界の住人であつたにしろ、俺は『俺』だ。格好良く戦うのが好きで、良太郎に憑いて、今はこの姿で、『野上桃』って名乗っちゃいるが案外モモタロスってセンスねえ呼び名も気に入ってて……早い話、そう言うのを全部ひくめるめて今の『俺』なんだよ。本当の目的とか、住んでた世界とか、体がどうなつたとか、そんな小せえ事は関係無え!」

ハナの入れたツツコミにそう言い切り、モモタロスは口元に不敵な笑みを湛え、その場にいる全員を庇うようにして彼らの前に立つ。

……イマジンの言葉が、ショックでないと言えば嘘になる。

だが、「元の体」が何であろうが、どうなつていようが関係ないと思つているのも事実だつた。

今の彼にとつて重要なのは、「良太郎と共に過ごした時間」。それが偽りでない限り、モモタロスの意志を挫く事は、誰であろうと……それが例え神であろうと、不可能な事。それだけの信頼を、彼は抱いているのだから。

「小さい事、か。ふむ、実にお前らしい考え方だな、お供その1」

「おうよ! ……つて、お供その1つて呼ぶなつて何回言つたら覚えるんだテーマはっ!」

「では、赤いお供の方が良かったか？」

「色でも呼ぶな!」

いつもの調子を取り戻したように、ジークとモモタロスの2人は言い合つ。

……無論、言い合つと言うよりは、モモタロスのツツコミをジークが聞き流しているだけにしか見えないのだが。

それでも……彼らの心を折ろうと画策していたイマジンを不快に

させるには充分だったらしい。

アンデッドイマジンは小さく舌打ちをすると、その右手を彼らに向け……気付く。

先程まで、最も取り乱していたリユウタロスが立ち上がり、自分を見て笑顔を向けている事に。ただし、その目は笑ってなどいなかったが。

\*

イマジンがこちらに右手を差し向けた瞬間。

橘は、後ろで呆然と座り込んでいた龍太が立ち上がるのを感じた。何故かは分らないが、かなりのショックを受けていたはずだ。そしてあれだけのショックから立ち直ったとは考えにくい。だからと言って、逃げる様子も無い。

なら、何を？

「……お前、やつつけるね？ 良い？」

ともすれば無邪気とも取れる声に振り返り……ぞくりと、橘の背に冷たい物が駆ける。

そこに浮かぶのは、酷薄な笑み。紫の瞳は暗い色を纏い、軽く首を傾げている仕草はどこか獲物を狙う獣に似ている。

「出来るか？ 貴様に？」

「……答えは聞いてないっ！」

言うが早いか、龍太は腰に銀色のベルトを装着、1番下にある紫のボタンを押して取り出したパスケースをベルトにタッチする。

「変身！」

『 GUN FORM 』

電子音が告げると同時に彼の体を鎧のようなものが包み、紫色の仮面ライダーへと変身した。全体的に、どこと無く龍をイメージさせる。それは両肩に展開しているパーツが、玉を持った龍の手のように見えるからか。

無論、それは橘達が見た事の無いライダー。少なくとも、BOA RDのライダーシステムでは無い。強いて言うなら、この間見た青いライダーに似ている。あの時は亀に似ていると思っただが。

「電王か。だがその姿……どうやら、俺がいた時間より、更に先の時間から来たようだな」

「うるさいよ」

面白そうに言うイマジンに対し、電王と呼ばれた仮面ライダー……龍太は不機嫌そのものの声で短く言い放ち、いつの間にか構えていた銃を撃ち放つ。

まるで、踊っているようなステップを踏みながら。

「『月の子』の裏切り者が。真実を知ってもなお、電王として闘う事を選ぶか」

「僕は、お姉ちゃんや良太郎がいるこの世界が好きなんだ。良太郎のいない世界なんて、面白くないよ」

「世界が統合されれば、その気持ちは忘れる。特異点に関する記憶が、消える」

「それが嫌だつて言ってるの！ お前の答えは聞いてない！」

心底苛立ったように言いつつ、更に龍太は攻撃を続ける。

だがイマジンの方も、その攻撃を軽々とかわしていた。

龍太が冷静な判断を失っている事も原因の1つだろうが、何より相手の動きが良い。龍太の調子が良かったとしても、攻撃が当たっていたかどうか……

「仕方ない。電王もまた、『皇帝に愛された子』の1人。消さねばならんか」

言うが早いのか、イマジンは今までとは比較にならない速さで、その腕を振るった。

\*

アンデッドイマジンが腕を振るった瞬間。

リュウタロスがその動きに合わせて大きく吹き飛んだ。

「あぐっ」

「小僧！」

「龍太！」

小さく上げた悲鳴に、モモタロスと橘が心配そうな声をあげる。

何が起きたのか、いまひとつわからないが……その姿や今までの攻撃から考えると、恐らく蜘蛛の糸のようなものを鞭のようにしならせ、自分を叩いたのだろう。

ゆっくりと起き上がりながら、迫り来る相手に向かって再び発砲する。

……当たるとは思っていないが、体勢を立て直すまでの時間稼ぎにするつもりだった。

攻撃の当たった胸がズキズキと痛み、集中力に欠けて狙いが上手く定まらない。

痛い、怖い、逃げ出したい。

そんな負の感情が、リュウタロスの心にじわじわと広がる。

だが同時に、それを押し返すほどの怒りも、彼の心の中で燃え上がっていた。

「負けたくない……負けない。こんな奴に負けるなんて、絶対に、やだー!!」

叫び、一旦身を引いて相手との距離をとる。

変身もフルチャージも、持っているのがパスではなくチケットである以上、使えるのは1回だけ。

そのなけなしの1回を……彼は今、使った。

『FULL CHARGE』

パスをセタッチし、電子音が告げると同時に、両肩に展開しているドラゴンジエムからエネルギーが放出。デンガツシャー・ガンモードにチャージされていく。

「最後行くよ。良い？」

ゆっくりと構えながら、彼は問う。

その声に、問いに、そしてキリキリと弓を引き絞るような緊張感に。不吉な物を感じ取ったのか、アンデッドイマジンは小さく舌打ちすると再び大きく腕を振るう。

「答えは、聞かないけど」

アンデッドイマジンの攻撃が胴に再び炸裂したのと、リュウタロスが引鉄を引いて必殺技であるワイルドショットを放ったのはほぼ同時。

相手に吹き飛ばされながらも、リュウタロスは自分の放った攻撃の行き着く先を見届ける。

……変幻自在のモモタロスの「俺の必殺技」エクストリームスラッシュや、相手の動きを拘束するウラタロスのソリッドアタック、近距離攻撃で回避不能なキンタロスのダイナミックチョップに比べ、自分の必殺技であるワイルドショットは遠距離かつ軌道が一直線である為かわされやすい。

実際、彼の攻撃が何度もかわされてしまっている事を、モモタロスも八ナも知っている。

だが、かわされる訳には行かなかった。今回だけは、何が何でも……それなのに。

無情にも、アンデッドイマジンはリュウタロスの渾身の攻撃を、体を反らす事でいとも容易くかわしたのである。

「そんな……」

思わず漏れたその言葉は、誰の言葉だっただろうか。

アンデッドイマジン以外の全員が、愕然とした表情でその様子を眺める。

フルチャージのせいか、それとも攻撃を受けすぎたせいか。リュウタロスの変身も解除され、傷だらけになった生身の体を敵前に晒す。

「残念だったな」

その場に座り込んでいるリュウタロスに、ゆっくりと右腕を向け、アンデッドイマジンは不敵に笑いながらそう言い放つ。

「イマジンでありながら同族を裏切った罪……その身で贖ってもら

おう、紫の龍よ」

敵が、そう言ったその瞬間。

何かの「音」が聞こえてきた。

……聞こえてきたそれは。牛の鳴き声に似た、汽笛の音……

## その30：希望と言つ名の光の中

契約は、過去の希望。  
望みは、悲しみの終わる場所。  
代償は、約束の場所。

音のした方を振り返ると、そこには1台の列車が止まっていた。  
黒い、猛牛を思わせる汽車のようなそれは、どこにも線路など敷設されていないのに、当然のように悠然とそこに存在している。

……時の列車、ゼロライナー。

ハナ達にとっては心強い仲間であり、イマジンにとっては厄介な敵。

そして始達にとつては……奇妙この上ない存在であった。

「え……？ 何でこんな所に電車が!？」

汽笛の音で意識を取り戻したらしい。睦月が、それを視界に入れるや、ぎよつと目を見開いて心底不思議そうな声をあげた。

彼にしてみれば、いきなり列車とスパイダーアンデッドに似た異形の両方が視界に入ったのだから、混乱するのは当たり前だが。

「悪いが、説明してる時間は無い」

睦月の問いに冷たく返したのは……いつの間にかゼロライナーから降り立った茶髪の青年、桜井侑斗。

だがその声には、どこか切羽詰ったような感じを受ける。

「侑斗……」

「俺だけじゃない」

どこか嬉しそつに行つたハナに返した侑斗の後から、2つの人影が滑り出るようにして降り立った。

ハナ達の視界に最初に入ったのは、既にベルトを装着済みの良太郎。

「良太郎！」

「……リュウタロス、大丈夫？」

打身や切傷で満身創痍のリュウタロスに目を向け、心配そうに臍を下げて問う良太郎。

……良太郎が来た。たったそれだけなのに、リュウタロスの顔から先程まで感じられた絶望の色は消え失せ、変わって希望に満ちた表情に変わる。

それは、リュウタロスだけでなくハナも、そしてモモタロスにも言えた事だったが。

「おめえ……ようやく参上！　ってか？」

「ごめん、遅くなって」

くしゃくしゃと良太郎の頭を乱暴に撫でながら言うモモタロスに、良太郎は苦笑いで言葉を返す。

「……待ち侘びたぞ、野上良太郎」

「久し振り、ジーク。また……助けてくれたんだね」

「無論だ。ほんの僅かなつながらりで、私をつなぎ止めたお前への恩は、まだ返しきっていないのでな」

高圧的だが、不快を感じさせないジークの言葉に、言われた方は優しい笑顔で頷く。

だが、すぐに良太郎は視線をイマジンに向け直すと、それまでの優しい顔から一転して厳しい物へと表情を変化させた。

それに気付き、リュウタロスは申し訳無さそうに俯いて……

「良太郎、僕……あいつをやっつけられなかった」

「……大丈夫。あのイマジンは、僕と……あのひとで倒すから」

うなだれるように言ったリュウタロスの頭を、今度は良太郎が優しく撫でながら、降り立った「もう1人」に目を向けた。

\*

降り立った人影に目をやった時、始は自分の目を疑った。いや、始だけではない。橘も睦月も、彼の存在に驚き、そしてまじまじと見つめた。

「剣崎……？」

そこにいたのは間違いなく、剣崎一真。

今さっき始に別れを告げ、海に身を投げたはずの彼が、先程とは違う服装でそこに立っていた。

「少しだけ未来さきの、だけだな」

そう言っただけで苦笑すると、未だ茫然としている睦月と橘に顔を向ける。

「睦月、無事か？」

「大丈夫……です」

睦月の言葉に、ほっとしたような表情を見せる剣崎。

いなくなったと思った剣崎が今、目の前にいる。それは、剣崎を知る者にとって非常に大きな衝撃だった。

自らの体をアンデッドと化し、始の前から去る決断を下したはずの彼。その顔には、先程始が見た微かな悲壮感はない。純然たる決意と信念、そして守りたいと言う思いが見て取れた。

……それは、人間だった頃となんら変わらない……いや、あの頃よりもより強さが増したような表情。

「剣崎、お前……」

「すみません、橘さん。侑斗が言った通り、時間が無いんです」

真剣な表情でそう言つと、剣崎はこちらを見つめる異形の方に目を向け……

「あいつを倒す事が先決です。……彼らと共に」

剣崎が視線を、異形からもう1人の青年に向けた時。青年も、こちらに視線を向けるのだった。

\*

「別れの挨拶は済んだか？」

声に余裕を滲ませて、アンデッドイマジンは良太郎達に声をかける。

それと同時に、剣崎と良太郎が半歩だけ相手に向かって歩を進めた。

「……待たせたな」

「然程待つてはいない」

剣崎の言葉に対してすらも、肩を竦めて返すだけ。

だが、そのやり取りが戦闘開始の合図となった。

2人はもう半歩だけ前に進むと、それぞれ変身に必要な物をポケットから取り出した。

剣崎が取り出したのはスペードのエースのラウズカード。それを腰にあるリーダーに通した。

彼の腰にあるのは、見慣れたプレイバックルでは無い。始と……

ジョーカーと同じ、ジョーカーラウザーと呼ばれる物。機械ではなく、自分の持つ「能力」の一部。

『CHANGE』

カードが読み込まれた瞬間、電子音に似た声と共に、剣崎の姿が揺らぎ、変わる。

本来なら、ジョーカーラウザーによる変身は通したアンデッドの姿をとるのだが……剣崎のそれは始の物とは違うらしい。恐らくは彼の抱くイメージが形に変わるのだろう。

剣崎が変わった姿はビートルアンデッドではなく、青い仮面ライダー……ブレイド。しかしその目は赤ではなく、アンデッドの血を連想させる鮮やかな緑。それだけが、彼らの知る「ブレイド」との差異だ。

「変身」

『LINER FORM』

一方の良太郎は、厳しい表情でケータロスとデンカメンソードをセツトし、ライナーフォームに変身する。

電子音と共に変わったその姿は、モモタロス達の知るそれと寸分の違いもない。だが、良太郎の構えに隙は無く、以前の彼に比べて非常に戦い慣れているように感じ取れた。

「野上、剣崎。俺は今回、変身しないからな。カードも、残り少ないし」

「うん」

「ああ」

ゼロライナーにもたれかかるようにして立つ侑斗に、良太郎と剣崎は頷きながら返すと、今度はイマジンの方へ顔を向けた。

仮面で表情はわからないが、恐らくはイマジンを睨みつけているのだろう。

一方でイマジンはやれやれと言わんばかりの溜息を吐き出すと、心底呆れたように剣崎へ言葉を放つ。

「……成程。時の守護者と結託し、あの時間から俺を追ってきたのか、青き甲虫カブトよ」

「ああ」

短く答えると同時に、剣崎はイマジンに向けてブレイラウザーを横に一閃する。だが、イマジンはそれを自らの体を上へ引き上げる事で軽々とかわした。

引き上げた木の上で仁王立ちになりながら、イマジンは彼らを見下ろすと、心底煩わしそうに溜息を吐く。

「この時代では、銃撃の銃形クワガと、赤き鬼をこの世から消せば良かったはずなのだがな」

「赤き鬼……モモタロスの事だね」

「なら『銃撃の銃形』は……橘さんか！」

「そうだ」

確かに、橘は……と言うよりギャレンは、スタッグビートルアンデッド、つまりクワガタムシの始祖の力を借りて変身する。攻撃も

銃撃が主体だ。だが、イマジンの物言いの意味が、始達は勿論の事、八人達にもわからなかった。

「鍬形」や「甲虫」と言うのがただの訛りや、特有の言語なのだとしても、剣崎や良太郎には通じていたようだし、その様子を油断なく眺めている侑斗にもわかつたらしい。

先の時間から来たと言っていた事を考えると、ひよつとしたら未  
来で「何か」を知ったのかもしれない。

自分達の知らぬ、何か……大きな事を。

「まあ良い。お喋りはこれくらいにしよう」

そう言うといマジンは木の上に立ったまま再度手を横に振った。

それはリュウタロスに向かってやった攻撃と同じものである事を、  
始とリュウタロスは本能的に察知したらしい。

「避ける、剣崎！」

「逃げて、良太郎！」

2人同時に声を上げ、それぞれに警告をする。

しかし……その声が届くよりも先に、2人の仮面ライダーは手に  
持つ剣でその攻撃を切り伏せ、半歩だけ前に進む。まるでどのよう  
な攻撃が来る事が分かっているかのよう。

「……馬鹿な！？ 何故、今の攻撃が防げた？ 知らない者なら誰  
でも確実に喰らう攻撃だぞ！」

「『知らない者』なら、な」

「でも僕達は、君がそう言う攻撃をする事が出来るって知っていた」  
うつすら、仮面の下で笑みさえも浮かべているような2人の仮面  
ライダーの言葉に、イマジンはあからさまに狼狽し、その反動で無  
様に枝から滑り落ちた。

地面に叩きつけられる直前で体勢を立て直した物の、無茶な体勢  
で着地したせいで捻りでもしたのか、軽く腰をさすっている。

「そ、そんなはずは無い。いかにお前達がこの先の時間から来た存  
在であろうと、そいつらが覚えていなければ知る由も無い！」

「ああ。実際、橘さん達は知らなかった。お前の存在も、お前の攻

撃ち」

「でもね、この事を覚えていた人がいるんだ」

そう言っつて、良太郎はゆっくりと……しかし真っ直ぐにハナに視線を向ける。

だが、向けられた方には心当たりなど無いのだろつ。軽く驚いたように目を開き、首を傾げる。

「私……？」

「そう、ハナさん」

「確かに剣崎は西暦2007年1月の剣崎だ。けどな、今ここにいる俺と野上は、もつと先の時間から来た」

「ここにいるモモタロス達より、ほんの少し、先の時間からね」  
侑斗と良太郎が順に口を開く。

目の前にいる良太郎は、自分達よりほんの少しだけ未来から来た。それなら、ハナも納得できる。彼らと一緒にいるであろう、「少しだけ未来の自分」が、その情報を与えているのだから。

そして彼らと共に「自分」がいると言う事は。

恐らく……イマジンの敗北が、確定した未来があると言う事。

「……認めん。それは認めない！」

2人に気圧され、そしてその「確定した未来」に思い当たったのか。無意識の内に後退るアンデッドイマジン。

だが、その後ろにはもはや崖しかない。

……「この時間の剣崎一真」が、始達の前から姿を消すために飛び込んだ崖しか。

「これで、終わらせる」

『EVOLUTION』

剣崎がキングのカードを通すと同時に、ブレイドとしての姿が揺らぎ、今度は金色のキングフォームの姿へと変化する。

だがやはり、その面の瞳の色は赤ではなく緑のまま。2度と赤には戻れぬと、皆に知らしめるかのよう。

「う……おおおおああああああっ！」

それに気圧されたのか、叫び声……いや咆哮を上げ、イマジンはその右手から網状の蜘蛛の糸を投げる。だが、2人は素早い動きでそれをかわすと、良太郎はイマジンの左側に、剣崎は右側に、それぞれ回りこんでその背を蹴り飛ばす。

その勢いで前に向かって数歩たたらを踏み、崖から離れたイマジンが慌てて体勢を整え直したその瞬間。

自分の眼前に、いつの間にか剣崎が悠然と立ち塞がり、その金色の剣を構え直すのが見えた。

そして自分の背後では、電王が体勢を立て直し、その4つの力を纏う剣を構える音が聞こえた。

『SPADE TEN、JACK、QUEEN、KING、ACE』  
キンググラウザーが読み込ませたカードの名を告げ、イマジンと彼  
の間に黄金色のカードを模したエネルギーの幕が下りる。

『MOMO SWORD、URAROD、KIN AX、RYU  
GUN』

デンカメンソードが、ダイアルを回す度にその武器の名を告げ、  
場に似つかわしくない軽快な音が流れ、イマジンの鼓膜を震わせる。  
イマジンの知らぬ電王の、そしてブレイドの最強技が、まさに今、  
イマジンに向けられていた。

「例え我が『神』の侵攻を退けたとしても……他の干渉者達がこの世界を、『始まりの地』を奪いに来る！　なのに、何故戦う！？  
終わり無き戦いだぞ！？」

追い詰められ、半狂乱にイマジンは喚く。

その姿にもはや、リュウタロスと戦っていた時の余裕は感じられない。

相手を失望させようとするその言葉にさえ、全く覇気が感じられなくなっていた。

イマジン以上の覇気の持ち主がこの場に存在しているからなのか。今この場には、「絶望」や「失望」と言った負の概念が入り込む余地がどこにもない。

「それが俺の運命なら、俺はその運命とも戦う。そして勝ってみせる！俺がアンデッドになっても、守りたいと思った物だから」

それは運命を切り開く決意。

ジョーカーとなった今でも、心は人のままである事、人間を……大切な者を守る事を決めた剣崎の芯は、揺るがない。

「例え終わらない戦いだとしても、それは諦める事の原因にはならない。それに……終わりが無いとは限らない。僕が……僕達が、絶対に終わらせる」

それは運命を守り抜く決意。

イマジンとの戦いが終わった今でも、自分に出来る事、自分にか出来ない事を行うと決めている良太郎の芯は、揺らぐはずも無い。

2人の仮面ライダーが動いたのは……同時。

『ROYAL STRAIGHT FLASH』

「電車斬り！」

キングラウザーと電王の宣言が重なり、アンデッドイマジンは前と後ろからの斬撃により悲鳴を上げる暇も与えられぬまま、爆発、四散した。

## その後：過去の希望、未来の遺産

西暦2005年1月23日。

アンデッドイマジンが消滅した頃、ウラタロス達は剣崎一真を見送っていた。

「本当に良いんだな？ この場所で降ろして」

「ああ……悪かったな、我儘を聞いてもらって」

侑斗の言葉に、剣崎がにこやかな笑顔で頷く。ここに来る前、どうしても行きたい場所があると行って無理に寄り道をしてもらった。物凄く渋っていたが、結局は剣崎の懇願と、先に折れた白尾の説得により、ほんの少しの時間だけ「そこ」で止まってもらった。

そこで見た「彼」の姿に安心し、そして心の整理をつけ……剣崎はようやく、「1人で戦う決意」を固める事が出来たのだ。

彼らの眼前には、砂だけの景色が広がっている。

時の中ではなく、現実の砂漠。誰もいない、来る事のない場所。

風に乗って砂塵が舞い、自然と言う猛威が襲い掛かる厳しい場所

……あえてそこを選んだのは、自身の中で暴れようともがく、ジョーカーと言う名の獣との折り合いをつけるため。だからこそ、誰も巻き込まない……そして自然と言う目に見えぬ物と戦えるここを選んだのだ。

「……俺はまだ、ジョーカーとしての闘争本能を押さえられるか分からない。今戦えば、きつと俺は、大切な人を傷つけると思うんだ」  
ここに来るまでの間に、既に彼は自分の戦い……アンデッドと戦い、そして最後には自らもアンデッドとなった事を、良太郎達に話している。そして良太郎達もまた、自分達の戦い……イマジンと戦い、そして「今」という時間を守った事を剣崎に語った。

そして、戦いはまだ終わっていないらしい事も。

いなくなっただけのイマジンが、未だ時の中で時折暴れている事、異世界とこの世界をつなぐトンネルの存在、そして……いつか来る

であろう、最大の脅威の事。

だが、戦いに身を投じるには、今の剣崎はあまりにも不安定だ。故に、彼は現実空間で自らの闘争本能と闘う事を選んだ。

いつか、自分が戦いに身を投じても、闘争本能に負けない「心の強さ」を勝ち得るために。

「だから、俺は一旦ここで降りる」

「分かりました。でも、その時が来たら……」

「ああ。必ず顔を見せる。もっとも、その時の良太郎が俺の事を知ってるとは限らないけど」

「そうですね」

西暦2007年より以前に剣崎が現れも、「その時の良太郎」はまだ、剣崎一真を知らない。その時出会ったとしても、恐らくその良太郎は不思議な顔をするだけだろう。

「それじゃあ剣崎さん、いつか未来で」

「ああ。……いつか、未来で」

固い握手を交わした後、2人はそう言って微笑むと……ゼロライナーの扉がゆっくりと閉まる。

そして剣崎一真をその場に残したまま、再び時の中へと戻っていったのであった。

\*

イマジンが消滅したのを見届けると、2人の仮面ライダーはその変身を解いた。

良太郎はベルトを外し、剣崎は特に何もせずその姿を「ヒト」の……剣崎一真の物へと変える。

その様子は、まるでトンネルの向こうで見たアルビノジョーカーの変化……アルビノジョーカーの姿から、「志村純一」の姿に変わっていく様子に酷似していた。

恐らくはジョーカーとして「ブレイドへの擬態」を解いたが故の

変化なのだろう。ほんの少し、疲れたように見えるのはやはりまだ自身の中で騒ぐ「戦いへの欲求」を押さえ込むのが難しいからなのか。

「……………行くんだな、剣崎」

本能的に剣崎が去るのを察したのか、始が苦しそうにそう呟く。

その呟きに、剣崎は無言のまま首を縦に振った。

「行くつて……………どこへ行くんですか！？ 剣崎さんの居場所はつ……………」

「……………」

「睦月の言いたい事は分かるよ。でも『今』の俺は、ここに……………この時間については、いけないんだ」

「何を言ってるんだ、剣崎？ この時間についてはいけないだど？」

何も知らない橘達からすれば、剣崎の言葉は意味不明な物に聞こえたのだろう。実際に困惑気味に彼の顔を見つめている。

だが、時の列車の住人達にはその言葉の意味が十分に理解出来た。

「西暦2007年から来た剣崎一真」がこの時間に滞在する事は許されない。

滞在用のチケットが無い以上、彼は、彼のあるべき時間……………西暦2007年に戻らねばならない。それが時間を護る為のルールだ。

イマジンを倒し、そして始達と関わっている事自体、下手をするとなこの時間への干渉とみなされかねないのだから。

「すみません、橘さん。今はこれ以上、言えないんです」

苦笑しながら、剣崎はゼロライナーに足をかける。

……………本来在るべき時間に、戻るために。

「……………始、橘さん、睦月」

乗りきる直前、剣崎はくるりと振り返り、仲間の名を呼んだ。

その顔に、いつもの人懐っこい笑みを浮かべて。

「……………いつか、未来で」

そう言つて手を軽く振り……………今度こそ本当に、その姿をゼロライナーの中へと消した。

「私達も戻らないと……………」

「あ、ハナさん達はもう少し待って。多分……もうすぐ、来ると思うから」

思い出したように言ってゼロライナーに乗ろうとするハナ達を制止し、良太郎ははにかんだ笑みを浮かべた。

ゼロライナーの入り口に立ち、彼らが入るのを塞ぐかのように。

「来るって……誰が来るの、良太郎？」

「僕と侑斗が。ウラタロスとキンタロス連れて、ゼロライナーで来るはずなんだ」

「……成程、そう言えば言っていたな。『少し先の時間から来た』、と」

納得したように、ジークが頷く。

戦いの途中、確かに良太郎はそう言っていた。そしてその時理解したはずだ。目の前にいる良太郎が本来いるべき「時間」と、今の自分達が本来いるべき「時間」に、多少なりとも開きがあると言う事を。

恐らく、今のハナ達と関わる事は、目の前の良太郎と侑斗には「過去の事象に関わる」と同じ事なのだろう。だから、一緒にはいられない。過去と未来は、本来同乗してはならない。

「……って事は、『俺』もお前の側にいるんだな？」

「うん」

「……なら、良いぜ。お前が1人で戦ってるんじゃないならよ」「ふい、とそっぽを向いて言うモモタロスの言葉を、良太郎は嬉しそうな表情で聞いている。

言った側の耳が赤くなっているように見えるのは、良太郎の気のせいでは無さそうだ。

「野上、そろそろ行くぞ。このままじゃ『俺達』と鉢合わせちゃう」「わかった。……じゃあ皆……また、後でね」

明るい笑顔でそう言うと、良太郎は軽く手を振りながらゼロライナーに乗り込み……

汽笛の様な音と共にゼロライナーは時間の中へと再び戻って行く

た。

汽笛の様な音と共にゼロライナーは時間の中へと再び戻って行った。崖の上から海の上、そして宙を走り、空中に開いた時間と現実をつなぐ扉を通って。

その直後。入れ違うかのように同じ音が、別方向から響きわたる。それは森の中から木々をすり抜けると、その場にいた全員の後ろで静かに停車した。

視線の先には、先程剣崎と良太郎が乗っていた列車と寸分違わぬ姿のそれが止まっている。

「あの列車、さつき海の方へ行つたはずじゃ……？」

怪訝そうな顔で、睦月が言う。

橋と始も同じ考えらしく、森の方から現れた黒い列車……ゼロライナーに視線を向ける。

先程同様、停車と同時に乗車口らしき扉が開き……そこから一人の青年がややふらつきながらもその場に降り立った。

黒い髪、黒い瞳。気弱そうだが、どこか芯の強さを感じさせる雰囲気。

……服こそ違つが、それは先程まで剣崎と共に戦っていた仮面ライダーの青年……野上良太郎その人。

「ハナさん、モモタロス、リュウタロス……それに、ジークも」

心底嬉しそうに、良太郎が言う。彼の後ろからはウラタロスとキントロスも顔を覗かせてた。

「良太郎、亀ちゃん、熊ちゃん！……痛っ」

「リュウタ、ちょっと、その傷どうしたのさ？」

「酷い怪我や。何があつたんや!？」

「リュウタロス、大丈夫？」

イマジンから受けた傷が痛むらしく、胴をおさえて蹲るリュウタロスに、それぞれ心配そうに駆け寄る。

リュウタロス、大丈夫？

その言葉は、先程の良太郎も言っていた言葉。そしてその時、大

丈夫と言う答えも返したはず。

だからこそ、目の前にいる良太郎が先程までいた良太郎と……イマジンと戦い、剣崎と共にそれを倒した存在とは違うのだと、理解できた。

「ようやく合流できたな。って言っても、もう終わった後みたいだけど」

周囲に視線を巡らせ、ゼロライナーから降り立った侑斗が言う。折れた枝、何かが発射したような微かな焦げ跡、そして傷だらけのリユウタロス。それを見れば、何があったのか凡<sup>おおよ</sup>その見当はつく。恐らく、何者か……電王に変身したと言う事は多分イマジン……が現れ、苦戦しながらも退けたと言った所か。

はあ、と深い溜息を一つ吐き出すと、侑斗は極端に瞬きの少ない男……始を見つけ、彼に視線を送った。それに始も気付いたらしい。不思議そうに軽く首を傾げると、反射的に睨むようにその姿を捉え

……

「……お前、相川始だよな？」

「そうだ」

「剣崎一真って奴から伝言がある」

「伝言だと？」

「ああ。『天音ちゃん達と仲良くな』だよ」

「あいつらしいな」

静かに言われ、始は一瞬顔を顰めたが、すぐにそれは微苦笑に変わる。親友とも言える存在の心遣いが嬉しくて……そして同時に、自身よりも始を心配する辺りが苦く思えて。

流れる血の色が赤から緑に変わっても、根本は変わらないのだと思つた瞬間に漏れた小さな呟きは、言葉を伝えた侑斗の顔にも微苦笑を招いた。

「せや、橘にも、伝言があったんや」

「何？」

「『押し付けてすみません』やて」

キンタロスの伝えた言葉に、橘は小さく笑う。

この言葉もまた、剣崎らしい。その言葉を放った時の剣崎は、きつと深々と頭を下げていただろう。

だから……

「金、もしもお前が剣崎に会う事があつたら伝えておいてくれるか？」

「……何をや？」

「『そう言う事は、直接言え』とな」

「おう。任しとき」

苦笑とも取れる橘の表情に、いつもの豪快な笑顔で返しつつ、キンタロスはドンと自分の胸を叩く。

「そこの僕ちゃんにも、伝言があるんだよねえ」

「俺にも？」

「『前に進め、カテゴリーエースの呪縛を断ち切つたお前なら、それが出来る』だつて」

「剣崎さん……」

睦月はその言葉に、いないと分かつていつつも……深々と頭を下げた。その瞳に、うつすらと涙を溜めて。

「それだけだ。それじゃ、イマジンも回収した事だし、行くぞ野上」

「あ、うん」

「お前らも乗れ。デンライナーまで送つてやる」

侑斗に言われ、ハナ達もゼロライナーに乗り込む。

送つてくれると言うのだから、その好意に甘えればいいし……何より、この時間に長居をしてはいけない、そんな気がしていた。

この時間の戦いは、一応の決着を見せたのだから。

始、橘、そして睦月を除く全員が乗つたのを確認すると、ゼロライナーはゆつくりと……しかし徐々にスピードを上げながら、時間の中へと向かつて行く。

元の時間に戻る為に、別れの汽笛を大きく鳴らして。

「……彼ら、一体何者だつたんでしょね、橘さん」

「それは分らん。だが、ひよつとすると……」

再び虚空の彼方へと消えていくその列車を見ながら、橘は小さく笑うと……

「いつかまた、会えるんじゃないか。そんな気がする」

そして、いつかきつと剣崎にも

いつになるのかは分からないが、3人の心に、剣崎の最後の言葉が響いていた。

いつか、未来で

剣崎一真が相川始の前から姿を消してから1週間程経った日の午後。

遥香に頼まれた買い物ついでに、天音が気に入らな花を見つけ、それを花束にしてもらい、始は銀杏並木の間を歩いていた。

冬も半ばを過ぎたと言うのに、この道だけ秋で季節が止まっているかのように銀杏の黄色い葉が舞っている。

始は、その光景が嫌いではなかった。周囲から取り残されたように色付き、舞い散るその様は、どこか自分に似ている気がするから人間と言う限りある命を持つ者達に対し、アンデッドである彼は永遠を生きる。親しい友人達も、いつか必ずその生を終える。その時、自分もこの場所のように周囲から取り残されるのだろう。

そんな寂寥にも似た感傷を抱きながら……そしてそんな感傷を抱く自分に驚きながら、始はさくさくと落ち葉を踏みしめて歩く。

俺も随分と人間臭くなったものだ。だが……それを悪くないと思えている

ふ、と己に向けて微笑を零しながら、彼はふと視線を足元に落とす。

天音と言う大切な少女がいて、遥香と言う優しい存在がいて。そして仲間とも呼べる存在もいる。それに恵まれていると思う反面、どうしても思い出す。

……唯一、側にいない親友の事を。

お前は、人間の中で生きる  
いつか、未来で

思い出されるのはその2つの言葉。そして思い出す度に、いるはずの無い親友に語りかける自分がいる。

お前こそ、人間の中で生きる

「いつか」って、「いつ」だ？

アンデッドである彼にとって、時間は無限にある。だからこそ、「いつ」なのを知りたい。

別れてから、まだ1週間。彼自身の生の永さからすれば、瞬きにも満たない時間。それだけしか経っていないのに、これ程までに「寂しい」と思うなど……情けないと思う。彼は、運命と戦うと宣言したと言うのに。

唐突にこみ上げる何とも言い難い感情を持って余しながら、始は視線を上げ、さくさくと前に進みはじめた。

早く帰らないと、天音や遥香が心配する。そんな風に思う事で、自身の中にある感情を誤魔化しながら。

そうして、どれだけ歩いただろうか。並木道の中頃まで差し掛かった時。

……始の目に、いるはずの無い人物の姿が映った。

最後に戦った時と同じ格好。怪我は無いが、服は少し破れている。ベンチに座る彼は、何を考えているのだろうか。少しだけ憂いを帯びているように見えるのは気のせいかな。

いや、そもそも距離がある。だから自分の勘違いかもしれない。そんな風に言い聞かせても、始の中には確信があった。その人物が、始が会いたいと切に願う、親友であると言う確信が。

彼は始を待っていたのだろうか。視線を上げて始の顔を見ると、口元に微かな笑みを浮かべ……いつも通りの朗らかな口調で始の名を呼んだ。

「始」

「……剣崎……」

名を呼べば、まるで安心したように顔全体に笑みが広がる。目元に笑皺ができ、どこか子供っぽさを感じる顔になる。

その顔に、安堵する。同時に何とも言えない思いが始の内を駆け巡り、気付けば彼に……剣崎に向かつてその足を踏み出していた。

だが、その歩みを邪魔するかのようには、急激な突風が吹き荒れた。落ちていた銀杏の葉が舞い上がり、始の視界を一瞬だけ黄で覆い尽くす。

顔を背け、風が吹き止んだそこには……もう、剣崎一真の姿は無かった。

あれは……俺の心が見せた、幻か……？

だとしたら、自分はどこまで弱っているのだろう。思わず浮かぶ自嘲を止められず、今度こそ始は家路に着く。

だが、先程までであった「寂しい」と言う気持ちは驚く程薄れている。

今のが幻にせよ本物だったにせよ、始の心を軽くしてくれた事は確からしい。彼の顔は、吹っ切れたように晴れ晴れとして……

「剣崎。……いつか、未来で」

そう呟きを落とした瞬間、その呟きに応えるように、どこか遠くで牛の鳴き声にも似た汽笛が鳴ったような気がした……

\*

「2005年のトンネルは、ご覧の通り綺麗さっぱり消えました」

デンライナーに戻るや否や、オーナーがステッキの先を窓の外に……丁度、トンネルがあったであろう位置に向けて、そう言った。

「あつたであろう」と表現したのは、トンネルなど最初から存在していなかったかのように佇む「山」のみだったからだ。

しかし、まだ大小様々な穴がその口をあけているのが見て取れる。むしろその数は増えているくらいだ。

「終わってない……そう言う事ですね、オーナー」

良太郎の言葉に、オーナーは否定とも肯定とも取れる表情で返すだけ。

だが、乗客達は皆、その表情を肯定と受け取った。

「イマジンとは違う敵との戦い……僕は、戦い抜くよ。そして、この時間を……この世界を守ってみせる。それが、僕に出来る事だから」

「おいおい、俺を忘れてもらっちゃ困るぜ、良太郎。楽しそうじゃねーか。イマジン以外の相手って奴も。それに……」

「……え？」

「『最後まで一緒に戦う』……お前が俺に言った望みだろうが」

真剣な表情で言い切った良太郎に、モモタロスが腕を彼の肩に回して不敵に笑う。

「最後まで一緒に戦う」……それは、カイとの最後の戦いの前に言った、良太郎の「望み」。そして、モモタロスはそれを聞き入っていた。

自身の契約者の望みとして。そして……自分自身の望みとして。

「……お前が戦うってんなら、それが終わるまで……しょうがねーから付き合ってやるよ。最後の最後まで、な」

くしゃくしゃと良太郎の髪を乱暴に撫でつつ、モモタロスが言う。  
だが。

「何を1人でおいしいトコ攫つとんのや」

「先輩は結局、戦いたいただけでしょ？」

「お供その1ともあるう者が、でしゃばりすぎだぞ」

「やーい、モモタロスの出たがりー」

と、からかうような口調で他の面々が言う。

その顔には、モモタロスと同じ、どこまでも付き合つと言いたそうな色が浮かんでいるのだが……モモタロスには気付かなかっただけらしい。

自分の「良いところ」を潰されたせい、ヒクヒクとこめかみを

引き攣らせ……

「うるせえっ！ テメーらちったあ黙ってる！」

「それはアンタでしょ！」

怒鳴ったモモタロスの腹を、ハナは鋭い右ストレートで殴りつける。一瞬遅れでモモタロスは呻き声を上げると、口からぷくぷくと泡を吹いてその場で撃沈した。

「先輩、いくらスカスカの脳みそだからって、いい加減学習しようよ」

「進歩の無い奴やなあ……」

「からかったあんた達も同罪」

言って、今度はウラタロスの腹とキンタロスの後ろ頭を蹴り飛ばすハナ。

……蹴られた方は微かな呻き声を上げた後、床に突っ伏してピクピクと陸に上がった魚のように痙攣している。

そんな「いつもの光景」が、繰り広げられた。

……それは束の間の平和。だが、そんな「日常」があるからこそ戦い抜ける。

その思いと共に、良太郎はその先を見据えていた。

この世界、この時間、この仲間を守るための戦いを覚悟して。

「これで、良かったのかい？」

ガオウライナーの中で、1人の青年が女に声をかける。

男は、20代前半といった所か。黒髪、黒い服装の上から、その内面の黒を誤魔化すためのものか、前を大きくあけた白衣を羽織っている。医者と言うよりは科学者、といった感じを受ける。

女はデンライナーの元オーナー……スフィンクスアンデッド。

ヒトの姿をしてはいるが、その体には数多の傷と、そこから流れる緑色の血が男の目には痛々しい。

「何度も何度も、モノリスを奪われる度に、君が行く事は無いと思

うんだけど？ 僕、凄く心配なんだけど」

「なら、次は貴様が行くか？」

「冗談やめてよ〜！ 僕は君程強くないし、人間にだって期待してない」

「フン。……ならば、何故手を貸す？」

「え？ 人間には期待してないけど、君には期待してるから」

言いつつ、青年はにこやかな笑顔を彼女に向け……

「ほら、僕そう言う顔、してるでしょ？」

「相も変わらず嘘くささ全開の笑顔だな。……あの者もお前の影響を受けてしまったのかと思うと、不憫でならん」

「酷っ！ カイ君は、素直で良い子なの。ただ、素直すぎて『月』の囁きを聞き入れちゃっただけ。天王路みたいだね」

にこやかな笑顔を絶やさず、男は言葉を紡いだ。

その様が、カイを髣髴とさせる。黒い服装も相まって、余計にそう見えてしまう。白衣と顔立ちだけがカイとの違いを際立たせてはいるが。

「……だから貴様はあの時……全ての『月の子』<sup>イマジン</sup>が消え去った時に拾ったのだろ。本来の歴史で、本来の人生を歩ませるために」

「利用されるだけされて終わり、なんて可哀想じゃない？ だからちよーっと記憶を修復してあげて、本当の時間で、お父さんとお母さんとお姉ちゃんと一緒に仲良く暮らしていけるようにしたんだよ。きつと今頃、僕とは違う、本当の笑顔を浮かべるんじゃないかな？」

自らの笑顔が偽りの物である自覚があるのか、男はどこか羨ましそうにそう言った。

スフィックスは嘘くさいと評したが、何も知らぬ者ならそうは感じないであろう笑顔。

本当に、人生楽しくて仕方が無いと言わんばかりの笑顔なのだが……彼をよく知る者からすれば、心底胡散臭い笑顔に見えるのだろう。

「あの者が消える事自体、間違っているのだ。西暦2008年1月

20日。あの日、消えたのは『月の子』<sup>イマジン</sup>だけ」

「そ。カイ君は『月の子』<sup>イマジン</sup>じゃないし、そもそも特異点だからね。消えるはずが無い。僕が『消えたように見せた』だけ。その事に良太郎君や侑斗君が気付かなかったのは、やっぱり何らかの干渉のせいじゃないかな？」

「何らかの干渉、か。……最悪の事態を想定せねばなるまいな」

どこか寂しげに言った彼女に対し、男は無言でバサリと白衣を翻し……

「その辺はもう少し見ておこうよ。次のお仕事もあるしさ。トンネルを増やしているのは、『月』<sup>ファイブ</sup>だけじゃないのも鬱陶しいしね。あ、黄金比の所とか面白そうじゃない？ 1万人超えの『操縦者』<sup>ファイブ</sup>は見物だよ、きつと」

「……貴様、随分と楽しそうだな」

「え？ そういふ顔、してる？」

相変わらずにこやかな笑顔で青年……「ゼロライナーのオーナー」は、スフィングスの冷たい眼差しを受け流すのであった。

そして。

「皇帝に愛された子」の新たな戦いは幕を開ける。

だがそれは……今はまだ、語るには早すぎる。

時の列車の乗客達よ。あなたの行き着く次の駅<sup>ステーション</sup>は、過去か、未来か……

## その後：過去の希望、未来の遺産（後書き）

……とりあえず完結です。

自分が当初予想していた以上に話が長くなり、まさか読了時間が軽く6時間近くまで行くとは思ってもみませんでした。

……何か頂けない感じで終わっているのは、単にキバ・ゴーオンジヤアの映画が公開される前に終わらせたかったからです。何しろ連載開始から半年以上経っている訳ですし。

……色んなトコで、何度も言っていますが、続きとか、電キバ前の話とかも脳内にあると言えはあります。

お声がかかれば書くかもしれないと、追い詰めた所で。

話の中に、平成ライダーの名前を所々入れておきました。例えば最終話では「黄金比」「ファイズ」（黄金比の事を と表すため）みたいな。

基本的には分かりやすくなっています。響鬼と龍騎に関しては、漢字一字を持ってきています。そこに気付いて下さっていたら幸いです。

それでは、最後に。

ここまでお付き合い頂いた皆様に感謝を。ご声援、ありがとうございました。また、機会があればお会い致しますよう。

西暦2008年8月8日 辰巳結愛

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5000d/>

---

過去の希望、未来の遺産

2011年8月4日03時26分発行